
宝くじで40億当たったんだけど異世界に移住する

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝くじで40億当たったんだけど異世界に移住する

【Nコード】

N2163N

【作者名】

クロ

【あらすじ】

試しに買ってみた宝くじで40億円の高額当選を引き当てた一良金の臭いを嗅ぎつけたハイエナ共から逃げるべく、避難先である先祖代々から伝わる屋敷にて見つけた一部屋が、異世界と行き来できる空間であることを発見する。

文化レベルや技術レベルがかなり低いとみられる異世界で、主人公は時に品物を、時に技術を持ち込み、その世界で自分の価値を見出すとする。

1話：優良物件

宝くじ、というものをご存知だろうか。

我が国日本では、小さなモノでは10万円。

大きなものと数億円のお金を、超低確率で手にすることができるクジである。

毎年何人もの幸運な億万長者が生産されているが、彼ほど幸運な当選者は、未だかつてこの国にはいなかったのではないだろうか。

「くつそ、親以外の誰にも話していないってのに、あの金の亡者共は何処から嗅ぎつけてきたんだ……」

その幸運な当選者である彼、志野一良しのかずらは、当選を期に購入したフアミリーカーで、夏を迎えたばかりでのどかな田舎の山道を走りながら毒づいた。

事の発端は今から約1ヶ月前に遡る。

いつも通り彼が会社が終わって帰宅する途中、普段夕食を買いに立ち寄るスーパーの脇の宝くじ売り場が偶然目に付き、ふらっと寄ってみたのだ。

そして、そこにでかかと

「ロト6発売中！ 今なら42億円キャリーオーバー中……！」

と書いてある張り紙を見つめ

「これで宝くじが当たれば、俺のサラリーマン生活も3年間という短期間で幕を下ろすことができるなあ。25歳にしてスローライフもいいな」

などと夢想しながら、例え外れても話のネタにでもなればいいかと思い、試しに購入してみたのだった。

しかし、普通に買っても面白くないと思った一良は、まるつきり同じ数字で10口購入。

つまり、もし当たったのが自分だけだった場合、キャリアオーバーのほぼ全額である40億円を取ってやろうという、アホな買い方をしたのだ。

「しかし、まさか本当に40億当たるとは思わなかったなあ」

そう、彼はそのアホな買い方が功を奏して、40億円当選という偉業を成し遂げてしまったのだ。

抽選日の夜に当選を確認した一良は、手元にある宝くじとインターネットに掲載されている当選番号が一致していることをたつぷり1時間確認し、狭いアパートの部屋の中を、宝くじを持って眺めながらぐるぐると回り続けて一夜を明かした。

そして、いつも通り出社する時間になってから、いつもの癖でスーツに袖を通している最中に、

「働く必要無いじゃん……」

ということに気づき、とりあえず会社に体調不良のため休む旨を電話で連絡。

もう一度、自分の宝くじと当選番号が合っていることを確認して、部屋の鍵をしっかりと閉めて、宝くじを冷蔵庫の下の際間に隠した。

その日から換金可能な期日まで、買い物にも会社にも行かず、部屋で冷蔵庫を守って過ごし、換金日にタクシーを呼んで銀行まで行き、即換金。

そのまま銀行に40億円入金という作業をしたのだった。

換金後に会社へ行き、

「親の町工場を継ぐことにしたので、会社を辞めさせて頂きます」

と、上司に報告して辞表を提出。

上司は厳しく指導をしすぎてしまったからかと気に病んでいたようだったが、一良が

「親も高齢で、工場を両親二人で切り盛りするには身体が辛くなってきたようなので、帰ってきてほしいと言われたんです」

と説明すると納得したようで、「大変だろうが頑張れよ。何かあったら相談してこい」と、暖かい言葉を掛けてくれた。

ちなみに、実家の町工場は現在殆ど稼動しておらず、一良の両親は今までの貯蓄を使って旅行に行ったり、畑を借りて趣味の家庭菜園に勤しんでいたりする。

その後、労務規定である退社前の1ヶ月間を引き継ぎやら残務処

理やらをこなしながら過ごし、円満退職した次の日。

聞いたこともない宗教やら、なんともうさんくさいボランティア組織やら、小学校以来会った事もないような友達からの金を無心する連絡が、電話だけで一日に50件オーバー。

更にどこから嗅ぎつけてきたのやら、連日連夜部屋の戸を叩く亡者共に嫌気がさしてアパート脱出を決意。

困り果てて親に相談したところ、

「群馬の山奥に、先祖代々から持つてる屋敷が残っているから、そこに避難してみたらどうだ。30年前に見たときもそんなに荒れてなかったし、柱や屋根はしっかりしていたぞ。あと遊びに使いたいから金を1億円程口座に入れておいてくれ」

とのことで、そんな場所だったら誰も来ないだろうと、そこに暫く避難することにした。

あと、親の口座には5億円ほどぶち込んでおいた。

2日後に速達で屋敷の鍵が送られてきたので、一良は急いでアパートを脱出したのだった。

「なんか建物を殆ど見なくなってきたな……。カーナビの住所だところら辺なんだけど」

山道に入ってから30分程走り、ナビに従って舗装されていない狭い道を10分ほど走っていると、なにやら大きな平屋の屋敷が見えてきた。

家の前には砂利が敷き詰められ、雑草は殆ど生えておらず、綺麗なものである。

周囲には竹林が広がっており、風に揺られてサラサラと音を立てている。

「おー、これか。30年放置されてた割にはしっかりしてるじゃないか」

砂利の上に車を止め、車を降りて屋敷を見ると、思っていたよりも断然綺麗な状態であった。

鍵を使って家の中を覗いてみたが、掃除をする必要がなく、そのまま住めそうな程である。

とても30年間放置されていたようには見えない。

「何でこんなに綺麗なのかな。やっぱり、いい建物はほっといても平気なのかね」

一良は少し不気味なものを感じつつも、家の中を散策してみると家の最奥に、手前に引く観音扉に南京錠の掛かった部屋があるのを発見した。

「ええ……、何で家の中に南京錠の付いた部屋があるんだよ……」

不気味なものを感じつつも、その南京錠に触れてみると、それは「バキッ」と音を立てて崩れ落ちた。

一良は「ヒイッ!？」と情けない悲鳴を上げながら後ずさるが、床に落ちたはずの南京錠は跡形も無く消えている。

「……これはあれだろ、この扉を開けたらそのまま行方知れずになるフラグだろ。開けるけど」

そう言うと、一良は車からロープを持ってきて扉の取っ手にくく

り付け、10メートルほど離れた柱にしがみ付きながら、ロープを思いっきり引っ張った。

ロープに引かれた扉は「キイツ」という音と共に簡単に開き、中の何の変哲も無い畳張りの6畳間が姿を現した。

一良は柱にしがみ付きながら、小さな声で「……ちくしょう……」と呟いた後、俯いてため息をつきながらその部屋に入った。

「何だよ、普通の6畳間……じゃない……し……」

部屋に入って顔を上げると、そこは先ほど見た6畳間などでは断じて無く、床も天井も石で覆われた冷たい石畳の通路だった。

慌てて後ろを振り返ると、そこには向こう側に開いた観音扉があり、その先には石畳の広い部屋があるだけである。

「え？何これ、神隠しに遭ったのか俺……って、あれ!？」

元来た道に戻ろうと、観音扉の敷居を跨いだ途端、一良の視界は元いた屋敷の風景に一瞬で切り替わった。

更にもう一度敷居を跨ぐと、またしても先ほどの石畳の通路。

「おお、これはすごいわ……」

そうして、何度か屋敷と石畳の通路を行き来してから、一良はふと気づいて自分の足の裏を見た。

「……玄関から靴持ってこよう」

靴下が、石畳の汚れで盛大に汚れていた。

2話：村にて その1

「すごいなあ。どういう仕掛けになってるんだろ」

畳部屋と石畳の通路の境目に、顔を半分ずつ出したまま、一良は呟いた。

ちなみに、通路との境目になっている畳部屋のスペースには、靴で歩いてもいいようにブルーシートが敷いてある。

現在一良の視界は、左目に石畳の通路、右目に元居た畳部屋が映っているという何とも奇妙な状況になっている。暫くそうして新感覚を楽しんでいたが、脳みそが混乱したのか吐き気がしてきたので、石畳の通路へ移動した。

「奥はどうなってるんだろ。何か明るいけども」

通路の奥を見てみると、30メートル程先に曲がり角があり、外から光が入っているのか、明るく見える。

通路自体も、ヒカリゴケのようなものが明るく照らしている。

一良は「ヒカリゴケって確か天然記念物だけど、役所に連絡したほうがいいのかな」などと考えながら、奥の光を目指して通路を進んで行くと、曲がり角の隅に何やら妙な物体を見つけた。

「ん？ 何だこれ……げっ！」

それはよく見てみると、風化してボロボロになった和服を纏った人骨らしきものだった。

「マジかよ……、誰の死体だよ。てか、白骨化して服がボロボロつて、どんだけ長い間放置されてたんだよ」

一良は人骨から数歩後ずさり、「やっと静かな場所にこれたと思つたら、いきなり警察のお世話になるのか」とぼやきながら、警察に通報するべく携帯電話を取り出した。

「あれ、圏外になつてる」

屋敷に着いたときにはしつかり3本立っていた電波表示が、ここでは何故か圏外表示。

この通路の中にいるからかと、外に出るべく曲がり角を曲がってみると、曲がり角の先は直接外の雑木林に繋がっており、外に出ることができた。

そこでもう一度携帯電話を確認してみるが、電波は相変わらず圏外のままだ。

「おかしいなあ、何で圏外なんだろう」

一良は首を傾げながらも、電波の繋がる場所へ移動しようと、自分の車を探して周囲を見渡した。

「……車どこだよ。むしろ屋敷はどこだよ。それに、今気づいたけど屋敷の周りって雑木林じゃなくて竹林だっただろ」

携帯片手に周囲を見回す一良の視界には、先ほど通ってきた通路の入り口と雑木林しか入ってこない。

屋敷の奥の部屋からここまで、一良の移動した距離はせいぜい50メートル。

普通に考えて、たかだかそれだけの移動距離でこの周囲の環境の

変わりようはありえない。

「……これはもしや」

一良は真剣な表情でそう呟くと、元来た石畳の通路を走って戻った。

途中で白骨死体に「ちょっと通らせてもらいますよ」と声を掛ける。

「……やはりそうか」

畳の部屋に戻って再度携帯電話を確認すると、電波はしっかりと3本立っていた。

「この敷居の先は、きっとどこか遠くの別の場所に繋がってるのか。通りで鍵が掛けられて封印されていたわけだ」

一頻り納得すると、「これはすごい超常現象だ！」と興奮を覚えながら、屋敷の入り口に置いておいたボストンバックを持つと、再び敷居を跨いで雑木林に向かった。

白骨死体の通報はとりあえず置いておき、自らの冒険心を満たすことにしたのである。

「世界の怪奇事件とかだと、アメリカの端から端に一瞬で移動したとかいう話もあるからな。日本以外の国に移動してる可能性もあるぞ」

一良は道に迷わないように、通った場所の木に拾った石で印をつけながら5分程歩くと、雑木林が急に終わって目の前に畑が現れた。畑の先には、木で出来たシンプルというか簡素な家がポツポツ見

られ、どうやら村のようであり、畑仕事をしている数名の住民の姿も見られる。

「おお、第一村人発見。……髪がブロードってことは、ここはヨーロッパかアメリカあたりだろうか」

一良の頭に一瞬「不法入国」の文字が浮かんだが、観光客のフリをしていけばいきなりバレることも無いだろうと樂觀することにした。

そして、折角だからと持っていたデジカメで写真を撮っていると村人も一良に気づいたのか、付近の村人とこちらを見ながら何やら話している。

一良は、不審者と思われるたら面倒なことになると思い、通報される前にこちらから話しかけることにした。

ボストンバッグを持っていれば、観光客にも見えるだろう。

「はろー！ あいむツアーリスト。あいむジャパニーズ！」

ニコニコと微笑み大きく手を振りながら彼らに向かって畑のあぜ道を歩く一良に、周囲と何やら話していた金髪ショートカットの妙に痩せた男は、

「え？ 何ですって!？」

と完璧な日本語で返事をしてくれた。

一良は振っていた手を萎めるように下ろし、

「ちくしょう……海外かと思ったら、長崎のオランダ村とか青森のアメリカ村みたいなノリの所かよ……」

と、やるせない気持ちになりながらも、とりあえずは日本でよかったと気を取り直した。

「観光でこの辺に来てるんですけど、最寄の駅って何処にありますかね？」

てくてくと歩いて村人の所まで近寄り、現在地を確認しようと話しかけると、先ほど返事をした男は困ったような顔をして他の村人に目を向けるが、どの村人も困惑した表情をしている。

「あの、何のことか私にはわからないのですが……ナルソン様の使用の方ですよね？」

「は？」

男の言葉に、今度は一良が困惑した。

駅を尋ねる人間に、「何のことかわからない」と言う返答こそ意味がわからない。

ってか、ナルソン様って誰だ。

「あーっと、トレインにライドしたくてステーションを探しているんですけど……」

「……申し訳ありません。貴方様が何を言っているのか私にはわかりません」

何処と無く緊張している様子の男の言葉に、一良は腕を組んで俯き、「うつむ」と唸った。

駅という単語がわからないのかと思い、咄嗟に少ない知識を総動

員してルー語のような文章を紡いだのだが、まるで伝わらないようだ。

むしろ、ここまで流暢な日本語を話しているのに、駅という単語がわからないはずがない。

「（……まるで、駅という単語そのものを初めて聞いたとような反応だな）」

そう考えた瞬間、一良はハツとして顔を上げ、改めて周囲を見渡した。

目に付く建物は簡素な木造平屋の家ばかりで、屋根は藁のようなものが敷き詰めてあり、お世辞にも立派とは言えない。

目の前にいる村人たちの服装も、何の素材で出来ているのかはわからないが、縫い目は粗く、無地である。

畑に目を向けてみると、置いてある鍬は、持ち手も刃の部分も木製で、使い易そうにはとても見えない。

それに、一良と話している村人たちは随分と痩せ細っていて、明らかに栄養失調気味だ。

「（ここは本当に日本なのか？ 全然違う世界なんじゃないか？）」

目の前で消滅する南京錠や、跨いだけで空間が切り替わる敷居があるのだ。

この場所が異世界ということもありえる気がしてくる。

一良は、もし彼らが何かのイベントで古代人のような演技していたとしても笑われるだけだと考え、「彼らが演技をしていない素の対応をしている」として行動することにした。

「ああ、すいません。つい方言が出てしまつて。旅の商人をしてお

ります、カズラと申します。今晚何処か泊まれる場所を探しているのですが」

一良は組んでいた腕を解き、営業スマイルでさりと嘘をついた。思うに、この世界……もしかしたらこの付近だけかもしれないが、文化レベルはかなり低い。

右手にぶら下げているボストンバックの中身だけでも、十分商人としてこの状況をやり過ごすことが出来るはずだ。

「商人の方なのですか？　今までこの村に商人がやってきたことなんて一度もないのですが……」

「おや、そうなのですか。道に迷って偶然この村に着いたのですが、私がこの村に訪れた商人第一号となるわけですね。偶然とはいえ、名誉なことです」

人の良さそうな笑みを浮かべる一良に、男も他の村人たちも緊張が解けたようだ。

彼らは恐らく、一良のことをナルソンというこの付近の有力者の家来か何かと勘違いしていたのであろう。

「お近づきの印と言っては何ですが、私の扱っている商品の一部を村にお贈り致しましょう。塩、それに痛みを止める薬などはいかがでしょうか？」

「えっ、塩？　……塩ですって！？　それに薬！？」

驚愕する男に、一良は内心ほくそ笑みながら

「ええ、塩と薬です。友好の印に、少しですがお譲りします」

と微笑んだ。

一良の記憶が正しければ、大昔の時代で塩や薬といったら、その価値はかなりのものだったはずである。

目の前にいるような平民には、塩はともかく、薬などは絶対に手の出せるようなものではない。

「ちょ、ちょっと村長を呼んで……いや、村長のお屋敷に案内しますから、ついてきてください」

慌てた様子で促す男に、一良は「わかりました」と笑顔で返しなから、心の中で「よし」と呟く。

これで、村長という立場の者に好印象を与えることができれば、暫くこの村を拠点にして、異世界探索ができるかもしれない。

男に連れられて村の中を歩くこと10分。

村の家々に比べれば、それなりにしつかりした一軒の屋敷にたどり着いた。

男は一良に「ちょっと待っていてください」と言うと、屋敷の引き戸を強くノックする。

「バレッタさん、ロズルーです！ 旅の商人さんをお連れしました！ 塩と薬を譲ってくださいるそうですよ！」

一良を屋敷まで連れてきた男——ロズルーという名前らしい——が戸を叩いてから待つこと10秒ほど。

戸が開き、これまた痩せ細った若い女が顔を出した。

「あ、ロズルーさん……薬って聞こえましたが……」

女の目の下には濃い隈が出来ており、手足は細くて棒のよう。何処に出しても恥ずかしくない、完璧な栄養失調と過労の化身である。

身長が170cmちょっとである一良よりも頭一つ分程小柄な体格も相まって、なおのこと儂げな印象を受ける。

女は肩ほどまで伸ばしている金髪を首の後ろで一つに結んでいるのだが、栄養失調のためか髪にも潤いが無くパサついて見えた。

「（すっかり休んで栄養さえとれば、結構可愛くなりそうだなあ）」

栄養失調でガリガリな今ですら、一良の見立てでは顔立ちはかなり可愛い部類に入る。

女を見てそんな感想を抱いている一良を他所に、ロズルーは興奮した様子で話し始めた。

「ええ！ カズラさんが譲ってくださる薬があれば村長の病も治るかもしれません！」

「えっ、本当ですか！ 父の命は助かるんですか！？ ありがとうございます！」

薬と聞いた女、バレッタは、疲労に染まった顔をパツと輝かせ、一良を見ると涙を滲ませながら頭を下げた。

「え？ ちょ、ちょっと待ってください。貴女のお父様はご病気なのですか？」

何やら話が、一良が目の前の子の父親を救う救世主のような方向になってきている。

風邪や腹痛程度に使う薬ならば持っているが、万が一結核とか癌などだった場合はどうしようもない。

「はい、5日ほど前から寝込んでしまって、ずっと熱は出ているし、栄養をつけさせようにも食べ物はあるが無く……。お金さえあればお医者様を呼ぶことができるのですが、私たちのような者にはとても払えるような金額ではなくて……。もう、半分諦めかけていたんです」

どうやら、彼女の父親はかなりの重病らしい。

そして、何故か彼女たちは一良が譲ると言っている薬を使えば、重病人である村長は治ると考えているようだ。

まだ何の薬かすらも言っていないというのに。

「（薬といっても、胃薬と少し前に医者で処方してもらった痛み止めくらいしか持っていないぞ。あとリポDか）」

バックに入っている薬を思い起こしながら、一良は陰鬱な気持ちになった。

万が一、村長の病気が難病だった場合、手持ちの薬ではどうにもならないし、医療従事者でもない一良に正しい診断が下せると思えない。

農作業のやりすぎで足腰が痛んでる村人がいるだろうと思い、結構強めの痛み止めを持っていたので薬を譲るなどと言ったのだが、考えが甘かった。

「私の持っている薬が効くかどうかはわかりませんが、とりあえず村長さんの具合を見せていただけますか？」

「はい、よろしくお願いします！」

勢いよく頭を下げるバレッタに、一良は「どうか腰痛とか栄養失調でありますように」と祈りながら、バレッタに導かれて屋敷に入るのだった。

「お父さん、この方が薬を持ってきてくれたよ！ もう大丈夫だから！」

「村長！ もう大丈夫ですよー！」

「う……、くすり……？」

「（……ええ……）」

通された一室で寝込んでいるバレッタの父親を見た瞬間、一良は思った。

これは明日にも香典を持ってくる羽目になりそうだなと。

「どうですか、カズラさん。父は治りそうですか？」

バレッタは父親の手を握り、棒立ちになっている一良を泣きそうな表情で見上げる。

「最寄の葬祭場ってどこですかね？」

などとはとても言えない空気を感じ取った一良は、とりあえずバ

レッタの父親の傍に座って具合を見ることにした。

「うわ、凄い熱だな。目も窪んでて焦点が合っていないし、全身に震えが起こっててこれはもう……大丈夫です！ 治ります！！」

素人目に見てもあまりに酷い病状に、思わず素直な感想を口走った一良であったが、涙をこぼし始めたバレッタを見た瞬間に発言を切り替えた。

言った直後に「やっちゃった！」と後悔したけれど。

「本当ですか！？ ……よかった」

「あ、いや、治るっていうか、もうすぐ苦しみから解放されるとい
うか……」

一良の手を握り、泣きながら何度も礼を述べるバレッタに、一良は全身に冷や汗を掻き始める。

そんな一良に追い討ちをかけるかのように、ロズルーが

「そうですか！ では、私は村の人たちにこのことを伝えてきます
！」

と言うと、慌てて制止をかける一良を無視して屋敷の外へ飛び出して行くのだった。

3話：村にて その2

「お父さん、これを飲めば治るのよ。頑張って飲んで」

バレッタは苦しそうに唸る父親をそつと起こし、一良から貰った薬（胃薬と鎮痛解熱剤の錠剤）を、水と一緒に父親の口に入れる。父親はむせ返りながらも、何とか薬を飲み込んだ。

「あとこれ、エイヨドリンクって言うんだって。これも飲んで」

父親にリポDを飲ませるバレッタを見ながら、一良は頭を抱えていた。

たったあれだけの薬で、死相の塊みたいになっている人間が助かるはずはない。

気休めでリポDも飲ませてはいるが、ファイト一発どころか、明日にも永眠するような気がする。

「カズラさん、父はあとどれくらいで元気になるのでしょうか？」

父親に薬とリポDを飲ませ、再び寝かせたバレッタは一良に尋ねた。

「あー、そうですね、遅くとも明日か明後日には全ての苦しみから解き放たれるかと思います」

若干投げやりに答える一良に、バレッタはホッとしたように微笑んだ。

「よかった……。あの、カズラさんは今夜お泊りになる所は決まっ

ているのでしょうか？ もしまだ決まっていけないのなら、薬のお礼
といつては何ですが、家に泊まっていつてくください」

心底信頼した表情を見せるバレッタに、罪悪感で一杯だった一良
は腹を決めた。

もし彼女の父親がこのまま死んだら、土下座でもした後に、彼女
に自分の財力を使って精一杯償おうと。

「汚いところで申し訳ないのですが、いかがでしょうか」

尚勧めるバレッタに、一良は蚊の鳴くような声で

「……おねがいします」

と呟くのだった。

「……えらいことになった」

一良は通された8畳ほどの広さの板張り部屋の隅で、もう二時間
近く一人頭を抱えていた。

先ほど見た村長の様子からするに、恐らく今晚か明日にはご臨終
なされる気がする。

はたしてその時、バレッタは自分のことを許してくれるのだろうか。

「治ります！」などと断言しておきながら、その後ポツクリ逝っ
てしまったのでは、最悪刺されても文句は言えない気がする。

「カズラさん！」

その後、一良が頭を抱えながら床を20分程転げまわっていると、急にバレッタが部屋に飛び込んできた。

一良は反射的に跳ね起きると、勢いよく床に頭を擦り付ける。

「お父さんが治りました！ 本当に凄いお薬です、ありがとうございます！」

「申し訳ございま……え？」

予想外の知らせに、一良が顔を上げると、土下座している一良を不思議そうな顔で見ているバレッタと目が合った。

「あの、治ったって、お父さんが元気になったってことですか？」

「ええ、もう起き上がって夕食の支度をしています。あんなに苦しそだったのに、こんなに早く元気になるなんて、本当に凄いお薬ですね！」

バレッタの返答に、一良は目が点になった。

一良が村長に飲ませたのは、ただの解熱鎮痛剤と胃薬、それにリポDである。

僅か数時間で元気になるはずがない。

「んなバカな……」

「え？」

「あ、いえ、なんでもないです」

きょとんとした表情のバレッタに、一良は漏らした言葉を慌てて訂正し、唸った。

村長が元気になった理由がさっぱりわからない、というか信じられない。

「あの、念のためにお父さんの様子を見せてもらってもいいですかね？」

「はい、父も夕食のときにお礼を言いたいと言っていたので、丁度いいですね。もう出来るころですから、居間に行きましょう」

嬉しそうにニコニコと微笑むバレッタの後を、一良は首を傾げながらついていくのだった。

「おお、貴方がカズラさんですか。貴重なお薬を分けていただき、ありがとうございます。ささ、どうぞ座ってください」

「あ、どうも……」

一良とバレッタが居間に着くと、先程まで息も絶え絶えだった村長が、部屋の中央にある囲炉裏で鍋に何やら汁物を作っているところだった。

村長の身体は痩せ細って棒のようだが、顔色は良く元気そうに見える。

「先程はまともに挨拶もできず、申し訳ありませんでした。この村の村長のバリンと申します。ささ、丁度夕食が出来たところです。召し上がってください」

「ありがとうございます。あの、調子はいかがですか？」

汁物が入れた木の器と木のスプーンを受け取りながら、一良が村長に尋ねると、村長はニッコリと微笑んだ。

「カズラさんの薬を飲んでから、あつという間にこの通りです。薬というものを飲むのはこれが初めてですが、まさかこれほど凄いものだとは……。何とお礼を申したらいいか」

「私もびつくりしました。薬は、短くても数日間には飲まないと効かないって聞いたことがあったので、こんなに凄いものだとは思っていませんでした」

びつくりしたのは一良の方である。

たかが合計数百円の薬と栄養ドリンクで、棺桶に片足を突っ込んでいたような人間が数時間で元気になっているのだ。

しかし、何はともあれ村長の病気は治ったようであり、一良に対する心象もすこぶる良くなったのは事実である。

「それはよかった」

などと言いながら、熱々の汁物を啜る一良だが、頭の中はクエスチョンマークで埋め尽くされている。

混乱しながら汁物を啜っていると、何やら妙な舌触りを感じて、器から口を外した。

具材は何だろうとチラ見してみると、何かの葉っぱと芋虫のようなものが入っているように見える。

「（芋虫じゃない芋虫じゃない芋虫じゃない、きっと何かの木の実は。もしくは限りなく木の実に近い芋虫だ）」

「あ、それは私が父のために捕ってきた、アルカディアン虫です。クロコ虫じゃないですよ」

「……」

一良がスプーンで具材を突いていると、バレッタから絶望的な情報をもたらされた。

見た感じ芋虫のようなアルカディアン虫が触れないくらい嫌いというわけではないが、口に入れるとなると話は別である。

クロコ虫じゃないとか、そういう問題ではない。

「最近はまだ採れなくなっちゃって、今日は10匹程しか取れませんでしたけど……。町では高級食材として使われているみたいですし、本当美味しいですよね……。って、カズラさんなら食べたことありますよね」

ニツコリと微笑むバレッタの横では、村長が「うむ、いつ食べてもこいつは美味い」などと言いながら、芋虫をモリモリ食べている。

「食ったことねえし食えるわけねーだろオー！？」

と叫びながら、器を村長の顔面に投げつけてやりたい衝動に駆られたが、さすがにそんな度胸はない一良は、目に涙を浮かべながら

「そうですね！ 美味しいですよね！」

と大声で自分をごまかしながら、何故か自分の器には沢山入っていたアルカディアン虫を、涙目で口にかき込み咀嚼した。

初めて食べるアルカディアン虫は、薄いコーンスープのような味

がした。

「頑張れ俺の胃袋。正露丸と共闘して、アルカディアン虫を撃退するのだ」

食後、一良が正露丸を飲んで部屋で倒れこんでいると、バレッタが布団を持ってやってきた。

「カズラさん、お布団持ってきました。そろそろお休みになりますよね？」

バレッタの言葉に、一良は自分の腕時計を見た。

元の世界と時差があるのかは分からないが、外にいたときの明るさからして、大して時間は変わらないだろう。

「え？ まだ6時……じゃない、まだ明るいですけど？」

「ええ、でも、もうすぐ日が暮れますから」

そう言っつて柵状の窓から空を見るバレッタ。

一良もつられて窓に目をやると、空はオレンジ色に染まっており、もうすぐ日が落ちそうだった。

「（そうか、ロウソクとか行灯あんどんみたいな照明装置なんて、この家にあるわけないもんな）」

恐らくこの村では、日の出と共に起きて、日の入りと共に寝るということが日常なのだろう。

元いた世界でも、大昔はロウソクなどの照明道具は高価な品物だったはずであり、この世界でも同じなのかもしれない。照明道具が発明されていればの話だが。

「ああ、そうですね。ありがたく使わせてもらいます」

礼を述べ、所々ほつれた煎餅布団を受け取る。

元々風呂なんてものがあるとは思っていなかったのだが、布団は存在するようなので助かった。

「あつ、そうだ。これを渡し忘れてた」

布団を受け取った一良は、村に譲ると言っていた塩をまだ渡していなかったことに気づき、ボストンバッグからビニールに包まれた食塩を取り出した。

表面には大きな文字で「食塩 1 kg」と記載されている。スーパーで税込み 105 円だった。

「お譲りすると約束していた塩です」

「えっ、これが塩！？こんなに真っ白な塩なんて、見たことないです！」

一良から塩を受け取り、バレッタは目を丸くして驚いている。つまり、この世界の一般的な塩には不純物が入ってしまっていて、着色が見られるのだらう。

「それに、この袋みたいな、透明なものは一体何でしょうか？」

「ん？それはビニール……あー、しまった……」

バレッタが不思議そうに見ている、塩の入った透明ビニールを見て、パチンと額に手を当てた。

ビニールなどと言っても見たこともないだろうし、説明しても理解できないだろう。

一良は「そういうもの」で通すことにした。

「私の国で最近発明されたもので、軽いしそれなりに丈夫なんですよ。水に漬けても平気です」

「そうなんですか……、あの、これは何て書いてあるんですか？初めて見る文字ですけど」

「私の国の文字で、塩と書いてあります。あの、本当にこんな風な文字は見たことがないんですか？」

「どうやら、日本語は通じるが、漢字や平仮名は通じないらしい。少なくともこの村では。」

「ええ、父から教わって一応文字の読み書きはできますけど、こんな文字は見たことがないです」

「どうやら、言葉は通じるが文字は通じないという、何とも都合主義というか、奇妙な世界のようにだ。」

「あの、カズラさん」

言葉が通じるのはありがたいが、文字が読めないのはこの先困るかな、と一良が考えていると、バレッタが遠慮がちに一良に話しかけた。

「父に飲ませていただいたお薬のことなんですけど……やはり、とても高価なものなのでしょうか？」

「ああ……、そうですね、それなりに高価です」

一良は少し考えて答えた。

実際は全部で数百円程度のものだが、もし本当に村長に発揮したような効能がこの世界の人間全てに発揮できるのであれば、使い方次第で絶大な力となるだろう。

ホイホイと安売りするべきではないかもしれない。

「そう……ですね」

一良の答えに、バレッタは俯く。

「あの、お願いです！」

そして、意を決したように顔を上げると、一良の手を取り懇願した。

「お金はいつか必ず払いますから、あのお薬を村のみんなにもわけあげてください！ 必要なら私を奴隷商に売ってもらっても構いません。村を、私たちの村を助けてください！」

「ちょ、奴隷商って、奴隷制があるのかよ……じゃなくて、わかったから顔を上げてください！」

お願いします、お願いしますと涙を浮かべながら繰り返し、縋り付いてくるバレッタを、一良は慌ててなだめる。

「他にも病人がいるんですか？」

「はい……父と同じような病気になっている人が、あと50人はいます。熱が下がらないまま死んでしまった人も、もう7人もいます。赤ちゃんがいる人も母乳が殆ど出なくなつて、アルカディアン虫をすりつぶしたものを飲ませたりしているのですが、やっぱり身体に合わないみたいで……。まだ死んでしまった赤ちゃんはいませんけど、可哀想なくらい痩せ細つてしまつて、いつまでもつか……」

「この村の村人は、全員で何人いるんです？」

「えつと、110人くらいだったと思います」

「ほぼ半分がダウンしてるのかよ……」

どうやら、この村はかなり深刻な飢餓状態のようだ。
このままいつたら村が崩壊するんじゃないだろうか。

「お願いします、私一人が身売りした程度では、あの薬1つ分のお金にも満たないということは百も承知です。でも、せめて赤ちゃんだけでも助けてあげてください……」

そう言うつと、バレッタは再び俯いた。

ここで手を差し伸べなければ男が廃るというもの。
たかだか数万円の出費で村を救うことが出来る上に、まず確実にこの世界での活動拠点を得ることができるのである。

あわよくば、村娘バレッタのフラグ回収というおまけ付だ。

「わかりました。フラグかいしゅ……じゃなかった、村を救うためならば、喜んでお薬を差し上げましょう。あと、お金はいりません。その代わりに、この村に私を住まわせて欲しいのです」

「えっ!？」

一良の申し出に、バレッタは驚愕した。
バレッタの知る限り、薬というものはそれこそ目玉が飛び出るような金額で取引されているものである。

村に住まわせて欲しいという依頼があつたとはいえ、無料で薬を提供するなどあり得ない話である。

「で、でも、たったそれだけのことでお金はいらないなんて、自分でお願いしておいて何ですけど、カズラさんは大丈夫なんですか？」

「ええ、お金よりも命のほうが大切ですから」

どう考えても綺麗事以外の何物でもない台詞を吐く一良を、バレッタは呆然とした表情で見つめる。

そんなバレッタの様子に、「いかん、幾らなんでも今の台詞は胡散臭すぎたか？」と一良は冷や汗をかいた。

「本当に……信じて、いいんですか？」

「も、もちろんです。任せてください」

震えた声で問うバレッタに一良が答えると、再びバレッタの目にじわじわと涙が浮かぶ。

そして、涙が一筋頬を流れると同時に、大声を上げながら子供のようにわんわんと泣き出すのであった。

4話：村にて その3

「ご、ごめんなさい、カズラさんの返事を聞いてホッとしてしまつて」

「いえいえ、ずっと辛かったのでしょうか？ 張り詰めていたものが切れたんですよ」

泣きじゃくるバレッタを何とか落ち着かせると、一良は「さて」と言つて立ち上がった。

栄養失調や病気で死に掛けている人間が大勢いると知っては、のんびりしているわけにはいかない。

「今から薬を取りに国へ戻ります。明日の朝には必ずここに帰ってきますから」

「えっ!？」

一良の台詞を聞き、バレッタは驚いた。

彼女の常識では、照明道具も持たずに、慣れない土地の夜道を歩くことは自殺行為である。

一良ならば高価な照明道具も持っているかもしれないと頭の隅で思ったが、道に迷った末にこの村に辿り着いたような人間が、夜中に出発して国に帰ろうとしても、昼間とは違って確実に道に迷うだろうし、獣や野盗に襲われる危険もある。

「今からって、もうすぐ日が暮れますよ？ 夜道は危ないですし、明日の朝に出ても……それに、バルベールに通じる関所までは、ここからどんなに急いでも徒歩では4日はかかりますよ?」

一良の身を案じるバレッタに、一良は首を振る。

バレッタは一良がバルベルとかいう国から来たと勘違いしているようだが、ここから歩いて15分の日本から来たのである。

通ってきた雑木林の木には石で印をつけてあるし、雑木林の中を歩くといっても大した距離ではない。

「いや、出発を遅らせたせいで亡くなられた方が出たとしたら、それこそ悔やんでも悔やみきれません。あと、私はバルベルから来たわけではありませんよ。半日もあれば帰ってこれます」

それに、と一良はボストンバッグからペンライトを取り出すと、スイッチを押した。

「えっ!？」

「夜道が暗くても、これがありますから」

強い光を放つペンライトを見て呆然とするバレッタに、一良は「それでは、また明日」と言って部屋を出るのだった。

「はてさて、家の傍に24時間開いてるスーパーってあったっけか？」

殆ど日が落ちて薄暗くなった森の中を、一良は来るときに付けた目印をペンライトで探しながら、ボストンバッグを片手に走っていた。

元々大した距離ではなかったので、森に入ってから僅か2分ほど

で石畳の通路に辿り着く。

「はいはい、ちょっと通りますよ」

相変わらず通路の曲がり角に崩れ落ちている白骨死体に声を掛け、通路を通って元の世界への敷居を跨ぐ。

周囲が一瞬で畳張りの屋敷に変わったことを確認すると、一良は屋敷の外に出て車に乗り込んだ。

「えーっと、最寄のスーパーは……ここから40kmか。完全に買い物弱者だな」

一良はやれやれと溜息をつく、リポDと食料を買うべく、40km先のスーパーに向かって車を走らせるのだった。

「病人が50人いて、村人全員が栄養失調。あと乳幼児に与える母乳が出ないんだっただな。……米と缶詰、それに粉ミルクか。どれくらい買っていけばいいんだろうか」

24時間営業のスーパーに辿り着いた一良は、ショッピングカートを押しながら考え、必要な食料品が恐ろしい量であることに今更ながら気づいた。

「さてよ、米を持って行って、もし水がなかったらどうする？ 確か村の畑は干からびてなかったか？ 一応飲む程度の水はあるかもしれないけど、米をといで炊くほどの水はあるのか？」

もっとバレッタに村の状況を聞いてから出てくればよかったと後

悔したが、後の祭りである。

結局、カートを押しながらあれこれ考えた末、無洗米100kg、塩20kg、梅干5kg、リポD400本（店に置いてあった在庫の全て）、粉ミルク10缶と哺乳瓶、水10リットル（水が汚い場合を想定しての粉ミルク用）、桃の缶詰60缶（病気の時には桃缶食べるってばっちゃんと言ってた）を買って行くことにした。

もし水が殆ど無かったとしたら、とりあえずリポDで臨時の栄養補給をさせ、後からポリタンクで水を運ぶしかない。

レジで会計をする際に、「炊き出しでもするんですか？」とバイトの女の子に聞かれたので、正直に頷いておいた。

「やっぱりこの時間帯じゃ、お薬コーナーは開いてなかったなあ。アパートから持ってきた薬だけじゃ足りないよな……」

150kg近く重くなった車を運転しながら、一良は唸った。

現在時刻は午後9時30分。

山道を時速40kmの安全運転で走り、スーパーに着いたのが8時丁度。

当然のごとく、お薬コーナーはとくに閉まっていた。

村長に飲ませた胃薬や痛み止めは、両方ともあと20錠程残ってはいるが、病気の人間が50人もいるのではとても足りない。

しかしまあ、胃薬は胃壁を守るやつだったし、痛み止めは解熱鎮痛剤なので、直接病気を治したのは栄養ドリンクであるリポDである。

栄養が足りなくて弱っている人間が大半だとすれば、リポDだけでも何とかなる気がする。

「特に熱が酷いとか、痛みを訴えている人だけに薬は与えることに

すればいいか。命が助ければとりあえずよしとしよう」

とりあえずそれで妥協することにし、一良は夜の山道を急ぐ。

点在する農家らしき民家を見ながら運転していると、一良はある重要な事に気づき、「あつ、しまった！」と声を上げた。

「こんなに大量の荷物、どうやってあの村まで運ぶんだよ……この車で屋敷に突っ込むわけにはいかないぞ」

合計150キロ近い荷物を、手で持って村まで運ぶのは無理である。

何度も往復すれば可能ではあるが、現代っ子である一良としては、はつきり言ってやりたくない。

「まいったなあ、今からホームセンターに行っても閉まってるだろうし……少しずつ運ぶしかないのか……」

悩みながら運転していると、道端の畑の物置小屋に、リアカーが入っているのが見えた。

一良は思わず車を降りて、物置小屋の中にあるリアカーをまじまじと見つめる。

「むう、なんというタイミング……でも、勝手に持っていたら泥棒だしなあ」

昔ながらの鉄製で結構重たそうだが、作りがシンプルなためになりしっかりしている。

タイヤもノーパンクタイヤ（中身が全部ゴム）のようだ。

「仕方ない……緊急事態だ、これで許してもらおう」

一良はリアカーを小屋から引つ張り出すと、車の後ろにロープでもち手を縛り付けた。

そして財布から1万円札を30枚ほど取り出すと、車にあったビニール袋に入れ、袋に「ごめんなさい」とマジックで書いて、リアカーのあった場所に置き、再び車に乗り込むのだった。

余談ではあるが、数日後に一良がこの小屋の前を通ると、真新しい折りたたみ式のリアカーが置いてあり、リアカーのもち手に張り紙がついており、「ありがとう。野菜なんでも採っていつてください」と書いてあったという。

「やっと着いた……よくリアカーに着けてたロープが千切れなかったな」

車の後ろのロープを外してリアカーを屋敷に入れ、後部座席に積んであった米などの積荷をリアカーに乗せる。

リアカーを気にしてゆっくりと運転したため、帰ってくるのになり時間がかかってしまい、現在時刻は夜中の12時である。

しかしそれでも、遅くても1時間後にはバレッタの待つ村に着くだろう。

村を出てから、まだ6時間程しか経っていない。

「一休みしたいところだけど、そうもいかないからな。リポD飲んで梅干食ったら、とつとと行くか」

思えば昼過ぎに異世界に行ってから、謎の葉っぱとアルカディアン虫入りの汁物しか口にしていない。

カロリー不足で若干辛いが、リポDを2本と梅干1粒で誤魔化した。

ファイト2発とクエン酸の合わせ技で何とかなるだろう。

「畳は後で掃除しなくちゃな……よし、行くか！」

一良は声を出して気合を入れると、150kgもの荷物が乗ったリアカーを引いて、異世界への敷居を跨ぐ。

「おお、さすがリアカー。軽い軽い」

一良は石畳の通路をリアカーを引いて、ペンライトで地面を照らしながらスイスイ進む。

雑木林では木の根っこに少々苦戦したが、最大積載重量が数百キロにも及ぶリアカーのおかげで、問題なく通過することができた。そうして、バレッタの待つ屋敷に向かってリアカーを5分ほど押していると、屋敷の方から誰かが走ってきた。

「あれ、バレッタさん、まだ起きてたんですか」

「カズラさん！ まさか、もう帰ってくるなんて……それにその荷物は！？」

リアカーに乗っている大量の荷物を見て、バレッタは目を丸くしている。

「国から薬と食べ物を持ってきたんです。えーと……詳しくは聞かないで貰えるとありがたいです」

自分がこの世界にやってきた経緯を話そうかとも思ったが、異世

界からやってきたなどと言っても信じられないだろう。

それに、考えてみれば、村から歩いて5分程の距離に日本と行き来できる場所があるというのに、その場所の存在にこの村の人間が気づいていないというのもおかしい話である。

何かの禁威的な土地がああ石畳の通路の場所だとしたら、知られたら面倒なことになりかねない。

「カズラさん……まさか……貴方はグレイ……」

「え？」

「あつ、いえ、何でもありません！　こんなに沢山のお薬と食べ物、ありがとうございます！」

バレッタは何故か急に慌てだし、一良に礼を述べるとリアカーの取っ手くぐり、一良を手伝って引き始めた。

何か言いかけていたのは気になるが、何はともあれ、深く追求しないでいてくれるのはありがたい。

それからバレッタの屋敷まで一緒にリアカーを5分ほど引いたのだが、バレッタは何やら考え込んでいるようで、一言も喋らなかった。

「ああ、腰が痛え……筋肉付けないとなあ」

リアカーに乗せていた荷物をバレッタの屋敷に運び込み、一良は腰に手を当てて伸びをした。

バレッタは栄養失調気味でとてもじゃないが重いものは運ばせられないので、100kgの米とリポDは全て一良が運んだのだった。

「すみません、私力がなくて……」

そんな一良に、バレッタは申し訳なさそうに謝る。

「あ、いやいや、気にしないでください。それより、もう夜中ですが、どうしましょう？　すぐにでも薬を持って家々を回りますか？」

「はい、きっと皆苦しんでいるはずですから、すぐにでも持って行ってあげたいです」

その答えに、一良も「ですよね」と頷くと、リアカーに乗せていたポストンバッグを肩にかけた。

こうなることを予想して、予めリポDと粉ミルク、それに哺乳瓶を詰め込んでおいたのである。

「よし、行きましょう」

「はい」

ペンライトで足元を照らしながら、二人は夜の村を早足で歩くのだった。

「さあ、頑張つて飲んでください。病気なんて直ぐに治ってしまう、魔法のお薬です」

「ほ、本当か……ありがとう……」

「え？ いや、そんな大層なものじゃないんだけど……」

二人は病気の村人の家に着くと、早速リポDを取り出し、寝込んでいる村人に飲ませた。

何故かバレッタが自信満々で村人にリポDを飲ませているが、一良としてはまだ確信が持てていないので、少しばかり不安である。

「何を言ってるんです、本当のことじゃないですか。さあ、急いで他の家も回りましょう」

そんな掛け合いをしながらも、二人は急いで次の村人の家に向かった。

何しろ、病気の村人は全部で50人はいるのである。
全員の家に回るとなると、結構時間がかかるのだ。

「あ、そうだ、赤ちゃんにあげる母乳がでない人のために、母乳の代わりになるものも持ってきたんですよ。そっちは急がないと」

「ええっ！？ 本当ですか！ じゃあ、病気の人には悪いですけど、赤ちゃんを優先しましょう！」

こんな具合で、結局二人が全ての家を回りきったのは、山の向こうから太陽が顔を出した頃だった。

5 話：戦争の爪痕

村にいる全ての赤ん坊に粉ミルクを与え（粉ミルクの缶と哺乳瓶は、使い方を説明して各家に1つずつ置いてきた）、病気の村人全員にリポDを飲ませるという大仕事を終えた二人は、次の仕事に取り掛かるべく屋敷の居間に戻ってきた。

炊き出しである。

しかし、さすがに寝ずに活動しっぱなしである二人はヘトヘトで、腰を下ろしてリポDを飲みながら小休憩をとることにした。

「あ、このお薬って美味しいんですね。思ってたのと随分違います」

一良から受け取ったリポDを両手で大切そうに持ち、少しずつ飲みながらバレッタは言う。

「そうでしょう？ 私もこの味が好きで、毎日……じゃない、時々飲んでるんですよ」

本当は毎朝1本リポDを飲んで活動を始めているのだが、薬を毎日飲んでいるというのもおかしい話になってしまつので、表現を変えておいた。

「それはそうと、この村の食糧事情はかなり悪いようですが、何があつたのか教えてもらえませんか？」

村に戻ってきてからずっと気になっていた事を一良が聞くと、バレッタは表情を曇らせた。

「最近ずっと雨が降らなくて、日照り続きで溜め池の水が枯れてしまつて……」

「ああ、干ばつで作物がやられてしまつたのか……」

バレッタの台詞に一良が納得していると、バレッタは辛そうに言葉が続けた。

「直接の原因は日照りなんですけど、昔だったら少し離れた大きな川から水を汲んでくれば何とかなつたんです。でも、4年前まで続いていた戦争のせいで、村の若い人は殆ど死んでしまつて……今回のような長い期間日照りになると、人手不足で作物を守れないんです」

「つい最近まで戦争があつたんですか？」

「えっ？」

一良の台詞に、バレッタは一瞬きよとした表情を見せたが、すぐに何か納得したような様子で、一良に戦争のことを説明し始めた。

「はい、4年前までの6年間、バルベールと私たちの国であるアルカディアの間で戦争がありました。何で戦争になつたのかは詳しくは知らないのですが、バルベールが急に侵略してきたってナルソン様の家来の方が言っているのを聞いたことがあります。それで、私たちの村からも若い男の人は兵士として召集されたのですが、戦争が進むにつれて人手が足りなくなつたみたいで、年寄りと幼い子供以外は女の人も戦争に狩り出されたんです」

バレッタの話を聞き、一良は「ううむ」と唸った。

話からすると、バルベールとアルカディアの間で起こった戦争は、往年の男や女性までもが招集されるほど、アルカディアにとって厳しい戦いだっただろう。

村に来てからバレッタの母親を見なかったのも、戦争で命を落としたからなのかもしれない。

「バルベールはアルカディア以外の国とも戦争をしていたのですが、今から4年前に、バルベールと戦争をしていた全ての国々が同盟を結んだんです。同盟を結んだことで各国が連携を取るようになり、大国であるバルベールもさすがに息切れを起こしたようで、バルベールからの申し出により、8年間の休戦協定が結ばれたんです」

「どの国も、長い戦争で国力が限界に達したってわけか」

つまり、その戦争で出た大量の犠牲は労働力不足に繋がって、現在もアルカディアを苦しめているのだろう。

労働力の中心である若い人間が一気に減ったことで、食料の生産力が下がり、人口も増えなくて労働力は更に低下するといった悪循環に陥っているのかもしれない。

恐らく、この村以外の町や都市も、似たり寄ったりな状況なのだろう。

「今年で休戦4年目ですから、あと4年したら期限切れです。もし4年後に戦争が再開されたとしたら、その時は私も兵士として招集されることになると思います」

その台詞に、一良は言葉を失った。

バレッタのような、とても戦いには向きそうも無い若い女性までもが、あと4年したら強制的に戦場へと引きずり出されるかもしれない

ないのである。

一良が何も言えずに黙っていると、バレッタは「さてと」と言つて立ち上がった。

「そろそろ食事の準備をしましょう。カズラさんに頂いたお薬のおかげで、疲れもすっかり取れましたし」

そう言つて微笑むバレッタに、一良も「そうですね、やりですか」と答えて立ち上がる。

「屋敷の納屋に、お祭りの時の料理に使う大鍋があるんです。それを使えば、村人全員分の食事も作ることができますよ。でも、大きい分薪を沢山使うので、村のみんなに薪を分けてもらわないといけませんけど」

「なるほど……そしたら、私が鍋の用意はしますから、バレッタさんは村の人たちに、炊き出しをするので薪を持つてくるように伝えて回つてもらえますか？ あと、できれば水も少しずつ持ち寄つて貰えると助かります」

「わかりました。そしたら、そろそろ父が起きてくると思うので、鍋の置き方などは父に聞いてください」

そうして、バレッタは一良に納屋の場所を教えると、

「では、行つてきますね。すいませんが、準備よろしく願いします」

と言つて、小走りで屋敷の敷地から出て行つた。

一良は走り去るバレッタの背を見送りながら

「戦争か……その時俺は、いったい何処で何をしているんだろうな」と呟くのだった。

「うわ、これは大きいですね。これなら一度で1000人分は余裕で作れそうだ」

その後すぐに起きてきた村長と一緒に、直径1メートルはありそうな青銅の大鍋を納屋から引っ張り出し、一良は感嘆の声を漏らした。

深さも50cmは裕にあり、これならば100人分のお粥を作ることも出来そうだ。

「うむ、いつも祭りの時期になると、この鍋でスープを沢山作って村人に振舞いましてな。山でカフクを狩ってきて、肉や野菜も沢山入れるので、村人には好評なのですよ」

「ほー、肉入りスープですか。沢山作れば、余計に美味しいでしょうねえ」

一良は「カフクって鹿とか猪みたいなものかな。てか、スープって単語は通用するのか」などと考えながら、村長の話に頷いた。

「ところで、これから作る粥に使う米というのは、いったいどんなものなのですか？」

「ええと、そんなに味がある食べ物ではないのですが、栄養豊富な

穀物です。本当は粥にはせずに炊き上げるんですが、体が弱っている人が多いので、粥にしようと思ひまして」

一良は村長に説明しながら、二人で納屋にしまつてあつた石で鍋の土台を作ると、鍋を乗せて中に無洗米を30kg入れた。

ちよつと多い気もするが、後々足りなくなるよりはマシだろう。

その後、一通り準備を終え、村の状況などについて一良が村長から聞いていると、ぽつぽつと村人が薪と水桶を持ってやってきはじめた。

やってくる村人の中には、日の出前に一良が薬やりポDを飲ませた者もいた。

「カズラさん、先程はお薬をありがとうございました。おかげで、もうこうして歩けるようになりましたよ」

そう言つて一良の手を取り礼を述べる村人は、顔色も良く元気そうだ。

どうやら、この世界ではリポDはかなりの性能を発揮すると見える。

「それはよかつた。これから鍋いっぱい粥を作りますから、お腹一杯食べてもつと元気を出してくださいね」

やつてきた村人たちと協力し、鍋に水を入れて薪を設置する。

村人たちは皆一様に一良に厚く礼を述べ、子供に粉ミルクを飲ませてもらった母親の中には、涙を流して一良の手を取る者もいた。

そうして、礼を述べられながら一良が村人に囲まれているうちにバレッタも戻つてきて、皆でわいわいと粥の炊き出しの仕度に取り掛かるのだつた。

「これは美味しい！　こんな美味しい粥は食ったことがねえ！」

「本当、塩もたっぷり入ってるし、この梅干ってやつもすっぱいけど凄く美味しいわ！」

鍋が大きいせいで2時間ほどかかってようやく粥が出来ると、一良はバレッタも食べる側に回らせ、粥をよそって村人に配った。粥を口にした村人たちは、皆口を揃えて「美味しい！」と驚きと喜びの声を上げていた。

「（そういえば、昨日食べたアルカディアン虫の汁物も、殆ど味しなかったもんな。調味料なんて全く無かったんだろっな）」

塩ですら高値で取引されていると思われるこの世界では、味の殆どが使われる素材の味だけなのである。

アルカディアン虫を美味しい美味いと言って食べていた、バレッタや村長の気持ちも分かる気がした。

「なあなあにいちゃん、どうしてそんな変な格好してるの？」

「え？」

嬉しそつに何度もお代わりにくる村人たちに、粥を配りながらそんなことを考えていると、一人の5、6歳男の子が寄ってきて、一良の服を引っ張ってきた。

その言葉に、一良は初めて自分の服装と村人の服装を見比べてみる。

一良は薄いストライプの入った白の半袖シャツとジーパン、靴はちよつとお高めのスニーカーである。

それに引き換え、村人たちは縫い目の粗い簡素な無地の上下に、草を編んだサンダルのような履物を履いている。

明らかに一良の服装は浮いていた。

「ええつと、これはね……」

「コルツ!!」

どう答えようかと一良が悩んでいると、母親らしき女性が慌ててやってきて、男の子を抱きかかえると、

「申し訳ありません!」

と深く頭を下げ、一良が言葉を掛ける前に、子供を抱えたまま走って行ってしまった。

いったい何なんだと一良が走り去る女性の背中を見ると、村人全員の視線が一良に集中していることに気づいた。

先程までのにぎやかな喧騒は張り詰めた静寂にかわり、村人たちは何故か不安そうな表情をしている。

「カ、カズラさん、その……」

「えつと、皆さんどうしたんです? 私の顔に何かついてますかね?」

慌てた様子で話しかけてきたバレッタに一良がそう答えると、周囲に張り詰めていた緊張が一気に溶けた気がした。

「あ、いえ！ 何でもないです！ その、私もお代わり貰おうかなって！」

「あ、はい、いいですよ」

一良がバレッタに粥をよそっている間にも、遠くから「よかった」とか「気をつけねばな」といった言葉が聞こえてきたが、あからさまにホッとしているバレッタや周囲の村人に「何のこと？」と聞くのも躊躇われたので、忘れることにした。

「そうそう、米はあと7袋残ってるので、炊き出しが終わったら粥の作り方を皆に教えて、梅干や塩と合わせて分けて持たせましょう。米や塩はまた後で国から沢山持つてきますから、食べ物心配はもうしなくても大丈夫ですよ」

桃缶は各家に1つずつかな、と言いながら考えている一良に、バレッタは一良にも聞こえないような小さな声で「……ありがとうございませう、グレイシオール様」と呟くのだった。

6話：幸運の雨

一良の腕時計の針が午後1時を指す頃、ようやく炊き出しも終わり、集まった村人たちは片づけを手伝う者、米や塩などをより分ける者に分かれ、それぞれ作業に移った。

村人たちが和やかに作業を行う中、一良は村長とバレッタに、ある提案をしていた。

「雨乞い、ですか？」

「ええ、村にはそのうち水道……川から水を通す道を作れれば思っているのですが、そんなことをしていたら畑が持ちません。川から水桶で水を運ぶにしても、畑が広すぎてきりがありません。なので、雨を降らしてしまおうと思うのです」

一良の提案に、バレッタと村長は少し困惑したような表情を見せた。

「あの、今までも何度かスィプシオール様に供物を捧げて雨乞いをしたのですが、スィプシオール様は雨を降らせてはくさいませんでした。それなのに、その……よろしいのでしょうか？」

「え？ 別に構いませんよ、昔ながらの方法ですが、雨乞いのやり方は知っていますし」

一良は、バレッタが言った「よろしいのでしょうか？」とは、「自分達がやっても上手くいかなかったけど、それでもやるんですか？」という意味と受け取っていた。

実際のところ、その解釈とバレッタたちの考えていることは、天

と地ほども離れているのだが。

「そうですか……それでは、すいませんがお願いします。何か私たちにお手伝いできるようなことはありませんか？」

「ええ、私の知っているやり方には、大量の薪というか、燃やすものがが必要です。最低でも家2〜3軒分程の木が必要なんですが、用意できますかね？」

一良の依頼に、バレッタと村長少し考えた後、お互い頷きあった。

「少し前から、誰も住まなくなってしまった家が数件あります。その家を取り壊して薪にすれば、十分足りるでしょう」

「そうですか……わかりました。村の人たちにもお願いして、取り壊しを手伝ってもらいましょう」

誰も住まなくなってしまった家というのは、先の戦争か今回の飢饉が原因で、住人が誰もいなくなってしまった家のことだろう。

取り壊すのは少々忍びないが、これも村のためである。

「大きな火を焚いても、火の粉が飛んで周りに飛び火しないような所ってありますか？」

「それなら、村はずれにある私の畑を使ってください。最近はずつと手入れもできなくて、作物も全部駄目になってしまっていますから、火を焚いても問題ありません」

こうして話がまとまり、本格的な雨乞いをする事になった。
もちろん、単なる神頼みではなく、一良には科学的な根拠がある。

大量に物を燃やすことによって発生する上昇気流に塵を乗せ、大気の状態を不安定にさせて雨を降らすのだ。

これが、大火事の後には雨が降る、という出来事の根拠である。第二次世界大戦中に日本軍が進駐先で同じことをして雨を降らせたといい話を一良は聞いたことがあったので、ここでも可能だろうと踏んでいた。

空には薄い雲がいくつも浮かんでおり、完全なる青空といった絶望的な状況ではないので、可能なはずだ、と一良は思っていた。

そしてそれから4時間後。

村人総出で空き家を解体した結果、造りが単純だったことも手伝って、村はずれにある村長の畑には、家3軒分の大量の木材と藁が集められた。

畑の周囲には木や建物などもなく、飛び火して火事になる心配もなさそうである。

「それでは、これから雨乞いを行います。まあ、ただ火をつけて雨が降るのを待っているだけなんで、数人が見張りをしていれば他の人は家に戻っても構いませんよ」

一良はそう言うのと懷からライターを取り出し、藁に火を着けた。火を着けるときに小さな火めきが起こったが、何故かあちこちから「さすがカズラ様だ」などといった声が聞こえてきた。何で様付けなんだろうとも思ったが、とりあえず聞こえないフリをしておいた。

火を着けると藁と木はすぐに燃え始め、巨大な火の玉のように赤々と燃え出した。

あまりの火力に、周囲にいた人々は焔1つ分程まで離れ、思い思いの場所に腰を下ろして火を見つめる。

一良も火から離れ、適当な場所に腰を下ろした。

「……雨を降らすなんて無責任なことやってしまったけど、本当に降るのか？ 降らせたって話を聞いたことがあっただけで、確実に降るとは限らないぞ」

一良は今更ながら、何であれ程自信満々に「雨を降らしてしまおう」なんて言えたのかと、少々後悔し始めていた。

この世界にやってきて、驚異的な効果を発揮するリポDや、炊き出しをして喜ぶ村人達の顔を見て、少し気が大きくなっていたのかもしれない。

気をつけねばいつか大恥を掻くことになりそうだ。

……もう手遅れなのかもしれないが。

「カズラさん」

一良が嫌な汗を掻いていると、背後からバレッタがやってきた。

「隣、いいですか？」

尋ねるバレッタに、「どうぞどうぞ」と一良は薦める。

「ありがとうございます」

バレッタは礼を言って一良の隣に座ると、パチパチと燃え上がる炎を無言で見つめている。

その穏やかな表情からして、これから雨が降るということを少しも疑っていないようだ。

そんなバレッタの表情を横目で見たカズラは、益々

「やばい、大した裏づけもないまま適当なこと言っただけじゃなかった」

と激しく後悔しながらも、立ち上っていく煙を追って空を見上げながら、心の中で「雨よ降れ、ホント降ってくださいお願いします」と祈るのだった。

「カズラさん」

「はい？」

一良が空を見上げながら一心に祈っていると、バレッタが炎を見つめたまま話しかけてきた。

「カズラさんはどうして、私たちの村に来てくださったのですか？」

「どうしてって……たまたま家の近所だったから、かなあ」

雨のことで頭がいっぱいだった一良が特に何も考えずにそう答えると、バレッタは少し一良の方を見てくすつと笑った。

「そうでしたか。でも、たまたまでもカズラさんが私たちの村に来てくれて、大勢の人が救われました。本当にありがとうございます」

「え？ あ、いえいえ、お役に立ててよかったです……あ、しまつた」

一良はそこまで言って、自分がここに来た経緯について酷い失言をしたことに気付いた。

まあ、本当のところ、最初に会った村人たちに「道に迷ってこの村に辿り着いた」と説明した後は、もう全く辻褃が合わないような説明をバレッタにしていたので、今更という感覚はある。

家が近所とか言ってしまったが、元からついていた薄っぺらい嘘は当の昔に破綻していたので、正直どうでもよくなってきた。

しかし、さすがに「近所ってどこさ？」程度には質問されるかと思っただけで身構えていたが、バレッタは特に何を質問するでもなく、再び炎を黙って見つめている。

そんなバレッタを一良は横目で見ながら、「何でも聞かないの？」と聞きたい衝動に駆られたが、折角聞かないでいてくれるのにここで聞いたら藪蛇である。

代わりに、雨乞いの成否についてバレッタに話しておくことにした。

「あの、バレッタさん」

「はい？」

一良の呼びかけにこちらを向くバレッタは、昼前に飲んだりポドと昼食で食べたお粥のおかげか、顔に色濃く残されていた疲労の影も消えていて、その表情は生命力で満ちている。

赤々と燃える炎に照らされたその顔は、一良の目にはかなり魅力的に映った。

「ああ、やっぱりこの娘は美人だな」と思いながら思わず一良が見惚れていると、バレッタが小首を傾げたので、慌てて本題を話し始めた。

「本当は雨乞いをする前に言っておくべきことだったんですが、この方法は確かに雨が降る可能性は高くなりますけど、確実ってわけ

ではないんです。なので、もしかしたら雨が降らないかもしれない
て……今更言って申し訳ないです」

申し訳なさそうに言う一良に、バレッタは少し驚いたような表情
を見せたが、すぐににつこりと笑みを浮かべた。

「スィプシオール様は気まぐれな性格だって言い伝えて聞いてます
から、大丈夫ですよ。村のみんなも、そこはわかってくれますから」

「スィプシオール様？ ……ええと、水の神様ですかね？」

「はい。でも、カズラさんがお願いしても駄目かもしれないって、
スィプシオール様は随分気分屋さんなんですね」

そう言ってくすりと笑うバレッタに、一良は首を傾げた。

雨乞いの相談をバレッタと村長にしたときにもスィプシオールと
いう名前を聞いたが、どうやら水の神様の名前らしい。

しかし、一良がお願いしてもというくだりは何なのだろうか。

「あの、それはどういう……ん？」

どういう意味かと一良が問おうとしたとき、一良の頬に何かが当
たった。

はっとして立ち上がり空を見上げると、そこにはいつの間にか大
きな黒い雨雲が現れていた。

そして数秒を置いてから、大きな雨粒が一気に辺り一面に降り注
いできた。

「あ、雨だ！ 雨が降ってきたぞ！」

「凄い！ さすがカズラ様だ！」

夏の夕立のように激しく振り出した雨に、村人たちは口々に一良を称えて喜び合っている。

ザアツと音を立てて降り注ぐ雨の中、一良は

「本当に降ってきたよ……」

と呟いて、泣き出した空を呆然と見上げる。

そんな一良の隣では、バレッタが

「本当、気まぐれなんですね」

と言いながら、一良と一緒に空を見上げるのだった。

後日談

火事を起こして雨を降らすということを実際に体験した一良は、日本に戻ってから屋敷の様子（異世界への敷居について以外）を報告するついでに、火事の後の雨について、

「この間家の近所で火事があったんだけど、すぐに雨が降ってきたんだよ。火事の後には雨が降るってのは本当なんだな」

と、多少脚色して携帯電話で父親に話したところ、

「そりゃあ偶然だよ。よくアメリカとかで大規模な山火事が起こったりしたときですら、数日間雨も降らずに山火事が大きくなったり

してるじゃないか。もし偶然じゃなかったら、よっぽど大気が不安定だったか、雨雲が形成されてたかだろうな」

という事を言われ、思わず携帯電話を取り落とす程動揺したのだった。

7話：水車と桃缶

「おお、綺麗な川ですねえ。こんなに綺麗な川は初めて見ますよ」

「そうですか？ 普通の川だと思いますけど……」

村に雨が降った次の日の朝。

一良とバレッタは、村人たちが水を汲みに来るといいう川にやって来ていた。

この川に来るまでの道はずっと平坦で、地面は乾いてひび割れた荒野のようになっていた。

川の周囲には短い草が生い茂ってはいるが、背の高い木や草は生えていない。

川幅は5メートル程あり、現代の日本では考えられない程に水は透き通っていてとても美しい。

深さは一番深いところでも、大体1メートルといったところだろうか。

「数ヶ月前はもつと川幅もあって水も多かったんですけど、日照りのせいで随分細くなってしまいました」

「なるほど……しかし、村から歩いてこれる距離に川があるのはいいですが、水を運んで何度も往復するには、なかなか辛い距離ですね」

歩いて村からここまでくるのに30分もかかっているので、水を運んで往復するとなったら1時間以上掛かってしまう。

ならば村に直接川の水を引いてしまえばいいのだろうが、川の水が微妙に低くて水が引けないのである。

もつと上流から水を引くにしても、川上の方向が村から遠のく方向に曲がっており、途中に丘などの障害があることや、ろくな道具がないことも手伝って、水路を作ることができないのである。

「これは消防用の吸水ポンプでも持つてくるか……でもなあ」

何とかして川の水を村に引かねばならないのだが、村にある道具のみを使って水を引くのは至難の業である。

そこで、日本からガソリンエンジンの吸水ポンプでも持つてこようかとも考えたのだが、いくらなんでもオーバーテクノロジーに過ぎる。

今すぐ水を引かないと死人が出るといった状況ならば話は別だが、昨日降った雨のおかげで溜め池の水も半分程まで貯まっているので、暫くの間は平気なはずだ。

出来ることならば、この世界の人間の技術でも作ることが可能な道具や手段でこの状況を打開したいと一良は思っていた。

その方が、きっと将来的に村のためにも自分のためにもいい方向に働くだらうと考えたのである。

「バレッタさん、水車って聞いたことがあります？」

「すいしゃ……聞いたことないです。どんなものなんですか？」

「えつとですね、川に大きな木の車輪を縦に置いて、水の流れの力で車輪を回す仕掛けの道具なんですけど」

「うーん……私は見た事も聞いたこともないです」

一良は落ちていた石を使って地面に絵を描きながらバレッタに説明したのだが、全く見たことがないらしい。

もし見たことがあるならば、この世界にも水車を作る技術者がいるはずなので、その人に製作を依頼しに行こうかと思っていたのだが、どうも現時点では無理のようだ。

「そうですか……となると、自分たちで水車を作るしか……無理だよなあ。簡単に素人が作れるとは思えないし」

村人たちと協力して何とか水車を作れないだろうかと一瞬考えたが、直ぐにその考えを打ち消す。

木の板を組み合わせた用水路程度のものならともかく、水車のような精密な設計を要する装置が作れるわけが無い。

一良とて水車を見たことぐらいはあるのだが、作るとなると話は別である。

ノウハウも何もない状態で、いきなり素人に水車が作れるほど、工作の世界は甘くはないのだ。

「あ、あの、もし難しいようなら自分たちでなんとかしますから……」

難しい顔で考え込んでしまった一良に、バレッタが遠慮がちに声を掛ける。

しかし、何ともならなかったから村はあんな惨状になってしまったわけ。

少し不安そうな表情をしているバレッタに、一良は「大丈夫ですよ」と言って微笑んだ。

「水車は私の国から持ってくることにしましょう。早速戻って……」

一良はそこまで言うと、ふとあることを思い出して、持っていた

バッグから桃缶（国産）を1つ取り出した。

「あ、ももかん、ですか？」

「ええ、折角なので、この川で冷やした桃を食べてから村に戻るとしましようか」

一良は川べりまで行くと、桃缶を水の中に入れ、流されないように周囲の石で固定した。

遠目に見える山から流れてくる川の水は冷たくて、この分ならすぐに冷たい桃が食べられそうだ。

「でも、桃缶は昨日全て村の人たちに配りませんでしたっけ？」

「そうなんですけど、実は1個余りましてね。ここで食べようと思っ

て持ってきたんです」
もちろんバレッタの家にも1つ配ってあるのだが、「折角余ったのだし、美味しいものは可愛い娘と食べたほうがもっと美味しい」という一良独自の考えの元、朝食代わりにバレッタと二人で食べてしまうことにしたのだった。

許せ村長。

「そういえば、もっと川の近くに村を移せば、水の心配もしなくて済むんじゃないんですか？」

桃缶を冷やししながら座って川を眺めていた一良は、ふと湧き上がった疑問を口にした。

干ばつが起るたびに離れた川まで水を汲みに行かねばならないような場所に住んでいては、不便な事が多い気がする。

「そうですね。でも、今みたいに雨が少ない時期はそれでもいいんですが、雨が多い時期になると川が氾濫することが多くて危険なんです」

隣にきて同じく座ったバレッタの言葉に、一良は「なるほど」と頷いた。

今の時期は雨が少なすぎて干ばつが起るが、別の時期になると今度は雨が多すぎて洪水という、なんとも住み難い土地のようだ。

「それに、ナルソン様が指定した場所以外には村を移すことはできないので、今の場所にいろしかないんです」

今までにも何度が耳にしたが、ここで再びナルソンという人物の名前が出てきたので、こういった立場の人なのか聞いてみることにした。

「ナルソンって方は、ここら辺の領主が何かをやっている方なんですか？」

「ええ、王家からこの地域一帯を預かって統治なさっている貴族様です。武勇の誉れ高いイステール家のご当主様で、先の戦争でも大活躍なさったらしいですよ」

「（おお、貴族とか王家があるのか。てことは、大きな城とか騎士団とかもあるのかな）」

王家や貴族といった、日本ではごく一部の国のニュースなどでしか耳にしなくなってしまう単語に、一良が一人妄想を膨らませていると、

「どうかしましたか？」

と、バレッタが一良の顔を覗き込んできた。
結構顔が近くて少し照れる。

「あ、いや、何でもないです。それで、統治されている村は作物などを納めているのですか？」

「はい、決まった時期に指定された作物を収めなければなりません。今回はあまりにも酷い干ばつで、収めることができる作物は殆ど無いのですが……そろそろ、ナルソン様の使いの方が様子を見に来る時期なんです」

「ちなみに、もし作物を納めることが出来なかったら、何か罰則みたいなことはあるんですかね？」

「ありますよ。決まった量の作物を納められなかった家は、財産を没収されます」

バレッタの答えに、一良は「そうだろうな」と頷いた。

義務を怠れば罰が下る、当然のことだろう。

「えっと、今回みたいな天災の時でも、財産は没収されるんですか？」

そう、問題はそこである。

平時に規定量の作物を収められなくて罰を受けるなら仕方がないが、非常時にまで同じことをしている領主だとしたら、何も考えていないバカか鬼畜かの二択である。

もしナルソンとかいう貴族がバカか鬼畜だった場合、かなり面倒なことになりかねない。

「そこは各地域ごとに違うみたいです。ナルソン様は天災が起こったときは、被害の大きさをよく調べてから収める作物の量を指示し直してください。3年前に作物が不作だったときは、森で木を切ってきて、木材を作物の代わりに収めるようにと指示してくださいました」

それを聞いて、一良はホツとした。

ナルソンという貴族はちゃんと村のことを考えて統治を行っている領主のようなので、今回のようなあまりにも酷い状況ならば、きっと作物を収めるとは言わないだろう。

木材を収めると言われたら、日本から鉄斧を持ってくれば人手不足の状況でもなんとかなるだろうし、いざとなったらチェーンソーを持ってくるか、それでも駄目なら日本で木材を買ってきてしまえばいい。

「でも、隣の地域を治めているダイアス様は、たとえ天災のせいで作物が取れなかったとしても、容赦なく罰する方だと聞いたことがあります。噂では、若い男は奴隷商人に売り飛ばされ、器量のいい女性は飽きるまで伽の相手として召し上げた後、同じく奴隷商人に売り飛ばされるそうです」

「ええ……よくそんなことやって反乱が起こらないな……王家から咎められたりはしないんですか？」

まるでゲームや漫画の設定で出てきそうな極悪貴族である。

きつと、見た目はぶくぶくに肥えてやたらと豪華な指輪とかを着けまくっている凶悪クリーチャーなんだろうな、と勝手に姿を想像

する。

「そうなんですけど、ダイアス様は商売が非常に上手で、かなりの金額を王家に献上しているために、王家も何も言わないらしいんです。それに沢山の私兵を持っていて、蜂起なんてとてもできないという話です」

つまるところ、人間としてはかなりの外道だが、金稼ぎは上手な貴族らしい。

と、折角綺麗な川を見ながら可愛い女の子と桃缶を食べようと思っていたのに、随分と陰気な話をしていることに気がついた。

「さて、そろそろ桃缶が冷えた頃ですね。食べましょうか」

「あ、はい。そうですね」

何やら辛気臭い空気になってしまっているが、桃缶を食べれば空気が明るくなるだろう。

一良は川から桃缶を引き上げると、プルトップを引いて缶詰を開け、バッグからプラスチックのフォークを取り出し、開けた缶詰と一緒にバレッタに手渡す。

「先に半分どうぞ」

「え？ でも、カズラさんより先に頂くわけには……」

渡された缶詰を持っておろおろするバレッタに、「いいからいいから」と食べるように勧める。

バレッタは恐縮しながらも、「ありがとうございます」と礼を言うつと、フォークで桃を刺して一口齧った。

「——ッ!？」

「どうです？　なかなか美味しいでしょう？」

バレッタは桃を口にして目を白黒させながら、一良の問いに激しく頷く。

「すごく甘いです！　こんなに甘くて美味しいもの、初めて食べます！」

「それはよかった。私の分はいいから、全部食べてしまっていていいですよ」

果物などはこの世界にもあるのかもしれないが、この桃のように美味しく品種改良されたものはないのだろう。

バレッタのあまりの感激ぶりを見て、一良は桃缶を全部バレッタに譲ることにした。

「えっ、さすがにそれは……」

そう言いながらも、手に持った桃缶と一良を交互に見比べているバレッタに、一良は思わず吹き出しながらも、

「まあまあ、今まで頑張っていたバレッタさんへのご褒美ですよ。どうぞ食べてください」

と一良が勧めると、

「えっと……じゃあいただきます」

と赤くなつて照れながら、嬉しそうに桃にパクつくのだった。

バレッタの桃を食べる姿を堪能した一良は、村に戻ってから早速「水車を手配してきます」と言つて日本に戻ると、携帯電話のネット検索で水車を製造している工務店を調べ、注文をするために直接工務店にやつてきていた。

「ええと、揚水水車ですね。ご指定のサイズですとこのグレードのものに揚水用の付属品を特注で付けることとなりますので、納品は20日後で代金は300万円になりますよが」

広げられたカタログを見せながら、髪に白髪の混じった人のよさそうな社長が、特色やら製作期間を説明する。

カタログに載っている水車はどれも味があり、田舎の風景に良く合いそうだ。

「ちょっと事情があつて、なるべく早く必要なんです。費用が高くなつてもかまわないので、なんとか1週間で作れませんか？ 組み立ては自分で行うので、各部品ごとにばらした状態で納品して欲しいんですけど」

「い、一週間ですか？ さすがにそれはちょっと……うちはあまり人手もありませんし、どんなに急いでも15日間が限界ですよ」

「そこをなんとか。前金で500万円、納品時に更に500万円出しますから、どうにかありませんか？ 運送費もこちら持ちでいい

ですから」

一良が合計1000万円という通常料金の3倍以上という驚異的な金額を提示すると、社長は驚きの表情を浮かべ、

「ちょ、ちよつと待っててもらえますか！？　すぐに戻ります！」

と一良に断ってから、携帯を取り出しながら応接室を出て行った。一良は出されていたお茶を啜り「いくらなんでも1週間は無理かなあ」と考えながらカタログを見て10分程待っていると、社長がニコニコしながら戻ってきた。

「志野さん、なんとか1週間で納品できる目途が立ちました。提示していただいた金額であれば、質も落とさずに納期に納品させていただきます」

「えっ、本当ですか？」

「ええ、知り合いの工務店に応援をお願いできたので、何とか対応できます」

その返事を聞くと、一良は早速懐から小切手を取り出し、先程提示した金額を記入して社長に渡した。

小切手に大金を記入してポンと渡すという、いつかやってみたいと思っていた庶民の夢を叶えることができて、ちよつと感動した。

「ありがとうございます、それでは、1週間後にご指定いただいた住所に運ばせていただきます」

「はい、お願いします。運送費は納品時に一緒に請求してください」

社長はそう言い残して応接室を後にする一良を見送ると、「こんな不景気でも羽振りのいい人はいるもんだなあ」としみじみ呟くのだった。

「えっと、手斧30本、ノコギリ20本、草刈鎌60本、平鍬に四又鍬にシャベルとツルハシ…… 開拓団でも率いてるんですか？」

「あー、まあそんなとこです。支払いはカードをお願いします」

工務店を後にした一良は、ホームセンターで大量の農具を購入していた。

村にある全木製の農具では、あまりにも農作業が非効率だし無駄な疲労を招くため、村人達にプレゼントしようと思ったからだ。

そのあまりの量に一度では運びきれず、店員にも手伝ってもらって何度も店と駐車場を往復して車に運ぶ。

しかし、さすがに量が多すぎて一度では車に乗せきれず、結局トラックを借りて屋敷とホームセンターを2度往復したのだった。

このあまりにも印象的な行動のため、その場に居合わせた店員たちに「開拓団長」というあだ名を付けられてしまったのだが、そんなことを一良は知る由もないのだった。

8 話：最高の報酬

「カズラ様、板の厚みはこれくらいでよろしいのでしょうか？」

「そうですね、それくらいあれば十分です。あと何で様付けなんですかね？」

水車の発注をした次の日。

木を切断するノコギリの音や、村人同士で声を掛け合いながら木を切り倒す音が響く中、一良は村人たちに指示しながら、揚水水車から水を通すために使う水路用の木板を製造していた。

ここは村はずれにある森の入り口で、作業をしている一良たちの傍には数本の切り倒された木が加工待ちで鎮座している。

「わかりました。そしたらこの厚みの長板をあと60枚ですね」

村の若い男は一良に板厚を確認してもらうと、再び真剣な表情で作業に没頭し始めた。

一良は「おお、後半は完全にスルーか」とぼやきながらも、新たに質問にやってきた村人に指示を出す。

「カズラ様、支柱の太さと長さはこれでいいのでしょうか？」

「あーっと、太さはこれでいいんですがちょっと長すぎるのでこの線まで切ってください。あと様付けはやめて欲しいんですけど」

「なるほど、この長さですね。皆にも伝えてきます」

村人が持ってきた柱をメジャーで測り、油性マジックで線を引く

と、その村人は再び柱を引きずって持ち場に戻っていった。

「え？ 何これイジメ？ イジメなの？」

「カズラさん、昼食の支度が出来たので持ってきました……どうかしましたか？」

一良が「ちくしょう、ちくしょう」と言いながらA4のノートに描いた水路の設計図を見直していると、バレッタと数名の村の若い娘が、粥を入れた数個の鍋や新たに一良が持ってきたおかず用の缶詰などをリアカーで運んできた。

「……村のみんなが私のことを様付けで呼ぶんです。何とかしてください」

「あー……皆カズラさんに感謝していますし尊敬しているんです。呼ばせてあげてください」

「ええ……」

普段呼ばれ慣れていない最上級の敬称に、一良はあからさまに嫌な顔をするが、バレッタに

「まあまあ、いいじゃないですか。それより、食事が出来たので休憩にしませんか？」

と流されてしまった。

まあ、尊敬されるのは慣れてはいないが悪いことではないので、様付けで呼ばれても極力気にしないことにした。

「そっか、もうそんな時間ですか。わかりました、休憩にしましょう……みなさん、食事が出来たようなので集まって食事にしましょう！　続きは食後で！」

一良が村人に呼びかけると、あちこちから了解の返事が返ってくる。

きりのいいところまでやろうと作業を続けている村人も数名見られるが、問題はないだろう。

「これで手を洗って待っていてください。今お粥を持ってきますから」

バレッタは一良の前に水桶を置くと、リアカーに積んである鍋からお粥を椀に掬う。

他の女性達も、それぞれ手洗い用の水桶を持って回ったり、集まって来た村人達に、缶詰とお粥の入った椀、それに水の入った木のコップを乗せた木製トレーを手渡している。

「はい、お待たせしました。それでは、他の方にも配ってきますね」

「あ、バレッタ！　こっちは私達でやるから、カズラ様とご飯食べてていいよ！」

食事を乗せたトレーを一良に渡し、他の村人達にも配ろうとリアカーに戻りかけたバレッタに、村人達に食事を配っていた娘の一人が声を掛ける。

「え、でも……」

一良の方をちらりと振り向きながらも戸惑っているバレッタに、

「平気平気、後は任せて」と言つて食事の乗ったトレーを渡すと、その娘はさつさと作業に戻つていつてしまった。

「えっと、お隣いいですか？」

少し苦笑しながらも渡されたトレーを持って戻つて来たバレッタに「どうぞどうぞ」と隣を薦める。

一良としても、バレッタと村長以外の村人とは気さくに会話をしたことが殆どないので、バレッタが来てくれると気が休まる。

一良が人見知りというわけではないのだが、どうも他の村人達は一良のことを極端に敬っているのか、どことなく遠慮がちに感じるのだ。

今回の水路製作作業で、一良から積極的に指示したり話しかけたりしたおかげで、幾らか改善したような気はしている。

「畑仕事に行った人たちはどうですか？ 渡した道具は上手く使えてますか？」

「はい、凄く使いやすいって好評ですよ。私も少し使つてみたんですけど、簡単に土が掘り起こせてびっくりしました」

ホームセンターで大量に購入した農具は、今朝リアカーを使つてバレッタの屋敷に運び込んだのだが、一良は水路に使うパーツを製作しなければならなかったので、農具の配布は村長に一任してきていた。

村長はすぐに村人達に配ると言つていたのだが、早速農具を使つて村人達と畑仕事を行っているようだ。

ちなみに、昨日の夜はあまりにも疲れていたもので、町にあったビジネスホテルに泊まってレストランで夕食を食べた後は爆睡していた。

「うんうん、喜んでもらえたようでよかったです」

そう言いながら一良が「さんま蒲焼」と書かれた缶詰のプルツプ式のフタを開けると、中から食欲をそそるいい匂いが漂ってきた。おかず缶詰の中では万人受けするものであるし、一良自身の好物という理由もあって、選んで買ってきたのだ。

お湯で温めておくといいと伝えておいたのだが、ちゃんと実践してくれたらしく、缶は程よく温まっている。

「わあ、いい匂いですね。凄く美味しそうです」

隣ではバレッタも缶詰を開け、その匂いに顔を綻ばしている。

周囲からも、「いい匂いだなあ」とか「こりゃ美味い!」といった声が聞こえてくる。

「これは秋刀魚っていう魚にタレをつけて焼いた料理です。結構美味しいんですよ」

「お魚ですか。たまに川で捕ってきた魚を食べることがありますけど、こんな風に調理したことはなかったです」

捕ってくる川というのは、昨日見に行った川のことだろうか。

この世界でも、やはり釣り針や網などで魚を捕るのが少し気になったので、聞いてみることにした。

「あの、川で魚を捕る時って、釣り竿で釣り上げたりするんですかね?」

「釣りあげることもありますけど、時間がかかるわりにあんまり釣

れないですね。なので、洪水の後に出来た水溜りの中にいる魚とか、取り残されている魚を拾ってきて焼いたり煮込んだりして食べることが多いです」

「ああ、なるほど。そりゃ効率的だ」

二人がそんな話をしながらのんびり食事をしている間にも、お粥のおかわりをしに何人もの村人がリアカーの元にやってくる。

やってくる村人達は、リアカーの傍にいる一良に必ず礼を述べてから、お粥をおかわりして行くのだった。

「さて、今日のところはそろそろ終わりにしましょうか。続きはまた明日にしましょう」

頭上にあつた太陽は遠目に見える山の山頂まで下り、空は夕焼け色に染まっている。

あと2時間もすれば日が完全に落ちそうなので、本日の作業は終えることにした。

一良が作業の終了を呼びかけると、すぐに村人達から了解の返事が返ってくる。

作業に使ったノコギリや、村に元々あつた青銅のノミや木槌などの道具を一良とバレッタと一緒に片付けようと思ったのだが、

「片付けは私たちでやりますから、カズラ様とバレッタさんは先に帰って休んでください」

と言われてしまった。

ちよつと忍びない気もしたが、一良が働くとバレッタもセットで

無制限に働きそうなので、ここはありがたく帰らせてもらうことにする。

「ここはお言葉に甘えておきますかね」

「あ、はい。それでは帰りましょうか」

一良たちは片付けをしている村人達に礼を言うと、バレッタと共に屋敷に帰ることにした。

帰り際、こちらに向かって祈るように手を合わせている数名の村人がちらりと視界に入った気がするが、目の錯覚ということにしておく。

屋敷への帰り道、村での魚料理についてや、今まで作っていた作物の話などをバレッタから聞きながらのんびり歩く。

村のことを楽しそうに話すバレッタの横顔を見ると、こけていた頬やガリガリだった体も少しふつくらとしてきており、ここ4日間で彼女の栄養状態は大分回復してきているようである。

何より、精神的に追い詰められていた状態から開放されたことが大きいのもかもしれない。

「（しかし、普通こんな短期間でここまで回復するものなのか？）」

飢餓状態にある人間が、どれほどの速度で回復するものなのか一良は詳しくは知らないが、もしかしたらあまりにも過酷な飢餓状態に体が置かれていたため、体の細胞たちは入ってきた栄養を残らずキャッチして吸収しているのかもしれない。

リポDで何十人も半死人が復活したのはよくわからないが、そこは幾ら考えても仕方のないことである。

そんなことを考えながらバレッタの横顔を見ると、

「あ、あのカズラさん、どうかしましたか？」

とバレッタが立ち止まり、少し顔を赤くして軽く俯きつつ、一良を上目遣いで見上げてきた。

少しばかり見つめすぎたらしい。

「あ、いや……バレッタさんが元気になってよかったって思いました」

バレッタは一良の言葉に一瞬きよとした表情をしたが、すぐに

「はい、カズラさんのおかげです」

と言って、花の咲くような満面の笑顔を一良に向けた。

その可憐な笑顔に、今度は一良が赤くなる番となってしまうたが、照れよりも目の前の彼女が見せる幸せそうな微笑みを見れたことが、何よりも嬉しく一良の心に染み渡るのだった。

9 話：揚水水車と全力疾走

水路のパーツを作る作業を始めてから6日後の昼。

一良は日本の屋敷にて、水車を納品しに来た社長と従業員から水車を受領していた。

「うわ、こりゃ結構な大きさの部品ですね。運ぶのが大変そうだ」

「そうですねえ、でも重い部品でも40kg程度なんで、運ぼうと思えば一人でもできますよ」

目の前のトラックに積まれた水車のパーツは殆どが木製で、一部の留め金にだけ金属が使われている。

大きな部品といってもリアカーには積めるサイズなので、運ぶのには問題ないだろう。

「では、玄関を上がったところにあるリアカーに重い部品から順に積んでもらっていいですか？ 軽い部品は後で自分で家に運ぶので、積み終わったら残りはここに降ろして帰ってもらって結構ですよ」

「え？ 家の中にリアカーがあるんですか？」

「ええ、そうです。あ、これ残りの代金の小切手です。あと運送費は幾らになりますかね？」

社長は玄関が上がったところと聞いて怪訝そうな顔をしていたが、小切手を貰うと「ありがとうございます！」とホクホク顔になり、残りの運送費分の金額を記入した小切手を一良から貰うと、

「おい、その支柱から運ぶぞ！」

と、連れてきた従業員に声を掛け、家の中のリアカーに部品を積み込み始めるのだった。

「しかし凄い量だな。リアカーが無かったら絶対運びたくないわ」

水車の部品を半分ほど乗せたリアカーを引き、一良は異世界への敷居を跨ぐ。

そしていつものように雑木林を抜けると、見慣れた村の風景が目に飛び込んできた。

少し離れた畑では、10人程の村人が一良が差し入れた農具を使って畑の手入れをしている。

「さて、これを屋敷に運んだらまた戻らなきゃな。残りの部品を持つてこないと」

後でリアカーをもう一台くらい買ってこないとな、などと言いながら村長の屋敷に向かってリアカーを引き始めると、畑仕事をしていた村人たちが作業の手を止め、一良の姿を見つけて集まってきた。

「おお、それが水車というものの部品ですか。村長のお屋敷に運ぶのですか？」

「ええ、でも部品はまだ半分ほど国に置いてきているので、屋敷にこれを置いたらまた戻らないといけないんですけどね」

「これで半分ですか。随分大きなものですね」

そんなことを話しながら、一良は村人たちにもリアカーを押してもらい、バレッタの屋敷に向かつてリアカーを引く。

村人たちと雑談をしながらリアカーを引きつつ、一良は「何でみんな『こんなにすぐ戻ってこられる国ってどこなのさ?』って聞いてこないんだろ」と首を捻るのだった。

「おかえりなさい、カズラさん!」

一良たちが屋敷の庭に到着すると、すぐにバレッタが屋敷から出てきた。

到着してから出てくるまでの時間から察するに、どうやらスタンバツていたらしい。

「ただいまです。これ、水車の部品なんですけど、まだ半分ほど国に置いてきているんです。なので、一旦これを降ろしたら残りの部品を取りに戻ります」

「わかりました、降ろすのお手伝いしますね」

リアカーの前足を地面に着け、村人と協力して部品を降ろす。結構な量の部品があつたが、さすがに10人以上の人手があつたおかげで、ものの数分で降ろし終えた。

「それでは、もう一度国に戻って残りの部品を取ってきます。部品が揃ったら川に行つて組み立てますので、バレッタさんは人を集めておいてください」

「わかりました。父も呼んでみましょうか？」

「あ、水路作りが優先なんで、今村に残っている人たちだけで川まで運びましょう。行く途中でまだ水路作りが終わっていないようだったら、必要に応じて手伝うってことで」

数日前から、村長には川から村までの水路を掘る作業の指揮を執ってもらっている。

水路は結構な長さになるので、大多数の村人はそちらの作業に従事しているのだが、水路が出来なければ揚水車を設置しても意味がない。

予定ではそろそろ完成することになっているので、もし終わっていなかったとしても少しの時間手伝えれば完成させることができるだろう。

「では、行ってきます。皆さんは私が戻ってくるまで休んでいてください」

一良は皆にそう言うと、再びリアカーを引いて雑木林の奥にある通路へと向かうのだった。

日本の屋敷から細かい部品を回収し、再び村の屋敷にまで戻った一良は、待機していた村人たちに軽い部品を桶などに入れて持ってもらい、リアカーを引いて川へと向かった。

村から出てすぐの所で、水路を掘っている村長たちを発見したが、予定通りに作業は進んでいるようだ。

ちなみに、一良が戻ると雑木林の入り口でバレッタが待っていて、

リアカーを引くのを手伝ってくれた。

「おお、もう殆ど完成してますね」

「ええ、あとはここから溜め池までの水路を掘れば終わりですな。このシャベルという道具のおかげで、随分楽に掘ることができましたよ」

水路を掘っていた村長は作業の手を止め、リアカーを引っ張ってきた一良に笑顔を見せた。

他の村人たちも、作業を続けながら一良に会釈をする。

「川の上流と下流からの水路は両方とも掘り終わりました。カズラさんの言ったとおりに、上流の川の脇にも川に沿った深い水路を1本作っておきましたよ」

作業の進み具合を村長から簡単に説明してもらいながら、一良は延々と続いている2本の水路を目で追った。

深さは大体30cm程で、掘られた壁面は何度も叩いて固められており、とりあえずは水が流れても大丈夫だろう。

後で板か石で補強する必要があるかもしれないが。

水路は川の上流付近から村の溜め池に向かうように作っているのだが、村に入る直前で2又に分岐させている。

分岐した一本は村の溜め池へと向かい、もう一本は再び川の下流へと向かっていて、2又の部分に木で作った簡単な水門を2箇所設置することで、溜め池に送るか下流に戻すかを選択できるようになっているのだ。

溜め池の水が一杯になったら村へ通じる水門を閉じてしまえば、川の上流に設置してある水車から汲み上げられた水は、再び川の下

流へと戻っていくので、溜め池が溢れるという事態は避けられるはずだ。

これならば、水路に常に流れてくる新鮮な水を炊事や飲用として使うことが出来、溜め池の水は農作業用として分けることができるだろう。

「では、私たちは先に川まで行って水車を組み立てていますね。バリンさんたちは水路が完成したら、先日作った木の水路を持って川に来てください」

「承知しました。すぐに合流できるよう、急いで作業を進めましょう」

一良は村長たちに残りの作業をお願いすると、再びリアカーを引いてぞろぞろと水路を辿って川の上流へと向かうのだった。

一良たちが川に着くと、先ほど村長が言っていたように川から3メートル程離れた場所に、川に沿って数メートルに渡り水路が掘られており、しっかりと板で補強されていた。

深さは川の水が十分引き入れられる程にまで掘られており、水路の幅も申し分ない。

一良は村人たちを数名のグループに分けると、数枚に分かれた説明書を該当する部品とセットで配り、それぞれ組み立てて貰うことにした。

工務店の社長から渡された組み立て図は殆どがイラストで、組み立て順に説明されている解り易いものだったので、日本語が読めないバレッタたちでも「A-1」や「B-1」などと書かれた部品番号に注意すれば、何とか組み立てることができるのだ。

「カズラさん、これをここに挿し込んで、こっちの部品と繋げるの
でいいんでしょうか？」

「そうそう、指を挟まないように気をつけて。はい木槌。……あ、
ロズルーさん、その部品はそれとは繋がらないですよ。こっちの記
号が書いてある部品です」

一良は村人たちが部品を組み立てるのをチェックしながら、水路
の幅をメジャーを使って計り、水車の支柱を立てる位置を確認する。

「ええと、ここここに支柱を立てればいいのか。支柱が振動で倒
れたりしたら洒落にならんからな。しっかり埋めて踏み固めておか
ないといけないな」

支柱を立てる位置に石で印を付け、一良もバレッタと同じグルー
プで水車を組み立てる。

そして組み立てから1時間半程が経過し、慣れない組立作業もよ
うやく8割ほど進んで皆で川の水を飲みながら一息ついていると、
木の水路や柱を持った村長たちがやってきた。

水路を作る作業をしていた村人達の他にも、家で赤ん坊の世話を
していた人や、子供や老人の姿も見える。

どうやら全ての村人がやってきたようだ。

……誰も留守番してなくていいのだろうか。

「おお、凄いですな、それが水車ですか」

「あ、お父さん。もう水路は掘り終わったの？」

「うむ、あとはこの木の水路を水車に合わせて置いていくだけだ」

結構な重労働をしてきた後にも拘らず、さすが日頃畑仕事で鍛えている為か、村長も村人たちにも疲れた様子は見えない。

むしろ、慣れない作業をしている一良たちのほうが疲れた顔をしている。

ともあれ、水路が完成したのであれば、さつさと水車も組み上げねばならない。

「すみません、まだ水車が組み立て終わってなくて。もうすぐ組み立て終わりますから、先に水車の支柱を立てる穴をここに掘ってもらっていいですか？ あと、作って貰った水路に水を送る木の水路の設置もお願いします」

「うむ、わかった。他の者も、大変だとは思うが頑張つて水車を組み立ててくれ。これが出来れば村は水不足で困ることは無くなるのだからな」

村長が休んでいる村人たちにそう声を掛けると、村人たちは「よし、やるか！」と声を出して、再び水車の組み立てに取り掛かる。

一良も村長にメジャーを渡し、掘る深さを指定すると、再びバレットと共に水車の組み立てを再開するのだった。

「よし、出来た！」

「こつちも水路の設置と支柱の穴掘りは終わりましたぞ。ここにこの平べったい足の付いた分厚い板を入れればいいのですかな？」

「はい、入れたら埋めながら何度も踏み固めて、しっかり固定して

ください」

作業を再開してから20分後。

ようやく組立作業も終わり、いよいよ水車を設置する段階となった。

一良は村長たちに指示をして、軸受け式の縦に長い支柱を立てると、何度も踏み固めて絶対に支柱が動かないように固定する。

「では、いよいよ水車を支柱に設置しますか。皆さん、水車を持ち上げるので手伝ってください！」

一良の呼びかけに、様子を見守っていた村人たちは一斉に集まって水車を持ち上げた。

水車の幅に対して人数が多すぎるため、大多数の村人は水車を支えることは出来ないが、それでも掛け声をかけて応援する。

「水車の軸の部分を、支柱のへこんでいるところに乗せてください。軸に負担が掛からないように、両方同時にゆっくりとお願いします」

軸は金属製であり、ちょっとやそつとの加重では変形するといったことはないと思うが、それでも慎重に軸受けに乗せる。

軸受け自体も金属なので、磨耗の点では心配はいらないようだ。

「では、後は水車の下に水受け用の木の水路を設置して、川と水路を繋げるだけです。バリンさん、お願いできますか？」

「うむ」

一良の指示に、村長は村人を集めてすぐに水受けの水路を設置し、続いて水路の上流側と下流側の川の間をシャベルで掘り進めた。

下流側は、流れてきた水が川に流れ落ちる程度には高さがあるため、直接川の水が入ってくることはない。

水路にはある程度の水深は確保しなければならないので、下流側には木の板で30cmほど敷居を作っておく。

また、水流で土が削られないように、壁面をしつかりと板で補強した。

「あと少しで川と繋がりますな……おい、皆集まれ！ 水車が動くぞ！」

村長の呼びかけに、川べりで休んでいた村人や、遠くで遊んでいた子供たちが駆け寄ってくる。

村長は全員が集まったことを確認すると、シャベルで一気に水路と川を隔てる土を取り除いた。

邪魔な障害が取り除かれ、水路には一気に川の水が入り込んでくる。

すると、水路に流れる水の流れに羽が押され、少しずつ水車が回り始めた。

「あ、回り始めた……すごい！ 水があんな高いところまで上がってる！」

一良の隣で水車を見ていたバレッタは、水車の羽の横に付けられた揚水用の木箱から、高所に設置された木の水路に続々と吐き出される水を見て、驚きの声を上げた。

周囲でも村人たちが歓声を上げ、設置された木の水路に流れる水を追って駆け出していく。

「カズラさん、私たちも追いかけましょう！」

「えっ？ 追いかけるって、まさかここから村まで走るの？ どんだけ距離あると……ってちよつと！ 引つ張らないで！ マジすかあー！？」

バレッタに手を引かれて強制的に走り出させられた一良や、水を追いかけて走っていく村人たちの後姿を見ながら、村長は

「おいおい、道具の片付けも残っておるというのに」

と呟きながらも、言葉とは裏腹に嬉しそうな笑顔を浮かべながら、やれやれとシャベルや木槌などの道具をリアカーに乗せるのだった。

10話：嘘はついていない

「もう……無理……死ぬ……」

バレッタに手を掴まれ強制的に村まで全力疾走させられた一良は、村の入り口にある二股に分かれた水路の脇に大の字になって倒れこんでいた。

一良が荒い息を吐き出しながら倒れている間にも、体力の有り余っている子供たちなどは、村の溜め池に向かう水を追いかけて未だにわいわい騒ぎながら走り続けている。

「ご、ごめんなさい、カズラさん。大丈夫ですか？」

一良の手を引きながら村まで強制的に走らせたスパルタ娘、バレッタは、倒れこんだ一良に驚き、急いで屋敷まで戻って木のコップを取ってくると、水路に流れている川の水を汲んで一良に駆け寄る。

「はい、お水です。ゆっくり飲んでください」

「あ、ありがてえ……」

バレッタは一良の肩に手を添えて軽く自分に寄り掛かせながら半身を起こさせると、一良の口元にコップを寄せて水を飲ませる。息も絶え絶えになりながら水を飲む一良を見て、普段とのギャップに少し笑ってしまった。

「ふう、生き返った……ん？　どうかしましたか？」

クスクスと笑っているバレッタに、一良は地面に手についてその

場に座り直しながら小首を傾げる。

「ふふ、何でもないです。それより、そろそろお家に戻ってお昼にしましょう」

バレッタはそう言って立ち上がると、片膝に左手を突いて一良に右手を差し伸べる。

「あ、もうそんな時間か。わかりました、私も準備手伝いますね」

一良はバレッタの手を取って立ち上がり、服についた砂埃を払うと二人で屋敷へと向かうのだった。

「ホントすいません。片付けのこと完全に忘れてました」

「いやいや、いいんですよ。一人でも十分運べる量でしたからな」

バレッタを手伝って食事の支度をしていた一良だったが、暫くしてからリアカーに大量のスcoopなどの道具を積んで村長が戻ってきたことに気付き、慌てて外に出て村長に謝罪をする。

リアカーも置きっぱなしだったので、確かに一人で運べると言えば運べるのだが、村長の持ち帰ってきた道具や余った板などの数から察するに、かなりの重労働だったはずだ。

「カズラさん、お父さん、食事の準備できたよ」

一良が村長に平謝りしているうちに昼食の支度を終えたバレッタが、屋敷の中から二人を呼ぶ。

二人が屋敷の中に入ると、居間では囲炉裏に置かれた鍋がほかほかと湯気を立ち上らせており、美味しそうな香りを漂わせている。

鍋の中には、近所の村人が分けてくれた収穫したての芋と、この間一良とバレッタが森で採ってきたドングリのような木の実が細かく砕かれて米と一緒に炊かれている。

それとは別に、同じく二人が山で採ってきた野草とアルカディアン虫を炒めて塩を振った小皿が、それぞれの定位置に一皿ずつ置かれていた。

「おお、これは美味そうだな。アルカディアン虫も捕れたのか」

「うん、たった6匹だけだね」

一良は全員の皿に2匹ずつ均等に入れられているアルカディアン虫を見て、今回は自分にだけ大量に配られていないことにほっとすると、定位置に腰を下ろした。

別にアルカディアン虫の味が嫌いというわけではないのだが、あのカブトムシの幼虫のような独特の形状をした芋虫を口の中に入れる瞬間は、やはり何ともいえない気分になるのだ。

バレッタが二人に炊き込みご飯をよそい始めた時、屋敷の戸を叩く音が聞こえてきた。

「あ、私が出てきます。お父さん、これお願いね」

「うむ」

バレッタは炊き込みご飯をよそっていた木のおたまを村長に渡すと、小走りで屋敷の入り口に向かう。

一良が村長から炊き込みご飯の入ったお椀を受け取っていると、

バレッタが慌てた様子で戻ってきた。

「お父さん、ナルソン様の使いのアイザックさんが……」

「ん、そうか。一良さん、すまないが少しの間席を外しますぞ」

村長はバレッタの言葉を聞くと、すぐにおたまを置いて屋敷の入り口に向かう。

「ナルソン様……前に言ってたこの辺を統治している貴族様でしたっけ」

「はい、その使いの方が来て……あの、申し訳ないのですが、私が呼ぶまで奥の部屋に行ってて頂けないでしょうか？」

突然のバレッタの申し出に、一良は一瞬きよとした。

しかし、本当に申し訳なさそうに頼むバレッタに、

「あ、はい、わかりました」

と返事をする、席を立てて普段寝ている奥の部屋に向かう。

バレッタは一良が奥に行ったのを見届けると、囲炉裏に置いてあった鍋と、炊き込みご飯をよそったお椀、それに一良の分の小皿を何故か別の部屋に下げ、再び屋敷の入り口へと向かうのだった。

「日照り続きでこの村も大変なことになっているかと思っていたんですが……溜め池に水は張ってあるし、何やら水路まで作られているし、一体何があったんですか？」

「この間運よく雨が降って溜め池にも水が貯まりましてな、水が残っている間にと、皆で協力して水路を掘ったのですよ」

バレッタが再び入り口まで戻ってくると、身体に皮の軽鎧を纏った若い男——アイザック——が村長と話をしていた。

アイザックは動物の皮で作られた皮紙が張られた薄い板と細い木炭を手にしており、腰には鞘に入った長剣を携え、背中にはふちを青銅で補強した丸盾を背負っている。

アイザックの身長は180cm程であり、身体は筋肉で引き締まっただけで無駄な贅肉など皆無である。

整った顔立ちにショートカットの金髪が映える、なかなかの美男子だ。

少し離れた所に生えている木には、彼が乗ってきたと思われる馬に似た動物が繋がれている。

「そうですか……それはそうと、収めて頂く作物ですが、2ヵ月後の期日までに収穫はできそうですか？」

「それが……雨が降る前に殆どの作物は枯れてしまい、村全体でもいつもの1割も収められるかどうかといったところなのです。一緒に畑を見て回りますか？」

村長が申し訳なさそうにそう言うと、アイザックは「やはり」といった風に表情を曇らせた。

「はい、お願いします。実は他の村も一部を除いて似たような状況で、酷いところでは餓死者も出ているのですが……ここはそこまで酷くはないようで良かったです。自分たちで食べる分の食料はあるのですか？」

アイザックはそう言いながら周囲の畑に目を向ける。

村に作られた沢山の畑では、多くの村人たちがせっせと農作業に励んでおり、その周囲では子供たちが遊んでいる。

餓死者が出るほど酷い状況ならば、そんな光景は見られないだろうと判断したのだ。

「ええ、山で採ってきた野草などを使って何とか食い繋いでいます。水の心配が無くなったおかげで、2ヵ月後の収穫は期待できませんが、4ヵ月後の豆の収穫は今までどおりできるかと思えますし、それまでの村の食料も、成長の早い葉物を育てることで何とか目処が立ったところです」

「なるほど、それはいい知らせですね……おや、何やらない匂いがありますね。これから食事ですか？」

アイザックは手にした皮紙に何やら書き込むと、屋敷内から漂ってくる香りに鼻をひくつかせた。

「え？ あ、はい。たった今作ったところで、これから食べようかと……」

「ふむ、そうだったのですか。ちょっと失礼しますね」

アイザックはそう言うと、入り口に立つ村長とバレッタを押しつけて屋敷の中に入り、囲炉裏のある居間までずかずかと入り込む。勝手に入っていくアイザックに村長は狼狽した様子だったが、一緒にいたバレッタは涼しい顔をしている。

居間に辿り着いたアイザックは、置いてある小皿に乗っているア

ルカディアン虫と野草の炒め物を見て、なるほど、と頷いた。

「これは……アルカディアン虫ですか。そういえば、この辺りの山でも捕れるんでしたね」

「はい、最近はあまり捕れないのですが、栄養があるのでこれだけでも何とかやっていけるんです」

ここで初めて、バレッタが言葉を発した。

やるせないような表情で笑顔を作って言うバレッタに、アイザックは「そうですか……」と同情した表情を見せる。

「勝手に家の中に入って申し訳ありませんでした。実は他の村の話なのですが、以前より収穫を村全体でかなり少なく申告していた所があり、つい先日同じような状況で発覚したという出来事がありました……」

つまり、収穫量をごまかして収める作物をできるだけ少なくしようといった事件があったために、領主側もかなり神経質になっているのだらう。

今回のような大規模な飢饉の時では尚更である。

「そんな……ナルソン様は私たちの生活を色々と気遣ってくださいるのに、それを裏切るようなことをする人がいるなんて……」

明かされた事実には悲しそうな表情をするバレッタに、アイザックは

「疑って申し訳ありません。どうか気を悪くしないでください」

と軽く頭を下げて謝罪する。

頭を下げるアイザックに、村長が慌てて

「いやいや、アイザックさんはお勤めを全うしているだけです。どうか頭を上げてくだされ」

と言って頭を上げさせると、アイザックは村長とバレッタに「ありがとうございます」と礼を述べた。

「では、早速ですが村の中を見て回らせてください。バリンさんはご同行をお願いします」

「わかりました」

村長を伴って屋敷を出て行くアイザックを見送ると、バレッタは小さくほつと息をついて、一良の待っている部屋へと向かうのだった。

「んー、貴族の使いか。どんな格好をしてるのか気になるなあ」

バレッタに奥の部屋に居て欲しいとお願いされた一良は、素直に言うことを聞いて部屋で大人しく寝転んでいた。

貴族であるナルソンの使いと聞いて、どんな格好をしているんだろうと非常に興味をそそられたが、バレッタの頼みとあっては断ることはできない。

それに、未だに日本での普段着（今日は英語で「Hungry!」と背中に書かれた色モノTシャツ）を着ている一良が、ナルソンの使いであるアイザックという人物に見られたら、まず確実に不審がられるだろう。

きつとバレッタは、そのことを心配して下がっているように言ってくれたはずだと一良は思った。

「カズラさん、お待たせしました。もう戻ってきてても平気ですよ」

一良が寝転がって物思いに耽っていると、バレッタが一良を呼びに戻ってきた。

「もう使いの方は帰られたんですか？」

「いえ、今は父と一緒に村の畑を見て回っています。なので、父が戻ってくるまでは外には……」

「あ、大丈夫ですよ。いいて言われるまで外には出ませんから」

すまなそうに言うバレッタに、一良は笑顔で答える。

そんな一良の様子に、バレッタもホッとした様子で「ありがとうございます」と微笑んだ。

「では、食事にしましょうか。父には悪いですけど、温かいほうが美味しいですから」

村長は村の畑の見回りに行ってしまったので、暫くは戻ってこないだろう。

一良は

「そうですね、食べちゃいましょうか」

と言って立ち上がると、バレッタと共に居間へと向かうのだった。

一方その頃、バリンとアイザックは村の畑を見回っていた。

畑で働いている村人たちは、ちらちらと二人を気にしつつも、鋤を使って畑を耕したり、芽が出たばかりの野菜の周囲に生え始めた雑草を手で引き抜いている。

畑で働いている者は誰一人として、一良が供与した農具は使っていないかった。

「ふむ、まだ芽が出たばかりのようですが、溜め池に水はありますし、水路からも水が流れているので、日照りの影響はあまり無さそうですね」

「ええ、皆で苦勞した甲斐がありました」

村長の言葉に、アイザックは水路を目で追った。

この延々と村の外に続く水路を、村の人たちがどれほど苦勞して掘ったのだろうかと思うと、深い尊敬の念が沸き起こる。

住民が100名足らずのこの村では、水路を掘る作業に充てられる人員は僅かだろうし、先ほど村長の屋敷で見たように食べ物も殆ど無い状況での土木作業は想像を絶するほどの難業であったはずだ。

まあ、実際のところ、一良が持ち込んだ大量の食料と道具のおかげで、全ての作業がサクサクと進んでいったのだが、そんなことをアイザックが知る由も無い。

「皆さん、本当に頑張ったんですね……さて、2ヵ月後に収めて頂く作物の件ですが、ざっと見て回ったところ、やはり収穫は厳しそうですね、以前にもあったように木材を収めていたかどうかと思います」

暫しの間水路を眺めたアイザックは、頭を切り替えると租税の話をし始めた。

いくら水路が引かれて水の心配が無くなったとはいえ、すぐに作物が生長するわけではない。

村全体では現在も深刻な食糧不足であると判断したアイザックは、今回は税の形式を作物から木材に切り替えることにした。

「前回と同じだけの量の木材は無理でしょうから、前回の8割程度の木材を収めていただければと思いますが、よろしいでしょうか？」

「わかりました。前回の8割ですな。必ずお納め致します」

アイザックは村長の返事を聞き微笑んだ。

「それでは、また1カ月後に様子を見に参ります。今後も大変でしょうが、どうか村の方々と協力して頑張ってください」

アイザックはそう言うと、村長としっかりと握手を交わすのだった。

11話：領主様と優等生

蝋燭の明かりが仄かに板張りの室内を照らす中、短く切りそろえられた白髪交じりのダークブラウンの髪を持つ壮年の男が一人、大きな執務机に向かいながら、手にした皮紙に書かれた報告文を読み上げていた。

報告文を読み上げる男の顔は険しく、その内容が芳しくないことを物語っている。

机の上には、彼が手にしている皮紙以外に数枚の報告書が重ねられ、その脇には羽ペンと黒いインクの入った小さな陶器が置かれている。

日本で言うところの16畳程の広さの部屋に置かれた家具は質素なものばかりで、彼の座っている机と椅子の下に敷いてある、動物の毛皮をつなぎ合わせた大きな絨毯以外には、高価に見える品はひとつもない。

彼が報告書を見ながら何やら考え込んでいると、部屋の扉がノックされた。

「アイザックです。グリセア村からただいま戻りました」

「入れ」

彼が報告書に目を落としたままそう言うと、「失礼します」との声の後に、右手に皮紙を持ったアイザックが入ってきた。

部屋に入ってきたアイザックは、未だに難しい顔をして報告書を読んでいる男に、手にしていた皮紙を差し出す。

「ナルソン様、グリセア村の状況ですが、ナルソン様の案じていたような事態にはなっておりませんでした。それどころか、村の中に

は水路が引かれ、水の心配はしなくてもいい状態となっております」

「……何だと？」

報告書を読んでいた男——ナルソン——は、アイザックの報告に顔を上げると、差し出された皮紙を受け取り目を通す。

それを読みながら怪訝な表情をするナルソンに、アイザックは何かまずいことでもしてしまったかと、直立したまま身じろぎした。

「水路には水が通っていたと書いてあるが、間違いないのか？」

「はっ、確かに水が流れておりました。水路は溜め池まで繋がっており、溜め池の水も半分ほど溜まっておりました」

「ありえんな」

アイザックの返答を聞くと、ナルソンは視線を報告書からアイザックへと移す。

その射抜くような視線を受け、アイザックは別に悪いことをしたわけでもないにも関わらず、背中に冷や汗を掻いた。

「し、しかし、実際にこの目で見てきたので間違いはないかと……」

「アイザック、お前はあの村から川までの距離と、川の周囲の地形を知っているか？」

「……いえ、申し訳ありません」

「……そうか」

ナルソンは立ち上がると、壁際に置いてある書類棚から、二枚の大きな皮紙を抜き出した。

「まあよい。何故水路に水が流れていることがありえないのか、今から説明しよう。地理と一緒にしつかり覚えるといい」

ナルソンは頂垂れているアイザックの肩を叩くと、机の上に二枚の皮紙を広げた。

1枚には彼が統治しているグリセア村の周辺地図が描かれており、もう一枚は村から少し離れた地域の地図で、村への水路に繋がっているはずの川も描かれている。

「いいか、まずグリセア村から川までの距離だが、大人の足で歩いて4半刻（約30分間）はかかる。更に日照り続きで食料も殆ど無く、先の戦争で若い男手がかなり少なくなっていて労働力も足りない。道具も村には青銅製のものは殆ど無い」

ナルソンはそこまで話して、「ここまではいいな？」とアイザックに確認する。

「はい」と返事をするアイザックに、ナルソンは再び説明を始めた。

「雨が何時降ったのかは報告書には書いてはいなかったが、お前が前回グリセア村に行った直後……大体一ヶ月前だな。そこで雨が降ったとして、それから必死に水路を作ったと言うのなら、まあわからない話でもない。ただし……」

ナルソンはそう言うと、指で地図に描いてある川を指した。

「この川の水面が水路を引ける高さであれば、だ。残念ながら、この川の水面は水路を引くには低すぎる。水路をもつと上流から引くにしても、川は上流に行くにつれて村から離れるし、途中にいくつもの丘まである」

「なんと……それでは、あの水はいつたい何処から……」

ナルソンの説明を聞き、アイザックは地図を見ながら唸った。

アイザック自身、水路に水が流れているのを見たことは事実であるし、てっきり単純に川への水路を掘っただけだと考えていたのだ。しかし、その川からは水路が引けないのである。

地図を見る限り、村の近くに他の水源は無く、何処から水を引いてきたのか皆目検討もつかない。

丘を切り崩すか、丘を大きく迂回して水路を引けば不可能ではないが、時間的にも労働力的にも現実的ではない。

「それは私にも分からんが……まあ、村の水路を辿っていけば分かるだろうな」

「そうですね、それでは明日もう一度、グリセア村へ行ってみます」

勇んでそう申し出るアイザックに、ナルソンは首を振った。

「お前には別の仕事をやってもらわねばならん。それに、グリセア村に水が供給されているというのは悪い知らせではないから、水源が何処かということは今は保留にしておこう。何しろ、ここからグリセア村まではラタに乗っていつでも丸１日はかかる。今はその調査にそこまで掛けられる程の時間は無い」

「……はい、申し訳ございません」

自分の注意力不足のせいで、ナルソンに領内の懸念事項を一つ増やしてしまったと、アイザックは肩を落とす。

ナルソンはそんなアイザックの様子に気づくと、ふっと目元を緩めて再び彼の肩を軽く叩いた。

「そんなに気にするな。お前がグリセア村に行った回数も、まだ数える程しかないではないか。それに、悪い知らせならともかく、今回はいい知らせだったのだ。今回の一件で地理を把握できて、逆によかったではないか」

「しかし、今回はよかったものの、もしこれが私の落ち度のせいで取り返しのつかない事態になっていたらと考えると……」

尚も気落ちしているアイザックに、ナルソンはやれやれと溜め息をつくと、話を変えるべく口を開いた。

「ところで、最近リーゼとはどうなんだ？ 仲良くしているのか？」

「えっ！？ い、いえっ、特に変わりありませんですっ！」

突然振られた話に、アイザックは驚いて顔を上げ、慌てて答える。そんな様子のアイザックに、ナルソンは大げさに溜め息をついてみせた。

「アイザックよ、そんなことでは我が娘を振り向かせることは出来んぞ。あいつの好みがどんな男かは分らんが、皆と一緒に攻めねば落とせぬということは確実だ」

「……アルカディアの盾と呼ばれているナルソン様のお嬢様では、
砦どころか難攻不落の城塞に思えますが」

「はっはっは、上手いことを言うではないか！ 確かにあいつはその
辺の砦どころではないかもしれんな！」

大笑いしているナルソンに、アイザックは

「いえ、冗談ではなく本当のことなんですがね……」

と、再び肩を落とすのだった。

一方その頃、件のグリセア村の村長の屋敷では、パチパチと薪の
燃える囲炉裏を囲みながら、一良がバレッタと村長から農作物や租
税について話を聞いていた。

「なるほど、大体二ヶ月から三ヶ月ごとに作物を税として収め、領
主はそれを他の地域と取引してお金に変えるわけですか」

「ええ、そのお金を王家に納めるので、しっかりと租税を徴収しな
いと王家からお咎めを受けます。王家から承諾を得られれば、作物
やその他の品を、お金の代わりに直接納めることもあるみたいで
すけどね」

「ふむふむ、バレッタさんは物知りですね。感心します」

一良がそう言うと、バレッタは少し照れた様子で微笑んだ。

「父から色々教えてもらっているんです。村長の娘であるからには、ある程度の学がなければ村の人たちに示しがつきませんから」

「うむ、我が娘ながら、バレッタは大変頭のいい娘です。こんな小さな村にいるよりも、ナルソン様などの貴族様の元に使えさせて頂いて、少しでも学を増やした方がいいと思うのですが……」

その言葉に、バレッタは父親に顔を向けるとにつこりと微笑んだ。

「ううん、私この村が好きだから離れたくないの。それに、私がいなくなったらこの家はすぐに埃まみれよ？ 一ヶ月もしない内に、お父さんは埃の塊になっちゃうわ」

「おいおい、酷い言い様だな。いくらなんでも掃除くらいできるわい」

そう言いながらバレッタを見る村長の目は温かい。

恐らく、バレッタは村長がこの屋敷に一人になってしまうのを気にしているのだろう。

そんな二人を見ながら、一良は「（親思いのなんていい娘なんだろう）」と、心が温かくなるのを感じるのだった。

「えっと、それで今回の租税ですけど、以前収めた木材の8割でしただけ？」

「ええ、昨日アイザックさんからはそう指示されましたな。本当は作物を収めたいところですが、今からでは殆どの畑で芋の成長が間に合いませんので、次に収める豆を植えるまでの間は成長の早い葉物を育てて、村の食料にする予定です」

一良は「なるほど」と頷くと、収める木材について少し考える。
この間水路を作るために行った伐採作業の進み具合から見て、伐採は問題なく行えるだろう。

前回収めた木材の量がどれだけあるのかは知らないが、一良が持ってきた斧やノコギリがある今、問題なく作業を行えるはずだ。

「ちなみに、提示されたものよりも多く租税を払うことってあるんですか？」

一良の問いに、バレッタが「ええ」と頷く。

「他の村ではどうなのかは知りませんが、予定より多く作物が取れた場合や、手が空いて薪に使う枝を大量に拾ってこれた場合などはそれを他の町で売ったお金の一部や採れたものなどを追加で収めることもありますよ」

「へえ、それはまたどうして？」

「ナルソン様は、私たちの生活のこともちゃんと考えて租税を決めてくださいますし、何か村で困ったことがあっても、積極的に支援してくださるからです。今回の飢饉では、さすがに無理だったみたいですけど」

「おお、そりゃいい領主様だ……」

バレッタの答えに、一良は思わず感心して頷いた。

かなりの善政を敷いているようではあるが、それ故にナルソンの負う苦労は半端なものではないだろう。

優しくしていても全てのものが恩に報いるわけではないだろうし、夕食時に村長から聞いたように、収穫量をこまかして自分達だけ楽

をしようという村も必ず出てくるのだ。

甘くしすぎれば付け上がるし、逆に厳しくしすぎれば反発する。
いつの世も、経営管理というものは難しいのだらう。

「ですから、今回のように税収が一気に落ち込むと思われる時は、何とか私たちもナルソン様に多く租税を納められるようにしたいんです。きっとナルソン様も、王家に納めるお金が足りなくなるでしようから」

「なるほどねえ……。それでは、指示された木材はもちろんのこと、可能であれば作物も収めたいですね。今も芋を育てている畑はどれくらいありますか？」

「芋畑は元の2割も残っていればいいところですな。他の畑は日照りで完全にやられてしまいました」

「2割か……ううむ」

ナルソン領の優等生であるグリセア村（さつき村長から初めて村の名前を聞いた）としては、何とか多くの租税を納めたいところである。

「（今から芋の苗を増やしても間に合わないから、出来ることといえば芋の質を上げることくらいか）」

日本から大量の作物などを持ってきてしまえば手っ取り早いのだらうが、この世界の食べ物とは大分味や形が違っし、いきなり大量の新種の作物を納めたとしたら、怪しまれること必至である。

とりあえず木材については心配ないようなので、可能な限り村にある作物を大切に育てて、租税として収めるのがいいだろうと一良

は考えた。

「あの、明日村の畑を見せてもらってもいいですかね？ 残った芋の様子が見たいんですけど」

「おお、見てくださいますか。ありがとうございます」

「え？ あ、はい。とりあえず見るだけですけど……」

何故か礼を述べて頭を下げる村長に、一良は内心首を傾げる。

「では、そろそろ休みますか？ 日が落ちてから結構経ちますし」

「あ、そうですね。寝ましょうか」

バレッタの一声にて、その夜の話し合いは一先ずこれにてお開きとなり、翌朝三人で畑に向かうこととなったのだった。

12話：畑と神様

次の日の朝、一良はバレッタと村長に連れられて、芋の生き残っている畑まで来ていた。

日照りの中でも村人達の努力で何とか生き残った芋たちは、緑色の葉を精一杯広げ、蔓もによると伸びており、どれも元気そうである。

「おー、どれも青々として元気そうですね」

「ええ、水路が引かれたおかげですな。たっぷり水をあげることができるので、日照りにも負けません」

一良たちが畑を見ている間にも、畑の世話をしにきた村人達が一良たちに挨拶をしては、芋の葉の隙間から覗いている草を抜いたり、溜め池に水を汲みに行ったりしている。

この畑の傍を通って溜め池へ向かう水路には水は流れていないので、溜め池の水は一杯になっているのだろう。

多くの村人達が代わる代わるやってくる様子から、どうやら村全体で協力して畑の世話をしているようだ。

「この芋は、収穫する時までにはどれくらいの大きさになっているんですか？」

「えっと、これくらいの大きさのものが多いです。一つの苗に5個くらいできますね」

バレッタはそう言いながら、手で小さな輪っかを作って見せた。輪っかは日本のスーパードで売っているMサイズの鶏卵と同じくら

いの大きさであり、随分小ぶりな芋が出来るようである。
一つの苗に5個できるとは言っても、どうにも物足りない気がする。

「肥料は何を与えてるんですか？」

「えっと……ひりょうって何ですか？」

「……え？」

何のことだろう？ といった表情で答えるバレッタに、一良は一瞬固まったが、こつちの世界では呼称が違うのだろうと思い直した。

「ええと、作物に栄養を与えるために土に混ぜるものですけど、何か畑に撒いたりしてませんか？」

「あ、豊作のおまじないのことですね。グレ……神様に豊作をお願いするために、作物の種を撒いた後に、山で狩った力フクの骨を細かく砕いて畑に撒いたりしますよ」

「……他に何か撒いたりはないんですか？」

「えっと……他には何も……あ、あの、もしかして骨ではなくてお肉のほうがよかったのでしょうか？ 昔からの慣習で砕いた骨を撒いていたんですけど、やっぱり骨なんかよりお肉のほうが……その……好きだったり……しま……す？」

どうやら、この村の農業には肥料という概念が無いらしい。
おまじないのような感じで結果的に肥料のようなものを撒いては

いるようだが、目的が土に栄養を与えることではないので、大した量は撒かないのかもしれない。

あと、神様の好みなんて聞かれても困る。

「神様の好物が骨と肉のどっちかってことは置いといてですね。作物を元気にさせるには、まず土を元気にさせないといけないのですよ」

「土をですか？」

一良の言葉に、バレッタは小首を傾げる。

恐らく、作物とは神様の恵みとか祝福とかのおかげで成長すると考えていたのだろう。

「ええ、そのためには森の中にある腐葉土……落ち葉などが腐って土みたいになっているものとか、残飯とかを一旦土と混ぜて腐らせたものを畑の土に混ぜたりします」

「あの……そんな腐ったものなんて畑に混ぜて、神様は怒らないのでしょうか？」

一良の説明に、バレッタは怪訝そうな表情で一良に問う。

この村の人間にしてみれば、畑に混ぜるという行為が神様に捧げるという意味なのだろう。

「あー、大丈夫ですよ。逆に神様も喜ぶと思いますし、土も元気になるですよ。神様はそれらを使って畑を元気にしてくれるんです」

一良の言葉を聞いて、バレッタと村長は「そうだったのか」と納得している。

作物は神様のおかげで育つという概念からどうにも抜け出せないようだが、今までずっと神様のおかげだと思っていたのに、急に「土を元気にしないと作物は元気にならない」などと言われても意味がわからないだろう。

とりあえずは、神様が腐葉土とかを使って畑を祝福している的なニュアンスで納得してもらうことにした。

「なので、森に行つて腐葉土を集めてこないといけないんですけど……」

「わかりました。村の者にも集まってもらつて、皆でその腐葉土というものを採りに行きましょう」

村長はそう言うのと、近くで畑仕事をしている村人に声をかける。声を掛けられた村人は作業の手を止め、村長から指示を受けると他の村人を呼びに駆け出していった。

「では、私も他の人たちを呼びに行つてきます。バレッタはリアカ―を取つてきてくれ」

「うん」

「あ、私も一緒に取つてきますよ」

こうして、大勢の村人を巻き込んだ腐葉土集めが行われることになったのだった。

それから約20分後。

一良は森の入り口に集められた村人達に期待を込めた視線を投げかけられながら、近場の土をシャベルで掘り起こしていた。

掘り起こされた土を手にとってみると、若干パサついてはいるが、ごく普通の腐葉土に見える。

「これが腐葉土です。これを沢山集めて畑の土に混ぜてください。そうすれば、神様が腐葉土を使って畑の土を元気にしてくれますから」

一良はそう言つと、手に持った腐葉土を集まった人たちに見せて歩く。

腐葉土を見せられた人たちは、口々に

「そうだったのか」

とか

「カズラ様がそう言うのなら間違いない」

などと言つては感心している。

「それでは、皆で腐葉土を掘り起こしてリアカーに積みましようか。とりあえずは畑1つにつきリアカー1台分程度を使うことにしましょう」

一良がそう指示を出すと、村人達は一斉に手にしたシャベルで近場の土を掘り起こし始めた。

長年落ち葉が積み重なった森の土は柔らかく、浅い部分だけ掘り返していれば簡単に腐葉土を集めることができそうである。

「さてと……バレッタさん、ちょっといいですか？」

「あ、はい。どうかしましたか？」

一良の傍で腐葉土を掘っていたバレッタは、一良の呼びかけに作業の手を止める。

「私はこれから国に戻って、追加のリアカーと畑に撒く肥料を取ってきます。なので、その間の作業の指示をバレッタさんとバリンさんをお願いしたいんですけど」

「あ、はい。わかりました。父にも伝えておきますね」

「お願いします」

一良はそう言うと、日本へ戻るべく森を出るのだった。

「ね、ねえコルツ、やっぱりまずいよ。絶対に追いかけるなんてみんなにきつく言われてるじゃない……」

「平気だつて。それに、これだけ離れてればあのにいちやんだつて気づかないよ」

日本に戻るために雑木林へ向かって歩く一良の50メートル程後方で、二人の子供が所々に生えている木に隠れながら一良を尾行していた。

子供は二人とも5、6歳といったところで、好奇心に瞳を輝かせているコルツと呼ばれた少年を、気弱そうな少女が彼の服を引っ張

って止めようとしている。

「で、でも、もしカズラ様にばれたら……」

「だから平気だって……あつ、林に入ってたよ！」

雑木林に入っていく一良を見て、見失ってなるものとコルツは急いで後をつける。

走り出したコルツに、少女は一瞬ついていくかを迷った様子だったが、すぐに彼を追って走り出した。

「あれ？ いなくなっちゃった……」

すぐに一良が入ってた雑木林についたコルツだったが、雑木林のどこを見ても一良の姿が見えない。

雑木林といっても、そこまで木は密集しておらず、たった今この場所に歩いて入っていった一良の姿が見えないというのはどうにもおかしい。

「ほら、やっぱりカズラ様はグレイシオール様なんだよ。そうじゃなかったら見失うはずないよ」

コルツの後を追ってきた少女は、一良を見失ってきよろきよろしているコルツに、ほっとした様子でそう言った。

少女の言葉に、少し腑に落ちない表情をしていたコルツだったが、実際に一良の姿が見えなくなってしまったことは事実である。

「そうなのかなあ、俺には普通のにいちゃんに見えるんだけどなあ……ミユラもそう思うだろ？」

「もう、まだそんなこと言ってるの？ ほら、早くみんなのところに戻るよ」

ミユラと呼ばれた少女は、雑木林の奥を眺めながらなおもぼやいているコルツの手を取ると、村人達が腐葉土を集めている森へと彼を引っ張って歩き出すのだった。

一方、子供に尾行されていたことなど全く気づいていない一良は、いつものように雑木林を抜けて石畳の通路に辿り着く。

そして全く変わらない様子で通路の隅に崩れ落ちている白骨死体に「毎度すいませんね」と声を掛けて前を通ると、日本への敷居を跨いだ。

「さて、またホームセンターに行くか。何かこのまま行くと大口取引先になりそうだな」

いつものように一良は車に乗り込むと、この間農具を買ったホームセンターに車を走らせる。

道すがら見える日本の景色は、僅か数分前までいた異世界とは違い、そこら中にのびのびと野菜が育つ畑が広がっている。

そんな景色を見ながらまったりと車を数十分走らせてホームセンターに到着した一良は、店の外に設置されている園芸コーナーに向かうと、大量に積みあがっている肥料袋の前で立ち止まった。

「ううむ、こりゃ随分と種類が多いな。どれを買っていいんだろうか」

様々な用途別に種類分けされている肥料を前に、どの肥料を買っ

ていけばいいのかと一良は腕組みして悩む。
それぞれの袋に書かれた説明を見て、

「異世界の作物用とか書かれた肥料もあればいいのに……芋用の肥料ってこれでいいのかな」

などつぶつぶ言いながら一良がうろうろしていると、その様子を見ていた店員が近寄ってきた。

「あの、何かお探ですか？」

「ええ、芋用の肥料を探しているんですけど、どれがいいんですね？」

「あ、それならこれがいいですよ。ちょっと臭いますけど」

店員はそう言うと、鶏糞と書かれた肥料の前に一良を案内する。確かに独特な香りがするが、肥料の説明欄には芋類にも使えると記載してある。

「肥料を使うのはジャガイモですか？」

「えーと……まあ、そんな感じだと思います」

この間村で食べた炊き込みご飯に入っていた小さな芋は、ジャガイモとは少し味が違う気もしたが、芋は芋なので大した違いはないのかなと思うことにした。

「では、鶏糞とは別にこれも撒くといいですよ。それとですね……」

「ふむふむ……では、今説明してもらった肥料を全部買っていきま
すかね」

ジャガイモの育て方をあれこれと説明してくれる店員の話を通
り聞き、とりあえず言われた肥料を一通り買っていくことにした。

「あ、はい、ありがとうございます。一袋ずつでよろしいでしょう
か？」

「いや、全部お願いします。ここに積んであるやつ全部」

「……え？」

「何kgくらいになるのかなー」と肥料を眺めながら呟いている
一良を他所に、置いてある品物全部寄越せと言われた店員は少しの
間固まっていたが、

「しよ、少々お待ちください」

と一良に一言断ると、店の中に小走りが入っていった。
それから1分程一良が待っていると、先程の店員が胸に「主任」
と書かれた名札を付けた別の店員を連れて戻ってきた。

「お客様、この肥料を全部お買い上げになられるとこの者から聞い
たのですが……」

「ええ、全部ください。あと折りたたみ式のリアカーも数台欲しい
んですけど、何処にありますかね？」

「あの、全部お買い上げですと、鶏糞だけでも400kgはあるの

ですが……ジャガイモですと、100坪あたりに30kgも撒けば十分ですよ?」

店員の台詞に、「あー、400kgか」と一良は唸る。

その様子に、さすがに必要な量を間違えていたのだろうと思っていた主任店員だったが、その予想はすぐに裏切られることとなった。

「すいませんが、店のトラックをお借りしたいです。できれば積み込みも手伝って欲しいんですけど」

そう言う一良に一瞬たじろいだ主任店員だったが、本当に購入するというのなら仕方がない。

主任店員は傍で目を丸くしている店員に肥料の総額の計算を指示すると、一良をリアカーの売っている場所へと案内するのだった。

13話：今後のために

「おお、こりや便利だ。高いだけのことはあるな」

ホームセンターで大量の肥料を購入した一良は、借りたトラックで何度か屋敷とホームセンターを往復して全ての肥料を運び終えると、買ったばかりの折りたたみ式リアカーを開いた。

一良の購入したリアカーは最大積載量が350kgの折りたたみ式という高性能品で、タイヤもちろんノーパンクタイヤである。

この間30万円を置いて勝手に買い取ってしまったリアカーの置いてあった倉庫に、新しく置いてあった折りたたみ式リアカーを見て、これはいいなと思って一良も2台程購入したのだ。

ちなみに、その倉庫にあったリアカーに付いていた張り紙に「野菜何でも採ってってください」と書いてあったので、「トマト2つ頂きました。美味しかったです」と張り紙に書き足して、本日の一良のお昼ご飯として大きなトマトを2つ、ありがたく頂戴してきた。

真っ赤に熟れた完熟トマトは、さすがプロの農家の技なのか、果物のように甘くて美味しかった。

「さて、とりあえず300kg分積んでいくか…… 畳大丈夫かな」

畳の具合を確認しながら、玄関先に山積みになっている肥料を次々にリアカーへ載せる。

さすがに畳も少しはへこむかと思ったのだが、何故か全くへこまなかった。

一良は内心首を傾げながらも、「こりや随分丈夫な畳なんだな」と自らを無理やり納得させ、リアカーを引いて異世界への敷居を跨ぐ。

「いつもすいません。これどうぞ」

途中、通路に崩れ落ちている白骨死体に、いつも前を通っているお詫びにと、ワンカップの日本酒をお供えしておいた。

一良が森に戻ると、村の人たちが集めたと思われる大量の腐葉土があちこちに山積みになっていた。

腐葉土集めをしている人たちは当初の半分程度の人数になっていることから、畑に腐葉土を混ぜている人と、森で腐葉土集めをしている人に分かれたのだろう。

「おかえりなさい、カズラさん。それが肥料ですか？」

一良がリアカーを置いて一息ついていっていると、バレッタがリアカーを引いて戻ってきた。

どうやら、リアカーに腐葉土を積んでは畑へと運ぶという作業を繰り返しているようだ。

「ええ、これも腐葉土みたいに畑に撒くんです。ちょっと臭いですがね」

「確かに、ちょっと変わった臭いがしますね」

そう言いながら、バレッタは肥料の載ったリアカーに近づくと、ビニール製の袋に書かれた「鶏糞」という文字を指でなぞった。

「これって、何て読むんですか？」

「けいふんって読めます。私の国にいる、ニワトリという鳥のフンを加工したんですね」

「……え？」

「さて、まだ国に沢山用意してあるので、また国に取りに行ってきますね……どうかしましたか？」

何やら鶏糞を見たまま固まっているバレッタだったが、一良に声を掛けられると、鶏糞の入った袋を見たまま口を開いた。

「あ、いえ……これを畑に撒くんですね？」

「そうですよ」

「これ、鳥のフンなんですよね？」

「ええ」

一良の返事を聞いて、バレッタは怪訝そうな表情で一良と鶏糞を交互に見る。

一良はそんなバレッタの様子を見て、神様に鳥フンを捧げるといふ行為に抵抗があるのだろーと思ひ、フォローしておくことにした。

「心配しなくても大丈夫ですよ。神様は腐葉土だろーが鳥のフンだろーが、畑を元気にすることの出来るものだったら何でも使ってくれますから」

「そー……ですか……色々ありがとうございます」

何故か申し訳なさそうに礼を言うバレッタに、

「いえいえ、村に住まわせてもらっているお礼ですよ」

と言うと、鶏糞を載せたリアカーをバレッタに任せ、再び日本の屋敷へと向かうのだった。

「これが最後の畑ですかね？」

「ええ、これで最後ですな」

太陽が山に隠れようとする頃、村の皆で集めた腐葉土と一良が日本から持ってきた肥料を、ようやく芋の生き残っている畑に撒き終えることができた。

傍らに置いてあるリアカーにはまだ肥料が残っているが、残りは明日以降に他の畑に撒くことになっている。

「しかし、思いのほか広かったですね。また国から肥料を持ってこない」と

「おお、それはありがたい。……しかし、この肥料というものは随分臭いますな」

村長の言葉に、自分の手や服を匂つてみると、一日中肥料を運んだり撒いたりしていたせいか、服にも身体にも肥料の臭いが染み付いているような気がした。

周囲にいる村人たちも、自らの臭いを嗅いでは顔をしかめている。

「こりや確かに臭いますね」

「ええ、夕食の前に湯で身体を拭いても、臭いが落ちるかどうかな…
まあ、こればかりは仕方ありません」

「私、先に戻ってお湯沸かしておきますね」

バレッタがそう言うと、数名の村人達がそれに習って家に帰ろうとする。

「あ、皆さんちょっと待ってください」

戻ろうとしている村人達を呼び止めると、一良はリアカーの隅に載っているダンボール箱を開いた。

「実は、こんなこともあるかと、いい物を用意しておいたんです。とりあえず各家庭に2つずつですが、どうぞ持って行ってください。はい、どうぞ」

「わ、いい匂い……」

一良から小さな袋に入った四角い物体を受け取った村娘は、その香りに思わず顔を綻ばせた。

他の村人達も、一良からそれを受け取っては、その優しい香りに感嘆の声を漏らしている。

「あの、カズラさん、これはいったい何に使うものなんですか？」

同じく一良からそれを受け取ったバレッタは、袋の文字を見つめ

ながら一良に問う。

「えっと、これは石鹼といって、服や体を洗う時に使うものです。いい香りもしますし、普通に水で洗うよりも断然綺麗になりますよ」

「えっ、石鹼って、これですか!？」

そう、一良が持ってきたのは石鹼である。

ホームセンターで肥料を購入している時に、その臭いがあまりにも強いいため、畑に撒く作業をしている間に体に臭いが染み付いてしまいかもしれないと思い、用意してきたのだ。

案の定、服にも体にも肥料の臭いが染み付いてしまったので、用意してきて正解だった。

「あ、知ってるんですね。だったら、皆さん使い方もわかりますかね?」

一良がそう言って皆を見回すと、頷いている村人も数人はいるが、殆どの村人は首を傾げている。

どうやら、この世界にも石鹼は存在するようではあるが、あまり一般的なものではないらしい。

「あ、あの、私が以前街で見たものは、こんなに硬いものではなくて、もつとぐにぐにしておて軟らかいものでした。それに、こんなにいい香りの石鹼は見たことがありません」

「えっ、そうなんですか?」

「私もこんなにいい香りのする石鹼は見たことがありません……それに、石鹼はなかなか高価なものですから、私たちのような農民

が使うことなどはまずありません」

そう言いながら、バレッタと村長は一良の持ってきた石鹼を不思議そうに見つめる。

もしかしたら、この世界の石鹼は、一良の知っている石鹼とは加工法も材料も全く違うものなのかもしれない。

今度日本に戻った時にでも、石鹼の生い立ちについて調べてみよう。一良は思った。

「ふむ……では、一度皆さんに石鹼の使い方は説明しておいたほうがいいですね」

一良はそう言うと、皆に向かって石鹼の使い方を簡単に説明し始めた。

一良が皆に説明している間、バレッタと村長は難しい顔をして少しの間何やら話していたようだが、すぐに話は纏まったようで、説明する一良に代わって石鹼を村人たちに配り始めた。

「では、以上のことを守って使ってくださいね。くれぐれも、いい匂いがするからって齧っちゃダメですよ？」

一良の説明が終わると、石鹼を受け取った村人たちは口々に一良に礼を述べ、それぞれの家へと帰っていく。

一良たちも、余った肥料の袋をリアカーに載せ直し、屋敷へと戻るのだった。

屋敷に戻った一良たちは、一人ずつ交代でお湯の入った水桶と石鹼を持って屋敷の庭に移動して身体を拭くことにした。

二人に勧められて先に身体を洗わせて貰う事になった一良は、水桶と着替えの入ったボストンバッグを持って庭に出たまでは良かったのだが、服をどうするべきか悩んだ末、誰も見ていないんだからいいやと全ての衣服を脱いで生まれたままの姿となり、身体を洗い始めた。

「はー、やっぱり石鹸はいいなあ。お湯だけで身体を拭いてた時とは大違いだな」

体中を石鹸の泡だらけにしながら、一良は心地良いため息をつく。今まではお湯と布切れで身体を拭いていたのだが、それだけだとどうにも気持ちが悪く感じており、石鹸を持ってきてよかった心の底から思うのだった。

「水車のおかげで水には困らなくなったし、共同浴場みたいなものを作るのもいいかもしれないな。後で二人に相談してみるか」

そんなことを言いながら鼻歌交じりで綺麗に身体を洗い終えた一良は、水桶の中の湯で身体についた石鹸を綺麗に洗い流すと、いそいそと衣服を身に纏うのだった。

「それじゃ、行って来ますね」

「うむ」

「はい、じゅっくり」

一良と交代で身体を洗うために庭に出て行くバレッタを見送り、

一良は早速村長に共同浴場について相談をしようと口を開いた。

「バリンさん、一つ相談があるのですが……」

「ん？ ……ああ、わかりました。バレッタには絶対に言いませんから、どうぞ行ってきてください」

「え？」

突然納得した様子で頷く村長に、一良は首を傾げた。

「我が娘ながら、あれはなかなか美人ですからな。カズラさんにはお世話になってますし、ここは私も折れましょう。どうぞ裸を覗いてきてください」

「ちょ、何を言ってるんですか！」

突然覗きの許可を出し始めた村長に、一良は思わず大声でツツコミを入れる。

「はて、覗きの相談ではないのですかな？」

「何処の世界に娘の親に覗きの許可を貰おうとする人間がいるんですか！」

とぼけた様子でそんな台詞を吐く村長に、一良は顔を赤くして反論する。

「はっはっは、それもそうですね。さて、冗談はさておき、相談とは何ですかな？」

「じよ、冗談だったのか……」

一良はここでようやくからかわれていたことに気付き、酷く脱力した気分になりながらも、先ほど思いついた共同浴場について話を切り出すのだった。

「えつとですね、折角村に水路を引くことが出来たので、その水を利用して村の共同浴場……皆で使う大きな風呂を作ったらどうかなと思いますして」

「風呂というと、お湯を沢山溜めてそこに入るというものでしたかな？」

「ええ、その大きなものを村に作れないかなと」

「……ううむ」

一良の提案に村長は腕組みして唸ると、何やら考え込んでしまった。

一良は「何か問題でもあるのかな」と黙って村長の返事を待っていると、暫くして村長は顔を上げ、申し訳なさそうに話し始めた。

「もし、その共同浴場なるものが村に出来れば、村の皆はきっと大喜びするでしょう。しかし、風呂というものは貴族様などの高貴な方々が入る非常に贅沢なものなのです。それを私たちの村に勝手に作ってしまうというのは……」

「あー……なるほど……」

その言葉に、一良は村長が何を言いたいのかが大体わかった。

恐らく、村にあまり目立つような贅沢品を設置しては、領主であるナルソンに目を付けられてしまいかもしれないのだろう。

今までの様な食料提供程度ならまだいいが、共同浴場のような目立つ施設の設置はさすがにまずいのかもしれない。

そこまで考えて、一良は一つの重大な問題に気付いた。

「あれ？　ということは、水車の設置もまづかったんじゃないですか？」

そう、水車である。

あれはこの世界には存在しない道具なのかもしれないのだ。

もしそうならば、その存在が露呈した瞬間、どうということだと村長が問い詰められることは必至である。

それに、例えば水車がこの世界に既に存在している道具としても、調達先を聞かれることは確実だろう。

「そうですね。しかし、あの水車がなければ村の畑は全滅していたでしょうし、本当にカズラさんには感謝しております」

「いや、しかしですね、もしナルソン様に水車のことがばれたら……」

「それでしたら、多分大丈夫でしょう。この間アイザックさんが村の様子を見に来た時も、水路については特に深くは追求してきませんでしたからな」

「そうですね……つつむ」

この間、村の様子を見に来たアイザックという人物は、この村と

川の関係にあまり詳しくなかったのだろう。

村長の話では、この間の視察は何とかやり過ごすことができたようだが、その報告を聞いたナルソンがもし疑問に思ったりすれば、水車の存在が露呈してしまうかもしれない。

それに、どちらにせよ、遅かれ早かれ水車の存在はばれてしまうだろうと一良は思った。

水車の存在がばれて、それを持ってきたのが一良だと露呈した場合、最悪一良はナルソンによって身柄を拘束される可能性がある。

折角この村にも馴染み始め、異世界ライフを楽しんでいるところでそんな大層な邪魔が入っては、当初予定していた異世界探索どころの話ではない。

この村の人たちのように、ナルソンも一良のやってきた国について何も聞いてこないならば問題ないだろうが、そう上手くはいかないだろう。

「バリンさん、提案なんですか……」

一良はこの目先の問題を解決し、今後もこの村で生活を送るために、一つの案をバリンに提示するのだった。

「……どうですかね？」

「確かにバレッタは頭のいい娘ですが……そこまでしていただいて、本当によろしいのですか？」

一良の提案を聞き、村長が喜び半分、驚き半分といった表情をしていると、身体を洗い終わったバレッタが戻ってきた。

湯で濡れた髪が首筋に垂れ下がっており、妙に色っぽい。

「はー、さっぱりした。この石鹸、本当にいい香りがしますね……どうかしました？」

何やら真剣な表情で話をしている一良と村長を見て、バレッタは小首を傾げる。

「バレッタ、随分前の話になるが、お前は町に出て色々学びたいと言っていたことがあったな」

「うん、そんな事言ったこともあったけど、今は村を出るつもりはないよ？」

そう言いながら定位置に座るバレッタに、村長は微笑む。

「その事なんだが、どうやら村を出ずとも色々学ぶことが出来そうだな。カズラさんがお前に勉学を教えてくださいださるらしい」

「えっ!？」

驚いた様子で一良を見るバレッタに、一良は提案の趣旨を話そうと口を開く。

「ええ、バレッタさんさえよければですが。それでですね……」

「ほ、本当ですか！？　ありがとうございます、是非お願いしたいです！」

一良の言葉を遮ってそう願い出るバレッタは、余程嬉しい提案だったのか、喜びに瞳を輝かせている。

バレッタの勢いに若干気圧されながらも、一良は遮られた続きを口にした。

「は、はい、わかりました。そこで一つ相談なんです、この間組み立てた水車を、バレッタさんが考案して作った物つてことにして頂きたいんです」

「……え？」

一良の発言にバレッタは固まっている様子だったが、とりあえず話を続けることにした。

「この間村の様子を見に来たアイザックさんですが、バリンさんの話からするとあまり村と川の関係に詳しくなかったように思えます。今後、もしナルソン様がアイザックさんの報告に疑問を感じた場合、水路を辿って水車を見られるかもしれません。その時に、水車の出所が私だとばれると、その……色々としても都合が悪いわけ……」

どう説明したものかと歯切れの悪い言い方をしている一良に、バレッタは

「あ、はい……そうですね……」

と頷いた。

今までの経緯から、一良がやってきた国についてはなあなあになつており、村人達は深く立ち入ろうとはしない。

バレッタと村長も例外ではなく、むしろ深く立ち入らないように村人達に指示している側である。

何故そうしているのかというとちゃんとした理由もあるわけなのだが、今の一良はその理由など知る由も無い。

「というわけで、その代わりといつてはなんです、水車の作り方の他にも私が教えられる範囲でなら何でも教えますので、協力してもらえませんか？」

「は、はい、私なんかでよければいくらでも……でも、大丈夫でしょうか……」

そう言つて不安そうな表情をするバレッタに、一良も「大丈夫」とは即答できず、うつむと唸る。

大分無理のある提案をしていることは承知の上だが、今のところこれ以外の対策が思いつかない以上、とりあえずやってみるしかない。

それに、水車の存在が即刻露呈するというわけでもないのです、時間的な余裕はまだあるはずだ。

「あの、カズラさん、今思いついたのですが……」

一良が「あ、でも工作精度とか突っ込まれたらどうしよう……」
などとぶつぶつ言って頭を抱えていると、その様子を見ていたバレ
ッタが何やら閃いた様子で話し掛けてきた。

「何です？」

「いつそのこと、今置いてある水車の代わりに、村のみんなで新し
く水車を作って設置してしまえばいいんじゃないですか？ 見本に
なる水車もありますし、作りを簡単にしたものだったら出来る気が
するんですけど」

「作りを簡単にですか……」

バレッタの台詞に、一良はうつむと考え込む。

確かに見本になる水車があるとはいえ、いきなり水車作りに挑戦
して作り上げることが出来るだろうか。

とはいえ、既に置いてある水車を見られた場合は、工作精度やら
軸に使われている金属やら突っ込まれ所が満載なので、バレッタの
案に乗っかるのがベストと思われた。

「そうですね……確かにあの水車を見られると色々とまずい気がし
ますし、何とか1ヶ月で水車を作ってみましょうか。とりあえず回
って、少しでも水を汲み上げればよしとするってことで」

「はい、それに実際に一度作ったことがあれば、アイザックさんや
ナルソン様に何か質問されても答えることができますし」

その様子に、村長はうんうんと頷くと、

「そうですね、バレッタや村人達も勉強になります。何とか皆で協

力して頑張りました」

と言い、一先ず話を纏めるのだった。

次の日の朝、一良はバレッタにも手伝ってもらいながら、最初に持ってきたリアカーに折りたたみ式リアカーを積んでいた。

もう一度日本に戻り、肥料を取ってくる為である。

「それでは、肥料を取りに行ってきます。勉強は夜にやるということでもいいですかね？」

「はい、ありがとうございます。でも、肥料を撒くので疲れていたらまた後日でもいいですよ？」

言葉ではそう言っで一良を気遣うバレッタだったが、勉学を学べることが余程嬉しいのか、その表情は期待に満ちている。

昨日の話では村の皆で水車を作るということにはなっていたのだが、畑に肥料を撒く作業がまだ残っていたため、まずはそちらを終わらせてから水車を作ることになっている。

葉物野菜の種まきもあるので、こちらの作業を優先しなければいけないのだ。

夜は肥料撒きや水車製作といった作業は行わないので、バレッタには夜に勉強を教えることとなったのだった。

「わかりました。では、行ってきますね」

「はい、お気をつけて」

こうして手を振るバレッタに見送られながら、一良は屋敷を後にするのだった。

「こ、腰が痛え……今度指圧マッサージにでも行ってくるかな……」

周囲で村人達が一心に肥料を撒く中、一良は腰を抑えて背伸びをした。

バレッタに見送られて日本に戻った後、再びホームセンターまで行って入荷されたばかりの肥料の大半を買い付け、それを村に運んで今に至るのだが、千数百キロの肥料などの荷物を一人でリアカーに載せては運ぶという作業はさすがに堪えた。

全てを村に運ぶのに結構な時間がかかり、村人に混じって肥料を撒き始めてから1時間程しか経っていないのだが、早くも空は夕焼け色に染まり始めている。

ちなみに、今日の昼食はすき屋の牛丼（大盛り卵付き）でさっさと済ませた。

「カズラさん、後は私たちでやっておきますから、先に屋敷に戻って休んでいてください」

一良が腰を抑えて呻いていると、それを見たバレッタが心配そうに声を掛けてきた。

他の村人同様、バレッタにも少し疲労の色が見えるが、まだまだ元気そうである。

「いやいや、私一人が先に帰るといふのは……」

「でも、無理はよくないですよ。疲れた時はちゃんと休まないと」

「バレッタ、カズラさんと一緒に屋敷に戻って、腰を揉んでさしあげなさい」

遠慮している一良に、二人のやり取りを見ていた村長が口を挟む。

「あ、いや、そこまでしてもらわなくても平気ですよ。一人で戻って寝転がってますから」

慌ててそう言う一良だったが、

「そうですね、一緒に戻りましょう」

と言って一良の手を引くバレッタに、強制的に屋敷まで連行されるのだった。

「それでは行ってきますね。すぐ戻りますから」

「はい、ゆっくりでいいですよ」

バレッタはそう言うのと、囲炉裏で暖めたお湯の入った水桶と石鹸を持ち、庭へと出て行った。

二人は屋敷に戻ってとりあえず一息ついたのだが、やはりどうにも身体に付いた肥料の臭いが気になるので、身体を洗うことにしたのだ。

先に一良が身体を洗わせてもらい、次はバレッタの番である。

「しかし、いくら屋敷の庭には木の堀があるとはいえ、年頃の女の

子が庭で身体を洗うつてのはちょっとまずいよな……冬になったら寒くて風邪引きそうだし、今度屋敷に併設した簡単な個室でも作らせてもらうか」

この世界ではそれくらい普通なのかもしれないが、一良としてはやはり気になる。

そんなことを考えながら一良はボストンバッグを開くと、中から大学ノートと筆箱、それと本屋で適当に買い込んだ数冊の本を取り出した。

「さて、勉強を教えるとは言ったけど、何を教えればいいんだろうか。適当に本持ってきたけど、役に立つかな……」

そうして、持ってきた本をペラペラとめくり

「あれ、『人気が出るカフェのはじめ方』なんて本入れたっけかな……間違えてカゴに突っ込んだのかな」

などと呟きながらも「ふむふむ」と暫く本を読んでいると、身体を綺麗に洗ったバレッタが戻ってきた。

「お待ちせしました……あ、それってもしかして、本ですか？」

「ええ、バレッタさんに勉強を教えるのに役立つかなと思って数冊持ってきたんです。これは間違って持ってきてしまったやつですけどね」

バレッタは本を開いている一良の横に座ると、興味津々といった様子で横から本を覗き込む。

一良も一緒に本を見ながら、石鹸のいい香りがするバレッタに内

心ドキドキしていたが、ふとバレッタを見ると、バレッタは本を見たまま目を見開いて固まっていた。

「カ、カズラさん……この本に載っているのは……絵……ですか？」

「え？ あ、そうか、しまった」

バレッタにそう言われて改めて本を見た一良は、そこに載っている「人を引き付ける空間デザイン」と書かれたページを見て頭を掻いた。

文字だけならいいのだが、でかでかとカフェの写真が載っているのである。

この世界に写真なんてものが存在するはずもなく、バレッタがこの本をみて驚くのも無理は無い。

しかし、見られてしまったものは仕方がないと、バレッタにも判るように簡単に説明だけしておくことにした。

「あー、えつとですね。これは写真といって、その場の風景を実際と寸分違わぬ状態で紙に描いたものです……わかりますかね？」

「えつと……例えばこの家の中の風景も、ここに載っているもののように描けるってことですか？」

「そうそう。理解が早いですね」

バレッタはなおも真剣な様子で本に載っている写真を見ていたが、ふと何かに気付いたようで、

「あの、ちょっと触ってもいいですか？」

と言つて一良に了承をもらつと、本を受け取つた。

「すごい……こんなに薄い皮紙なんて見たことはありません。何の皮なんですか？」

「あ、それは皮紙じゃないですよ。原材料は木です」

「……え？」

一良がそう教えると、本のページを触りながら感心していたバレッタは再び固まつた。

「えーと……まあ、木を色々加工するところという紙ができるんです。どうやって加工するのは私もよく知らないんですけどね」

「これが木なんですか……」

むむ、と唸つて紙を触っているバレッタに、一良は「（今度ネットで紙の作り方も見ておくか）」と内心一人ごちると、本題を切り出すことにした。

「それはそうと、勉強を教えると約束はしましたが、何を教えられるといいんですかね？」

一良の問いかけに、バレッタは本を開いたまま「んー」と唸る。

「王都に住んでいる人たちは、法律や歴史や神学を勉強するって聞いたことがありますけど」

「……」

バレッタの台詞に、今度は一良が固まった。

一良は現代日本での義務教育を元に、バレッタに教える勉強をどうするか考えていたのだが、よくよく考えてみればこの世界の勉強と現代日本の勉強が同じはずが無い。

歴史や法律などと言われても、この世界に来てわずか2週間程度しか経っていない一良には、何一つ教えることが出来ないのである。

「……すいません、その中の何一つ教えられません。私の国の勉強と、アルカディアの勉強の内容は随分違うみたいです」

「えっ」

一良の言葉に、バレッタは少しの間黙って考えていたが、すぐに口を開いた。

「カズラさんの知っていることでしたら、何でも教えていただきたいです。王都の人たちが学んでいることが勉強の全てでは無いと思いますから」

「しかし、何を教えればいいやら……」

うつむ、と考え込む一良にバレッタも一緒になって考えていたが、いい考えが思いついたらしく、「そうだ」と顔を上げた。

「では、カズラさんの国の文字の読み書きを教えていただきたいです。そうすれば、この本も読めますし」

そう言うバレッタに、一良も「なるほど」と顔を上げた。

「文字ですか。まあ、言葉は通じるから文法は同じだし、覚えるのは比較的簡単かな……わかりました、いいですよ。その代わりですが……」

「その代わり？」

首を傾げるバレッタに、これはいい機会だと兼ねてからの懸念事項を一つ解決することにした。

「私にもこの国の文字を教えていただきたいです。恐らく、この国の文字は全く読み書きできないと思うので……」

一良がそう言うと、バレッタは驚いた表情をしていたが、すぐに「いいですよ」と微笑んだ。

「それでは、早速始めますかね？」

「あつ、その前に腰を揉みますよ。痛いんでしょう？　そこに横になってください」

こうして、一良はバレッタに、バレッタは一良に、それぞれ読み書きを教わることになったのだった。

15話：私をイステリアへ連れてって

水車を作ることが決まってから2日後の朝。

一良とバレッタは川べりに設置してある水車の脇に並んで腰を下ろしたまま、それぞれ手にシャーペンを持ち、大学ノートとにらめっこをしていた。

まだ村では肥料を撒く作業は終わっていないのだが、村長や他の村人の勧めで一足先にバレッタと水車の製作準備に取り掛かることとなったのだ。

一良の持つノートには、何度も消しゴムで消しては書き直す作業を繰り返された水車のイラストが描いてあり、描かれた水車の形状は目の前にある実物の水車のそれとは若干異なっている。

イラストは水車を真上から見た形状のものが一つと、真横から見た形状のものが一つ、寸法をあちこちに記入された状態で並んでいて、いかにも図面といった雰囲気である。

それとは別に、半透明にした水車を斜め手前から見たようなイラストも描かれており、こちらは寸法などは一切記入されておらず、その形状の特徴だけがわかりやすく描かれている。

父親が町工場で金属引物業を仕事にしているということもあり、何度か手伝いで簡単な図面を描かされたことがあったのだが、その経験が役に立った。

今し方それらが描きあがり、今はその見直しをしているところである。

バレッタの持つ大学ノートには五十音順にひらがなが縦に書かれており、ひらがなの隣にはこの世界の文字でそれぞれ対応するものが書かれてる。

バレッタは大学ノートを見つつ、一緒に持ってきた「人気が出る

カフェのはじめ方」というタイトルの本の文章を解読しながら日本語の勉強をしているのだが、聞き覚えの無い単語がかなり記載されているので、その都度一良に質問しながら読んでいる。

小学生用の理科や算数などの参考書も日本から持ってきてはいるのだが、今回は日本語の勉強ということで、綺麗な写真の所為かバレッタが最も興味を示していたその本を持ってきたのだ。

数ページだけではあるが、漢字やカタカナの隣には予め一良がふりがなをふっておいたので、ノートと見比べれば全て読むことができるのである。

「カズラさん、このハーブティーっていう飲み物って、どんな味かするんですか？」

一良が描き終わった図面の見直しをしていると、バレッタが「こだわりのハーブティー」と書かれたページを開いて質問してきた。そのページには鮮やかな赤色をしたハイビスカスブレンドのハーブティーの写真が載っている。

「その写真のものにはハイビスカスっていう花が入っていて、かなり酸味の強い味がしますね。他にもハーブの種類は沢山あって、それぞれ味も香りも異なりますよ……」口で説明しても分かり難いかな。今度国から持ってきますから、一緒に飲みましょうか」

「えっ、ホントですか！？　ありがとうございます！」

一良の提案に、バレッタは嬉しそうに顔を綻ばせた。

一良がこの世界に来てからまだ半月程しか経っていないが、村の人たち、特にバレッタとは大分打ち解けることができた気がする。

初めて会った頃はかなり遠慮がちに一良と接していたのだが、最近ではそれもなくってきている。

ちなみに、この間村長に聞いた話では、バレッタは今年で16歳になるらしい。

「それはそうと、今度作る水車に釘を使いたいんですけど、村にありますかね？」

「確か父が持っていましたけど、そんなに数は無かったと思います。幾つくらい使えますか？」

「えっと、100本以上は使えない……」

本当ならば釘を使わずに作ればいいのだろうが、やはり釘が使えたほうが楽だし確実に固定ができる。

日本から持ってきてしまえば楽なのだが、日本には鉄製の釘しか売っていないだろう。

釘を深く打ち込んでしまえばねえかもしれないが、万が一そこまで細かく見られてしまったら事なので、できればこの世界の青銅製の釘が使いたいのだ。

「100本は無かったと思いますね……街に行けば手に入りますから、今から村の人に声を掛けて街に行く準備をしてきますね」

「近くに街があるんですか？」

街という単語に、一良は敏感に反応した。

こちらの世界に来てからはこのグリセア村しか人里は見たことが無かったので、近くに街があるなら見てみたい。

街というからにはそれなりに人も多いだろうし、ここよりもずっと栄えていることだろう。

「ええ、歩いて2日程のところに、ナルソン様が直接治めているイステリアという街があります。商店も沢山あるので、釘も売っていますよ」

「なるほど……その街はかなり大きな街なんですか？」

「そうですね、ナルソン様の統治している地域では一番大きな町です。大きな建物も沢山ありますし、この村なんて比べ物になりませんよ」

バレッタの説明に、一良の好奇心は激しく刺激された。

元々、こちらの世界を色々見て回りたいと思っていたので、大きな街があるなどと知っては見てみたくて仕方がなくなる。

「……私もイステリアに行ってみたいんですけど、ダメですかね？」

「えっ」

戸惑った表情を見せるバレッタに、一良は慌てて言葉を繋げる。

「もちろんこの服装では行きませんよ。といっても、服を誰かから借りなければいけませんけど……」

「あ、はい……では、服のことは父に相談してみますね」

街についていきたいという予想していなかった申し出にバレッタは内心困ったが、一良の頼みとあつては無碍にもできない。

それに、今一良が着ている服のままでさすがに了承しかねるが、服を着替えてくれるというのであれば普通の村人と大差ないので、多分大丈夫だろうと思った。

「すみません、お願いします」

その返答を聞いて嬉しそうに頭を下げる一良に、バレッタはやはり一度父親に相談してみようと思うのだった。

「カズラさんもイステリアに？」

「うん、服も着替えて行くって言ってたから、連れて行くって言うちやっただけど……」

その日の昼食後、バレッタは居間で村長に川でのやりとりの内容を相談していた。

ちなみに、一良は「部品図を描く」と言って自分の部屋に籠っている。

「まあ、服を着替えていってくださるのなら、街で目を付けられることもないだろうし平気なんじゃないか？ 後は一良さんが街で目立つような行動をしないように、お前たちが気をつけていればいいだろう」

「うん……でも、大丈夫かな……」

なおも不安そうに俯いているバレッタに、村長は苦笑した。

「何をそんなに心配しとるんだ。カズラさんはあのグレイシオール様なんだぞ？ そんな下手を仕出かすわけがないだろう。それに、ついていってくださるなら道中に獣に襲われる心配もないし、逆に

ありがたいじゃないか」

村長の言葉にバレッタは

「うん、そうだよね」

と顔を上げた。

「じゃあ、私は村の人たちに街まで行くことを伝えてくるね。その後はアルカディアン虫を捕ってくるから」

「うむ。では私は薪を用意しておこう」

こうして、一良の与り知らない所で無事に話が纏まり、イステリアまでの小旅行が決定したのだった。

「ほう、イステリアにですか。随分久しぶりですね」

屋敷を出たバレッタは、村の家々を回ってイステリアに行く人員を集めていた。

歩いて片道2日の旅となるので、道中の安全の為に集団で行動をする為である。

また、荷物の分担を決めることで、街で売る品物を出来るだけ多く持つていくという目的もある。

「はい。なので、よかつたらロズルーさんも一緒に行きませんか？カズラさんも一緒に行きますよ」

ロズルーはそれを聞くと、「おお」と声を漏らした。

「カズラ様が一緒に行ってくださいるなら何かあっても安心ですね。わかりました、丁度薪も余っているところですし、私も一緒に行きましょう」

「よかった。出発は明後日の早朝ということでお願いしますね」

バレッタはこの後も数人の村人に声を掛けて約束を取り付けると、街で売るアルカディアン虫を捕るために森へと向かうのだった。

部屋の柵状の窓から見える景色が夕焼け色に染まり始めた頃、一良はようやく部品図を描き終えて背伸びをした。

大学ノートに描かれているのは随分と大雑把な部品図ではあるが、各部品の形状も単純であり、寸法を入れるポイントも少ないので問題は無い。

それに、それほど部品に精度は要求しないので、公差（ズレてもいい寸法の許容範囲）ももちろん入れていない。

一良が部品図を見直していると、部屋の戸がノックされた。

「どうぞー」

ノックされた戸に一良が声を掛けると、手に服を一式持ったバレッタが部屋に入ってきた。

「カズラさん、イステリアの件ですけど、明後日の早朝に出発することになりました。これ父の服ですけど使ってください」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

一良はバレッタから村長の服を受け取ると、子供のように「やった！」と喜んだ。

何しろ、異世界に来てから初めての旅行であるし、初めて大きな街へ行けるのだ。

この間、村にアイザックが来た時にはその姿を見ることが出来なかったが、街に行けば色々な職種の間人を見ることが出来るだろう。もしかしたら剣や槍などの武器を持った衛兵のような者を見ることが出来るかもしれないし、建物も大きなものが沢山あるとのことなので、一良は今から心が躍るのだった。

「それで、カズラさんが村を留守にしている間に、村に残っている人たちにしてもらおう水車の製作作業の指示をしないといけないんですけど」

「あ、そっか、わかりました。明日、私から村の人たちにお話をさせてもらいますね」

「お願いします。では、そろそろ夕食が出来るので居間へ行きましょうか？」

この後、夕食の席でハイテンションにイステリアの事をあれこれと質問する一良に、村長とバレッタは「そんなに楽しみなのか」と若干驚きつつも、丁寧に一つ一つ一良の質問に答えたのだった。

16話：いざ往かんイステリア

イステリアへの同行を申し出た2日後の早朝。

携帯用のオイルランタンが室内を明るく照らす中、一良は旅先で必要になるであろう荷物を詰めたズタ袋の中身を見直していた。

ズタ袋は昨日バレッタから借りたもので、植物の繊維で編まれたしつかりしたものである。

ズタ袋に入れてある荷物は、食料やりポド、それに包帯や消毒液などの救急セットなどで、今部屋を照らしているオイルランタンと一緒に、昨日日本のアウトドアショップで買ってきたものだ。

部屋の窓から見える空は薄暗く、太陽は未だ山の向こうに隠れている。

いつもならまだ寝ている時間なのだが、先ほどバレッタに起こされてもうすぐ出発する旨を伝えられたため、こうして荷物の最終チェックをしているのだ。

服装も既に一昨日借りた村長のものに替えており、傍から見てもこの村の住人とは殆ど変わらないだろう。

一良は持つて行く全ての荷物のチェックを終えたと、ズタ袋を背負って部屋を出るのだった。

「お待たせしました。遅くなつてすいません」

一良が居間へ行くと、既に仕度を整えたバレッタが火を焚いた囲炉裏の前に座って本を読みながら待っていた。

バレッタはいつもの服装の上から毛皮のマントを羽織り、いかに

も旅人といった格好である。

「いえ、まだ他の人たちも来てませんから平気ですよ」

バレッタは読んでいた本を自分の袋に仕舞って立ち上がると、傍らに置いてあったマントを一良に差し出した。

「父のものですけど、カズラさんもこのマントを使ってください。夏とはいつても、夜は冷えますから」

「おー、マントなんて着けるのは初めてです。何か格好いいですね」

一良はマントを受け取ると、バレッタにマントの付け方を教えてもらいながら早速身に着けた。

マントは毛皮の裏地に布を貼り付けたもので、なかなか温かい。外で寝る時でもこのマントに包まっていれば、風邪を引くこともなさそうだ。

「これは温かいですねえ……ん？ バレッタさん、その腰に着けている物は何ですか？」

一良がふとバレッタに目を向けると、マントの隙間から平べったい板状のものが水平に背中側の腰に縛り付けてあるのが見えた。

「あ、これですか。短剣ですよ」

バレッタはそう言ってマントを払うと、手馴れた様子で腰に着けていた鞘から青銅の短剣を抜き出し、目の前にかざして見せた。

抜き出された短剣は刃渡りが40cm程はあり、剣幅も6cmはあるように見え、よく研がれた刃は囲炉裏の光を鈍く反射しており、

なかなかの迫力である。

バレッタのような線の細い女の子が持つと、一良にはかなり違和感が感じられた。

「……えっと、バレッタさんって剣が扱えるんですか？」

「はい、父から教わっていますから、剣以外に槍も使えますよ。でも、どちらもあんまり得意じゃないですけどね……練習の時は父に叱られてばかりです」

バレッタは苦笑しながら、流れるような動作で右手に持った短剣を逆手に持ち直し、鞘に戻した。

どんなコメントをしたものかと一良が困っていると、バレッタはマントを羽織りなおして自分の荷物が入った袋を床から取り上げ、

「では、もう皆が集まってくる頃ですから、外に出て待っていますよるか」

と言うと、屋敷の入り口へ向かうのだった。

「あの、本当に私が持ちますから……」

「いやいや、これくらいやらせてください。無理言って街までついて行かせてもらうんですから」

でもでもと困っているバレッタに苦笑しながら一良は薪が縛り付けられている木製の背負子しやうこを背負いなおすと、バレッタと共に屋敷を出た。

一良が背負っている薪は街で売るためにとバレッタが予め用意して土間に置いてあった薪なのだが、さすがに女の子に重たい薪を背負わせて自分は荷物袋担当というのは気が引けたので、薪を背負わせてもらうことにしたのだ。

背負っている薪は乾燥しているにも関わらずずっしりと重く、なかなか質が良さそうだ。

二人が屋敷の外へ出ると、三名の男の村人が屋敷の前で雑談しながらバレッタと一良を待っていた。

どの村人もマントを羽織っており、その内2名の足元に一良と同じくらいの量の薪が縛り付けられている背負子が置いてある。

もう一人は荷物担当なのか、三人分の荷物が入っていると思われる大きなズタ袋を足元に置いていた。

三人は一良とバレッタが屋敷から出てきたのに気付くと会釈をした。

「カズラ様、バレッタさん、おはようございます」

「おはようございます。ロズルーさんたちはまだ来ていませんか？」

「まだですね。もうすぐ来ると思いますけど」

「わかりました。では、武器を持ってくるのでちょっと待っていてくださいね」

そう言うのと、バレッタは持っていたズタ袋を地面に置いて再び屋敷の中に戻っていった。

「いやはや、カズラ様も街へ同行していただけたとはありがたい限りです。ロズルーさんなどはいいい機会だから奥さんと娘のミユラち

「やんも連れて行くって喜んでましたよ」

「いえいえ、足手まといになると思いますけどよろしく願いします……てか、ミュラちゃんってロズルーさんのお子さんだったんですか」

「あ、知らなかったんですか。まあ、ミュラちゃんがロズルーさんに似ているのは齒並びくらいで、他は全部奥さんのターナさんそっくりですから、気付かなくても仕方ないですね」

そうして少しの間一良が村人たちとロズルー一家のことで雑談をしていると、当の本人であるロズルーが妻のターナと娘のミュラを伴ってやってきた。

ロズルーも例に漏れずマントを身に着け、薪を縛り付けた背負子を背負っており、三人の荷物を入れたズタ袋は妻のターナが肩に背負っている。

「カズラ様、おはようございます。遅くなって申し訳ありません。ほら、ミュラも挨拶しなさい」

「おはようございます。遅くなってごめんなさい」

ロズルーに促され、ミュラもぺこりと頭を下げて一良に挨拶をする。

ミュラは栗毛色の髪を背中まで伸ばした女の子で、先ほどの雑談で村人から聞いた話では歳は6歳らしい。

水路を作っていたときや畑に肥料を撒いていたときも、村娘に混じって食事や水を運ぶ手伝いを率先して行っていた頑張り屋である。ミュラも他の大人同様、身の丈に合ったサイズのマントを身に着けており、一良を見上げる姿がとても可愛い。

「おはようございます。私も出てきたばかりですから平気ですよ…
…なるほど、確かに奥さんそっくりだ」

ミユラとターナを見比べて、一良はしみじみ呟いた。

真っ直ぐに伸びた栗毛色の髪の毛を初めとして、ぱっちりとした
目や通った鼻筋など、いい部分をしっかりと受け継いでいる。

髪型も同じにしている所為か、まさにそっくりである。

「ですよねえ。ミユラちゃん、お父さんじゃなくて美人のお母さん
に似てよかったなあ」

「うん！」

村人の言葉に元気に返事をするミユラに、どつと笑いが起こる。

「またその話が……ミユラもそんなに嬉しそうに返事するんじゃない。
い。悲しくなってくるだろうが。お前も笑ってないで何とか言っ
てくれ」

「ふふっ、ミユラ、お父さんに綺麗な歯をありがとうって」

「うん、お父さん、綺麗な歯をありがとう！」

「おいおい……」

皆で大笑いしながらそんな微笑ましい会話をしていると、バレッ
タが先端を布に包まれた槍を四本と、一張の短弓と皮製の矢筒を持
って屋敷から戻ってきた。

槍の長さは大体140cm程で、短槍のようである。

「皆さんお待ちせしました。ロズルーさん、おはようございます」

「おはようございます。今日は娘も同行させてもらいますが、よろしく願います」

ロズルーはそう言つて頭を下げるとバレッタから短槍と短弓と矢筒を受け取り、それを両方ともターナに手渡した。

それらを受け取ったターナは短槍の先端に付いている布を外して刃の部分を確認すると、再び布を巻いて縦に持ち直す。

もう一人の荷物持ちの村人も短槍を二本受け取ると、ターナと同様に刃を確認して元に戻した。

「では、出発しましょうか。今から歩けば明日の日暮れ前にはイステリアに着きますね」

「そうですね、行きましょう」

バレッタの言葉に、それぞれ地面に置いてある荷物を背負うと、村を出るべく歩き出すのだった。

村を出た一行は、まだ薄暗い空の下、イステリアへと続く土がむき出しになって乾燥した道をてくてくと歩く。

道の幅は3メートル程度あり、その脇には一定間隔ごとに木が植えられていて、道を逸れて迷わないような工夫がされていた。

ミュラがいるので歩く速度はそこまで早くはなく、雑談をしながらの行軍である。

ミュラの歩幅では若干早足になってしまうのは仕方がないが、疲

れたらその都度小休止を入れることになるだろうし、その時にリポDを少しだけ飲ませれば体力もすぐに回復するだろう。

「あの、バレッタさん、ちょっと聞きたいんですけど」

「はい、何ですか？」

一良は一行の先頭をバレッタと並んで歩きながらハーブティーについて雑談をしていたのだが、ふと話が途切れたタイミングを見計らって、気になっていたことを聞いてみることにした。

「先ほど皆さんに槍を渡していましたけど、そんなに道中には危険が多いんですか？」

「そこまで危険なわけではないんですが、イステリアなどの街へ行く時は一応念には念を入れて複数人で武装するようにしているんです。獣が出ることもありますし、この辺ではあまり聞きませんが、追い剥ぎや夜盗が出たら丸腰では抵抗もできませんから」

「追い剥ぎに夜盗ですか……恐ろしい話だ」

世界的に見ても治安のいい日本で育った一良としては、追い剥ぎといわれてもあまりピンとこないが、先ほど見たような槍を持った人間に襲われることを想像すると寒気がする。

これは日本から日本刀でも買ってきて携帯していたほうがいいのだろうかと考えていると、難しい顔をしている一良を見てバレッタは微笑んだ。

「大丈夫ですよ。この辺はナルソン様の私兵が時々巡回しているのでそういう人たちが出ることあまり無いですし、今この中でも私

とミユラちゃん以外は全員実戦経験がありますから、万が一襲われても数人相手だったら撃退できます」

「実戦って、4年前まであった戦争ですか？」

「ええ、皆さんその中を何年も生き抜いた方々ですから、槍の扱いもかなりのものですし、いざと言う時はとても頼りになりますよ。ロズルーさんは秋になると山に入って狩りもしますから、弓の扱いも一級品です」

バレッタの言葉に、一良は少し振り返って後ろを歩いている5人を見た。

見たところ、特に強そうといった雰囲気は感じられないのだが、よく見ると身体はがっちりとしていて逞しく、時折周囲に視線を走らせてはちゃんと周囲を警戒している。

戦争での実戦経験者が5人も一緒にいる上、ナルソンの私兵が巡回を行っているというのであれば、それほど道中の危険は危惧しなくてもよさそうだ。

「なるほど、こりゃ確かに頼り甲斐がありそうですね」

あからさまにほっとしている一良にバレッタはくすつと笑う。

「でも、もし獣が出たらその時はカズラさん、よろしく願いしますね？」

「えっ、獣ですか？ …… ウリ坊くらいだったら何とかなるかなあ」

バレッタの言葉を冗談と受け取った一良がそんな事を言うと、バレッタは尊敬するように瞳を輝かせた。

「わ、本当ですか？ では、もしウリボウが出たらお願いしますね！」

「ええ、ウリ坊程度でしたら棒の一本もあれば私でも楽勝ですよ」

バレッタの反応に、一良は

「（ウリ坊って単語が通用するってことはイノシシもいるのかな？）」

と見当違いの解釈をしつつ、若干明るくなり始めた異世界の景色を楽しみながらイステリアへの道を歩くのだった。

17話：休憩小屋と闇夜の狩人

「ミュラ、そろそろ休憩するか？」

「ううん、まだ大丈夫だよ……」

村を出発してから1時間が経過し、空が若干明るくなってきた頃、背後から聞こえてきた声に一良が振り返ると、ロズルーが彼とターナの間を歩いているミュラに声を掛けていた。

出発した当初は時折話しながら元気に歩いていたミュラだったが、時間が経つにつれて口数も減り、今は額に汗して黙々と早足で歩いている。

口では大丈夫と言っではいるが、その表情には大分疲れが見て取れた。

「皆さん、ここで少し休憩にしましょうか」

一良がバレッタに休憩の提案をしようかと口を開きかけた時、同じくミュラの様子に気付いて振り返っていたバレッタが歩みを止めて皆に声を掛けた。

「すみません、そうしてもらえると助かります」

「おねえちゃん、ごめんなさい……」

小さく肩で息をしながら、しゅんとした様子で謝るミュラに、バレッタはしゃがみ込んで視線を合わせると、

「いいのよ、疲れた時はちゃんと休まないかね」

と言って微笑む。

「そうそう、俺も足が痛くてへ口へ口だよ。ミユラちゃんの方がよっぽど体力ありそうだなあ」

一良は背負った背負子を街道沿いに生えている木の根元に降ろして背伸びをすると、なおも凹んでいるミユラに笑いかけた。

他の村人たちも、木陰に集まって背負っていた荷物を降ろし始めている。

「はっはっは、カズラ様はもう少し身体を鍛えたほうがいいですね」

「うっ、努力します……バレッタさん、私の袋を貸してもらえますか？」

村人とのやり取りを見てくすくすと笑っているミユラに一良はもう一度微笑み掛けると、バレッタからズタ袋を受け取り、中からリポDを一本取り出した。

「ミユラちゃん、お薬あげるからこっちにおいで」

「うん」

一良の呼びかけに応じてとてとてと走ってきたミユラに、蓋を開けたりリポDを渡す。

リポDのラベルに記載してある用法用量の欄には、15歳未満は服用するなど書いてあるが、6歳の子供でもほんの一口二口ならば平気だろう。

「一口だけ飲んでね。沢山飲んじゃダメだよ」

「うん、わかりました」

ミユラは素直に頷くとリポDを一口だけ飲み、まだ中身の残っているリポDを

「カズラ様、ありがとうございます」

とちゃんとお礼を言って一良に返した。

一良はミユラの頭を撫でながら

「どういたしまして」

と言って微笑むと、リポDを袋に仕舞って代わりにサクマドロップの缶（蛍の墓のイラストじゃないやつ）を取り出した。

「相変わらずこの蓋は硬いなあ……よし、開いた。ミユラちゃん、手を出してごらん」

やたらと硬く閉まっている蓋を開け、ドロップの缶を不思議そうに見ているミユラに手を出してもらい、その上で缶を一回振る。

すると、ガラン、という独特の音と共に、中からオレンジ色のドロップがミユラの手の平に転がり落ちた。

「お、オレンジか。ハツカじゃなくてよかった。ミユラちゃん、口に入れてごらん。硬いから噛まないようにね」

「うん」

一良に言われるがまま、ミュラはオレンジ色のドロップを口に入れる。

ドロップを口に入れたミュラは、今まで体感したことのない新感覚のオレンジの味に一瞬目を見開くと、喜びを表現しているのか凄い笑顔でその場でぴよんぴよんとジャンプした。

「美味しいかい？」

「うん！ これ凄く美味しいね！」

「そつかそつか、じゃあこれはミュラちゃんにあげよう。他の人も分けてあげてね」

「うん！」

ミュラは一良からドロップ缶を受け取ると、座って休んでいる村人に駆け寄ってドロップを配り始めた。

ドロップを貰った村人たちは、それぞれ

「こりゃ甘くて美味しいなあ」

「そうか？ 俺のは随分とスースーするけど」

とドロップの味を楽しんでいる。

その光景を見ながら一良はその場に腰を下ろし、改めて自分たちが歩いてきた道を眺めてみた。

一良たちが歩いてきた道は延々と真っ直ぐ村に向かって伸びており、道沿いには道標として植えられた木しか生えていない。

道から外れた所には所々に大きな岩が鎮座していたり細い木が生

えていたりするが、それ以外には何も無く、遠くに山が見えるばかりで、一帯は乾燥した荒野である。

これから進む道を見てみても、まるっきり同じ景色が広がっていた。

「カズラさん、お水をどうぞ」

これから歩く距離のことを考えて、一良が自分の足裏にマメが来ないかと心配していると、バレッタが皮袋に入った水を持ってきた。

皮袋には木のコルクのようなもので栓がしてあり、皮袋自体も結構な大きさである。

「ありがとうございます。あの、今日は日が暮れるまで歩くんですか？」

「いえ、日が落ちる前には野営の準備をします。とはいっても、この先にナルソン様を作ってくださいました休憩小屋があるので、そこまで辿り着ければ今日の移動はおしまいですけどね」

休憩小屋という単語を聞き、一良は思わず「おお」と声を上げた。てっきり野宿するものだと思っていたのだが、ちゃんとグリセア村とイステリアの中継地点に休憩用の小屋を建てておくとは、なかなかナルソンもやるものである。

恐らく、こういった配慮の積み重ねで、領内の民からグリセア村の住民が抱いているような尊敬を勝ち取っているのだろう。

「ですから、ミユラちゃんには大変ですけど頑張って歩いてもらわないと。もちろんカズラさんもですけどね」

そう言ってくすりと笑うバレッタに、一良は

「頑張ります……」

と応えると、慣れない草編みのサンダルを履いている自分の足を撫でるのだった。

それから約10時間後。

頭上で激しく自己主張していた太陽も傾き始め、これはいよいよ野営の準備をしなければいけないのだろうかと一良が案じていると、視界の先に木で出来た小屋が見えてきた。

小屋のある辺りから先には森が広がっており、街道はその森の中に伸びていつている。

「あ、カズラさん、休憩小屋が見えてきましたよ!」

「ほ、ホントですか……助かった……」

慣れない履物と10時間越えという長時間の行軍のため、一良の左足の裏にはマメが1つ出来ており、包帯でぐるぐる巻きにして衝撃を和らげてあるのだが、正直かなり痛い。

しかし、6歳のミュラが黙々と歩いているのに、25歳の一良がマメが痛くて歩けないなどと言いつけにもしもいかず、心配するバレッタたちに笑顔で「大丈夫」と言つて、歯を食いしばって歩いてきたのだ。

途中、1時間ごとに5分、昼食で30分程度の休憩を挟みながらの行軍であったのだが、足裏にマメが出来たのは一良だけである。

ミュラも長時間の移動で若干疲れた様子ではあるが、時折りポロ

を一口ずつ飲んでいたためか、村を出発した時のように歩きながら話せるくらいに元気は残っている。

一良も途中でリポDを1本飲んでみただが、この世界の人々のように驚異的な回復をすることはできず、日本でリポDを飲んでいた時とやら変わらなかった。

一良たちは小屋まで辿り着くと、小屋のドアを開けて中の安全を確認し、二人の村人が見張りとして小屋の前で待機することにして、残りの者は小屋の中へと入った。

小屋の中は10畳程の広さで一部屋だけの簡単な作りとなっていて、引き戸式の窓が四方についており、中央には囲炉裏が設置してある。

薪などの燃やすものは置いてはいないようなので、持ってきた薪を数本取り出すと、囲炉裏にくべて着火剤となる小枝に一良がライターで火を点けた。

「いてて……、ありや、マメが潰れちゃってるなあ」

一良は火を点け終わると囲炉裏の前に座り込み、包帯を外して足を確認した。

左足の裏に出来ていたマメは潰れてしまっていて血が出ており、包帯が血で赤くにじんでいる。

「カズラさん、大丈夫ですか？」

一良が潰れたマメをオキシドールで消毒していると、荷物を降ろしたバレッタが心配そうに一良の傍にやってきた。

「ああ、大丈夫ですよ。消毒してまた包帯を巻いておけば歩けますから」

「そうですね……でも、無理しないでくださいね？ 明日は私が薪を運びますから」

「あ、いえ、本当に平気ですよ。薪は任せてください」

一良とバレッタがそんなやり取りをしているのを、ロズルーたちは不思議そう表情で見ていたのだが、バレッタとの譲り合いに終始していた一良は全く気付かないのだった。

その後、各自交代で夕食（一良が持ってきた混ぜご飯などの缶詰類）を摂り、見張りも交代しながら就寝することとなった。

その日の深夜。

「カズラ様、カズラ様」

小さな声でそう呼びかけられながら身体を揺すられ、一良は目を覚ました。

目を開けるとターナが一良の頭の脇に座り、軽く覗き込むようにしていた。

見張りの順番が回ってきたのだ。

一良は毛布代わりに身体に掛けていたマントを退けて起き上がり、ごじごじと目を擦った。

「ターナさん、おはようございます」

「おはようございます。あの、本当によろしいのですか？ 見張りなどをカズラ様にやっていただくなんて……」

ターナはそう言つて申し訳なさそうな表情をしている。

就寝前に見張りの順番の相談を皆でしたのだが、一良も見張りに立つと言ひ出すと皆口を揃えて

「カズラ様にそんなことをしていただくなんてとんでもない！」

と言つて一良を諫めたのだが、他の村人達が交代で見張りをして
いるのに自分だけ眠りこけているのは心苦しいと、反対を押し切つて見張りに立つことにしたのだ。

ちなみに、交代の時間は空に出ている星の動きを見て計っている
らしかつた。

「いやいや、これくらいやらせてください。私だけ特別扱いというのはどうにも心苦しいですから」

「そうですか……では、すいませんがよろしくお願いします」

ターナは申し訳なさそうにそう言つと、傍らに置いてあつた短槍を
一良に手渡した。

そういえば武器を持つて見張りに立つんだつたな、と思いながら
一良は短槍を受け取ると、ずしりとした重さが手に広がつた。

重いとはいつても一良でも十分振り回すことは出来るくらいの重
さであるので、何かあつても殴りつける程度の事だつたら一良にも
出来るだろう。

「では、行つてきますね。ターナさんもゆつくり休んでください」

「はい、外で夫が番についているので、何かあつたら夫に申し付け
てください」

一良は毛布代わりにしていたマントを羽織ると、槍を片手に小屋を出るのだった。

一良が小屋を出ると、ロズルーが扉から右手に少し離れた小屋の角の壁に背を預けて立っていた。

傍らには短槍と矢筒が立てかけてあり、手には短弓と一緒に矢を一本握っている。

「おはようございます、カズラ様。足は大丈夫ですか？」

「おはようございます。薬を塗って包帯も巻いてありますから大丈夫ですよ」

一良はそう言って包帯を巻いている足をロズルーに向けて見せると、建物から見てロズルーとは反対側の位置の壁に背を預けた。

こうして小屋の端と端に立って見張りをすることで、グリセア村側とイステリア側の両方の街道を見張ることが出来るのだ。

一良とロズルーが見張りをしながら暫し雑談をしていると、ふいにロズルーが口を止めて目の前に広がる森を凝視した。

急に話を止めたロズルーに、一良は何事かとロズルーの視線を追うが、そこには真っ暗な森が広がるばかりである。

「こんなところでアルマルに会えるとは……カズラ様、狩ってもよろしいでしょうか？」

そう一良に問いつつ短弓に矢を番えて引き絞っているロズルーに、

一良は何のことかさっぱりわからなかったが、何か動物がいるのだろつと

「あ、どうぞ」

と返事をした。

一良が応えると同時にロズルーは矢を放ち、矢は真つ暗な森へと吸い込まれていったかと思うと、すぐに何かの獣の「ギャツ」という断末魔が聞こえてきた。

ロズルーはすぐに森へと駆けていくと、暫くしてから手にウサギくらいの大きさをした、ふさふさの黒い毛に全身が覆われた動物（アルマルと言うらしい）を抱えて戻ってきた。

その目玉にはロズルーが放った矢が突き刺さっており、どうやら既に死んでいるようだ。

「いやあ、こんなところでアルマルに会えるとは思ってもみませんでした。これはいい値で売れそうです。カズラ様、ありがとうございます」

まるで暗視スコープみたいな目をしてるんだなと一良が感心していると、ホクホク顔でアルマルを抱えているロズルーが一良に頭を下げて礼を述べた。

「え？ あ、どういたしまして……」

何故礼を言うのか一良にはよくわからなかったが、とりあえずそう応えると、ロズルーは早速小屋に戻ってそつとターナを起こした。起こされたターナはアルマルを見て驚いていた様子だったが、小屋の中で手早く血抜きや皮剥ぎをやったのけ、あつという間に毛皮とブロック肉に切り分けてしまった。

その間、一良も小屋に入って血抜きなどの作業を見たかったのだが、見張りをしないわけにもいかないので、アルマルを渡して戻ってきたロズルーと毛皮の話や肉の話をロズルーの交代の時間までしていたのだった。

次の日の朝、すっかり寝入っていてそんな出来事があつたなどとは露ほども知らない者たちは、朝から出されたアルマルの焼肉に喜びの声を上げて一良に礼を述べ、一良は何故礼を言われるのだろうと首を傾げるのだった。

18話：大都会とおのぼりさん

休憩小屋にて一晚を明かした一行は、翌日の朝も薄暗い内に全員が起床し、アルマルの焼肉（味付けは一良が持ってきた食卓塩のみ）という重たい朝食を食べてから小屋を出発した。

空はまだ薄暗く、森の中に続くイステリアへの街道は闇夜の如き暗さである。

一良以外の同行者は時折食べれるキノコや野草を採取しており、森の中も良く見えているようだが、視力が1.5程度である一良はなんとか足元の様子がわかる程度の視界しかない。

それでも隣を歩いているバレッタにぴたりと寄り添いながら慎重に歩を進めていたのだが、歩いているうちに段々と目も慣れてきて、何となく周囲が見えるようになった。

本当ならば持ってきた携帯用ランタンを使いたいところだが、万が一イステリア方面から人が来たらと考えると、迂闊に使うことが出来ないのだ。

折角持ってきたのに使うことが出来ないとは、まさに単なるお荷物である。

「こんなに暗くてもよく見えるなんて、皆さん相当目が良いんですね。私はようやく周囲がうつすらと見えるようになりましたよ」

一良がバレッタにそう話しかけると、バレッタは不思議そうに小首を傾げた。

「そうですか？ 普通だと思いますけど……あ、でもロズルーさんはかなり目が良いみたいですよ」

昨晚、ロズルーがアルマルを狩った時点で何となく予想は付いて

いたが、この世界の人間はかなり視力がいいようだ。

本すら満足に手に入らないため、近くで物を長時間読むといったことをする事が殆どなく、太陽と共に寝起きをしているような生活を生まれた頃からしていれば、彼等のような超視力を得ることが出来るのかもしれない。

ロズルーの視力が特別いいというのは、彼が狩人をしているからだろう。

「あー、確かに。昨晚は真っ暗な森の中にいたアルマルを、一発で矢で仕留めていましたからねえ。真っ黒な動物なのによく見つかりますよね」

「本当ですよ。真っ黒なアルマルを夜中に見つけるなんて、私にはとても出来ないです」

そんな話をバレッタとしながら、森の街道をひたすら進む。

そうして歩いているうちに空も明るくなり、真っ暗だった森の中にも光が差し込んでくるようになった。

途中で何度か休憩を挟み、森の中を歩くこと5時間。

辺りが大分明るくなった頃、一良たちは森を抜け出した。

「あれ？　もしかして、もうイステリアに着いたんですか？」

目の前に広がる光景に、一良は隣を歩いているバレッタに問いかけた。

森を抜けた先には見渡す限りに畑が広がっており、所々に民家も見える。

「いえ、ここはイステリアの周囲にある穀倉地帯です。イステリアはこの穀倉地帯を抜けた先にあります」

「穀倉地帯……こりや相当なものですな。畑の終わりが見えないですよ」

一良は畑の終端は何処かと探してみたが、畑は延々と続いており、それこそ地平線の彼方まで広がっているようにも見える。

あちこちで畑の世話をしている人々が見られるが、畑に生えている植物は背が小さく、水が足りないのか元気が無いように見え、中には枯れてしまっているものもあった。

畑の脇には所々に水路と思われる溝が掘ってあるのだが、今は水は通っておらずにカラカラである。

「かなりの広さがありますからね。イステリアをぐるっと囲むように畑が広がっていて、所々に村や町もありますよ」

「ううむ、随分と大規模に食糧生産をしてるんですね……ちなみに、これから行くイステリアの人口はどれくらいなんですか？」

一良がそう問いかけると、バレッタは口元に手を当てて少し考える素振りをした。

「えっと、確か数年前は20万人くらいって父から聞いたことがありますけど……」

「バレッタさん、今は30万人近くいるはずですよ」

「ふーん、30万人か……って、30万人も住んでるんですか!？」

バレッタの答えを補足したロズルーに、一良は思わず振り返って聞き返す。

「ええ、4年前の休戦直後は20万人程にまでイステリアの人口が減ってしまっていたらしいのですが、王家の命令で他の領主様の領民が毎年数千人ずつナルソン様の領民として組み込まれているんですよ。もしまた戦争が起こったら、バルベルと最も長く国境を接しているイステール領が激戦区になるのは目に見えてますからね」

「なるほど、それで人を集めているわけですか」

「どうやら、イステリアという街はかなり巨大な都市のようである。村でバレッタや村長にあれこれ質問していた時は、街の様子や店の種類などは聞いたのだが、肝心の街の規模を聞いていなかった。とはいえ、想像していたものよりかなり大きな都市ということが判り、一良にとっては嬉しい誤算である。」

戦争に向けて人を集めているということは気になるが、休戦条約はまだ4年も残っているのです、直近でどうこうなるといった話はないだろう。

「あと少し頑張れば着きますから、もう少しだけ頑張りましょう」

「もちろんです、頑張ります！　いてて……」

こうして、足裏のママの痛みに耐えつつも、一良はうきうきした様子で大都会イステリアに向かって必死に歩を進めるのだった。

延々と続く畑沿いの街道を歩くこと5時間。

畑を眺めながら食事休憩（周囲に人がいないことを確認して缶詰を食べた）などの小休止を挟みつつも歩き続け、一行はようやくイ

ステリアの出入り口となっている巨大な城門の前に到着した。
太陽は若干傾いてはいるが、日が落ちるまでにはまだ時間があり
そうだ。

「うわあ、これ全部防壁ですか。街をぐるっと囲んでいるのか」

イステリア市街に入る大きな門の前で、一良はその両脇に伸びて
いる防壁の長さに驚いていた。

石で作られた高さが5メートルはありそうな防壁は、延々とイス
テリアの街を守るように伸びていつている。

門は観音扉式の木製のもので、青銅でしっかりと補強されていて
とても分厚く、高さも4メートルはあるように見えた。

防壁の上には槍を持った監視の兵が数百メートルごとに配置され
ているようで、時折周囲を見渡している。

防壁はまだ未完成の部分があるらしく、あちこちで工事を行って
いる人々の姿も見られた。

防壁の他に塔も建設しているらしく、防壁にくっついた形で建設
されており、作りかけの石の外壁の内側にある木の骨組みが覗いて
いるものが遠目に見られた。

「カズラさん、街の中に入りますよ」

まるでおのぼりさんのように二人並んで口をあんぐりと開けて城
壁や城門に見入っている一良とミユラに、バレッタは苦笑しながら
声を掛ける。

一良は

「あ、はい」

と生返事をしながら、やはり口を開たままで巨大な城門を見上げ

ながら門を潜った。

門を潜った所には数名の衛兵がおり、一行は背負っている薪やアルカディアン虫を売りにきたこととグリセア村からやってきたことを衛兵に告げ、バレッタはグリセア村出身の証明書の皮紙を袋から出して見せていた。

街の中には武器は持ち込めないらしく、持ってきた武器を衛兵に預けて引き換え用の木板を受け取った。

その際にバレッタが衛兵に入場料として銅貨を数枚渡していたのだが、必要なのは入場料だけで武器の預かり賃は無料とのことだった。

「うおお、これは凄い、まるで中世映画の中にいるみたいだ……」

街に入った一良は、視界に入ってくる景色に驚嘆の声を上げた。

まず、グリセア村と違ってとにかく建物が多い。

幅7メートルほどの真っ直ぐに伸びた道の両脇に、木造の建物や石造りの建物が一定間隔ごと建てられており、通りは多くの人々が行き交っている。

遠くには石で作られたドーム状の大きな建物も見え、2階建てや3階建ての立派な建物も沢山ある。

城門の裏手には衛兵の詰め所らしき木の小屋が建てられており、交代のために出てきたと思われる衛兵が防壁についている階段を登っていた。

「早速薪などを売りに行くんですか？」

一良はこっそり持ってきたデジカメで街や衛兵を撮りまくりたくなる衝動を何とか抑え、興奮を鎮めてバレッタに話しかける。

隣ではミユラが未だにあんぐりと口を開けたまま街の光景に見とれていた。

「いえ、今日はもう日が落ち始めているので共同宿泊所に向かいます。物を売ったり釘を買うのは明日ですね」

「共同宿泊所……宿屋みたいなものですかね？」

「んー、少し違います。宿屋のように個々に部屋が宛がわれるようなものではなく、大きな広い部屋に沢山の人が集団で寝泊りする施設です。街が運営している公共施設なので、宿代がとても安い上に食事もありますよ。といっても夕食だけですけどね」

詰まる所、昨晚泊まった休憩小屋を大きくしたような感じの施設なのだろう。

ある程度お金を持っている人は宿屋に泊まり、お金がなかったり節約したい人々はそういった公共施設に寝泊りをするのかもしれない。

「あと、集団で寝泊りをするので泥棒には十分注意してください。寝ている間に荷物を盗まれることが結構あるみたいですから。一応交代で荷物番をするので大丈夫だと思いますけどね」

バレッタの共同宿泊所説明に、イステリア初心者組みの一良とミユラは揃って「はい」と返事をするのだった。

街の中を20分程歩き、一行は今晚お世話になる共同宿泊所にやってきた。

共同宿泊所の建物は木造平屋のようで、天井こそそれほど高くはないが、小学校の体育館ばりの広さをしている。

宿泊所の奥には別の建物が併設しており、漂ってくる匂いから察するにどうやら調理場のようである。

入口を入ってすぐの所にいる受付のおっさんにバレッタが代金を支払って中に入ると、そこにはかなりの人数の先客が、思い思いの場所に腰を下ろしていた。

「うわ、こりゃ随分と混雑してますね」

「前に来た時はここまで混雑してなかったんですけど……あ、あの辺りが空いてますから、あそこで休みましょう」

宿泊所内を見渡していたバレッタが、丁度一行がなんとか休める程度のスペースを見つけ、座ったり寝転んでいる先客に気をつけながらその場所に辿り着く。

空きスペースに着くとそれぞれ荷物を降ろして座り込み、一息ついていた。

「しかし、ここは本当に大きな街ですね。建物も沢山ありますし、まさか街全体が防壁で覆われているなんて考えてもみませんでしたよ」

一良は足に巻いてあった包帯を解いて、マントで隠しながら足裏のマメをオキシドールで消毒すると、水を飲んで一息ついているバレッタたちに話しかけた。

ミユラはマントを頭からかぶってこっそりドロップをズタ袋から取り出して口に放り込んでいる。

「私が10年前に父に連れてきてもらった時は防壁なんて無かったですけど、戦争が始まってから建造を始めたみたいですね。ただ、費用が足りなくてまだ完全には完成していないって話ですけど」

「休戦後からバルベルとの国境沿いにも大きな砦を作っているって話ですから、きっとそのせいで街の防壁の完成が遅れているんでしょうね。まあ、あと4年も休戦期間があるので、それまでには完成するとは思いますが」

「むむ、皆か。そちらにも激しく興味を引かれるな……」

一良たちがそんな話をしていると、宿泊所の奥にあった扉が開き、中から大鍋を乗せた木の台車が運ばれてきた。

それまで床に寝転んでいたりしていた人々は瞬時に起き上がると、我先にと鍋の前に長い列を作る。

「食事が出来たみたいですね。私たちも並びましょうか」

「そうですね」

荷物の番もしなければいけないので、半数ずつ交代で食事を受け取りに列に並ぶ。

食事として出されたのは野菜が少し入っている薄味のスープが木の椀に1杯のみで、スプーンすらついていなかったが、激安の共同宿泊所なのだから文句を言うところではないのだろう。

一良が日本から持ってきた缶詰や、塩をたっぷりと使った米の食事に慣れてしまっていた一行は、貰ってきた薄味の野菜スープを口にして何ともいえない表情をしている。

「あの、この宿泊所の食事って前からこんな感じだったんですか？」

「いや、少なくとも私が毛皮を売るために2年前に来たときは具がもっと入っていましたし、味もこれよりは濃かったですよ。それに

パンも1つ付いていたかと思えます」

一良たちはそんな話をしながら、一良の持ってきた食卓塩を周囲に見えないようにこっそりスープに入れ、味を濃くしてから再度口にした。

何だかただの温かい塩水みたいな味になってしまったが、何も入れずにそのまま飲むよりはマシである。

一同は森で採ったキノコや野草のうち、生でも食べられるものを選んで塩水に漬けながら口にし、不満足とはいえ満腹感を得ることに成功した。

一同がそんなことをしている間にも、極薄野菜スープをお代わりする人々で、鍋の前には再び長い行列が出来上がっていたのだった。

19話：異世界のショッピングモール

「カズラさん、朝ですよ。起きてください」

「ん……」

次の日の朝。

身体を揺さぶられる感触に一良が目を覚ますと、宿泊所内は格子窓から差し込んだ日の光で明るくなっており、周囲は身支度を整える者たちの喧騒に包まれていた。

まだ日が昇って間もないようで、室内の空気はひんやりとしている。

バレッタやロズルーたちも周囲の人々と同様に出発する準備を始めており、マントに包まって眠っているのは一良とミユラだけである。

時折、喧騒に混じって「荷物が無い！」などといった声が聞こえてくることから、例の如く夜中に泥棒が出たようだ。

バレッタは一良が目を開けたのを見て、おはようございます、と微笑んだ。

「おはようございます……街に出るんですか？」

「はい。もう少ししたら街のお店が開き始める時間なので、持ってきた品を売りに行こうと思ひまして」

持ってきた品とは、薪やアルカディアン虫のことである。

薪の価値がどれくらいなのかは判らないが、以前バレッタがアルカディアン虫は高級食材だと言っていたし、ロズルーが仕留めたアルマルの毛皮もあるので、それなりの金銭は得られそうである。

とはいっても、一良は未だにこの世界の通貨単位すら知らないの
で、どれくらいの価値になるのかは検討も付かない。

「へえ、こんな朝早くからお店が開くんですか……薪とかつて、買
取専門のお店があるんですか？」

「いえ、薪は誰でも必要としていますから、片っ端からお店に売り
込みに行くんです。アルカディアン虫は食料品店に売りに行きます
し、アルマルの毛皮は衣料品を扱っているお店で売れると思います」

「ふむふむ、必要な物ならどの店でも買い取ってくれるのか」

一良とバレッタがそんな話をしている間にミユラもターナに起こ
されて目を覚まし、身支度を整え始めている。

眠いと言つてくずつたりなどせず、てきぱきと準備をしている様
は、一良の知っている日本のお子様とは違って随分と逞しく見えた。
そんなミユラを見て一良も慌ててマントを身体に付け直すと、薪
を満載した背負子を背負うのだった。

宿泊所を出発した一行は、早くも人通りが多くなつてきている大
通りを抜け、沢山の店舗が並んでいる区域にやってきた。

店舗のある区域の中心は大きな円状の広場となっており、広場の
周囲に沿って設置されている建物は全てが何かしらの店のようであ
る。

広場は直径が50メートルはあり、荷物を載せた幌付の荷馬車があ
ちこちに停めてあり、中には出店を設置し始めているものもあつ
た。

広場は既に沢山の人で賑わっており、幾つかの店には人だかりが

できていた。

広場内にある店もある程度は区分けされているらしく、食料品を売る店や衣料品を売る店など、大体の種類ごとに店舗は纏まっているようだった。

「では、まずは薪を売りに行きましょう。……カズラさん、どうかしましたか？」

そう一良にバレッタが声を掛けると、一良は昨日に引き続き口を半開きにして広場の光景を見つめていた。

何しろ、映画などで大昔を題材にしたものの中で見るような光景が、実際に目の前に広がっているのである。

見た事のない食べ物を売っている店や、本物の剣や槍を販売している店など、初めて尽くしの光景に一良はただただ感動していたのだ。

「えっ？ あ、すみません、こんなに立派な商業区画があるなんて思っていなかったもので、見とれてしまいました……」

一良の傍らでは、ミユラが瞳を輝かせて沢山のお店にきよろきよろと視線を走らせている。

ミユラも一良と同様、初めて見る光景に感動しているようだ。

「ふふ、ここ以外にもことごとくくらいお店が沢山ある区画がいくつもありますよ。もっと街の中心に行けば、高級品を取り扱っているお店の区画もありますし」

「ふむふむ、ということとは、この辺りは庶民の区画ってことですかね？」

「ええ、街の中心に行けば行くほど、裕福な人たちが住んでいる地区になりますね」

どうやらこの街の構造としては、街の中央にはお金持ちが集まり、その他の人々は中心から離れたエリアに住んでいるらしい。

確かに、イステリアに到着して門を潜った辺りに建てられていた家よりも、この辺りに建っている建物のほうが立派に見える。

「では、薪を売りに行きましょうか」

「そうですね」

持って来た薪を売るために、一番手近にある店に一行は向かう。

向かった店は石で作られた二階建ての建物で、一階にある店の入口の扉は大きく開放されており、店内には大きな一枚布や、一良たちが履いているような草編みの履物や厚手の布で作られた履物などが置いてあった。

一行が店に入ると、奥からこの店の主人と思われる中年の男が現れた。

「いらっしやい。何か入用ですかね？」

「いえ、薪を買っていただけないかと思って立ち寄らせていただいたのですが、幾つかいかがですか？」

バレッタはそう言って一良の背負っている背負子から薪を一本抜き出して店主に手渡した。

薪を受け取った店主は手で重さを見るような仕草を見ると、納得がいったのか何度か頷いた。

「ふむ……これはなかなかいい薪だ。彼が背負っている分で幾らかな？」

「80アルでどうですか？」

一良の背負っている薪を見ながら問う店主にバレッタが金額を提示すると、店主は一瞬きょとんとした表情になった後、大げさに笑い声を上げた。

「お嬢さん、幾らなんでもそりや高すぎだよ。これなら50アルが相場つてもんだ」

「そうですか、それでは他を当たらせてもらいますね」

バレッタがそう言ってさっさと店を出ようとすると、店主は

「待った、55アル出そう。お嬢さんは商売上手だな」

といって苦笑しながら両手を軽く挙げて降参のポーズをとった。

「安すぎです。70アルまでならまけましょう。これ以上は無理ですよ」

出口へと向かう足を止め、バレッタは振り返って顔をしかめながら10アル値引きした値段を提示する。

店主も困ったような顔をして、少し唸って考える素振りをした。

「60……いや、62アル出そう。これ以上は本当に無理だ。これでも駄目なら他を当たってくれ」

そう言う店主に、バレッタも口元に手を当てて数秒考えているようだったが、返答を決めたのか口を開いた。

「ごめんなさい、やっぱり他を当たらせてもらいます」

申し訳なさそうな表情をして謝るバレッタに、店主は

「いいいいいよ、もし他で売れなかったらまた俺のところに着てくれ。62アルで買わせてもらうよ。慣れなくて大変だろうが頑張るな」

と、バレッタに笑いかけた。

バレッタは店主にお礼を言って微笑むと、足を店の外へと向けるのだった。

「バレッタさん、なかなか上手でしたよ。お店の人が62アルで買ってくると約束してくれてよかったですね」

「本当、私も見習わないといけないわ」

「はー、緊張しました……でも、少しおまけしてくれましたし、交渉に慣れていないってバレバレだったみたいですけどね」

交渉の労を労うロズルーとターナに、バレッタは苦笑しながら応えた。

一良から見れば実に堂々と値段交渉をしているように見えたのだが、商売のプロが見ると隠した緊張などは分かるものなのだろうか。正直、一良にはバレッタと同じように値段交渉が出来るとはとて

も思えなかった。

もしかしたらバレッタの容姿も関係したのかもしれないが、一良は男なので先程の店ではその点でも絶望的である。

「この薪って幾らくらいが相場なんですか？」

「その量ですと、大体60アルってところですね。冬場はもっと値段が上がるんですが、今のような夏の季節だと大体そんなところですよ」

自分の背負っている薪を指差しながら質問する一良にロズルーはそう答えると、さてと言って自分の背負子を背負い直した。

「それでは、私たちも薪と毛皮を売りに行ってきます。ミュラ、おいで」

「お父さん、カズラ様と一緒にいたらだめ？」

ミュラはいつの間にか口に入れたらしいドロップでほつぺたを膨らませながら、一良とロズルーを交互に見る。

既に左手は一良のマントを握っており、一緒にいる気満々のようだ。

サクマドロップや缶詰で餌付けされたのか、この短期間で随分と懐いたものである。

……一緒にいれば何か貰えるかとも思っているだけかもしれないが。

「あ、私は別に構いませんよ。はぐれないようにちゃんと見てますから」

「しかし……」

一良に遠慮しているのか、ロズルーとターナは申し訳なさそうな表情をしている。

しかし、懇願するような表情で一良のマントを掴みながら自らに視線を向けてくる娘の姿に、ロズルーは苦笑して

「では、なるべく早く戻ってくるのでそれまでお願いします」

と言って一良に娘をお願いすると、待ち合わせの場所をこの衣料品店の前と皆で決め、品物売るべくターナと一緒に人ごみの中へと消えていった。

「では、俺達も品物売ってきますね」

「はい、ではまた後で」

ロズルーたちに続き、他の村人たちも人ごみの中に消え、この場に残ったのはバレッタと一良、そしてミュラである。

売るものとしては薪とアルカディアン虫があるのだが、とりあえずは薪を売ろうということで、先程の店の隣の店舗へと3人は入っていくのだった。

それから1時間後。

10軒目の店を出たところで、バレッタは小さく溜め息をついた。ミュラははぐれないようにと、一良と手を繋いでいる。

「ふう、やっぱり62アル以上で買ってくれるところは中々ありま

せんね……」

「そうですね……61アルまでは出してくれる所がありましたけど、62以上は厳しいんですかね」

最初の店の時のように、バレッタは淡々と値段交渉を行ったのだが、やはり相場の60アルを超える価格で買い取ってくれる店は見つからない。

最初は楽しそうに店を見ていたミユラだったが、今は口には出さないが若干疲れた表情をしている。

結局、これ以上薪を高く買い取ってくれる店を探していたらアルカディアン虫を売ったり買い物をする時間に差し支えてしまうことから、最初の店に戻って薪を売ってしまうことにした。

距離的には僅か数十メートルしか離れていないので、最初の店にはすぐに辿り着く。

3人が再び店に戻ってくると、やっぱりな、といった表情をした店主が出迎えてくれた。

「どうだい、他の店じゃ61アルがせいぜいだったんじゃないか？」

「はい………すいませんが、62アルで買い取ってもらってもいいですか？」

バレッタが申し訳なさそうにそうお願いすると、店主は

「ああ、約束だからな。買い取らせてもらうよ」

と言って、懷から8枚の銅貨を取り出し、バレッタに手渡した。

「10アル銅貨が6枚に1アル銅貨が2枚……確かに。ありがとうございます」

一良はバレッタに手伝ってもらいなが背負子を降ろすと、薪を背負子から外して店の空いているスペースに積み上げるのだった。

「今度はアルカディアン虫を売りに行かないと。食料品のお店はあつちですね」

薪を売り終えた3人は、休む間もなく食料品店へと向かった。食料品店が集まっている辺りは、他の店よりも多くの人で賑わっているように見える。

それぞれの店の前には板や平たい石が置いあり、売り物の価格がそれぞれ記載してあるようだ。

一良はイステリアに来る前に、少しだけバレッタからこの世界の文字を習っていたため、数字は一応読む事が出来、文字もごく僅かなら虫食い状に読む事が出来た。

「えーと、ナツイモ1つ5アル……あれ、1つ5アル？ 薪があれだけあっても60アルなのに、この芋は随分高いんですね。高級品ですか？」

「いえ、この芋はこの時期村でも採れる普通の芋です……こんなに高くなっているなんて……」

どうやら、食糧不足のために食料が高騰しているようだ。

一良が店の中を覗いてみると、その1つ5アルするという芋が木箱に入って他の食料品に混じって陳列されていた。

芋は長さが10センチくらいあるサツマイモのようなもので、太さは手の人差し指と親指で作る輪くらいでしかない。

薪を売ったお金を全て使ったとしても、僅か12本の芋しか買えないとは、かなりの高騰っぷりである。

これはアルカディアン虫などの高級食材は高く買い取ってもらえるんじゃないかと期待して店に入ったのだが、応対に出てきた女主人に提示された金額は8匹で12アルだった。

「すまないねえ。今は小さなアルカディアン虫よりも、芋とか豆のほうが需要があるんだよ。もっと街の中心に近いところにある店なら高く買い取ってくれるかもしれないから、行ってみたらどうだい？」

「そうなんですか……わかりました、行ってみます。ありがとうございます」

折角片道2日という距離をはるばる歩いてイステリアへとやってきたのだから、高く売れるのであればその方がいい。

3人はより街の中心に近い商業区画へと向かうべく、広場を後にするのだった。

20話：本音と建前

歩くたびにコツコツと革靴の音が響く石の床に目を落としながら、アイザックはナルソン邸の廊下を歩いていった。

いつもと同じ皮の軽鎧を身に纏っているアイザックの両手には、普段持つっている剣の代わりに、色鮮やかな黄色い花束が大事そうに抱えられている。

暫く廊下を歩いてようやく目的地へと続く扉の前に辿り着くと、アイザックは緊張した様子で深呼吸をした。

開け放たれている窓から入り込んでくる日差しは暖かく、時折頬を撫でる微風が心地良い。

柔らかく頬に当たる微風を受けながら、アイザックは花束を抱えたまま目を閉じると、

「オルマシオール様、どうか私に勇気をお与えください……」

と、小さな声で自らの信仰する戦いの神に祈りを捧げ、閉じていた目を開いた。

「うう、何でこんなに緊張するんだよ。もう初めてお会いしてから4年も経ってるのに……」

アイザックは自らの意思に反してバクバクと早鐘を打つ胸に手を当て、もう一度深呼吸をした。

そうして手櫛で自らの短く切り揃えられた金色の髪を整え、10秒程その場で息を整えると、小さく「よしっ！」と気合を入れ、ゆっくりと目の前の扉を開いた。

「ああもう、ほんとにあのクズだったらしつこいんだから！ 贈り物を渡したらさっさと帰ればいいのに、何であいつの自慢話なんて聞かないといけないのよ！ たかが商人風情と結婚する気なんて欠片もないってのがわかんないのかなあ！」

綺麗に手入れされた草花の咲き誇るナルソン邸の中庭の隅の木陰で、年の頃は15歳程に見える一人の少女が、木のテーブルに正面を向いて突っ伏しながら、隣に控えている侍女服を着た、少々そばかすが目立つ20代半ばの女性に小声で愚痴をこぼしていた。

少女が今いる位置は、少女が椅子に腰掛けると頭だけ周囲から見える程度の背の高さの植木に囲まれており、突っ伏している状態では周囲から見られる事はない。

少女は白を基調としたフリルつきの上質なドレスを身に纏っており、背中の中程まで伸ばした流れるようなダークブラウンの髪は艶やかで美しい。

整った顔立ちに切れ長の瞳が印象的で、今後成長したら誰もが羨むような美人なること間違いなしの美少女である。

しかし、今はその美しい顔を苛立ちに歪め、これまた上質な革の靴を履いている足でテーブルの支柱を突っ伏した状態のままガンガンと蹴飛ばしている。

リーゼがテーブルを蹴るのに合わせ、テーブルの端に置かれた取っ手付きの銅のコップがカタカタと揺れた。

「でもリーゼ様、そんなに嫌なら贈り物をお断りして、結婚する気はないとはつきり申し上げれば……」

机を蹴飛ばし続けている少女——リーゼ——に、女性は若干疲れたような表情でそう話し掛けると、リーゼはその顔を女性のほうに

くるりと向けてキツと睨み付けた。

「あのねエイラ、そんなことしたらもう贈り物が貰えなくなるかもしれないじゃない。あのバカ商人とか他の男が持ってきた贈り物を大げさに喜んで見せて、結婚の話は適当に受け流して自慢話にニコニコしながらちよつと持ち上げてやれば、あいつらはこれからもせっせと贈り物を持ってくるでしょ。それに結婚の話をはっきり断つたりしたら、私がアイザックに気があるって噂を立てられかねないわ。ただでさえお父様はアイザックと私が結婚する事を望んでいるみたいだし、隙を見せたら本当に結婚させられかねないのよ」

エイラと呼ばれた使用人の女性は内心溜め息をつきながらも、申し訳ありません、と小さく頭を下げた。

リーゼとエイラのこんなやり取りはいつものことで、エイラとしては本当は何も言わずに只のオブジェクトと化してしまいたいのだが、何も言わなければ言わないでリーゼに怒られたりへそを曲げられたりするのです、仕方なく話しに付き合っているのだ。

リーゼはその後もぶつくさと文句を言っていたが、遠くから聞こえてきた中庭の扉が開く音に敏感に反応すると、突っ伏していた身体を瞬時に起こして服装の乱れをばつと直し、テーブルに置いてあったコップを手にとって優雅に飲み始めた。

「こんにちは、リーゼ様。おや、お茶をしていらしたのですか？」

先程までの苛立ちに歪んだ表情を完全に消して、アイザックがやって来るであろう位置に対して斜め45度の角度をとり万全の体制でスタンバっていたリーゼは、持っていたコップをテーブルに置くと、植木の向こうから歩いてきたアイザックに、こんにちは、と柔らかに微笑んだ。

「はい。木々の緑が美しくて、眺めながらお茶をしたくなってしまうってエイラにお願いして用意してもらったんです。アイザック様もご一緒にいかがですか？」

リーゼがそう誘うと、アイザックは心底残念そうな表情をした。

「お誘いただけて光栄です。しかし、これからバルベルとの国境沿いの新たに建築中の砦を視察しに行かねばならないのです。折角のお誘い、非常に嬉しいのですが……」

アイザックが本日砦の視察に行くという事は予めナルソンから聞いていたので、リーゼは心の中で

「うん、知ってる」

と呟くと、口元に手を当て驚いたような表情でアイザックを見つめた。

「まあ、そんな遠くまで……この間も遠くの村の視察に行かれたばかりなのに、今度は砦の視察なんて、お父様も人使いが荒いんだから……」

「ふふっ、そうですね。でも、私のような若輩者に砦の視察などという重要な仕事を任せていただけて、本当に嬉しいんです。大変な仕事でも、ナルソン様の力になれていると思えば苦にはなりませんよ」

そう言って本当に嬉しそうな笑顔を見せるアイザックに、リーゼは一瞬きよとした表情をすると、

「ありがとう」

と言つて花の咲くような笑顔をアイザックに向けた。
それまで緊張を押さえ込んで何とか普通に会話が出来ていたアイザックだったが、その笑顔を向けられた途端に顔を真っ赤にして落ち着きなく周囲に目を泳がせると、

「い、いえっ！ あのっ、これ気に入って頂ければと思つて持ってきたのですがっ！」

と言つて、持っていた黄色い花束をリーゼに差し出した。

「まあ、綺麗な花束！ ありがとうございます、アイザック様」

リーゼは花束を受け取つて大事そうに胸に抱くと、これまた嬉しそうな笑顔をアイザックに向ける。

アイザックは再度向けられたリーゼの笑顔に更に赤くなると、

「いえ、喜んでもらえて光栄です！ それでは、これにて失礼致します！」

と、深く一礼して早足で中庭を出て行くのだった。

歩き去っていくアイザックの背中を見送ったリーゼは、アイザックが見えなくなると貰った花束をエイラに差し出した。

「エイラ、これを半分私の部屋に飾っておいて。もう半分はあなたにあげるわ……ちょっと、何可哀想な物を見るような目してるのよ」

アイザックが去つていった中庭の出入り口に哀れみを込めた視線

を送っているエイラに、リーゼは花束を押し付けると、椅子から立ち上がって背伸びをした。

「あー、疲れた。これでもう今日は誰かに会う予定はないわね」

リーゼは、やれやれといった風に溜め息を吐くと、懷から革紐に結ばれた全く同じ形の青色の宝石を3つ取り出した。

「さてと、街でこの内の2つを売って、そのお金でぱーつと買い物でもしましょ。エイラも何か欲しいものがあつたら言いなさい、買ってあげるわ」

「リーゼ様、アイザック様は本当に素敵な男性だと思いますが、結婚のお相手としては不足なのですか？」

渡された花束とリーゼを交互に見比べながら問いかけるエイラに、リーゼは少し唸った後、アイザックの出て行った中庭の出入り口に視線を送って口を開いた。

「あー、そうね、いい人だと思うわ。顔もいいし、優しいし、仕事もできるし、結婚したらきっと大切にしてくれると思うわ。私はする気にはなれないけど」

「何故ですか？」

「お父様と思考が一緒だからよ。私と結婚してイステール家を継いだとしても、贅沢をすることなんてまずないでしょうね。湯水の如くお金を使いたいとまでは言わないけど、お父様とお母様みたいに一生節制生活をするなんて私はごめんだわ」

「……」

一方その頃、街の外側寄りの商業区画を出発した一良たちは、アルカディアン虫をもつと高値で売るべく、街の中心付近にある高級商業区画へとやってきていた。

街の中心に近づくに連れて周囲の建物は立派になってゆき、3階建ての立派な建物も数多く見られ、聖堂のような大きな建物も見られた。

道を行き交う人々の身なりも建物同様立派になってゆき、所々に警備兵の姿も見られる。

一良たちは周囲をキョロキョロと見渡して食料品店を見つけると、店の中に入ってしまった。

店の中には、先程までいた商業区画の食料品店では目にしなかった食べ物もいくつか陳列されており、食料の高騰も相まって値段も相当なものである。

「いらつしゃいませ、何をお探しでしょう？」

店に入ると、すぐに奥から店主の中年男が現れた。

着ている服は見るからに素材がよさそうで、なかなか裕福そうである。

「いえ、アルカディアン虫を売りたいくてやってきたのですが、買い取っていただけませんか？」

「おつ、アルカディアン虫ですか。最近はいあんまり入ってこなくてねえ」

店主はそう言うと、バレッタから小袋に入ったアルカディアン虫を受け取って中身を確認した。

店主は中身を確認すると、袋の底を持ってアルカディアン虫をコロコロと転がし、大きさや色艶を確認しているようだ。

「ふむ、これなら8匹で15アルってところですが、いかがでしょう」

さすが高級食材を取り扱っている店。

先程までいた商業区画の店での買い取り価格は12アルだったのに比べ、3アルも高い15アルで買い取るという。

「うーん、15アルですか……もう少し高く買い取ってはいただけないでしょうか？」

「ううむ……申し訳ありませんが、うちでは15アルが限界ですね」

バレッタは折角高級商業区画にまで来たのに最初の店の価格で売ってしまうのはもったいないと思い、ダメもとでお願いしてみたのだが、この店では15アル以上は出してはくれないようだ。

バレッタは店主に他の店も回ってみる事を伝え、アルカディアン虫を仕舞って店を出るのだった。

「では、次の店に行きましょうか」

「あの、提案なんですけど、バレッタさんがアルカディアン虫を売っている間に、私が釘を買っておくっていうのはどうでしょう？ 時間の短縮になると思うんですけど」

「えっ……一良さんが一人でですか？」

先程より高値でアルカディアン虫が売れるという事がわかり、意気揚々と別の店へ向かおうとしているバレッタに一良がそう話し掛けると、バレッタは不安そうな表情で一良を見た。

「大丈夫ですよ。お店にはそれぞれ値段が書かれた板とか石がありますから、法外な値段をふっかけられたりはしないと思います」

「私もついていくから平気だよ！」

目を合わせて「ねー」と微笑み合っている一良とミュラを見て、バレッタはくすつと笑った。

「そうですね。では、釘の調達はお願いします。お金はこれを……」

「あ、お金は大丈夫です。一応私も国から売れそうなものを持ってきましたから」

先程薪を売ったお金を袋から取り出そうとしているバレッタに、一良は自分の荷物が入ったズタ袋を持ち上げてみせる。

バレッタは一良の持っている袋と一良を交互に見て、何を売るつもりだろうかと少しだけ不安になったが、一良だったらヘタなものを売ったりはしないだろうと思い直した。

「わかりました。では、もしお金が足りないようなら取りに来てください。釘は100本の束で大体40アル程だと思いますから」

「了解です」

一良はそう言って先ほどとは別の食料品店に入っていくバレッタ

を見送ると、広場を見渡して雑貨屋と思われる様相の店を見つけ、ミユラと手を繋いだままその店へと向かうのだった。

「こんにちはー、買い取ってもらいたいものがあるのですがー」

一良は雑貨屋の中に入ると、店の奥に向かって声を掛けた。

店の中には動物の形に削られた木の小物や、ピカピカに磨かれた銅の手鏡など、色々な商品が陳列されている。

奥の店の方に行けば行くほど高そうなものが陳列されており、中には緑色のトルコ石のような色のついた石のネックレスなども置いてあるようだった。

ミユラは店の奥のほうに置いてある銅の手鏡を見つけると「わぁ」と声を上げて駆け寄り、手で触れないように気をつけながら珍しうに鏡に映った自分の顔を覗き込んでいた。

「はいはい、何をお売りいただけるのでしょうか？」

店の奥で椅子に座りながら帳面を付けていた店主と思われる上品な服を着た老婦人は、一良が声を掛けると作業の手を止め、実には人の良さそうな笑みを浮かべて揉み手をしながら一良の元までやってきた。

一良は持っていたズタ袋から穴が10個程開いている木製のオカリナを2つ取り出すと、それを一つ老婦人に差し出した。

それは日本の個人雑貨店で2980円で買った手作りのオカリナで、表面にはニスが塗っており、綺麗な光沢を放っている。

「これなんです、買い取っていただけますかね？」

老婦人はオカリナを受け取ると、それをしげしげと眺め、手で撫でて肌触りを確認しているようだった。

「ええと、これは何ていいましたかねえ、歳の所為かド忘れしてしまつて……えーと」

「オカリナですけど、知ってるんですか？」

手に持ったオカリナを眺めながら首を傾げている老婦人に一良がそう聞いてみると、老婦人は

「ああ、そうそう、オカリナでした。歳をとるとどうも物忘れが酷くていけませんねえ。へっへっへ」

そう言つて笑っている老婦人に、一良は

「（オカリナつてこの世界にも存在するのか。こりゃ売るのにも困らなさそうだ）」

と、かなりの昔からある楽器だということをネットで調べてから調達してきた甲斐があったと内心喜んだ。

「それで、そのオカリナを二つとも売りたいんですけど、幾らで買い取ってもらえますかね？」

一良の問いかけに老婦人は難しい顔をしてオカリナを撫で回しながら暫く唸ると、若干渋い顔をして口を開いた。

「最近じゃオカリナは買い取っても売れ行きが悪くてねえ。いくらツヤのある珍しい木を使つていても、こんなに小さなものじゃ置物

としてはあんまり人気がないんですよ」

そう言っただけでもオカリナを撫で回している老婦人に、一良は老婦人がオカリナを何か別のものと勘違いしているのかと考え、笑いながら

「やだなあ、オカリナは置物じゃなくて楽器じゃないですか」

と言っただけで自分の手に持っていたオカリナを口に当てると、ピロピロと音を出して見せた。

その音色に、銅の手鏡を見ていたミユラは走って一良の元に戻ってくる

「わあ、綺麗な音……いいなあ」

と一良を見上げた。

オカリナの音を聞いて老婦人は目を点にして固まっていたのだが、一良はそれに気付かずオカリナを吹くのを止めてミユラに微笑みかけると、

「はい、吹いてごらん」

と言っただけでオカリナをミユラに手渡した。

ミユラはオカリナを受け取ると早速口をつけ、嬉しそうにピロピロと音を出している。

一良はその様子を微笑ましく見て老婦人に視線を戻そうとすると、老婦人は慌てて驚いた表情を取り繕い、先程と同じく人の良さそうな笑顔を見せながら揉み手をした。

「そ、そうでしたそうでした、オカリナは楽器でしたねえ。でも、

先程言ったようにあんまり人気がなくて売り難いんですよ……お客さんは大体幾らくらいで売りたいと思っっていますかね？」

「え？ ……うーん、そうだなあ」

老婦人の言葉に一良は腕組みして唸った。

自分が村から一生懸命運んできた薪が全部で62アルだったので、木のオカリナがそれより高いということはないだろう。

何しろ老婦人が言うにはこの世界にもオカリナは存在しているよーだし、話からするとそれほど高いものではないらしい。

一良はとりあえず、これくらいの値段で売れたらいいな、という希望を込めて高めに言ってみることにした。

「1個20アルでどうですかね？」

「ぶっ！？」

一良の提示した金額を聞いて、余程あり得ない金額だったのか、老婦人は吹き出してむせ返っている。

老婦人の反応を見て、一良は幾らなんでも高すぎたかと、慌てて値段を訂正した。

「あつ、ウソウソ、冗談です！ 2つ合わせて20アルでどうですか？」

「ふ、2つで20アル！？ わかりました、今お金を持ってきますから少々お待ちを！」

一良が値段を訂正すると、老婦人は慌てた様子で奥に戻り、すぐに2枚の銅貨を持って戻ってきた。

「はい、20アルですね、確かに……ううむ、これじゃあ釘の値段には届かないな」

10アル銅貨を2枚受け取り、ミユラの吹いていたオカリナも老婦人に渡すと、一良は自分の袋の中身を思い返ししながら少し考えた。そんな一良の対面では、2つのオカリナを受け取った老婦人がホクホク顔でオカリナを撫で回している。

一良はそんな老婦人を見て、

「（よっぽどオカリナが好きなのかな？）」

と見当違いな事を考えながら、再度店の中を見渡した。

すると、店の奥のほうに置いてある様々な色の石が目に入った。

透明度が低く加工も荒いようではあるが、小ぶりのサファイアのような宝石も見られる。

それを見て、一良は袋を覗き込むと直径2cm程の丸い一粒の紅水晶を取り出した。

その紅水晶は日本のいつも通っているホームセンターの傍にある土産物屋で買ったもので、パワーストーンのコーナーに様々な石と一緒に大量に売られていたものを、異世界で売れるかもしれないと思っただけで買っただけだ。

機械で真円にカットされた紅水晶（ローズクォーツとも呼ぶらしい）は透き通ったピンク色がなかなか美しいのだが、大量生産されているためか、一粒250円ととても安かった。

「あの、これも買い取っていただきたいんですけど、どうですか？」

一良がそう言って老婦人に税込み250円の紅水晶を差し出すと、老婦人は撫で回していたオカリナを近くの棚に置き、何故か手を震

わせながら紅水晶を受け取った。

「え、え、ええ！ 買い取れますとも！」

老婦人は食い入るような目で掌に乗せた紅水晶を見つめ、ニヤリとした笑みを浮かべているように一良には見えて驚いたが、一度瞬きをすると元の人の良さそうな笑みでにこにこと一良を見ていたので、見間違えかと思う事にした。

「そうですか、それはよかった。幾らで買い取ってもらえますかね？」

「そうですねえ……これだとまあ、2000アルといった所ですかね」

「2000アル！？ これが2000アルだって！？」

2000アルという思いもよらぬ凄まじい金額に、一良は思わず大声を出して老婦人の持っている紅水晶を摘み取る。

そして先程の老婦人のように食い入るような目で紅水晶を見つめていると、何故か慌てた様子で老婦人が口を開いた。

「ああつ、いい間違えました！ 2000アルです！ 2000アルで買い取らせていただきます！！」

「……は？ 2000アル？」

「ええ！ 2000アルで買い取らせていただきます……す？」

いきなり大声を出されて紅水晶を奪い返された老婦人は、今までに見た事もない美しい宝石を前にして極度の興奮状態に陥っていた

こともあり、あまりにも安すぎる値段を言ったために一良が激怒したと勘違いをしてしまった。

2000アルという値段で買い取ったとしても、軽く見積もっても3000アル以上で確実に売れると確信していたために咄嗟に2000アルで買うなどと口走ってしまったのだが、ポカンと口をあけて自分を見ている一良を見て、自分がとんでもないミスをしてしまったことに気付き、一気に血の気が引いていくのを感じた。

「カズラ様、こっちに置いてある石、1200アルって書いてあるよ。高いねー」

老婦人は慌てて値段を訂正しようと口を開きかけたのだが、それを遮るようにミユラが店の奥で宝石の置いてある棚を見上げながらそんなことを言ってしまったので、今更訂正するわけにもいかなかった。

一良はここにきて、ようやく自分が騙されかけていたことに気付いた。

今までのやり取りを思い返してみると、先程売ってしまった才力リナも相当買い叩かれてしまったと思われるが、既に取引は成立してしまっただ後であるし、紅水晶が安値どころか爆安価格で買い取られなかっただけマシである。

一良は大きく溜め息をつくと、自分の考えの甘さを反省し、才力リナのことは授業料として諦める事にしたのだった。

「あーっと、じゃあ2000アル……いや、2500アルで買い取ってもらえませんか？ 嫌なら他に行きますけど」

老婦人はミスさえしなければ一良を騙してばる儲けができたはずだったが、例えば2500アルで買い取っても十分な儲けを得る事が

できる。

老婦人は自らの迂闊さを呪いながら、消え入るような声で

「……まいどあり」

と呟くのだった。

21話：お嬢様の悩み

「わあ、これが100アル銀貨なんだ。私初めて見たよ」

100アル銀貨を見たいとせがむミュラに、一良は老婦人から受け取った25枚の100アル銀貨から1枚を手渡した。

100アル銀貨は1アルや10アル銅貨と同程度の大きさだが、刻まれている模様は10アル銅貨よりも細かいように見える。

ミュラは嬉しそうに銀貨を受け取ると、銀貨をコンコン叩いたり何故か軽く齧ってみたりと弄繰り回して遊んでいる。

一良はそんなミュラを横目で見ながら、先程受け取った紅水晶を真剣な表情で色々な角度から眺めている老婦人に話を切り出した。

「さてご婦人、一つ提案があるのですが」

「ああ、これを誰から買い取ったかなんてことは誰にも言わないし、お前さんが何処で手に入れたかなんてことも聞くんもりはないよ。次からは適正価格で買い取ってやるから幾らでも持っていておいで」

「……回転早いつすね」

老婦人は紅水晶を眺めたまま、まるで一良が何を言うのか判っているかのように淡々とした口調で切り替えした。

まだ提案の内容を言っていないにもかかわらずにそう切り替えされてしまった一良は少々面食らったが、老婦人の発言はこれから一良が話そうと思っていた内容に沿っていたので、話が早いのはありがたかった。

「お前さんが袋からこの宝石を出した時に、少し袋の中で選んてい

る様子だったからね。他にも何か持つてるんだろ？ さっきのオカリナといい、こんなに高価なものをお前さんみたいな田舎者が持っているなんて、真つ当な手段で手に入れたとは思えないからね」

「いや、別に悪いこととして手に入れたってわけじゃ……」

まるで何処からか盗んできたかのように言われ、一良は困った表情をしたが、老婦人は

「ああ、別に入手先なんてどうでもいいよ。私は儲かりさえすれば他は気にしないからね」

と、紅水晶から一良に視線を移してニヤリと笑みを浮かべた。

一良としては悪党のように思われてしまうのは癪だが、深く聞かれないならそれに越したことは無い。

持ってきた紅水晶やオカリナが相当な金額で売れるというのであれば、あちこちで売り歩いてはかなり目立つ事になるだろうし、出来ることなら取引店は目立たないように1箇所に絞りたいのだ。

先程、目の前にいるこの老婦人に販売金額をまんまと騙されかけて（オカリナは騙されたが）、ようやく危機意識を持つ事ができたのだが、ここで騙されておいて本当によかったと一良は自身の今までの能天気さを振り返るのだった。

そうですか、と一良が適当に相槌を打っていると、老婦人は紅水晶を近くの商品棚に置いて一良に向き直った。

「それで、その袋に入っている他の物も売ってくれるのかい？ 別にもう騙したりはしないから、安心してお出し」

そう言って再び人の良さそうな笑みを浮かべながら揉み手をして

いる老婦人に、一良は一つ溜め息をついた。

「残念ですけど、今日持ってきたのはそれで全部ですよ。それに、例え品物を持っていたとしても、はいそうですかとまた出したりしたら、まるで私は馬鹿丸出しじゃないですか」

「ほう、さすがにそれくらいは判るのかい。完全な馬鹿じゃなくてよかったよ」

一良の返答に老婦人は声を出して笑うと、ただどね、と言葉を続けた。

「あんた、幾らなんでも無防備すぎるよ。たまたまかどうかは知らないが、今日は私のところに来たからよかったものの、他の店であんたみたいな田舎者がこんな高価な宝石を出したりしたら、盗品と疑われて衛兵を呼ばれてもおかしくない。役人の家族が経営してるような店でこんなもの出したら、一発で終わりだよ。この街の役人は融通が利かないのが多いからね」

「……ご忠告ありがとうございます」

自分を騙した相手に説教をされるのは癪だが、老婦人の言っている事は一良にとって凶星である。

一良がしゅんとした様子で肩を落としていると、老婦人は溜め息を吐いた後に、店の奥に向かって声を掛けた。

「嬢ちゃん、その棚は私の持っている鍵を使わないと開かないよ。棚に入っている100アル銀貨と比べなくても、さっき渡した銀貨は本物だから安心おし」

老婦人の言葉に一良はびっくりして店の奥へ目をやると、いつの間にか店の奥へと移動していたミュラが、老婦人がお金を出していた棚の引き出しを開けようとして取っ手を引っ張っていた。

声を掛けられたミュラは驚いたのか、一瞬びくつと肩を揺らしていたが、まだ100アル銀貨が本物なのか疑っているらしく、訝しげな視線を老婦人に向けている。

今までの楽しそうに店内を見ていた表情から一転、あからさまな敵意を持った視線で老婦人を見つめているミュラに、一良は少々驚いた。

老婦人はやれやれと言って懷から鍵を取り出すと、ミュラの元まで行つて棚の鍵を開けた。

「気の済むまで確認おし。ガイエルシオール様に誓つて偽金なんて置いてないよ」

老婦人がそう言うと、ミュラは早速手元の100アル銀貨と棚の中の銀貨を真剣な表情で見比べ始めた。

老婦人は銀貨を見比べているミュラに目を向けたまま、

「全く、この嬢ちゃんの方がよっぽどしっかりしてるよ。お前さんもしっかりしな!」

と言つて、一良の背中をバンと叩く。

一良は

「肝に銘じておきます……」

と小さく頭垂れるのだった。

「私、あのおばあさん嫌い。カズラ様を騙すなんて信じられない！」

老婦人の店を出てすぐ、ぶすつとした表情でミュラは吐き捨てるように言った。

ミュラが満足するまで100アル銀貨を確認させた後に店に置いてあった釘も購入したのだが、あまりにもミュラが不機嫌そうに老婦人を睨んでいたため、さすがの老婦人も居心地が悪かったのか、今後ともよろしくという言葉と共に40アルで釘を200本売ってくれた。

更に店の奥から布の小袋に入った豆の焼き菓子を持ってきて、ご機嫌取りとばかりにミュラに差し出していたが、結局ミュラの機嫌は直らなかった。

ミュラは不機嫌な顔をしながらも、しっかりと焼き菓子を受け取っていたのだが。

「うん、人を騙すのはよくないよね。俺がボケつとしてたのも悪かったんだけど」

「カズラ様は悪くないもん。悪いのはカズラ様を騙したおばあさんだもん！」

ミュラは一良が騙されたことが余程許せないのか、若干涙ぐんだ瞳で一良を見上げる。

そんなミュラを慌てて一良がなだめていると、視界の端にこちらへと向かってくるロズルーとターナの姿を見つけた。

背負っていた薪や毛皮が無く、代わりに何かが入っている布袋を背負っている事から、全ての取引を終える事が出来たのだろう。

「おつ、ミュラちゃん、あそこにお父さんとお母さんがいるよ。も

「用事は済んだみたいだね」

一良がそう言うのと、ミユラは今までの不機嫌な表情から一転して明るい表情になり、

「あつ、ほんとだ！　おとーさん、おかーさん！」

と大声で両親を呼びながら駆け出した。

一良はタイミングよく現れた二人に感謝しつつ、走っていったミユラの後を追おうと歩き出すと、不意に斜め前方から現れた誰かの側頭部が一良の鼻っ面に激突し、一良はその衝撃でその場に尻餅をついた。

「い、痛つてえ……」

「ご、ごめんなさい！　余所見していて……いたた」

「ちょっとエイラ、何やってるの！」

一良が痛む鼻を手で押さえながら声のする方を見ると、侍女服姿の女性が頭を押さえながら呻いており、その脇から上質な白いドレスを纏った物凄い美少女が慌てた様子で一良の元へと駆け寄ってきた。

「私の供の者が申し訳ありません！　走っていった子供を見て余所見をしていたら、貴方様とぶつかってしまったようです……大丈夫ですか？」

「え？　あ、いや、大丈夫ですからお気になさらず」

ドレスの裾が汚れるのも気にしない様子で、その場にしゃがみ込んで心底心配そうな表情で一良の肩に手を掛けてきた少女に一良は戸惑った。

ぱつと目で判断したところ、その辺にいる人たちと比べて服装が格段に上質であり、従者まで従えているのである。

そのような身分の高そうな人間が自分のような田舎者にこのように接する事自体驚きだが、それ以前にリーゼのあまりの美人っぷりに、一良は自らが赤面してくるのを感じた。

「お荷物の中身が出てしまっていますわ。エイラ、あなたも拾うのを手伝って」

「は、はい、申し訳ありませんでした」

少女の言葉に、一良は地面を見て血の気が引いた。

尻餅をついた拍子にズタ袋の入口が開いてしまっており、中身がいくつか地面に転がり落ちているのだ。

だが、見たところ袋から出てしまっている物は万が一を思って袋の上のほうに入れておいた青銅の鍋や木のコップであり、日本から持ってきた缶詰やランタンは底のほうに仕舞っておいたためか、外には出ていなかった。

一良は慌てて袋から出てしまった荷物を拾い、二人が拾ってくれたものと合わせてささつと袋に入れた。

「あら、靴の下に何か……」

目に付く荷物を大急ぎで袋に入れて一良がほつと息をついていると、少女はかがんで自らの靴の下にあった何かを拾い上げた。

……ライターだった。

「す、すいません！　それも私の荷物でして！」

「そうでしたか、お返しします……あら、これは何……っ!？」

少女は手に持ったライターを一良に渡す際、妙にへこむ点火スイッチを不思議に思ったのか押し込んでしまい、見事に点火。

ワンボタンのライターであった上に、薪に火をつけるために火力メモリを最大にしてあったため、結構な大きさの火が出てしまった。

火が出たことに驚いた少女は、驚きのあまりに手を引っ込めてしまい、その拍子にライターを取り落とした。

その様子を見ていた侍女服姿の女性——エイラ——も、ライターから立ち上った炎に、目を点にしている。

「リーゼ様！」

驚いて手を引っ込めた少女——リーゼ——に、一良たちの様子を遠巻きに見ていた数名の野次馬の中から、平民服を着た二人の若い男が駆け寄ってきた。

男たちは街中にも関わらず、腰に剣を挿している。

「リーゼ様、どうなさいました!？」

「えっ!？　今火が……」

「貴様、何をしている！　動くな！」

リーゼと呼ばれた少女が取り落としたライターを一良が慌てて拾おうとすると、男の一人に一瞬で腕を捻り上げられて拘束された。恐らく、この男達はこっそりついてきたリーゼの護衛なのだろう。

「あいたつ！ わ、私は何もしてませんよ、本当です！」

やはり高貴な身分の人物だったかと、一良は自分の運のなさに内心悪態を吐きながら弁明してみたものの、ライターを拾い上げられたら一貫の終わりである。

いきなり罪人として処分されるようなことはないをお願いしたが、連行された上で一良の荷物について厳しく追求されてしまうことは確実だろう。

さらば村でのマツタリ異世界ライフ、などと一良が悲観していると、リーゼの後ろからロズルーたちが駆け寄ってきた。

「あの、私の連れが何か粗相を？」

ロズルーが一良の腕を捻り上げている男に声を掛けると、男は鋭い視線でロズルーを睨み付けた。

「何っ、貴様らもこいつの仲間か！ こいつはナルソン様のご息女であられるリーゼ様に危害を加えたのだ。貴様らも取り調べるから、詰め所まで来てもらおうか！」

「待ちなさい！ この方は私に何もしていません！」

「そ、そうです！ 元はといえば私がぶつかったのが悪いのであって、この方は何もしていません！」

ナルソンのご息女という言葉にロズルーは一瞬硬直したが、すぐに頭を深く下げて謝罪を述べる。

一良も、これはえらいことになったと捻られた腕に妨害されつつ謝罪を述べて頭を下げた。

それでも二人の謝罪など一切無視し、腰元から縄を取り出して問答無用でロズルーたちまでも拘束しようとする男に、リーゼとエイラは慌てて割って入る。

今まで、父親の私兵が尾行していることにリーゼは何となく気付いていたが、今回のように直接関わってくる事は初めてだった。

「しかし……」

「彼を放しなさい。二度は言いません」

「……はっ」

リーゼが有無を言わさぬといった風にそう命ずると、男はしぶしぶ一良を拘束している手を放した。

ロズルーは一良が開放されたのを確認すると深々と一礼した。
一良たちもロズルーに習い、リーゼに対して深く頭を下げる。

「リーゼ様、ありがとうございます。それでは私達はこれで失礼いたします」

「あ、待つてください。先程落とした火の出る……あ、あれ？」

立ち去ろうとする一良たちに、リーゼは先程落としたライターについて聞こうと足元を探したが、ライターは何処にも落ちていない。そんな様子のリーゼに、ロズルーはもう一度、失礼します、と声をかけると、一良の背を押して広場の入口へと歩き出すのだった。

「カズラ様」

リーゼたちからある程度離れた所で、ミュラが差し出してきた手を一良が取ると、ミュラの手の中にはライターが握られていた。

リーゼたちがやり取りをしている間に、地面に落ちていたライターをミュラがこっそり回収していたのだ。

その様子を視界の隅で確認していた一良は、ミュラからライターを受け取って袋に入れると、

「ありがとう。助かったよ」

と言ってミュラの頭を優しく撫でた。

頭を撫でられたミュラは、

「うん！」

と嬉しそうに返事をする、再び一良と手を繋いで満足そうにしている。

「本当に危なかったですね。リーゼ様がああ言ってくださらなかったら、今頃どうなっていたことか」

「リーゼ様……さっき、私の腕を掴んでいた男がナルソン様のご息女と言っていましたね」

ほっとした様子のロズルーに一良がそう言つと、ロズルーは、ええ、と頷いた。

「リーゼ様はまだ歳若いにも関わらず、とても優しくて我々平民に

対しても慈悲深く接してくださるという噂は聞いていたのですが、本当のことだったみたいです。さすがはナルソン様のご息女であられる」

「近隣の有力者が沢山言い寄ってきているって話も聞きましたけど、イステール家のご令嬢という上に評判も良くて美人というなら、文句の付け所がありませんよね。言い寄る方が多いのにも納得できます。それに、若いながらに剣や槍の腕前も相当なものらしいですよ」

歩きながら關心しているロズルーとターナに、一良は、なるほど、と頷いた。

「ふむふむ、天は二物を与えずとは言いますが、凄い人もいるものですね」

「天は二物を与えず？」

一良の言った諺に、ロズルーとターナは小さく首を傾げている。

「天は一人の人間に、それほど多くの長所や才能を与えないという、私の国で使われている諺ですね」

ロズルーたちとそんなことを話しながら歩いていると、広場の入口に立っているバレッタを見つけた。

バレッタも一良たちに気づき、小さく手を振ると歩み寄ってきた。

「ロズルーさんたちと一緒にだったんですね。釘は買えましたか？」

「ええ、200本程買えました。これで水車作りも出来そうです」

一良の言葉にバレッタはほっとしたように微笑んだ。

「カズラ様の持ってきた宝石が2500アルで売れたんだよー」

「えっ!？」

「ちょ、あんまり大きな声で言わないで!」

一良はミユラの口を慌てて押さえながら、目を丸くしているバレッタたちに先程の雑貨屋での一件を説明するのだった。

その日の夜。

蝋燭の明かりに照らされたそれなりに豪華な一室で、リーゼは両親と夕食を摂っていた。

その部屋の広さは日本で言うところの畳12畳程度で、家族で食事を取る際に使うただけにナルソンが設え^{あつら}させた部屋である。

部屋の床には動物の毛皮で作られた絨毯が敷いてあり、今は火が灯っていないが壁には暖炉が1つ設置されている。

部屋に1つだけ設置されている窓は開け放たれ、その先には屋敷のあちこちに設置されている蝋燭の明かりに照らされた中庭が見える。

季節は夏という事もあり、窓から時折入り込んでくる夜風が心地よく、虫たちの奏でる音楽がなんともいえない良い雰囲気を作り上げていた。

3人が食事を摂っている長テーブルはそれほど大きいものではなく、あと2人分も食器を載せればテーブルの上は一杯になってしまっただろう。

ちなみに今晚のメニューは、個人のものは塩をまぶして焼いた川魚に、豆と葉物のスープとパン、それにデザートのカットフルーツである。

それとは別に、肉と野菜の炒め物が盛られた大皿がテーブルの中心に置かれている。

「リーゼ、毎月多くの者がお前に求婚しに来ているが、気に入った男は見つかったか？」

ほぐした魚をフォークで口に運びながら問う自らの父親に、リーゼは内心溜め息を吐きながらも、表面上は少し困ったような笑顔で答える。

「いえ…… 会いに来てくださる方々はどなたもとても素敵の方ですけど、私はまだ結婚なんて考えられなくて……」

リーゼがそう答えると、ナルソンはそうかそうかと笑顔で頷いた。

「まあ、焦らずともその内お前も気に入るいい男が現れるだろう。お前が気に入った男であれば、貴族ではなく平民出の者でも構わんからな。ただし、イステール家の者となったら私が徹底的に鍛えるが」

もう結婚させる気満々でアイザックを鍛えてるじゃないか、という言葉をリーゼは心の中で呟くと、ありがとうございます、と笑顔を作った。

リーゼとしては、平民出でも構わないといった気遣いこそいらぬお世話であり、貴族以外の者と結婚するつもりは更々ない。

他の貴族の娘のように、親が勝手に決めた者と強制的に結婚させられないことには感謝しているが、出来ることなら金持ちの貴族と

結婚したいのだ。

今まで、リーゼは特に不自由な生活を送ってきたわけではないが、他の貴族や王家に比べて明らかに華やかさが欠ける生活に対して、どうにもコンプレックスに感じていた。

私生活で着る服や、他領の来賓を招く部屋などは比較的豪華にあつらえてあるが、それ以外では極力出費を抑えた生活を送らされている。

ただでさえイステール家は、バルベールとの戦争の為にここ十数年で財政が急激に悪化しており、その節制度合いは前にも増して徹底してきているため、優雅な生活など夢のまた夢だ。

今から4年前、領主会議に参加するナルソンに連れられて王都へ行った際に目にした、王族や取り巻き貴族達の優雅な暮らしぶりには衝撃を受けた。

王都では、まだ10歳程だったが早くも美しさが際立ち始めていたリーゼに対し、沢山の貴族がリーゼに寄ってきては声を掛けてきた。

更には、リーゼが将来美人になると確信した者たちが少しでも自分を印象に残そうと、美しい服や宝石といった豪華な贈り物を山のように贈ってきたのだ。

その後、ナルソンは何故かリーゼを王都へ連れて行くことはなくなってしまったが、あの強烈な印象は今でもリーゼの心に残っており、自らも貴族なのにあのような優雅な生活ができない事に不満を覚えるようになったのだ。

「でも、結婚する相手は慎重に選びなさいね。身分の高さや家の大きさも重要かもしれないけど、頼り甲斐があつて優しい人と一緒になったほうが絶対にいいと私は思うわ。後はあなたが夫を上手く教育して、足りない部分を補えばいいのよ」

そう言って微笑む母に、リーゼは、はい、と笑顔で返事をしたが、内心複雑な気持ちであった。

母の名前はジルコニア。

歳はまだ26歳で、バルベルとの戦争が始まる直前、つまり10年前に父のナルソンが再婚した、兵士出身の平民出の女性である。ジルコニアは肩に掛かる程度まで伸ばされた銀髪に、無駄な贅肉の無い均整の取れた身体をしていて、おっとりとしたたれ目が印象的な顔立ちである。

リーゼのように特別美人といったわけではないが、親しみやすい雰囲気を持った女性である。

リーゼの本当の母親はリーゼが3歳の時に病死し、それからリーゼが5歳になるまでリーゼには母親がいなかった。

そのため、ジルコニアがやってきた当初こそリーゼは人見知りをして打ち解けられなかったが、リーゼと仲良くなろうと積極的なジルコニアの姿勢もあって、二人はすぐに打ち解ける事ができた。

しかし、リーゼが初めて王都へ行ってから1年が経った頃、リーゼはジルコニアの取る一つの行動が鬱陶しく感じるようになっていた。

というのも、リーゼに面会に来る客人をジルコニアが独断で選別していることを、侍女のエイラから聞いて知ってしまったからだ。

それまで、リーゼの美しさの評判を聞いて面会を求めてくる貴族や豪商が何人もいたが、リーゼと面会できたのはジルコニアが許可した者だけである。

王都からやってきた大貴族や、拳句の果てには隣の地域を治めている大貴族のダイアス、グレゴルンまでも、ジルコニアの判断で面

会を許される事はなかった。

もちろん、ジルコニアが面と向かって拒否したわけではなく、ジルコニアに言われたナルソンがあれこれと嘘の事情を言って断っていたのだが、リーゼにしてみれば大きなお世話である。

元々大貴族であったイステール家は、バルベールとの戦争で多大なる働きを見せて発言力も更に大きくなっており、リーゼとの面会を断られた貴族達も強く出ることができず、不満を持ちながらも面会を諦めて帰っていくしかなかった。

何を基準にして面会の可否を決めているのかは分からないが、ジルコニアの独断で決められてしまうのには納得がいかない。

しかし、ナルソンまでも協力しているとあつては反発することもできず、リーゼとしては我慢するしかない。

日頃から休みも取らずに激務に追われていてなお、娘との時間だけはしっかりと確保する両親を見ていては、反発などできるはずもなかった。

そこで、とりあえず今は両親に対して従順に振舞っておき、いつか王都へ行く機会が巡ってきた時に優良物件を手にするべく、自らの評判を少しでも上げるために、ジルコニアの選別を潜り抜けて面会に来た人には勿論の事、街の住人に対してでさえも極力好感を持たれるように振舞っているのだった。

「それはそうと、今日アイザックに国境沿いに建設している砦の視察を命じたのだが……」

リーゼの気持ちを知ってか知らずか、ナルソンは自らの押しているアイザックの話題を口にするのだった。

「ああもう！ 私にどうしろっていうのよー！！」

両親との夕食を終えて自室に戻ったリーゼは、柔らかな天蓋付きベッドに倒れこむと、枕に顔を押し付けて絶叫した。

最近、両親は食事の時に毎度のようにアイザックの話題を出してくるのだが、リーゼとしてははつきり言っただうでもいい。

アイザックを押ししたい気持ちは判るのだが、結婚相手を自由に選ばせてくれるのなら、特定の人物を押すような真似は止めてもらいたいものだ。

リーゼがなおも

「アイザックなんてどうでもいいのよ！ もう許してよ！」

などと、アイザックが聞いたら首を吊りそうな言葉をベッドの上でじたばたしながら枕に叫んでいると、部屋の戸がノックされた。

リーゼはすぐさま身体を起こし、ベッド脇の台に置いてある櫛で髪を整えて服装の乱れをぱっと直すと、

「はい、どなた？」

と、落ち着いた声で答えた。

「エイラです！ 失礼します！」

エイラはそう返事をする、まだリーゼが入室許可を出していないにも関わらず、慌てた様子で部屋に飛び込んできた。

「リ、リーゼ様！ どどど、どうしましょう！？」

「ちよつ、落ち着きなさい！　いつたいどうしたの？」

明らかに気が動転しているエイラに、リーゼが部屋の丸テーブルに置いてあった水差しの水をコップに入れて手渡すと、エイラは

「も、申し訳ありません」

と断ってからコップを受け取り、中の水を一口飲んだ。

「部屋でエプロンを脱いだ時に気付いたのですが、エプロンのポケットから、こ、こ、こんなものが……」

そう言つと、エイラはポケットから青みがかつた乳白色の宝石が埋め込まれた、ハート形のペンダントトップを取り出した。

ペンダントに埋め込まれた宝石は、部屋の蠟燭の光を反射してキラキラと美しく輝いている。

「……ッ!？」

そのペンダントを見た瞬間、リーゼの思考は停止した。
今まで沢山の宝石や装飾品を見たことがあつたが、ここまで美しいものは見たことがない。

「ど、どうしましょう？　恐らく、私が昼間ぶつかった方のものだと思うのですが……リーゼ様？」

リーゼはその後もしエイラに声を掛けられているにも関わらず、ペンダントに目を奪われたまま固まっており、肩を叩かれてようやく思考を取り戻したのだった。

22話：芋畑の怪

イステリアにて危うく一良の身柄が拘束されそうになった次の日、太陽の代わりに月明かりが大地を照らし始めた頃、一良たち一行はようやくグリセア村の入口付近に帰り着いた。

一行は村を出発した時と比べて遥かに身軽で、持っている荷物と言えば私用品の入ったズタ袋と、イステリアで買った作物の種が入った小さな布袋、それに加えて2羽の鳥が入っている木の檻を口ズル―が背負ってるのみである。

食料が高騰していたため、作物の種も例に漏れず高額となっていたが、一良が紅水晶を売って得たお金やアルマルの毛皮を売ったお金があつたので、今まで村では作っていなかった作物の種を数種類仕入れる事ができた。

その他にも、鶏のような外見の根切り鳥という鳥（草の根を掘り起こして食べることから付いた名前らしい）をつがいで購入した。

この鳥は1週間に1つ程度卵を産むとのことで、上手く繁殖させて増やす事ができれば、村人たちの食卓も若干ではあるが豊かになるだろう。

ただし、根切り鳥の卵は孵化しても雛が大きくなる前に死んでしまふことが多いらしく、3年という短い生涯で5羽も孵化して成長すれば御の字ということらしい。

その上、羽は退化して飛ぶ事は出来ないとのことで、よく今まで絶滅しなかったなと根切り鳥の説明を聞きながら購入する際に一良は思ったのだが、そこは人間がうまいこと調節していたのだろう。

ちなみに、根切り鳥はつがいで800アルもした。

それらとは別に、一良の背負っているズタ袋には、村人達がよく着ているような服に使う布地の反物が2反入っている。

今までのようにこちらの世界で日本から持って来た服を着ている

のはあまりにも目立つので、バレッタの提案で服を仕立てる事になったのだ。

一良は出来合いの服を買ってしまおうかとも考えたのだが、バレッタが普段の礼に自分が繕うと強く主張したので、お言葉に甘えることにした。

村の入口を抜けて村長邸に辿り着くと、村長と数人の村人が帰り着いた一良を見てホッとした様子で出迎えてくれた。

「カズラさん、長旅お疲れ様でした。ささ、温かい夕食が出来ていきますから、荷物を置いて食べてください。他の皆も上がって食べていってください」

「ただいまです……おお、焼き魚と炊き込みご飯ですか。これは豪華ですね！」

村長に促されて屋敷の居間に上がると、そこには既に一行全員分の夕食が用意されており、食欲をそそるいい匂いが漂っていた。

囲炉裏には木の串で串刺しにされた川魚が塩焼きにされており、鍋には山菜の他に何かの肉が入れた炊き込みご飯が炊けている。川での漁は普段は行わないといったことを以前にバレッタが言っていたので、疲れて帰ってくるであろう一行のために村長たちが川で釣ってきてくれたのだろう。

ここ4日間、一良たちとしては缶詰と塩汁の食事ばかりだったため、鍋で作った温かい食事や焼き魚は大変ありがたい。

「カズラ様、足をどうかなさったのですか？」

それぞれが背負っていた背負子やズタ袋を下ろす中、一良も背負子を下ろそうとしているのを見て、食事の準備の手を止めて手伝い

に寄つてきた村娘の一人が、一良の足に巻かれた包帯に気が付いた。

「ええ、普段沢山歩いていない所為か足裏にマメが出来た上に潰れてしまったんです。包帯をぐるぐる巻きにして痛みを誤魔化しているんですが、やっぱりちよつと痛いですね」

そう言つて恥ずかしそうに頭を掻く一良を見て、村娘は一瞬怪訝そうな表情をしたが、そうなんですか、と相槌を打つと一良の背から背負子を降ろした。

「カズラさん、水を汲んできました。足を洗わせていただきますから、そこに腰掛けてください」

背負子を降ろした一良が腰を押さえて背伸びをしていると、水桶と石鹼を持ったバレッタが屋敷の入口から入ってきた。いつの間にか水路に水を汲みに行っていたらしい。

「ありがとうございます。足は自分で洗いますから、バレッタさんは居間に上がって休んでいてください」

そう言つて恐縮した様子で水桶を受け取ろうと手を出した一良に、バレッタは

「いえいえ、一良さんこそ慣れない旅でお疲れでしょう？ さあ、座つて足をこちらへ出してください」

と、有無を言わさぬといった風に言つと伸ばされた一良の手を掴んでその場に座らせ、両足に巻かれている血と砂で汚れた包帯を解き、水桶に足を入れさせて優しく洗い始めた。

足を水につけられた瞬間、足裏の傷口が染みて激痛が走ったが、

そこはぐつと我慢する。

「マメが出来てしまうとは……カズラさんの普段履いている靴と違って、我々の草履が足に合いませんでしたか。申し訳ありません」

「いやいや、私が貧弱なのが悪いんですよ！ それに無理言って連れて行ってもらったのは私なんですから、謝らないでください！」

すまなそうに謝る村長の声に、一良は慌てて振り返って村長を宥める。

居間が上がっている他の村人達も、足を洗われている一良を見て心配そうな表情をしているか不思議そうな表情をしているかの二通りだ。

「カズラさん、袋から包帯とお薬を取ってもらえますか？」

一良が村長を宥めていると、一良の足を洗い終わったバレッタに声を掛けられた。

足は両方とも石鹸で綺麗に洗われ、後は消毒して包帯を巻くだけである。

「ありがとうございます。包帯は自分で巻きますから、バレッタさんも居間が上がってください」

「ダメです。私がやりますから、袋を貸してください」

「ええ……」

何故か自分で巻くことを却下され、一良は仕方なく袋から包帯とオキシドールを取り出してバレッタに手渡した。

バレッタはそれらを受け取ると、一良がここ数日していたのと同じように手早く傷口を消毒し、包帯を傷口に当て丁寧に巻きつける。実は昨夜もバレッタに半ば強制的に包帯の巻き換えなどをしてもらったのだが、他の村人たちに注目されながら足に包帯を巻かれるというのは何となく気恥ずかしい。

包帯の交換が済むとバレッタも居間に上がり、他の村人たちと同様に囲炉裏を囲んで一良の左隣に腰を下ろす。

ちなみに、一良の右隣には既にミユラが着席していた。

「さて、食べるとしましょうか」

「はい、いただきます」

一良が手を合わせてそう言うと、他の村人たちも一良と同じように手を合わせ、いただきます、と声を揃える。

「一良さん、イステリアへの旅はいかがでしたかな？」

串に刺さった焼きたての川魚の塩焼きにかぶりつき、その味に思わず一良が頬を緩めていると、対面に座っている村長が話掛けてきた。

他の村人達もそれぞれ混ぜご飯や魚を口にしながらも、興味津々といった様子で一良を見ている。

「いやあ、実に楽しかったですよ！ 今まで見た事もないような石で出来た防壁や城門、大勢の人で賑わう商業区画が見れて、驚きと感動の連続でした」

「そうですかそうですか。道中では危険な目などには遭いませんで

したかな？」

村長が一良にそう問うと、一良の代わりにロズルーが口を開いた。

「いやいや、危険な目どころか、イステリアに向かう途中でアルマルを狩ることができましたよ。おかげで街ではいい値で売ることができました」

「アルマル？ 街道沿いで狩る事が出来たのか？」

「ええ、休憩小屋で私がカズラ様と番をしていた時に、目の前に現れたんです」

ロズルーがそう言うのと、話を聞いていた村人たちから「おおー」とどよめきが上がるとともに、「さすがカズラ様だ」などといった言葉も一良の耳に聞こえてきた。

もういつものことなのでスルーしておく。

「あと、カズラさんは持参した宝石を街で売って、そのお金を村のためにって私達に分けてくれたのよ。そのおかげで、根切り鳥や珍しい作物の種も買ってこれたの」

「なるほど、ロズルーが根切り鳥を2羽も背負ってきた時は驚いたが、そういうことだったのか……カズラさん、本当に何から何までありがとうございます」

バレッタの言葉に、村長は一良に礼を述べて深く頭を下げた。

あまり驚いている様子はないので、恐らく一良が金を工面してくれたのだらうと予想していたのかもしれない。

「いえいえ、私の方こそ村の皆さんに良くしてもらっていますから」
頭を下げる村長に、同じく一良も目ごろ世話になっている礼を述べる。

そして暫し豪華な食事を楽しみながら、イステリアでの出来事（一良がオカリナを買い叩かれたことやリーゼと遭遇したことも含め）を和やかに報告し、話が一段落した頃。

そういえば、と村人の一人が口を開いた。

「村の芋畑なのですが、カズラ様たちが村を出発してから凄い事になってるんですよ」

「凄い事？」

村人の言葉に一良が問い返すと、その村人は、ええ、と頷いた。

「芋の育ち方が尋常ではなくて、凄い勢いで大きくなっていつてるんですよ。カズラ様の国の肥料は凄いなあと畑仕事をしながら毎日皆で話していたんです」

「……え？」

村人の言葉に、一良は自分の耳を疑った。

一良が持ってきた肥料は、日本のホームセンターで買ってきたごく普通のものである。

いくら今まで何も肥料を与えていなかったとはいえ、肥料を撒いて僅か数日で芋が急激な成長をするはずがない。

村を留守にしていた他の面々も、村長の言葉に顔を見合わせている。

「うむ、その事も伝えねばならなかったですな。肥料を撒いてからたった8日しか経っていないにもかかわらず、芋の葉がいつもより二回り以上は大きくなっているのです。栄養ドリンクというお薬といい、カズラさんの国の品物は素晴らしいですな」

「二回り以上つて……あの、明日の朝一緒にその芋畑に行ってもいいですか？ この目で確認したいんですけど」

「ええ、そうしていただけると私どもとしてもありがたいです。是非お願いします」

ともあれ、話を聞いただけでは芋がどれほどの成長をしているのかいまいち想像できない。

本当ならば明日は朝から水車の部品製作の進みぶりを確認しに行くつもりだったのだが、芋の成長っぷりはかなり気になる。

いくらなんでも二回り以上というのは考えにくいので、村長が大げさに言っているのだろうと一良は思ったのだが、とりあえず明日は朝一番で芋畑へ行き、それから水車の部品製作に取り掛かることにしたのだった。

次の日の朝。

長旅の疲れの余りに布団に包まって泥のように眠っていた一良は、寝過ぎすことを見越してセットしておいたアナログ式の目覚まし時計のけたたましい金属音に叩き起こされると、村長親子と朝食を摂って芋畑へと向かうべく屋敷を出た。

ちなみに、目覚まし時計が鳴った直後に、既に起きて朝食の準備をしていた村長とバレッタが音に驚いて部屋に飛び込んでくるといった一幕もあったりしたのだが、理由を説明して平謝りすると笑っ

て許してくれた。

疲れすぎてそこまで頭が回らなかったのだが、一言言ってから目覚ましをセットすればよかったと一良は反省するのだった。

屋敷を出てから少し歩き、以前肥料を撒いた芋畑に到着すると、一良は目の前に広がる光景に思わず

「なんじゃこりゃあ……」

と驚きの声を上げた。

「この通り、肥料のおかげで葉も蔓も今まで見たこともないくらいに大きくなりました。この分なら、収穫の時期には例年よりも立派な芋が収穫出来そうですね」

そう、昨日村長は大げさに言っていたわけではなく、本当に葉が二回り以上大きくなっていたのである。

目の前の畑に植えられている芋たちは、以前一良が見たときよりも遙かに長く蔓を伸ばし、畑の端に植えられている芋などはあぜ道にまで大きな葉をつけた蔓が盛大にはみ出している。

満足そうに頷いている村長の隣ではバレッタが嬉しそうに芋畑を眺めているのだが、一良としては喜びよりも疑問が先に立つ。

8日ほど前に肥料を撒いていた時の芋の葉は、パソコンで使うマウスと同じくらいの大きさだったのだが、今では大人の手のひら程の大きさになっているし、蔓も一回りほど太くなっているのだ。

これははっきり言って異常である。

「肥料を持ってきた私が言うのもなんですが、これはいくらなんでもありえないですよ。他の畑はどうなっているんですか？」

一良は地面に片膝を着くと、芋の葉を手にとって怪訝そうな表情で村長に問いかける。

そんな一良とは対象に、村長とバレッタは何がいけないのだろうといった表情をしている。

「他の畑も同じように芋や野菜が大きくなっていますが、何か問題でもあるのですか？」

「いえ、そういうわけではないんですけど、たった数日で野菜がここまで大きくなることなんて聞いたことが無かったもので」

一良はそう言いながら、目の前に生えている芋の一つを掘ってみた。

芋の葉がここまで成長しているのであれば、土の中にある芋も既に大きくなっているのではないかと考えたからである。

「よいしょ……うわ、やっぱり芋まで大きくなっていやがる」

芋の根元を掘ってみると、そこにはやはりというか、既に収穫できる程にまで大きく成長した芋が姿を現した。

大きさはスーパーで売っているMサイズの卵と同じくらいであり、以前バレッタが言っていた収穫時期の芋のサイズと同程度である。

「この間まで日照りで枯れかけていたのに、もう収穫できるくらい芋が大きくなってるなんて……肥料を撒くのとそうでないのでは、ここまで差がでるんですね」

バレッタは嬉しそうにそう言うが、一良にしてみれば最早異常事態レベルである。

しかし、芋の成長が加速したのは嬉しい誤算であることも確かだ。

別に悪いことではないので、リポDの効能と同じように、買ってきた肥料の成分の何かが芋に対して特別な効能を発揮したのだろうと一良は楽観的に考えることにした。

どの道、詳しい原因などを今ここで考えても判らないし、撒いた肥料の所為でこうなったことは確実なので、とりあえず今はそれでよしとすることにした。

「まあ……悪いことじゃないしこれはこれでいいか。それでは、私は水車の部品作りに行ってきますね。バレッタさんも一緒に来てください」

「では、私はこのまま畑の草むしりをすることにしますかな」

こうして、一良とバレッタは村長と別れ、水車の部品製作をするために森の伐採場へと向かうのだった。

一良とバレッタが伐採場に着くと、そこには既に10名の村人が集まっていた。

村人達は木を伐採する者と水車の部品を作製する者に数名ずつ分かれ、和やかに雑談しながら作業を進めていたが、一良とバレッタの姿を見つけると作業の手を止めて集まってきた。

「カズラ様、おはようございます。イステリアから戻られたのですね」

「ええ、昨晚戻りました。釘も手に入ったので、これで水車作りもバッチリです。作業の進み具合はどうですか？」

話しかけてきた村人に一良がそう問うと、その村人は自信有り気に胸を張った。

「カズラ様がイステリアへ出発する前に指示してくださった通り、水車の羽と外枠の板は完成しました。材料の木材は既に用意できているので、その他の部品もあと1日もあれば完成しそうですよ」

「えっ、本当ですか。そりや随分早いですね」

一良はイステリアへ旅立つ前に、水車の組み立てに必要な部品の部品図を全て大学ノートに書き出し、水車の製作作業に当たる村人達に見方を教えてから託していったのだが、ここまでハイペースで作業が進んでいるとは予想外だった。

一良たちの留守中に水車の製作作業に当たった村人は、ここにいる10名で全員である。

10名と言うと結構な大人数に聞こえるが、部品を作るにも木材が足りない為、森の木を切り倒す所からやらねばならない。

かなりの重労働となるため、一良たちが戻ってくるまでに半分程度でも作業が進んでいればいい方かと一良は思っていたのだが、いい意味で予想を裏切ってくれたようだ。

「これもカズラ様のおかげですよ。カズラ様が国から持ってきてくださった道具が使いやすいのもありますが、米や缶詰の食事をするようになってからというものの、長時間働いても以前に比べて大分疲れにくくなりましたし、例えば疲れても少し休めばすぐに元気になります。それに、前より力もついたみたいで、以前よりも重たい物でも運べるようになりました」

「……なんですって？」

とんでもないことを笑顔で軽く話す村人に、一良は思わず聞き返した。

「そういえば、私も最近全然疲れなくなりましたよ。昨日あれほど歩いたのに、今朝には殆ど疲れが残っていませんでしたし」

一良に問い返された村人の代わりに、バレッタがこれまたとんでもないことを言い始めた。

思い返してみれば、イステリアへの旅において疲れた顔をしていたのは一良だけである。

ミユラは行きにて少し疲れた様子を見せていたが、まだ6歳であるので仕方が無いだろう。

だが、疲れた様子を見せてもリポDを一口飲ませれば短時間で体力がほぼ全快し、帰りの道でも一良に比べれば遥かに元気だった。

イステリアまでの移動で要した時間は片道約20数時間程だったが、途中の休憩時間を差し引いても、距離に換算して片道80km近くは歩いた計算になる。

普段農作業で身体を使っている大人たちならまだしも、例え万能薬化しているリポDを飲んだとはいえ、6歳のミユラがあそこまで元気だったということが不思議でならない。

「（これはもしや、リポDが発揮したような効能を米や缶詰までもが持っているってことか？ 肥料を撒いた畑もおかしな事になっていたし、日本から持ってきたものはこの世界だと何か特別な効力があるのかもしれないな。俺は例外みたいだけど）」

バレッタと村人達が口々に自分もそうだと話している中、一良は一人腕組みして考え込んだ。

しかし、どんな理由でこんな現象が起こっているのかがよく分からない。

日本から持ってきた食べ物にも何か効能があるというのは確かだろうが、そうなると薬の扱いなどにはもっと注意せねばならなかったことになる。

リポDの驚異的な効能は村人で実証済みなのだが、日本で買えるような薬はまだ数える程しか村人達には与えていない。

この村に来たばかりの頃に、高熱を出して死にかけていた村長や村人に解熱鎮痛剤と胃腸薬を与えたことはあったが、リポDも一緒に与えていたため、それらの薬の効能はいまいちよくわからない。

薬が効きすぎて身体がおかしくなるといった反応は一例もなかったので、恐らくこの世界の人間が飲んでも問題はないのだろうが、今後はもう少し慎重に取り扱ったほうがいいだろう。

村人の誰かが高熱でも出して寝込んでいれば、薬を少しだけ与えて効能を見るといったことも可能だが、現在は村人全員が健康そのものである。

高熱どころか風邪すら引く気がしない。

「カズラさん、どうかしましたか？」

一良が腕組みしたまま俯いて考え込んでいると、バレッタが顔を覗き込んできた。

その声に一良が顔を上げると、集まっていた村人達は既に作業に戻っており、一良の傍にいるのはバレッタだけである。

「あ、いえ、何でもないです。私たちも部品作りに加わりましょうか」

一良はバレッタにそう言うと、作業を進めている村人達の元へと歩き出した。

バレッタは歩いていく一良の背中を、何かを伺うような表情で少しの間見つめていたが、すぐに自らも小走りで後を追うのだった。

23話：神様はお茶が好き

芋の異常成長を確認した日の午後。

真夏の太陽がさんさんと降り注ぐ中、一良は額に汗しながらシャベルを使って一人で穴を掘っていた。

ここは日本へと通じる石畳の通路のすぐ脇で、掘っている穴は通路に崩れ落ちていた白骨死体を埋葬する為のものである。

こちらの世界に来てからというもの、纏まった時間が取れずに白骨死体を埋葬することも出来なかったのだが、思いの他水車作りがハイペースで進んでスケジュールに余裕が出たため、死体を埋葬する事にしたのだ。

一良が留守の間の部品作りの指揮は、留守中に作業を主導していた村人が引き続き執っている。

「こんなもんなあ。ああ、腰が痛え……」

一良は人ひとりが横になれる程度にまで穴を掘り進めると、シャベルを地面に突き刺して背伸びをした。

最近、重い物を背負ったまま長時間歩いたり、大量の肥料やら米やらをリアカーに積み降ろししていたせいか、なかなか腰が痛む。日々肉体労働をしているおかげで筋力が付いたことに加え、時々バレッタにしてもらうマツサージのおかげで痛みは大分良くなったが、今やっているような穴掘り作業のような腰に負担のかかる仕事をすると、どうしても腰が痛むのだ。

本日は死体の埋葬をした後に一旦日本へ戻って買い物に行く予定なので、その時に湿布でも買ってこようと思つた一良は思ふのだった。

一良は腰をさすりながら溜め息を吐くと、風呂の浴槽程度にまで深くなつた穴から這い出した。

そして、さあ死体を埋葬するか、と気を取り直して通路に崩れ落

ちている白骨死体の元まで歩いていったのだが、白骨死体はパーツごとにばらばらになっており、骨を一つ一つ運ばなければいけないようである。

それに加えて、手袋など持ってきてはいないので、人骨を素手で掴まなければならない。

「……まあ、素手でもいいか」

ビニールシートと軍手でも持ってきて纏めて運ぼうかとも思ったが、なんとなくバチ当たりな気がしたので素手で運ぶことにした。万が一警察にこの場所が見つかったとしても、骨の劣化具合から見てかなり昔のものと思われるので、事情聴取は受けても逮捕ということにはならないだろう。

むしろ、もう長いこと人目に触れていないような場所だと思われるので、警察に見つかるといった心配もいらないかもしれない。

そんなわけで、最初こそ初めて素手で触る人骨におっかなびつくりな一良だったが、作業を続けるうちに次第に慣れ、両腕に大小様々な骨を抱えて運ぶに至った。

遺骨を全て穴に運び終わると、横たわった人間の形になるように骨を並べる。

骨について特に詳しいわけではないので、あちこち有り得ない位置に他の部位の骨が置いてあったりするのだが、当の本人が気づいていないのでどうしようもない。

骨を全て並び終わると、死体が纏っていたボロボロの和服をかけてやり、その上にシャベルで丁寧に土を被せて埋葬した。

「これでよし。帰りに線香と日本酒でも持ってくるから、待っていておくれ」

一良はそう言っただけで出来たての墓の前で手を合わせて一礼すると、日本へ通じる通路へと足を向けるのだった。

「レモングラスにローズヒップにオレンジピール……ハイビスカスも買っていくか。ブレンドしてあるやつもいくつか買っていこう」

日本に戻った一良は、町外れにある個人のハーブ屋へとやってきていた。

携帯のネットで調べて単に近かったという理由だけでやってきたのだが、昔の民家をそのまま使った木造の小さな店舗は雰囲気もよく、所狭しと陳列されたハーブ入りのアクリルビンが店の雰囲気と非常にマッチしている。

また、開け放たれた窓から見える景色も町外れということもあって、緑が多くて爽やかであり、時折入り込んでくる風がとても心地よい。

ハーブも自分で栽培したものを販売しているらしく、試飲させてもらったハイビスカス入りの冷やされたブレンドティーはとてもさわやかで美味しかった。

ハーブの他にアロマオイルの入った小瓶やガラス製のポット、それにハーブについて書かれた書籍も置いており、品揃えも豊富である。

一良自身ハーブティーが好きで、群馬の屋敷に逃亡する前はちょこちょこ買っては自分でブレンドしたりして飲んでいたので、こういう店と出会えると嬉しくなる。

「すみません、ハーブを単品でいくつか買いたいんですけど、取り分けてもらってもいいですかね？」

一良は飲み終わった試飲用のコップをレジのあるカウンターに返しに行く、先ほど試飲用のハーブティーを出してくれた長い黒髪の若い女性店員に声を掛ける。

他に店員は見当たらないことから、この女性が店長なのかもしれない。

「はい、どれを取り分けましょうか？」

「えっと、レモンガラスとローズヒップと……」

一良は先ほど見繕ったハーブに加えて数点のハーブを女性に注文すると、それぞれ30グラムずつ取り分けてもらった。種類にもよるが、この店ではハーブ30グラムあたり平均で600円程だったので、ちょっとお高めな価格である。

その後、レジにて商品を清算していると、カウンターに陳列されているハーブの種が入った袋が目にとまった。

「むむ、種か……。あの、ハーブの苗って売ってますかね？」

一良がそう聞くと、女性は申し訳なさそうに

「ごめんなさい、苗は売り物では出してないんです。種ならあるんですけど……」

と言って、陳列されているハーブの種が入った袋を数個引き抜き、カウンターに並べて見せた。

全ての袋に200円と書かれた値札が張られている。

「うっむ、種か。どうしようかな……」

以前、バレッタと一緒にハーブティーを飲む約束をしていたのでハーブを買いに来たのだが、これを機にハーブを使って色々実験を行ってみようと思ったのだ。

あちらの世界にハーブの苗木を持って行って、植木鉢に入れたまま肥料を与えてハーブがグリセア村の芋のように急激な成長を遂げれば、日本から持っていた物に何らかの劇的な変化が起こっていると判断することができる。

逆になんの変化も起こらなければ、日本から持っていた物には特別な変化は起こっておらず、あちらの世界の植物や人間に原因があると判断することが出来ると思ったのだ。

リポDや米などの驚異的な効能に関しては、一良に対しては何の効能も發揮していないので、恐らくあちらの世界の人間に原因があるのだろう。

一良自身もあちらの世界に行ってから、特にこれといって特別な力が備わったような実感は皆無なので、この推測は正しいように思えた。

何の恩恵も受けられないように体質が変化しているといった逆チート状態に一良の身体が変質しているとしたら、それこそ原因の追究は毒でも飲んでみない限りお手上げ状態なのだが、それは勘弁願いたい。

別にハーブの苗ではなく種を持って行って向こうで育ててみてもいいのだが、苗だと生長の変化がすぐに目に見えて判るのでありがたいのだ。

とはいえ、売っていないものを無理に売ってくれと頼むわけにもいかず、とりあえず種だけでも買っていくことにした。

「まあいいや、ここにある種を一通り1つずつもらえます？ あとこのガラス製のポットと本も1冊お願いします」

「ありがとうございます。あ、でも、ホームセンターに行けばハーブの苗も売ってると思いますよ？ 種もうちより安くて沢山種類があるはずです」

女性は種の入った袋を纏める手を止め、思い出したように言った。そんなことを言ってしまったら折角品物が売れる機会をふいにしてしまうかもしれないのにと一良は思ったのだが、表情から察するに素で言っているようである。

「んー、やっぱり種も買うことにします。ホームセンターでは苗だけ買うことにしますよ」

「まあ、ありがとうございます。これ、私が書いたハーブの育て方を書いたメモなんですけど、よかつたら使ってくださいね」

女性は嬉しそうに微笑むと、各ハーブの育て方がイラスト付きで載っているメモのコピーを、ハーブの種袋と同じ数だけ紙袋に入れてくれた。

メモの内容はイラストを含めて全て手書きである。こうして一良はポットやハーブの種などを購入すると、ハーブの苗やその他の日用品などを買うべく、いつものホームセンターへと向かうのだった。

いつも最上層にしているホームセンターに到着すると、一良は早速園芸コーナーへとやってきた。

園芸コーナーには花や果物などの苗木が沢山並んでおり、一良の捜し求めているハーブの苗も売っている。

一良がハーブの苗木を物色していると、それを見つけた店員のー

人が小走りでやってきた。

胸に着けてある名札には「主任」と書かれている。

「志野様、本日はこういった物がご入用でしょうか？」

「え？ ハーブの苗をいくつか貰おうかと……」

いきなり名前を呼ばれたので少々驚いたが、何度も農具やら肥料やらを大量購入していたので名前を覚えられてしまったらしい。

今日はホームセンターではそこまで大量に物を買う予定はないので、あまり期待されても困る。

「ハーブですか。本日ご用意できるのはここ並んでいるものだけと
なっているのですが……必要とあれば明日中にでも大量に取り寄せる
ことができますよ」

「いや、そんなに大量にはいらないます。2、3鉢もあれば十分で
す」

一良がそう言うと、主任店員は少し拍子抜けしたような表情を見
せたが、直ぐに気を取り直すと陳列されているハーブを一つ一つ説
明し始めた。

一良はハーブをお茶として飲みはするが育てたことは無かったの
で、簡単に育てることが出来るハーブにはどんなものがあるのか店
員に質問しながら苗木を紹介してもらった。

あれこれと説明を受けた結果、丈夫で繁殖力の強いペパーミント
とレモングラスの苗木を買っていくことにした。

その他に、種を植えるための鉢をいくつかと、それに入れるハー
ブ用の土も何袋か購入した。

ハーブ栽培に必要な品物を購入した次は、仏さんに供える線香と日本酒である。

線香はホームセンターでも売ってはいるが、そのホームセンターは日本酒を置いていなかった為に、以前米を大量購入したスーパーへと移動した。

店に入ると酒売り場へと向かい、有名どころの飲みやすい日本酒を2本カゴに入れる。

2本もカゴに入れたのは、村長への土産用として試しに1本持つていこうと考えたからである。

あちらの世界に行ってから酒を見たことは無かったが、さすがに存在はしているだろう。

あちらの世界の人間がアルコールを摂取した結果酷いことになったら困るので、とりあえず1本だけ持つていくことにしたのだ。

もし酒を飲む人間がいなかったら、2本とも墓にお供えしてしまえばいい。

線香もカゴに入れ、さあ清算しようと思ったところで目に入ったのがお薬コーナー。

今日の午前中に村人達と話した際、薬についても少し考えたのだが、もしリポDと同じく薬も驚異的な性能を発揮するのであれば、ある程度手元に置いておいて損はない。

使用する分量は気をつけなくてはいけませんが、持っていておいて損はないだろう。

とりあえず機会があれば病気の者に確認を取ってから試してみることにして決めると、通常の風邪薬の他に漢方薬も効能を確認しながら複数カゴに放り込んだ。

その他に、真っ白なティーカップを3つと傷に塗る軟膏や包帯、ガーゼなどもいくつかカゴに入れ、清算をするべくレジに向かうのだった。

空が綺麗な夕焼け色に染まり始めた頃、全ての買い物を済ませて山奥にある屋敷に戻った一良は、両手に買い物袋をぶら下げ、いつものように異世界への敷居を跨ぐ。

そうして石畳の通路を抜け、先ほど作ったばかりの墓の前までたどり着くと、日本酒を開けて少し墓に掛けてやり、線香を焚いて手を合わせた。

「墓石も何も無くて申し訳ないけど、今はこれで我慢してください。今度何か作って持ってきてます……花も買ってくればよかったか、面目ないです」

そう言つて土が丸く盛られているだけの墓に向かつて一礼すると、村へ通じる雑木林へと歩き出した。

そしていつものように目印を付けてある木を辿りながら雑木林を抜け、バレッタたちが作業を続けているはずの伐採場に向かう一良の背後の木陰に、小さな人影が一つ。

その人影は一良が見えなくなったのを確認すると、木陰から出てきて雑木林を見ながら首を傾げた。

「……おかしいなあ、確かにカズラ様はここから出てきたんだけどなあ」

木陰から出てきたコルツは、雑木林の奥を眺めながら納得がいかない表情で唸った。

コルツは一良が昼頃に雑木林へと入っていった後、自分もついて行ってみようと後をつけて一人で雑木林に入ったのだ。

しかし、しっかりと一良の背中を見ながら雑木林を歩いていたにも関わらず、いつの間にか一良の姿は掻き消えてしまっていたので

ある。

そしてなお訳が分からないことに、そのまま歩いて雑木林を抜けた先には見慣れた自らの村があり、元の場所に戻ってきてしまっていたのだ。

「あの兄ちゃん、どう見ても神様には見えないんだけどなあ。村のみんなは直接聞いたらダメだって言うし、どうすれば分かるんだろ……でも目の前で消えちゃったし、やっぱりグレイシオール様なのかな……」

コルツは日頃、自らの両親や村の大人達から、村の人間が一良をグレイシオールだと気づいていることを絶対に一良に知られてはならないと、耳にタコが出来るほど言い聞かされていた。

コルツのわんぱくぶりを心配した大人が釘をさしてのことだったのだが、コルツとしては言われれば言われるほど一良の正体を確かめてみたくなる。

そこで、以前ミュラと一緒に一良の後をつけたりしたのだが、その時は正体は分らず仕舞い。

今朝、イステリアから帰ってきたミュラにもう一度一良の後を一緒につけようと切り出そうとしたのだが、ミュラがあまりにも楽しそうに旅の話を（主に一良との話）をしていたので、誘っても拒否どころか妨害されかねないと思って諦めたのだ。

本当は一良に直接聞いてしまいたいのだが、大人達はそれは絶対にしてはならないという。

大人達曰く、グレイシオールは正体がばれると村から姿を消し、二度と姿を現さなくなるといことなのだが、コルツとしては納得がいかない。

何故納得がいかないのかというと、大人達はグリセア村に古くから伝わっている昔話の内容を理由に、グレイシオールに正体を知っていることを知られてはならないというのだが、その昔話の内容が

問題なのである。

コルツが知っているグレイシオールの昔話の内容には、グレイシオールは正体がばれると姿を消すといった話は一切出てこないのだ。その昔話の内容は、大体こんな内容である。

その昔、アルカディアという国が今ほど大きくなかった頃。

この地域一帯の村々は、長い日照りの末に大飢饉に襲われた。

それに加えてこの一帯を支配する領主は取立てる作物の量を平時と変えず、村人の食料を根こそぎ持つてしまった。

このままでは飢餓のために村が滅びかねないといった状態になった時。

変わった服を着た一人の男が、何処からともなく村にやってきた。その男は村の惨状を見ると、何処からか沢山の水や食べ物を運んできては村人達に粥を作って分け与え、飢え死にしかかっていた村人達を救ってくれた。

村人達はその男に大変感謝し、村は息を吹き返した。

しかし、その話を聞きつけた周囲の村々の人々が、救いを求めてこの村に押し寄せてきた。

男は押し寄せてきた村人達を救うべく、もつと沢山の食べ物を必ず持つてくると約束して何処かへと姿を消した。

男が姿を消してから数日間、この村の人々は男の残していった食べ物を押し寄せてきた村人達にも分け与え、何とか食いつないでいた。

不思議なことに、男の持ってきた食べ物は少しの量でも身体に力が沸き起こり、大勢の飢えた人々を救うことができた。

数日後、男が木の台車に沢山の食べ物載せて村に戻ってきた。

集まっていた人々は大喜びで男を迎えたのだが、そこに男の噂を聞きつけた領主が沢山の家来を従えて現れた。

その領主は欲深く悪いやつで、男を捕らえると食べ物全て取り上げた。

その上、男の首に縄をくくりつけ、男に食べ物を持ってきた場所まで案内するように強要した。

男は大層悲しそうな顔を見ると、一瞬で首の縄を解き、村の林へと向かって走り出した。

領主は縄を解かれたことに激昂し、携えていた剣で何度も男に斬りかかったのだが、男は領主の剣をひらりひらりと華麗にかわし、村はずれにある林に到達すると霧のように忽然と姿を消してしまい、その後二度と姿を現さなかった。

不思議な事に、男を捕らえようとした領主とその家来達は男が消えた直後から謎の病に倒れて数日の内に死んでしまい、村は圧政から開放された。

その上、領主達が死んでからすぐに雨が降って日照りも終わった。人々は、あの男は慈悲と豊穡の神様であるグレイシオール様に違いない、領主と家来達は神様に斬りかかるという大罪を犯したため、天罰を受けて死んでしまったのだらうと噂があったという。

とまあ、このような内容の昔話なのだが、グレイシオールの正体云々のくだりは一切出てこないのだ。

話に出てきた林というのは、今まさにコルツの目の前にある雑木林のことなのだが、村の人々はその雑木林を神聖視して伐採などは一切行わない決まりとなっている。

以前、何人かの不心得者が、先程のコルツのように雑木林へと入っていった事があつたらしいのだが、真っ直ぐ歩いて行つたはずがいつの間にか雑木林の入口へと戻ってきてしまうという現象に見舞われたため、なおの事村人達はこの場所を神聖視するようになったのである。

コルツとしても、この雑木林に足を踏み入れたのは今日が初めてである。

以前だったら好奇心よりも得体の知れないものに対する畏怖が勝り、とても雑木林に入る事など出来なかったのだが、20日以上も村で一緒に生活をし、その姿を見慣れた一良が雑木林に入っていくのを見ていくらか畏怖も薄れ、勇気を振り絞って一良の後を追いつ、雑木林に入ったのだ。

しかし結果はごらんの有様。

夕方頃までコルツがうろうろしている内に一良は何食わぬ顔で荷物をぶらさげて雑木林から出てくるし、何が何やらさっぱりわからない。

コルツはその後、雑木林を見つめながら暫く唸っていたのだが、周囲に誰もいないことに改めて気付くと急に怖くなり、慌てて村へと逃げ帰るのだった。

その日の夜。

一良はいつものように村長親子と夕食を済ませると、囲炉裏に小鍋を置いてお湯を沸かしていた。

日本から持ってきたハーブを使い、二人にハーブティーを振舞うためである。

お湯が沸くのを待つ間に、ガラスポットに目分量でハーブを数種類取り分け、自らが日本で好んで飲んでいたものと同じものになるようにブレンドする。

一部のハーブは香りが出やすいように、少し手で潰してからポットに入れた。

「ほう、それがハーブというのですか。何かの薬草ですか？」

「ええ、香りがいい草や花びらなどを乾燥させたものです。お茶の他に料理に使ったりすることもありますし、身体にもいいんですよ」

一良は珍しそうにハーブの入った袋を眺めている村長に、レモングラスの入った袋を手渡す。

村長はそれを受け取ると、眺めた後に袋を少しだけ開け、中の香りを嗅いで微妙な表情をした。

「……変わった香りがしますな」

村長はそう言うのと横から覗いていたバレッタにも袋を手渡すが、同じく香りを嗅いだバレッタも微妙な表情をしている。

「そのままだとイマイチな香りに感じるかもしれませんが、お湯で煮出すといい香りになりますよ」

一良は日本から持ってきた紙袋の中から更に数種類のハーブを取り出すと、それを二人に見せながら味や効能などを説明した。

バレッタは一良の説明を聞きながら、一良がハーブと一緒に買ってきたハーブの説明本を開き、載っている写真と見比べながらふむふむと頷いている。

そんなことをしているうちにお湯も沸き、いよいよ実際にハーブティーを作る事となった。

「私が好きな組み合わせのものを淹れますけど、もし口に合わなかったら言ってくださいね。別のを淹れますから」

一良はそう言いながら、小鍋のお湯をガラスポットに注ぎ込む。ポットの中に入れたハーブは、レモングラス、オレンジピール、

ハイビスカス、ローズヒップである。

ガラスポットの中に入っていたハーブたちはお湯を注がれるとふわりと広がり、それぞれの特徴的な色をお湯に溶かし出し始めたが、みるみるうちにハイビスカスの赤色に支配され、ガラスポットのお湯は鮮やかな赤色で統一された。

「わあ、凄く綺麗ですね。前に本で見たハーブティーと同じ色です」

ガラスポット内のお湯がゆっくりと赤色に染め上げられる様を、バレッタは瞳を輝かせて見つめている。

村長もポットの様子を見ながら、ほう、と感嘆の声を漏らしている。

「本のものとは入れられているハーブの種類が少し違いますけどね」

一良はポット内のハーブが煮出されるのを少し待つと、スーパーで買ってきた白いティーカップにハーブティーを注ぎ入れる。

「どうぞ、お口に合うといいんですが」

バレッタと村長は一良からカップを受け取ると、カップから立ち上る爽やかな香りに頬を緩ませた。

先程の乾燥状態のハーブとは違い、中々にいい香りがする。

「いただきます……んっ、少し酸っぱいけど美味しいです!」

「うむ、これは美味い。酸っぱさも梅干とは違った酸っぱさですね。それに何と言っても香りがいい」

そう言って美味しそうにハーブティーを飲む二人を見て、一良は

ほつと胸を撫で下ろした。

初めてハーブティーを飲む二人には是非とも楽しい思いをしてもらいたかったのだが、なんとか上手くいったようである。

「おお、そうですか、よかったです。他にも色々な種類のハーブがありますから、組み合わせ次第で様々な味と香りが楽しめますよ」

一良はそう言って二人を見ながらハーブティーを口にしながら、折角なら蜂蜜も持ってくればよかったと自身の詰め甘さに頭を掻くのだった。

24話：台所事情は火の車

蠟燭の明かりに照らされた石造りの一室で、ナルソンは椅子に座ったまま、執務机の上に広げられた領内の大地図を真剣な表情で見つめていた。

机を挟んだナルソンの正面では、彼の妻であるジルコニアが立つたまま机に左手をつき、右手に持った皮紙に目を通して見る。

ジルコニアは薄紅色のチュニツクを纏っているだけのゆったりとした服装だが、ナルソンは襟の張った柄入りのシャツに上質な布のズボン、更に薄茶色のマントを着けており、いつでも来客の応対が出来るような服装である。

ここはナルソンの執務室で、先日アイザックからグリセア村の報告を受けた部屋と同じ部屋である。

時間帯は昼過ぎで、外では太陽が猛烈に自己主張しているのだが、この部屋には窓が無いために日の光は入らない。

机の隅には、先程ジルコニアが棚から引き出した領内の直近の情報や他国の動向が載った資料が数枚広げられている。

「北側の防壁の完成度は6割といったところよ。西と東は4割。南は3割出来ているかどうかってところね」

ジルコニアはそう言うと、手にしていた皮紙を机の隅に置いてあ
る他の資料に重ねて置いた。

「全ての防壁が完成するのは、休戦条約の期限切れ直前か」

ナルソンが呟くように言うと、ジルコニアは、そうね、と頷いた。

「他領からの移住で毎年数千人ずつ領内の人口は増えているから、労働力的に見れば防壁の完成は間に合うと思うわ。西のグレゴロン領と南のフライス領からの食糧支援、それに王家への納税の一部免除と支援金が続けばだけど」

「……続くと思うか？」

ナルソンは見つめていた地図から顔を上げ、正面に立つジルコニアを見上げた。

ジルコニアはナルソンの視線を受けると、机の端に重ねられた資料から数枚を抜き出してナルソンの前に並べる。

「フライス領からの支援量は若干増えているわ。でも、グレゴロン領からの支援量は急激に落ち込んでいるの」

ナルソンが並べられた資料を見ると、ジルコニアの説明したとおり、グレゴロン領からの食料支援量が急激に低下していた。

資料には支援量低下の理由も補足されており、どうやらグレゴロン領でも飢饉が発生しているようである。

「ダイアス殿も苦勞しているようだな……これは、工事に回している人手を食糧生産に回さざるをえないか……」

バルベールと休戦条約が結ばれてから現在に至るまで、ナルソン領では農地開拓などの内政よりも、バルベールとの国境付近に建設している砦の工事や、イステリアを取り囲むようにして建造している防壁の工事に力を入れている。

昨年までは比較的順調にいていたのだが、今年は日照りによる大規模な飢饉の所為で領内は食糧不足となり、ここ数ヶ月の間は王家の勅命で他の領地から食糧支援を受けていた。

それ以前にも、増加する領民分の食料は他領から無償で送られてきていたのだが、かつてない規模の大飢饉が発生したため、それだけでは足りなくなってしまったのである。

しかも、ここにきて隣のグレゴリン領からの支援が減ってしまい、防衛設備の工事を最優先するという当初の方針を転換するか否かの判断を下さねばならなかったのだ。

「そうね……でも、国境の砦に当てている人員だけは引き抜かないで。砦無しじゃバルベールの大軍を止める事は出来ないから。それどころか、今作ってる砦の他にも最低2つは砦が必要よ。もっと人員を回して貰わないと、4年後に地獄を見る羽目になるかもしれない」

資料を見て呻くように言葉を吐き出したナルソンは、ジルコニアの言葉を聞くと大きく溜め息を吐いた。

「折角の意見だが、そんなことをしていたらバルベールと戦争が再開される前に領内は飢餓地獄と化してしまうよ。食料が圧倒的に足りないんだ。領民は来年からも数千人単位で他領から入ってくるし、自給できなくなってしまうたら元も子もないじゃないか。それに、休戦条約が切れる前に和平を結べる可能性だってある」

「……クレイラッツからの食料輸入量を増やすことは？」

「試算はしてみたよ。木材を大量に生産したり、銅や錫すずの採掘量を増やして輸出に回し、食料を大量に輸入したとしても、中長期的に見たら今度は領内で使う物資が一時的とはいえ不足してしまう。それに、その場凌ぎで食料を買ったとしても、また今回みたいな日照りがくる事があつたらもう持たないぞ。森の木は手当たり次第に切ってしまうたら雨期には取り返しの付かない事になるしな。ジルの

言い分も分かるが、万が一戦争が再開した時に食料がなかったら話にもならないだろう。ここは納得してくれ」

ナルソンの言葉に、ジルコニアは目を閉じて暫く考えている様子だったが、一つ小さく溜め息を吐くと再び目を開いた。

「軍備を優先して領内の内政を後回しにしたツケが回ってきた、か……私の責任ね」

バルベールとの休戦条約締結後、イステール領は内政よりも防衛拠点構築や兵力の充足といった軍備増強を第一に政策を推し進めてきた。

ナルソンとしては、領内の食糧生産や各地の復興支援を最優先としたかったのだが、彼の妻であるジルコニアが軍備増強を第一とするべきだと強固に主張したのである。

当然のように、ナルソンを含めたイステール領の他の重鎮達……一部の軍人以外は揃って反対したのだが、ジルコニアは自身の主張を頑として譲らなかった。

結局、バルベールとの戦力比や自国の継戦能力、休戦条約切れ時点で領内の軍の規模が現在と変わっていなかった場合の危険性を粘り強く説いたジルコニアに、当初は反対していた大部分の者達も、ナルソンが首を縦に振ったために渋々納得した。

そのおかげで軍関連への予算が当初よりも大幅に増やされたのだが、ジルコニアとしてはこれでも不足していると考えている。

「いや、ジルの主張は最もだったよ。それに、今までにも何度か飢饉は発生したが、ここまで酷い飢饉は初めてだ。何百年か前に今回のような飢饉はあったらしいがな。こればかりは予測できないよ」

毎年、アルカディア国内ではちょっとした日照りや洪水はよく起

こつていたのだが、今回のような大規模な飢饉は数百年ぶりである。内政を第一に推し進めていれば、今より状況は多少はマシだったかもしれないが、どっちみち各地で大きな被害は出ていただろう。

「そうね……後悔の前に何か対策を打ち出さないかね。それに、ここまで酷い飢饉なら、言い伝えみたいにグレイシオール様が現れて私達を助けてくれるかもしれないし」

少し冗談めかしてジルコニアがそう言うのと、ナルソンは座っている椅子の背もたれに背を預けて苦笑した。

「おいおい、その話だと領主は農民に殺されてしまっただぞ。勘弁してくれ」

苦笑しているナルソンにジルコニアはくすりと笑うと、机の端に置かれた資料からバルベールの情報が載った資料を一枚抜き出した。

「大丈夫よ。言い伝えと違って、イステール家は農民に恨みを買うような事は殆どしていないわ。それより、これを見てくれる？」

ナルソンは差し出された資料を受け取って一通り目を通すなり、眉間に皺を寄せて小さく唸った。

「蛮族の一部と和平を結んだか……まずいな。実にまずい」

蛮族とは、バルベール領の北方一帯に住んでいる部族の総称である。

この蛮族は各部族ごとに纏まってしか行動せず、部族同士で頻繁に領土争いが起こっているため、国と言う概念が殆ど無い。

その領土争いの余波がバルベールにも押し寄せ、生存圏をバルベ

ール領土に求めて攻めかかってくる蛮族に、この数十年の間バルベルはずっと悩まされてきたのだ。

しかし、バルベルはここにきて一部の部族と和平を結ぶ事に成功したらしい。

「ええ、北方の圧力が少なくなっているうちに、南方のアルカディアを含めた国々に一気に侵攻してくるでしょうね。前回の戦争の時みたいにバルベルは二正面で戦わなくていいから、次の戦争は私達にとってかなり厳しいものになるわ」

「我々を制圧すれば南は海。バルベルは背後を気にせず、大陸側にだけ意識を向ければいいからな……わかった。国境の砦建設に当たっている人員は現状維持だ。他の砦の建設に当てる人員も可能な限り捻出しよう。ただし、街の防壁工事は全面的に休止して人員を食糧生産に回すぞ。武官にはジルから話を通しておいでくれ。文官には私が話そう」

その言葉を聞き、ジルコニアはにつこりと微笑んだ。

「ありがと。砦があればそう簡単には負けることは無いわ。後は私に任せておいて」

ジルコニアはそう言うつと、腰を屈めてナルソンに口付けをする。そんなジルに応えつつも、ナルソンやれやれと苦笑した。

「全く、これではどっちがアルカディアの盾なんだか分からんな。むしろジルがそう呼ばれるべきなんじゃないか？」

「何言ってるのよ。私には内政と軍事と外交を同時にこなすなんてことは出来ないわ。軍事だけじゃ国を守ることなんて出来ないもの。」

その二つ名は貴方のものよ」

ジルコニアはそう言うのと、じゃあね、とナルソンにもう一度微笑んでから部屋を出て行った。

ナルソンは少しの間ジルコニアの出で行った扉を眺めていたが、一度大きく深呼吸して気合を入れなおすと、部下に出す指示書の作成作業に取り掛かるのだった。

ナルソンとジルコニアが各々の仕事に奔走している頃、一良はバレッタと一緒に屋敷の庭先にしゃがみこんで、ハーブの苗木に肥料を与えていた。

2人の傍らには、一良が日本で買ってきた空の植木鉢やハーブの種袋などが入った紙袋が置いてある。

「乾燥させる前からいい香りがするんですね。昨日飲んだハーブティーとは違って、何だかスーッとします」

バレッタはペパーミントの植木鉢に園芸用シャベルで肥料を入れながら、その独特の香りに鼻をひくつかせている。

「乾燥させなくても、このままでもお茶に使えますからね。採りたてで淹れるとこれがまた美味しくてねえ」

肥料の効能が変化しているのかを確認するために、買ってきた2種類のハーブの内、ペパーミントにだけ肥料を与え、レモングラスはそのままの状態にしておく。

こうすることで、お互いの成長を見比べてみるのだ。

一良はバレッタがペパーミントに肥料を与え終えたのを確認する

と、傍らに置いてある紙袋から空の植木鉢とハーブの種袋を取り出した。

「さて、次は種を植えますかね」

「あ、私が土を入れますね」

成長具合を見る実験だけならば苗木だけでもいいのだが、折角種を沢山買ってきたので、こちらも一緒に育ててみる事にした。

種の種類が多いので、植木鉢の方には肥料を与え、肥料を与えない方は地植えである。

地植えした種が万が一大量に繁殖したとしても、広がり過ぎないように板か何かで囲って花壇を作ってしまうといいし、採れれば採れただけ村の人たちにもおすそ分けが出来るから、爆発的成長を遂げてくれたほうが一良としては嬉しい。

「んー、夏に植えることが出来る種って少ないな。バジルとルッコラくらいか」

ハーブの種袋に記載されている種まき時期の目安表を見ながら、植えることの出来る袋を仕分けする。

殆どの種が4月から5月、もしくは9月から10月が種まき時期で、8月に種まき出来る種は少ないようだ。

「カズラさん、こっちの紙にはローズマリーやレモンバームは夏でも日陰で涼しいところなら種植え出来るって書いてありますよ」

一良がバジルの種袋を開封しようとしていると、紙袋からハーブの育て方が記載されている紙を取り出して読んでいたバレッタが、地面に置かれているローズマリーとレモンバームの種袋を手につ

た。

「えっ、ほんと？」

「ええ、ここに書いてあります」

バレッタの横から紙を覗き込んでみると、確かに手書きの綺麗な文字で「夏でも日陰で涼しいところなら種植えできます」と書いてあった。

「おお、本当だ…… ってか、バレッタさんいつの間にそんなに私の国の文字が読めるようになってたんですか。まだ勉強を始めてから10日しか経ってませんよ」

「ふふ、覚えれば覚えるほどカズラさんの持ってきた本が読めるようになるから楽しくて、夜も少しだけ夜更かしして勉強してたんです。驚きました？」

バレッタの言葉に、一良は内心舌を巻いた。

全く見た事のない文字を、僅か10日でここまで読めるようになるとは驚異的な学習能力である。

しかも、日本語はひらがなの他に漢字とカタカナも混じってくる難解なものである。

よっぽど記憶力がよくて、尚且つやる気が無ければ、ここまで短時間で学習する事は出来ないだろう。

「あれですか、やる気が違いますか」

「やる気が違います」

そんな掛け合いをしながらも、2人は並んでせつせと鉢に肥料を入れたり、庭の日陰になっている部分を掘り起こして土を耕す。ハーブの事や村の事を話しながらのんびり作業を続けていると、話が一段落したところでバレッタが一良の方に顔を向けた。

「カズラさん」

「ん？」

「何か、凄く楽しいですね」

「うん、楽しいねえ」

そうして2人は微笑み合うと、再び雑談をしながら種植え作業を続けるのだった。

その日の夜。

いつものように一良は村長親子と共に囲炉裏を囲み、夕食を摂っていた。

今日のメニューは白米に梅干、山菜とキノコとウインナー（一良の持ってきた缶詰）の炒め物である。

食事のお供に、ジャーマンカモミールがベースのハーブティーも淹れてある。

「では、もしかしたら今日植えたハーブが沢山増えるかもしれないのですかな？」

「この国の土に合えば、もしかしたら凄い勢いで増えるかもしれない

いですね。でもまあ、ただの草だし普通に育つとは思いますよ」

話している内容は、昼間に一良とバレッタが植えたハーブの事である。

昨晩はハーブを植えることを村長に詳しく説明していなかったの
で、食事をしながら話しているのだ。

「カズラさんの植えたものだから、きっと元気に育つと思うよ」

「うむ、そうだな」

そう言って美味そうにハーブティーを飲む二人を見て、一良は苦笑した。

確かに一良が持ってきた肥料を与えた作物は急激な成長を遂げた
が、今回持ってきたハーブたちにまでそれが適用されるとは限ら
ない。

しかしまあ、こちらの世界の作物のように急激な成長はしなかつ
たとしても、普通の草と変わらないハーブたちだったら、それなり
に育ってはくれるだろう。

「あ、そうだ、バリンさんにいいものを持ってきたんですよ。ちょ
っと待っててくださいね」

一良はそう言っ立ち上がり、自分の部屋へと向かう。

そしてすぐに目的のもの……日本酒を手にして戻ってきた。

ラベルには、「真澄―純米大吟醸―」と書かれている。

真澄とは長野県の地酒なのだが、群馬のスーパーに何故か売つて
いたので買ってきたのだ。

一良は酒にあまり強いほうではないが、真澄は比較的飲み易いの
で選んだというのもある。

「お待たせしました。これ、私の国のお酒なんですけど、バリンさんはお酒飲めますかね？」

「おお、酒ですか！ 勿論飲めますとも！」

酒という言葉に、バリンはそれはもう嬉しそうに顔を綻ばせた。相当酒が好きと見える。

「それはよかった。お口に合うかどうかは分かりませんが、とりあえず少しだけ飲んでみてください」

一良の言葉に、村長は水の入っていた木のコップをぐいっと飲み干して空にした。

一良はビンの蓋を開けると、さっとコップを差し出してきたバリンに苦笑しつつ、コップに一口分だけ注いでやる。

「もし身体に合わなかったら大変なので、とりあえずは一口分だけです。平気そうだったら続きを飲むってことで」

「む、そうですか。では一口……ん！ これは美味しい!!」

酒を口にしたバリンは、膝を叩いてその味に大喜びしている。

「おお、美味しいですか。それはよかった。それでは、暫く様子を見ましようか」

一良がそう言ってビンを引っ込めると、バリンは心底不満そうな表情になった。

「いや、大丈夫ですぞ。絶対大丈夫です。大丈夫ですので是非もう一杯……」

「お父さん、ダメよ」

「いや、しかし」

「ダメ」

「……むう」

バレッタにぴしゃりと言われてむくれる村長に、一良は吹き出しそうになるのを必死に堪えながらハーブティーを飲んで誤魔化した。

「そういえば、村で飲むお酒はどんなものなんですか？」

一良が問うと、一良の脇に置いてあるビンを凝視しているバリンの代わりにバレッタが口を開いた。

「私は少し飲んだだけで気持ち悪くなってしまうので殆ど飲めないんですけど、ふんわりといい匂いのするお酒ですよ。お祭りの時などに、街で買ってきてみんなで飲んだりしますね」

「うむ、カズラさんの持ってきてくれた酒とは違って、私達の飲むものは白みがかってましてな。これがまた美味しいのです。他にも、貴族様などは果物から作った酒を飲んでいると聞いたことがありますな」

2人の話に、一良はふむふむと頷いた。

この世界にも酒ぐらいはあるだろうとは思っていたが、どうやら

どぶろくのようなものや醸造酒は存在しているようである。

先にも述べたが、一良はあまり酒が強いほうではないのだが、折角なので機会があれば一口飲んでみたいところだ。

「なるほど、機会があれば一口飲んでみたいですねえ」

「ええ、その時には是非カズラさんも飲みましょう……さて、そろそろいい頃合ですな。もう一杯……」

「まだダメ」

「……」

こうして、約一分ごとに繰り返される村長とバレッタのやり取りを一良が60回ほど見物した後、いよいよ村長が涙目になってきたところでようやく解禁となり、今度はコップに半分の酒に村長はありつけることができた。

しかし、嬉しそうに酒を飲む村長を見ながら、

「（コップ半分っていうと結構な量だし、続きは2時間後かな）」

と悪魔的なインターバルを一良が設定している事を、酒に夢中になっっている村長は知る由も無いのだった。

25話：あなたは何者？

ハーブの種蒔きをしてから4日後の朝。

村長邸の庭先で、村人達が着ているものと同じ無地の上下を身に着けた一良は、ペパーミントとレモングラスが植えてある鉢を見ながら腕組みして考え込んでいた。

というのも、それらの成長ぶりが当初予想していたものとは大分違った結果になっているためである。

ちなみに、一良の着ている服は昨日バレッタが縫い上げてくれたもので、長の長さもピッタリであり、着心地も抜群だ。

「むう、もっと急激な成長っぷりを遂げるかと思ったんだけどなあ。肥料の性質が変化しているわけじゃないのだろうか」

一良の目の前にある2種類のハーブは、持ってきた時と比べて多少は大きくなっているが、この程度の成長ならば日本で育てるのとなんら変わらない。

ホームセンターで買ってきたままの状態で、肥料を与えていないレモングラスはごく普通に成長しているし、鉢に肥料を混ぜたペパーミントも似たような成長ぶりである。

また、4日前にバレッタと一緒に植えた種たちはバジルのみ大量に発芽しており、その他の種たちはルッコラが2つ3つ発芽しているだけ。

地面に植た種も鉢に植えた種も同じような発芽具合で、発芽にかかった日数は種を買った店でもらった紙に書いてある情報通りである。

一良がハーブたちを見ながら唸っていると、屋敷の入口からバレッタが顔を出した。

バレッタは庭先でハーブを見ながら唸っている一良を見つけると、

自らも庭に出てきて一良の横に並ぶ。

「村の作物とは違って、ハーブは一気に大きくならないんですね…
…あ、ルッコラの芽が出てる！」

昨日までは出ていなかった小さな芽を見つけ、バレッタはその場にしゃがみ込むと嬉しそうに指先で小さな葉に触れた。

一良が当初予想していたような急激な成長を見る事は出来なかったが、とりあえずは普通に成長してくれているようなので、暫くは様子見ということになりそうだ。

種を植えた場所には、その種類と同じ数の木の板が置いてあり、植えたハーブの名前がカタカナで書かれている。

バレッタが油性マジックで書いたのだが、なかなか上手に書けていた。

「んー、もうちょっと早く成長するかと思ったんですけどね。まあ、普通に育っているみたいだから良しとしますか」

「普通に育ってくれば十分ですよ。大切に育てましょうね」

バレッタは一良に笑顔を向けると、もう一度ルッコラの葉を優しく撫でてから立ち上がった。

「朝食の準備が出来ましたから、食べに戻りましょう。食べたらいよいよ水車の組み立てですから、頑張らないと！」

そう言いながら胸の前に両手で握りこぶしを作って気合を入れるような仕草をしているバレッタに、一良は自然と頬が緩んだ。

ハーブの急成長という結果が得られなかったことは残念だが、村

の畑に植えられている野菜たちは今も物凄い勢いで成長を続けている。

芋はあれから更に一回りも大きくなっているし、葉物の野菜は種を蒔いてから2週間しか経っていないにも関わらず、あと数日で村人達の食卓に並び始めるのではないかというくらいの成長ぶりである。

約4週間前までは飢饉で壊滅寸前だった村だとはとても思えないくらいに村人達の表情は活力に満ち、皆が嬉々として毎日の畑仕事や水車作りに精を出している。

それを考えればハーブが急成長しなかったことなどは些細な事にも思えるし、そもそもハーブの苗木をこちらの世界に持ち込んだのも、元々は日本から持ち込んだ肥料や植物の効能や性質の変化を調べるといった目的であったので、ハーブを大量生産することが目的ではない。

あわよくばハーブも大繁殖させられるかもという打算はあったが、調査という観点で見れば、目的は順調に達せられているのだ。

「そうですね。ちゃんと回ってくれるといいんですけど……楽しみだけど不安だなあ」

「もし回らなかったら反省会ですね。ハチミツをたっぷり入れたハイビスカスティーを淹れて慰めてあげます」

「むむ、それも魅力的……って、バレッタさんが飲みたいだけでしょうが！」

「えへへ」

イステリアから戻ってきてからというもの、ハーブの観察や畑の草取り、水車の部品作りや夕食後の勉強会と、一良はバレッタと朝

から晩まで常に一緒に行動しているせいか、以前にも増して仲良くなってきた感じがする。

バレッタは一良に対して以前のような遠慮がちな態度を今では殆ど見せなくなっているし、何といっても自然な笑顔を見せることがここ数日で一気に増えた。

今まで不安で仕方が無かったであろう村の水不足と食糧不足は全て解決済みである上に、兼ねてからの希望であった勉学も、こちらの世界のものとは大分違うが一応学ぶ事が出来ている。

不安の種もなくなった上に自らの希望も叶い、今のこの生活はバレッタにとって、この上なく充実したものとなっているのかもしれない。

「村のみんなもすぐく丁寧な部品を作ってくれましたし、きっと回りますよ。それに、カズラさんの設計したものなら絶対に大丈夫です！」

一良にとって水車の設計など初めてのことで、いくら大丈夫と言われても不安は残るが、ここでうだうだ言っているのも始まらない。

とりあえず水車を組み立てて設置してしまい、もし上手く回らなくても部品を幾つか作り直せば何とかなるだろうと楽観的に考える事にした。

「そうですね、設計図はバレッタさんも私と一緒に見直しをしてくれまししたし、きっと大丈夫ですよね」

「う、そう言われると不安が……」

「大丈夫大丈夫」

こうして上手い具合にバレッタにも責任をお裾分けしつつ、一良は朝食を摂るべく屋敷へと戻るのだった。

朝食後、一良とバレッタは水車作りに加わっていた10名の村人と共に、リアカーに水車2号機の部品を満載し、以前日本から持ってきた水車を設置した川べりへとやってきていた。

木板で補強された川べりの水路に設置されている水車は今も回り続けており、グリセア村へと向かう水路にせつせと水を送っている。真夏の太陽が強烈に降り注ぐ中、キラキラと水しぶきを上げながら力強く回る水車の姿を見て、村人の誰かが

「綺麗だなあ」

と素直な感想を口にした。

「では、水車を組み立てますかね。皆さん、よろしくお願いします」

水を運ぶ水車を眺めている村人達に一良がそう声を掛けると、村人達は早速リアカーから部品を降ろし、リアカーの脇で車座になって部品を組み立て始めた。

先日、日本製の水車を組み立てた時は、既に出来上がっている部品を説明書を見ながら組み立てるだけの作業だったが、今回組み立てる水車の部品は、一良と村人達が自分達で手作りした物である。村人達はどの部品がどのような役割をするのかを部品作りを通じて理解しているためか、組み立て作業の滑り出しは上々に見えた。

「さて、私とバレッタさんは先に水車を交換する準備をしておきましようか」

「はい、水路の水を止めてきますね」

バレッタはリアカーから厚さが10センチ程もある分厚い木板を取り出し、川に接している水路の上流側に行くと、水路に木板をはめ込んで川と水路を遮断した。

勢い良く回っていた水車も、羽を押していた水がなくなるにつれて徐々にその動きを止める。

バレッタが水路の水を止めている間に、一良はリアカーから「有限会社志野精工」と刺繍されているタオルを2枚取つてくると、水路の水が無くなったことを確認してから片手で水車をくるくると回し、揚水用の木箱に入っていた水を全て空にした。

「日差しが強いですし、軽く拭いておけばすぐに乾きそうですね」

水路の水を止めて戻ってきたバレッタは、一良からタオルを一枚受け取ってそう言うのと、水を滴らせている水車を優しく撫でた。

「そうですね。でも、少し経ったら水車を回して日当たりを調節しておきましょう。湿り気のせいで取り外す時に手を滑らせたら大変ですからね」

今設置されている水車を取り外す際、数名で協力して取り外すとはいえ、川の水で濡れているせいで手を滑らせ、水車の下敷きにもなるようなことがあっては大変である。

そのために水車を乾かしておこうということなのだが、かんかん照りの太陽に任せておけば、30分もあれば粗方乾かすことができるように思えた。

今まで散々村を苦しめてきた連日の日照りも、今回ばかりは頼もしい味方となりそうだ。

暫く二人で水車を挟むような形でタオルを使って水を拭いていると、バレッタが手に持っているタオルの文字に気付いて作業の手を止め、タオルを広げながら一良に尋ねた。

「カズラさん、この布に書いてある「ゆうげんがいしゃ」のせいこうって、カズラさんの国のお店か何かですか？」

「ああ、それは私の父が経営している会社の名前ですよ」

一良が水車を拭きながらそう答えると、バレッタはハツとしたような表情で視線を手に持ったタオルから一良へと移す。

「……カズラさんのお父様？」

「ええ、そうです。会社といっても、父と母の二人で操業している小さな町工場なんですけどね」

バレッタの問いに一良も作業の手を止めると、バレッタの持っているタオルの『志野』と刺繍されている部分を指でなぞった。

「この『志野』というのは私の苗字でね。そういえば、こっちに来てから下の名前しか名乗ってなかったかな……どうかしました？」

自分のことを少し呆けた様子で見つめているバレッタに、一良は小首を傾げる。

「いえ……あの、カズラさん、あなたは……」

バレッタは途中まで言いかけると、ハツとしてリアカーの脇で部

品の組み立てを行っている村人達の方を振り返り、ホッと小さく息を吐いた。

「ん？ 私が何ですって？」

問い返す一良にバレッタは困ったように少し笑うと、

「えっと、この話の続きはまた夜にでも……それより今気付いたんですけど、この水車の軸は金属で出来ているのに、新しい水車の軸は軸受けに当たる部分さえも木がむき出し状態ですが、平気なんですか？」

と話題を変えてきた。

一良としてはバレッタの言いかけたことは気になるが、別にしつこく食い下がる必要もない。

新しい話題に頭を切り替えると、再び水車を拭く作業を再開しながらバレッタの問いに答えるべく口を開いた。

「ああ、それは平気だと思いますよ。見本にした水車より部品を少なくしていますし、揚水量も減らしているので軸に掛かる負担もそれほど大きくないはずですよ。使い続けて磨耗するようなら、またイステリアへ行って銅か青銅を買って来ればいいですし」

無いとは思うが、もし水車2号機の軸が磨耗するようないことがあれば、一度解体して軸を作り直す必要がある。

その時は面倒だが、再度イステリアへ行って銅か青銅を購入してきて、村で軸受けと軸の接点部分を製造する事になるだろう。

どちらにしろ、そんなにすぐ軸が使い物にならなくなるということとはいいないので、ナルソンの家来であるアイザックが来た時に動いていれば問題は無い。

いざとなつたら軸を何本か追加で作成し、この水車の脇にでも交換用として転がしておけばいいのだ。

「青銅……村で溶かして軸用に加工するんですか？」

「出来ればその方がいいんですけど、イステリアで鍛冶職人に製作を依頼する方が早いかもしれませんね……よし、これくらい拭いておけば平気かな」

目立つた水濡れを粗方拭き取り、一良は水車を見上げて息を吐いた。

この後、水車2号機を組み立てたら今設置してある水車を外し、軸受けに使っている柱も掘り起こさねばならない。

結構な重労働だが、一良の持ち込んだ食べ物で体力が強化されている村人達とならば難なくこなすことができそうだ。

「私たちも水車の組み立てに加わりますかね」

「はい……といつても、もう殆ど組み終わっているみたいですけどね」

バレッタの言葉に一良が村人達の方を見ると、もう殆ど水車は組みあがっていた。

やはり自分たちで作った部品を組み立てるというだけあって、早いものである。

「ありや、本当だ。そしたら、水車が乾くまで小休止ですかね」

「そうですね」

いくら水車が組みあがっていても、水車が乾くには時間が掛かる。

特に急いで設置しなければいけないわけではないので、少しの間休憩とすることにしたのだった。

その後、水車を組み立て終わった村人たちと共に川の水を飲みながら30分程休憩し、水車の取り外しを行うことになった。

一良も水車の取り外しに加わりうとしたのだが、村人達に

「この程度のことなら私たちがやりますから、カズラ様は休んでいてください」

と言われてしまったので、水車の大きさの問題で取り外し作業に加わることでできない数名の村人、それにバレッタと一緒に作業を見守る。

カンカン照りの太陽のおかげで水車はしっかりと乾いており、手を滑らす者も出ることなく無事水車を軸受けから外すことが出来た。地面に固定されている軸受けの掘り起こしも、力持ちな村人達のおかげですぐに済み、全木製の新しい軸受けを代わりに入れてしっかりと固定する。

見本の水車と同様に、軸受けには水車が汲み上げた水が常に掛かるようになっていたので、摩擦によって発生する熱の冷却も万全だ。

「それでは、新しい水車を設置しますね」

村人達は一良に断りを入れると、組み立て終わって地面に寝かせたある水車を、掛け声をかけて持ち上げた。

「いよいよ私たちが作った水車が回るんですね……私、水路を仕切っている板を外しに行ってきます」

「お願いします……ちゃんと回るかなあ」

そんな不安がる一良を他所に、すぐに水車2号機の設置も終わり、後は水路に川の水を引くだけとなった。

バレッタは水車が設置されたことを確認すると、皆に

「板を外しますねー」

と宣言し、川と水路を隔てている木板を取り外した。
新しく設置された水車2号機は、流れてくる川の水に羽を押され、
ゆっくりと回転を始める。

「お、回った回った。回転速度にムラは……」

くるくると回り始めた水車に村人達が拍手をしたり互いに肩を叩いて喜んでいる姿を他所に、一良は水車を横から真剣な表情でチェックする。

そんな一良の元に、水路に填めていた板を手にしたバレッタが戻ってきた。

「カズラさん、どうですか？」

「んー……うん、これなら大丈夫ですね」

バレッタは一良の返事を聞くと、ホッとした様子で笑顔を見せ、
回っている水車からグリセア村へと向かう水路を眺めた。

今まで設置されていた水車に比べると水量は半分以下だが、水車

2号機はしっかりと川の水を村へと送っている。

「さて、無事水車も交換できましたし、外した水車を解体して村に帰りますかね」

「カズラ様、解体せずにこのまま運んでは駄目でしょうか？」

一良の言葉に、取り外した水車の傍らに居た村人の一人が提案する。

「そのまま運べればその方がいいですけど、重たいですし村までは結構かかりますよ？」

この水車は一つ一つの部品はたいした重量は無いとはいえ、組みあがった状態では400kg近い重量である。

持ち手が付いているなら交代で何とか運べるだろうが、持ち手の無い水車を村まで運ぶとなると、結構辛いものがありそうだ。

「別に大丈夫ですよ、交代で運べばいけると思います。なあ？」

「ああ、このままでも普通に運べるな」

村人たちはそう言うと、6人で横になっっている水車を縦にし、前に2人、横に2人、後ろに2人と分かれて水車を持ち、村に向かってててく々と歩き始めた。

横の二人は脇から支えてバランスを取る係りなので、実質的に水車を持ち上げているのは4人である。

残りの村人たちも、運ばれていく水車に続いてぞろぞろと歩いて行く。

「ええ……一人当たり確実に100kg近く持ち上げてるはずなのに、何で皆平気な顔してるんだよ……」

「カズラさん、私たちも行きましょう」

まさかの展開に呆然と立ち尽くしていた一良は、声を掛けて来たバレッタの方を振り向き、バレッタの可愛らしい顔を見ながら背中に嫌な汗を掻いた。

「あ、あの、どうかしました？」

じっと見つめられて赤くなっただけで照れている様子のバレッタに、一良は慌てて『片手でリングを握りつぶすバレッタ』の妄想を打ち消すと、村人達に続いて村へと歩き出すのだった。

その日の夜。

夕食も食べ終わり、いつものように火の灯った囲炉裏の前に二人で並び、一良はバレッタと勉強をしていた。

今日の勉強の内容は人体機能学であり、身体の仕組みや機能についてを参考書を見ながら学んでいる。

この分野については一良も素人なので、バレッタと一緒に頑張って勉強しているような状態なのだが、あからさまにバレッタのほうが飲み込みが早いため、軽く凹んでいた。

現在、バレッタに教える勉強の内容は毎日内容を変え、一日ごとに少しずつ学ぶ方法を取っている。

数学や物理といったまさに「座学」といった内容のものから、上手なお茶の淹れ方や保存食の加工法といったものまで、様々な種類の勉強を参考書や資料片手に教えているのだが、バレッタは全てに

興味津々で、正に乾いたスポンジの如く教える内容を片っ端から自らの頭に詰め込んでいる。

ノートもしっかりと取っているのだが、書いている文字は日本語であり、既に日本語はマスターしているようだ。

参考書を二人して見ながら『血管は川、赤血球は船』という内容をバレッタ読み上げるのを聞きながら、一良が必死にノートを取っていた時、ふと昼間にバレッタが一良に何か言いかけていたことを思い出し、バレッタが参考書の項目を読み終わるのを待ってから口にした。

「バレッタさん、昼間のことなんですけど……」

「カズラさん、血漿^{けっしょう}タンパク^{たんぱく}って……あ、はい、何ですか？」

見たことの無い単語の意味を一良に聞こうとしていたバレッタは、勉強に集中しきっていた頭を切り替えて一良に応える。

「昼間バレッタさんが私に何か言いかけていたのを思い出して、何を言おうとしていたのかわかって……」

「あっ……」

その問いに、バレッタは一瞬戸惑った様子だったが、自分の中で何かを決心したのか、真剣な表情で一良に向き直った。

バレッタの真剣な様子に、一良も何を言われるのだろうかと身構える。

「カズラさん、あなたは……あなたは、人間なですよね？」

26話：加護を得る者求める者

真面目な顔でおかしな質問をしてくるバレッタに、一良はポカンとした表情で

「……はい？」

と思わず聞き返した。

バレッタの質問の意味は解るが、その意図がさっぱりわからない人間かと問われれば答えは勿論イエスなのだが、その質問の仕方では、まるで今まで自分が人外の生き物だと思われていたかのようなのである。

質問の答えを返さない一良に、バレッタは極度の緊張からか声を震わせながら

「……に、人間では……ないのですか？」

と、再度一良に問い掛ける。

バレッタは今までおぼろげながら、『一良はグレイシオールなどではなく普通の人間なのではないか』と何度も感じるがあったのだが、今朝水車を拭いていた時に一良から『一良の両親が経営する会社』の話聞いたことで、疑念が確信に変わったのだ。

そこで思い切って一良に質問してみたのだが、すぐに答えを返さない一良に、バレッタは自分がとんでもない質問をしてしまったのではないかと急に不安になってきた。

「人間ですよ！ 人間以外の何者でもないです！」

同じ質問を二度投げかけられた一良は、バレッタの手が震え始めたのを発見し、慌ててバレッタの問いに答える。

「……本当ですか？」

「本当ですよ。というか、人間以外の何に見えるっていうんですか」

バレッタは一良の言葉を聞くと、心底ほっとしたといった風に大きくため息を吐き、

「……よ、よかったあ」

と弱々しく安堵の言葉を吐き出した。

疑問が解決してほっとしているバレッタとは対照的に、一良は困惑した表情のままである。

「あの、一体どういう意味です？ 私が人間ではないとも思っていたんですか？」

一良がそう質問すると、バレッタは先ほどとは打って変わって申し訳なさそうな表情で、おずおずと話し始めた。

「はい……実は、カズラさんがこの村に来た時からずっと、カズラさんはグレイシオール様だと思っていました……村の皆も、カズラさんはグレイシオール様に違いないと今も信じているはずですよ」

「グレイシオール……ん？ ちょっと待って、それってもしかして……」

グレイシオールという単語を聞き、一良は以前バレッタから聞いた

た別の似たような単語を思い出した。

思い出すと同時に、一気に顔から血の気が引き、全身からじわじわと冷や汗が吹き出てくる。

「ええと、以前村で雨乞いをした時に、バレッタさんから『スイプシオール様』っていう水の神様の話を聞いたことがありましたよね」
「ええ、ありましたね」

「……スイプシオール様の『シオール』って、どんな意味なんですかね？」

「司る神という意味です。スイプは生命の源という意味で、水という意味も併せ持っています」

「……なんてこった……」

一良はバレッタの言葉を聞き、両手で頭を抱えた。

前々からやたらと村人たちに敬われていると感じてはいたが、村に色々な物を持ってきていたことから、何処かの名士あたりに勘違いされているのだろうと頭の片隅で考えることはあった。

しかし、目の前にある問題を片付けることで毎日が精一杯で、村人にどう思われているかまで頭が回っていなかったのが本当のところである。

「……ちなみに、グレイってどういう意味なんですか？」

「慈悲と豊穡という意味です。正確にはグレシオスという……あの、大丈夫ですか？」

バレッタの説明を聞き、一良は頭を抱えたままうんうん唸り始めてしまった。

改めて考えてみれば、この村に対して自分の行ってきた所業は、それはもう凄まじいものであるということに今更ながらに気付く。

50人以上もの栄養失調患者を即座に全快させ、何処からともなく大量の食料や塩を運び込み、日照り続きだった村に偶然とはいえ雨まで降らせてしまったのだ。

この間、僅か3日である。

そのうえ、村人達にとっては見たことも無い機械や道具（水車や農具）を山のように持ち込み、拳句の果てには作物が巨大化したり、一良の持ち込んだ食べ物の効果で村人達が超人化し始めているのである。

もし一良自身が村人の立場にあつたとしても、神様が救世主だと思ってしまうだろう。

一良は一度大きくため息を吐くと、気だるそうにゆっくりと顔を上げた。

「大丈夫です……慈悲と豊穡の神様ですか。これはまた凄いものに勘違いされたものですね……」

確かに自分の行ってきたことは神の御技に近いものがあるかもしれないが、このまま神様だと勘違いされたままでは後々不都合が生じる可能性が大きい。

これは早い内に村人達の誤解を解かねばと一良が考えていると、バレッタが再び申し訳なさそうに口を開いた。

「実は、村の皆にカズラさんがグレイシオール様だとふれ回ったのは私なんです……村に伝わるグレイシオール様の言い伝えに余りにも酷似していたので……ごめんなさい」

「……言い伝え？」

言い伝えという単語に反応した一良に、バレッタはその内容を説明すべく口を開いた。

「はい。もう何百年も前から言い伝えられている話です。昔、この地域一帯が日照りによる大飢饉に襲われた時、変わった格好をした一人の男がこの村に現れ、村に大量の食料を持ち込んで人々を救ったというお話です。しかも、その男の持ってきた食べ物を少量でも食べた人々は、僅かな時間で体力を持ち直して元気になったそうです。……あの、その男の人ってカズラさんのことじゃ」

「違います。そんなに長生きできないです」

もしかしてといった表情で聞いてくるバレッタの言葉を、一良は即座に否定した。

数百年前に現れたという男の取った行動は、今まで一良が取った行動に共通するところが多分にあるが、断じて同一人物などではない。

というか、そんな数百年前に現れた男と一良が同一人物だとしたら、最早一良は人間ではないのだが、バレッタにしてみれば『まさか』といったところがまだあるのかもしれない。

「そ、そうですね、私ったら何言ってるんだろ……カズラさんは人間なんですよね」

自らの言葉を噛み締めるように言うバレッタを横目で見ながら、一良は今後のことについて考える。

まずは早急に村人達に『志野一良の人間宣言』を行い、一良がグ

レイシオールだという誤解を解かねばならない。

今まで一良が村に対して行った様々な援助からして、グレイシオールではないとわかったからといって排斥されるようなことはないだろうし、村長の娘であるバレッタがフォローに回ってくれるはずである。

村長であるバリンも、きちんと説明すれば一良の助けになってくれるだろう。

「ええ、私は人間です。これは早いところ村の皆の誤解を解かないと……明日の朝にでも、村の人たちに私がグレイシオールではなく人間であることをきちんと説明することとしましょう」

「あつ、それは待ってください！」

一良がそう言うのと、バレッタは慌てた様子で声を上げた。

一刻も早く村人達の誤解を解きたい一良は、待てと言ったバレッタに小首を傾げる。

「実は先ほど話した言い伝えには続きがあつて、村にやってきた男……グレイシオール様は、その噂を聞きつけてやってきた領主と兵隊たちによって捕らえられてしまったのです」

「捕らえられた？ 別に悪いことしたわけでもないのに何でまた……それより、その言い伝えと私がグレイシオールではないことを説明することに何の関係があるんです？」

さっぱり解らないといった風に尋ねる一良に、バレッタは真剣な表情で一良に向き直る。

「数百年前にこの村に現れたグレイシオール様が領主に捕まってし

まったそもその原因は、グレイシオール様の噂が方々に広がってしまったからなのです。噂を耳にするのがグレイシオール様の救いを求める人々だけならいいのですが、その恩恵を自分だけのものにしてしようとする者の耳にまで噂が届いてしまうと……」

「よからぬ事を考えた輩が、私目当てにこの村にやってくる、ということですか」

一良はバレッタの説明を聞き、ふむふむ、と頷いた。

つまり、バレッタを含めた村の人々は、言い伝えと同じ道を辿らぬように、一良が村に対して行った所業を一つたりとも外に漏らさないように緘口令を敷いているのだらう。

現領主であるナルソンが数百年前の領主と同じような行動を取るとは限らないが、美味しい話に誘われてやってくるのは領主だけではないはずだ。

「はい。ですから、カズラさんはこれからもグレイシオール様として振舞って頂きたいのです」

「……え？」

グレイシオールの噂話が広まらないようにしているといった内容に頷いていた一良は、バレッタからの予想外の言葉に耳を疑った。

既にバレッタは、一良がグレイシオールではないということを理解しているはずである。

それなのに、これからグレイシオールとして振舞って欲しいなと頼まれても、何のためなのかさっぱり解らない。

この娘は新興宗教でも立ち上げる気なのだらうか。

「いや、バレッタさん、私はグレイシオール様じゃないんですよ？」

それなのにグレイシオール様として振舞えと言われても……」

一良が困惑した様子でそう言うと、バレッタは慌てて顔の前で手を振って見せた。

「あ、ごめんなさい、私の言い方が悪かったです。カズラさんは、自分がグレイシオール様だと思われていることに気付いていない振りをして、村の人たちに今までどおり振舞って頂きたいんです」

「……何故？」

「村の人たちは、カズラさんがグレイシオール様だと信じているからこそ、絶対に村の外にカズラさんの施しの内容を漏らすまいとしています。それに、カズラさんが何処からやってきたのかといったことや、何故これほどの短期間に大量の食料や肥料、それに見たことも無い数々の道具を村に運びこめたのかといったことも、カズラさんがグレイシオール様であると村の皆が信じているので、言い伝えによるグレイシオール様への畏怖から、誰も探ろうとしないのです。もしカズラさんがグレイシオール様ではないということを村の人たちが知った場合、今までのこと全てについて説明を求められると思います。それに、万が一村の人たちの口が軽くなって噂が広がつてしまい、ナルソン様や王家の耳に入るような事にでもなれば……」

……

「うん、物凄く面倒なことになるね。人間宣言は滅びの道だね」

一良はバレッタの丁寧な説明を聞き、即座に自分の立てていた行動計画を撤回した。

村人達に神様だと勘違いされ続けるというのは、これから先のことを考えると色々と問題が発生しそうだが、バレッタの言うような

大事になるよりは遥かにマシである。

元々この異世界で何か大きな事をしてやろうと考えていたわけでもないのに、時々イステリア辺りを観光しながら目立たずにのんびりと村で過ごせるのなら、一良としてはその方がいいのだ。

村の農業も頗る順調だし、村人達と共に作った手作り水車のおかげで、水の心配も水車の存在が露呈した場合の心配もなくなった。

これからはこの村に対する派手な支援は極力控え、バレッタとハーブ栽培でも行っていくと一良は考えるのだった。

「……わかりました。心苦しい所はありますが、これからも『神様だと思われていることに気付いていない神様』という体で村の人たちには接していきます。すいませんが、ボロが出そうになった時はフォローをお願いしますね」

一良がバレッタに溜め息交じりにそう言うと、バレッタは嬉しそうに大きく頷く。

「はい！ 『ふおー』も『さぽー』も私に任せてください！」

何故かやたらと嬉しそうな様子のバレッタに、一良は

「（あー、いつの間にか横文字もしっかり習得してるなあ）」

と疲れた脳みそでボンヤリ考えつつ、明日からの神様ライフを思ってもう一度深く溜め息を吐くのだった。

一良がなんちゃって神様生活を送り続けることを決意している頃、イステリアに居を構えるナルソン邸の執務室では、ナルソンとジル

コニアがバルベルとの国境付近に建設中である砦の視察を終えて戻ってきたアイザックから報告を受けていた。

何時ものように執務机に向かって椅子に腰を下ろしているナルソンは、工事の進捗具合が満足の行くものだったのか、時折頷きながら報告書を読み続けている。

そんなナルソンの傍らでは、ジルコニアが机に腰を持たれかせた状態でアイザックに工事の細々とした部分について尋ねては、時折ナルソンの読んでいる報告書を覗き込んでいる。

「砦の建設は頗る順調です。このままの状態で作業が進めば、休戦条約切れの１年前には完成すると思われます」

アイザックの言うとおり、砦の建造はかなり順調に進んでいる。

国境沿いの砦の建造は、現在のイステリアにおける最優先政策なので、物資と人員を優先的に配置しているため、順調なのは当然といえは当然なのだが、それにしても当初の予想を若干上回るハイペースで建造は進んでいた。

工事に当たっている全ての者が、４年前まで行われていたバルベルとの戦争から、いかにこの砦が今後重要な拠点になるのかを認識しているからなのだろう。

工事に奴隷を用いず、全てアルカディア王国民のみで作業を行っているという点も、工事の進捗具合が早い理由の一因と言える。

「砦内の食料生産量はどれくらいになりそう？」

特に気になっていた点についてジルコニアが尋ねると、アイザックは自分の記憶から即座に情報を引っ張り出し、問いに答える。

「あの土地にどれほどグレイシオール様のご加護があるのかはまだ解りませんが、５０人から１００人が１年間食べられるだけの食料

は継続して生産できるかと思えます」

「……多く見積もっても100人分、か。それでも無いよりはマシよね……」

ジルコニアはその報告を聞くと、小さく溜め息を吐いた。

ジルコニアは以前から砦の自給体制についてずっと頭を悩ませていたのだが、砦を大きくしても生産できる食料には限界がある。

水については井戸をいくつか掘ることで解決できるのだが、食料だけはどうにもならない。

実際、この砦を用いた長期戦になった場合は、砦への外部からの物資補給は必須なのだが、バルベールの大群を相手取ってそれがどこまで可能なのだろうか。

一つの砦に対して長期で完全包囲を敷くといったことは、現実問題としてかなりの輸送力が必要になるはずだが、相手は国土を見ただけでもアルカディアとは比べ物にならないくらいの大国である。

何ヶ月も砦に対して完全包囲を敷くといった芸当も、難なくこなしてしまうかもしれないのだ。

「どうにもならない事を深く考えても仕方あるまい。有事に備えてたつぷりと食料を備蓄するという事で、今はよしとしようではないか」

暗い顔をしているジルコニアに、ナルソンは読んでいた報告書から顔を上げて声を掛ける。

執務機の正面では、まるで食料生産量が低いのは自分の責任なのかのようにしょぼくれた表情をしているアイザックに、ナルソンは苦笑した。

「アイザックもそんな顔をするな。砦内の食糧生産だけで全てを賄

おうということ事態、度台無理な相談なんだ」

「はい……しかし、もっと上手い手段が他にあればと……」

尚もしよぼくれているアイザックの生真面目っぷりに、ナルソンはやれやれと溜め息を吐きながらも、次にアイザックに任せる仕事は何だったかと、机の上に散らばっている書類の中から一枚のメモ紙を引っ張り出した。

引っ張り出したメモ紙を流し読みすると、それをアイザックの方へと滑らせる。

「まあ、その件については後は私がやるから気にするな。お前は次の職務をしっかりとこなして来い」

アイザックはメモ紙を手にとると、内容を確認して一つ頷く。

「わかりました。それでは、今から内容の確認をしてまいります」

「おいおい、もう夜中だぞ。今日はもういいから休め、明日からにしろ」

夜中だというのにこのまま仕事に移ろうとするアイザックを、ナルソンは再び苦笑しながら諫める。

諫められたアイザックは、

「（ナルソン様は明け方まで働くおつもりなのでしょう？）」

という言葉を中心にただで呟くと、小さく

「……了解しました」

と返事をし、一礼して部屋から出て行った。

「……ホントに真面目というか、職務に一生懸命な子ね。あんまり苛めちゃダメよ?」

「苛めてない」

アイザックの出て行ったドアを見ながらポツリと感想を漏らすジルコニアに、ナルソンはぶっきらぼうにそう答えると、散らばっている書類を整理し始めた。

そんなナルソンに今度はジルコニアが苦笑しながら書類整理を手伝い始めたのだが、ふと一つ気になることを思いついたので、ナルソンに聞いてみることにした。

「そういえば、アイザックには次はどんな指示を出したの?」

「今後7日は部隊の再編と訓練の現場指揮……まあ、休憩みたいなものだな。それが終わり次第、グリセア村の視察だ」

グリセア村、という単語を聞き、ジルコニアは少し遠い目をしながら

「グリセア村、か。……本当に、グレイシオール様でも現れてくれればいいのに」

と呟くのだった。

27話：少女の期待と鬼教官

一良がバレッタに人間だと認知された次の日の早朝。

辺りはまだ薄暗く、未だひっそりと静まり返っているグリセア村のあぜ道を、一良はボストンバッグ片手に日本に繋がる石畳の通路へと向かって歩いていった。

今日の一良の服装は何時もとは違い、バレッタの縫ってくれた服ではなく、ジーパンにTシャツ姿である。

日本へ戻る目的といったら今までは物資の調達のみだったのだが、本日の目的はそれではない。

「カズラさん、カズラさんの国……日本へ行ったら、まず本屋さんへ行ってみたいです！」

一良の隣を歩きながら、期待に満ちた表情で言うバレッタに、一良は、いいですよ、と返事をする。

今回の日本帰りの目的は物資の調達ではなく、バレッタを日本へ連れて行くことである。

昨晚、一良が人間であることを話した後、バレッタから

「あの……もし、ご迷惑でなければ、今度私もカズラさんの国へ連れて行っていただけませんか？」

とお願いされ、一良も『バレッタだったら別に構わないだろう』と判断して了承したのだ。

一良から日本行きの子承を取り付けたバレッタは余程嬉しかったのか、その後深夜まで一良に日本のことをあれこれと質問し続けた。

一良の腕時計が夜中の1時を指す頃になって、バレッタはようやく自分がずっと喋り続けていたことに気付き、慌てて謝罪した後に就寝することになったのだが、『今すぐにでも行きたい!』と顔に書いてあるような表情をしているバレッタに、一良が気を使って

「少し仮眠をとったら、早速私の国に行ってみます?」

と提案し、それから3時間して今に至っているのだ。

ちなみに、これは一良は知らないことなのだが、昨夜のバレッタは興奮のあまりに一睡もしていない。

「でも、本屋へ行く前に服と靴を買わないといけませんね。アルカディアの服装と日本の服装は大分違いますから」

バレッタの現在の服装は、普段どおりの無地の服に草編みの草履である。

この世界ではまるで目立たないこの服装も、日本では金髪美少女というステータスとの合わせ技で、注目の的間違いなしだ。

日本観光をするにしても、まずはどこかで服を調達し、それに着替えさせてからだろう。

「あ、そうですね……お金って、これは使えませんよね?」

念のため持ってきたのだろう、バレッタは腰紐に括り付けていた布袋から、100アル銀貨を数枚取り出した。

こちらの世界ではかなりの価値がある100アル銀貨も、日本ではただのアンティーク扱いである。

「アルカディアのお金は使えませんねえ。日本のお金なら私が持っているので、心配しなくても平気ですよ」

「すみません……私も、アルカディアン虫でも捕って来ればよかったですね。日本のお店で売ればお金にできますし」

「ええ……アルカディアン虫はどうかなあ……下手すると売れる前に色んな意味で大変なことになりそうだな……」

そんなことを話しているうちに、二人は石畳の通路へ繋がる雑木林へと辿り着いた。

日の出前ということに加えて、うつそうと生い茂る木々のために雑木林の中はかなり暗い。

普段は決して踏み入らない薄暗い雑木林を前にして、バレッタの表情にも若干の緊張が見える。

一良は不安そうにしているバレッタに気付くと、その背を軽くポンポンと叩いた。

「別に心配しなくても大丈夫ですよ。私はいつもここを通ってますけど、至って普通の林ですから」

「は、はい」

一良はバレッタに笑顔でそう言うと、ポケットから取り出したペンライトで足元を照らしながら、雑木林の奥へと歩を進めた。

歩き始めた一良に続き、バレッタもゆっくりと雑木林へ足を踏み入れる。

「この先に、日本へと繋がる石造りの通路があります。そんなに距離はないので、すぐに着きますよ」

「そうなんですか……言い伝えでは、この雑木林に入ると、いつの

間にか入り口に引き返してしまうとされているのですが……」

薄暗い雑木林の奥へ奥へと向かって歩きながら、一良はバレッタの言葉を聞いて軽く振り返りながら笑って見せた。

「面白い言い伝えですね。でも、もしそんなことが本当に起こるんだったら、私は何時までたっても日本へ帰れないじゃないですか。大丈夫、普通に通れますよ」

「そう……ですよね、カズラさんがいつも通っているんですもんね」

一良の言葉を聴いて安心した表情を見せたバレッタに、一良は笑顔で頷くと、自身の行く手に見えてきた一本の木を指差した。

「あと、道に迷わないように木に印を付けてあるんです。これを見つけないがら進めば、絶対に迷いませんよ」

「目印ですか、それなら迷うこともありませんね」

「ええ。ほら、こんな風に石で大きく印を付けたんで、暫くは消え……バレッタさん？」

目印の付けてある木に近づき、その印を手でなぞりながら後方を振り返った一良だったが、そこにいるべきバレッタの姿がない。

何処かの木の陰にでも居るのかと周囲を見渡してみたが、気配すら感じる事が出来なかった。

「なんだって…… たった今話してたのに……」

忽然と姿を消してしまったバレッタに、一良は嫌な汗を掻きなが

らも大声でバレッタの名前を呼ぶ。

しかし、その声は空しく雑木林に響き渡るだけで、何の返事も返ってこなかった。

一良は一瞬呆然と立ち尽くしたが、バレッタが万が一にでも神隠しに遭っていたら大変な事態である。

先ほどバレッタが言っていた言い伝えのように、雑木林の入り口に戻っていてくれと祈りながら、一良は全速力で雑木林の中を村への入り口へと向けて駆け出すのだった。

「あ、あれ！？ カズラさん！？」

突然目の前にいた一良の姿が掻き消え、バレッタは驚いて周囲をキョロキョロと見渡した。

一良が大きく印の付けられた木に手を掛け、こちらへ振り向こうとした瞬間、まるで空間が完全に切り替わったかのように周囲の景色が一変したのだ。

「そんな……目の前にいたのに……」

周囲の景色は、先ほどまで一良と共に居た場所とは木々の立ち位置が異なっており、先ほど一良が触れていた印の付いた木も見当たらない。

あまりの急展開に頭が着いていかず、バレッタがその場で呆然と立ち尽くしていると、背後から自らの名を呼ぶ声が耳に届いてきた。一良の声である。

「バレッタさん！ よ、よかった、見つかった……」

「え、カズラさん、どうして私の後ろから……？」

混乱している様子のバレッタに、一良は慌てて走ってきた所為で乱れている呼吸を整えながら口を開く。

「いや、私も訳が分からないのですが、後ろを振り返ったらいつの間にかバレッタさんの姿が消えていて……さっき聞いた言い伝えを思い出して、慌てて引き返して来たんですよ。でも、神隠しとかじゃなくて本当によかった……」

心底ほつとした様子の一良とは対照的に、バレッタは一瞬で移動したとされる自身の身体や周囲の様子を、怪訝な表情で確認している。

言い伝えでは、雑木林に立ち入るといつの間にか村への入り口へ引き返しているということなのだが、こうして二人で歩いていて自分だけが強制的に引き返す羽目になるとは、さすがにバレッタも思っていないかった。

言い伝えを信じていなかったわけではないのだが、一良と一緒にだったら雑木林を通り抜けることが出来ると思いついていたのだ。

「やはり、言い伝えのように私もこの雑木林を通ることが出来ないのでしょうか……」

沈んだ表情で俯いて呟くバレッタを見て、それならば、と一良は左手でバレッタの右手を握る。

「あ……」

「こうして手を繋いでいけば、バレッタさんも一緒に雑木林を抜けることが出来るんじゃないですか？」

少なくとも、一良は雑木林を自由に通過することが出来るのだ。

こうしてしっかりと手を繋いでいれば、もしかしたらバレッタを掴んだまま雑木林を抜けることが出来るかもしれない。

一良は自身の考えに光明を見出して頷くと、不安そうな表情をして自分を見上げてくるいるバレッタに微笑み、再度雑木林の奥へと向けて歩き始めるのだった。

黙々と歩くこと約2分。

先ほどバレッタが急に消えてしまった場所に辿り着き、二人は足を止めた。

「確か、さっきはこの数歩先辺りで急に景色が変わってしまったんです」

バレッタはそう言うと、足元に落ちている石を一つ拾い上げ、雑木林の奥へと放り投げた。

投げられた石は途中で消え去るということはなく、印の付いた木の脇を通り、地面に落ちてコロコロと転がった。

「石は大丈夫みたいですね……」

投げた石が消えなかったことを確認すると、バレッタは一良と手を繋いだまま、もう片方の手も使い、繋いでいる一良の腕をぎゅっと抱きしめる。

一良もバレッタの手を強く握り返すと、印の付いた木に向かってゆっくりと歩き出した。

「よし、このまま行けばなんとか…… なっ!？」

もう少しで目印の付けてある木に手が届こうという距離にまで近づいた瞬間、今までしつかりと自分の腕に掴まっていたバレッタが一瞬で消え去った。

左手に掛かっていた質量が急になくなり、思わずバランスを崩して転びそうになる。

「あ、あぶねえ……こりゃ一体どうなってるんだ」

しつかりと手を握っていた上に、その姿を視界に捉えていた状況での突然のバレッタの消失に、この世界にやってきてから様々な驚くべき事態に遭遇してきた一良も、さすがに言葉を失った。

目の前で人一人が一瞬で消え去るというのは、かなりインパクトが大きい。

正直、初めて異世界への扉を通った時よりも衝撃を受けた。

一良は今までバレッタの手を握っていた左手を数秒見つめていたが、再び踵を返し駆け出すのだった。

「バレッタさん」

先ほどバレッタが瞬間移動させられていた場所に一良が戻つてくると、バレッタは落ち込んだ表情で膝を抱え、落ち葉の降り積もった地面を見ながらぽつんと座り込んでいた。

一良が傍まで歩み寄ると、バレッタは膝を抱えたまま一良を見上げ、

「……ダメでした」

と呟き、再び視線を地面に戻した。

目尻には若干涙が浮かび、相当凹んでいるようだ。

「うーん……何故か解らないけど、今すぐ日本に行くってのは無理みたいですねえ……」

一良は自由に雑木林を移動することが出来るのに、バレッタにはそれが出来ないというのは意味がわからない。

しかも、単に通れないどころか、一瞬にしてこの場所まで移動させられてしまうという超常現象のオマケつきである。

一良とバレッタの違いといったら、性別もしくは生まれた世界くらいなものだが、もしそのどちらかが理由だとしたら、バレッタが日本に行くことは絶望的である。

「……日本、行ってみたかったな……」

寂しそうに呟くバレッタに、どう応えればいいのかと一良がオロオロしていると、バレッタは一つ大きく溜め息を吐いて立ち上がり、服に付いた土をぱんぱんと払った。

「無理なことをぐちぐち言っても仕方ありませんよね。我侬言っすいませんでした」

そう言っつて無理して作ったような笑顔を見せるバレッタを見て、一良は自分が悪いわけでもないのに、何故か罪悪感で一杯になってしまう。

まさかこんな現象が起こるとは毛ほども思っていなかったために、日本へ行ってみたいというバレッタの頼みを受けてしまったのだが、

期待が大きかった分、行けないと分かった時のショックも相当大きかったようだ。

「いや、我俣だなんて……何か方法があるかもしれませんし、また何か考えて挑戦してみましよう」

「……はい、そうですね」

まだ完全に無理と決まったわけでもないので、日本へ行く何か上手い方法があるかもしれない。

諦めるのはまだ早い、と前向きに考えてそう言った一良だったが、俯いて返事をするバレッタは既に諦めてしまっているように見えた。村に伝わる言い伝えと全く同じ状態になってしまったということが、かなり堪えたのかもしれない。

二人はそうして暫く無言で立ち尽くしていたが、不意にバレッタが顔を上げて口を開いた。

「カズラさん、一つお願いがあるんですけど……」

「うん、何でも言って」

笑顔で応じる一良に、バレッタは少し照れたように目を逸らしながら笑って見せた。

「また、桃缶が食べたいです」

「え？ 桃缶？」

桃缶が食べたい、というお願いに、何でこのタイミングで桃缶な

んだろうと一良は内心首を傾げた。
しかし、バレッタが

「はい、桃缶です。……ダメですか？」

と申し訳なさそうに一良を見上げると、一良はすぐに笑顔で頷いた。

「わかりました、桃缶ですね。すぐに買ってきますから、バレッタさんは屋敷で待っていてください」

「はい、ありがとうございます」

了承した一良にバレッタが礼を述べると、一良は

「では、また後ほど」

と、駆け足で雑木林の奥へと消えていった。

バレッタは小さく手を振りながら走り去る一良の背を見送ると、もう一度大きく溜め息を吐いた。

「はー。カズラさんが戻ってくるまでに元気出さないと。頑張れ、私」

バレッタはそう言って胸の前で小さく拳を作って気合を入れる仕草をすると、村へ戻るべく雑木林を後にするのだった。

バレッタと別れてから数分後。

一良は石畳の通路の脇にある墓の前に立ち、難しい顔をして墓を見下ろしていた。

「なあ、数百年前に村に現れたグレイシオールって、あんたのことなのか？」

バレッタから昨晚聞いたグレイシオールの言い伝えによると、グレイシオールは領主の拘束から逃れた後、この雑木林に姿を消したらしい。

首に縄を掛けられて拘束されていた状況から一瞬で縄を解き、斬りかかってきた領主の剣を全て回避したとのことだが……。

「何とか縄を解いて逃げたはいいものの、剣を避けきれずに何度か斬られて、その傷が原因でここで力尽きたってのが一番しっくりくるんだよねえ……」

通路の隅に崩れ落ちているような状態の死体と、昨晚聞いたグレイシオールの言い伝え。

どう考えても関わりがあるように思えるが、数百年も前の話なので、ここに崩れ落ちていた死体がグレイシオールか否かという事実を確認することは難しいだろう。

しかし、言い伝えが事実だとすれば、この墓の下にいる白骨死体がグレイシオールだと考えて間違いないように思える。

昨晚、バレッタから言い伝えを聞いた時点で『おやつ?』と思っていたのだが、グレイシオールという神様の物語を信じているバレッタにとっては必要の無い、むしろ伝えるべきではない情報である。今日も、もしバレッタが雑木林を一良と共に抜けることができたとしても、一良は墓の前は素通りするつもりだったのだ。

「あんたもあの屋敷からこの世界に来たんだとしたら、俺のご先祖様だったりするのかな？」

一良が父——志野真治——に屋敷への避難を勧められた際、確か父は、『先祖代々伝わる屋敷』と言っていた。

先祖代々とは言っても、屋敷がどれくらい前から志野家の所有物だったのかはわからないが、もし数百年前から志野家の所有物だったとすれば、あながち有り得ない話でもない気がしてくる。

しかし、そうなるとわからないのが、この世界に繋がる屋敷の一室のことを、何故誰も一良に教えてくれなかったのかという点だ。別の世界に繋がる部屋があるという情報を、知っていたのに伝え忘れたというのは考えにくい。

かといって、一良の父が一室のことを知っていたにもかかわらず、あえて一良には何も伝えなかったというのも無理があるし、第一そうする理由がない。

部屋の扉に南京錠が掛かっていたことから、もしかしたら誰もあの扉を開けようとする者がおらず、この世界に繋がっているということを知りも知らなかった、と考えるのが一番自然に思えた。

「でも、そうするとあの南京錠を掛けたのは誰なんだって話になるなあ。そういえば、あの南京錠は畳に落ちた後何処にいったんだろ…… ああ、もういいや、今度父さんに先祖のことをそれとなく聞いてみよう」

いくら考えても明確な答えなどこの場で出るはずもなく、一良は考えるのを中断して頭を掻くと、いつものように日本へ戻るべく、石畳の通路に入って行くのだった。

一良が桃缶を買いに日本へ移動している頃。

イステリアの街中にある訓練場にて、アイザックは100名の部下と共に体力づくりの腕立て伏せをしていた。

訓練場という少し物々しいが、3メートル程の石の壁で周囲を囲ってあるだけの殺風景な広場である。

広場と街を繋ぐ観音開きの大きな木の門は開け放たれており、扉の傍には見張りの兵士が一人立っている。

門の前を通りかかる市民も数多くおり、訓練場で行われている訓練に興味を示し、見張りの兵士に話しかける者も少なからずいるようだ。

訓練している兵士は皆若く、今年で20歳になるアイザックと彼の副官が一番の年長者である。

「48、49、50！……ん？　なんだ、遅れている奴は誰もいないのか」

予め決めてあった回数をこなしたアイザックが地面から顔を上げると、部下の兵士は全員がアイザックと同じペースで腕立て伏せをこなしたらしく、それぞれ立ち上がって手に付いた砂を払ったりしている。

ここ数週間、アイザックは部隊を離れ、ナルソンからの指示で他の職務に当たっていた。

部隊長である自分がいなかったことで多少なりとも弛んでいたはずの部下達の気を引き締めようと、かなりの速度で腕立て伏せをさせたのだが、驚いたことに全員がついてきている。

一人でも遅れる者がいれば、次に控えている長距離走を予定の倍の距離で行うと宣言しておいたのだが、それは行わずに済んだようだ。

アイザックが部下達に感心していると、隣で腕立て伏せをしてい

た彼の副官である男が、手とズボンについた砂を払いながら溜め息を吐いた。

「隊長が居ない間、何故かジルコニア様が部隊の様子を時折見に来ていたんです。そこで出される訓練指示といたら、正に地獄のようでしたよ。隊長の計画した訓練が神の慈悲に思えます」

「ジルコニア様が指導してくださったのか……それならお前達の体力がついているのにも納得がいくな。よかったじゃないか」

アイザックがそう言うと、副官の男は心底疲れたような表情でアイザックに目を向けた。

「よくないですよ。2週間程前、あまりの訓練の過酷さに思わず舌打ちをしてしまった奴がいたんですが、その直後に全員がジルコニア様と模擬短槍を使った実戦訓練をさせられたんです。結果は……」

「何！？ ジルコニア様が手合わせしてくださったのか！ 何と羨ましい……で、どうだったんだ！？」

余程その実戦訓練に参加したかったのか、アイザックはなんとも悔しそうな表情を見せた。

そんなアイザックを見て、副官の男は、

「（何をどう考えたらそんなに羨ましく思えるんだこの人は……）」

と気持ちの悪い物でも見るような目でアイザックを見ると、遮られた続きを口にした。

「散々でしたよ。誰一人として20秒持たずに地面を舐める羽目に

なりましたし、倒れても動けなくなるまで無理やり立たされました。私も『貴様は戦場でも同じようにずっと倒れているつもりか！』って怒鳴られながら何度も立ち上がらされては、しこたま槍で殴られて地面を抱擁ですよ。次の日は身体が痛くて動けませんでした」

「そうか、さすがジルコニア様だな……」

心底感服した様子で感心しているアイザックに、副官の男は

「（いや、俺の話聞いてたのかよ。何が『さすが』なんだよ）」

と心の中で文句を言うが口には出さない。

「ジルコニア様に訓練のお相手をして頂けるなんて、お前達が期待されている証拠だぞ。6日後から俺はグリセア村の視察で部隊を留守にするが、俺が居ない間にジルコニア様が指導にいらしても、しっかりとご期待に応えら得るように訓練に励めよ。よし、次は……」

「えっ！？ 6日後からって、また居なくなるんですか！ 勘弁してください、殺されちゃいますよ！」

さらりと重大なことを言って次の訓練に移行しようとするアイザックの台詞に、副官の男は激しく反応した。

そのやり取りを聞いていた部下の兵士達も、一斉にアイザックに駆け寄って懇願する。

「隊長だけ逃げるなんて卑怯ですよ！ オルマシオール様に見放されますよ！？」

「隊長が居なくなったら、あの人絶対にまたここに来ますよ！ 俺

達も連れて行ってください！」

皆切羽詰った表情をしていることから、ジルコニアの訓練が余程トラウマになっているのだろうか。

アイザックは自分達も連れていけと連呼する部下達に圧倒され、数歩後ずさった。

「お、おい、落ち着け。ジルコニア様に来ていただけるなんてありがたい事じゃないか。何をそんなに嫌がってるんだ」

「嫌なものは嫌なんですよ。お願いしますから、何か理由をつけて部隊も一緒に連れて行ってください。グリセア村まで行くのでしたら、野外行軍訓練も兼ねて部隊を連れて行けるじゃないですか」

副官の意見に、アイザックは腕組みして考え込んだ。

副官の言うとおり、グリセア村までならば距離的にも手頃であり、行軍訓練をするにはうってつけである。

ジルコニアから逃れたいという理由からくる不順な希望ではあるが、部下の全員が望んで行いう訓練ならば、やる気も違っただろうし身にもつくはずだ。

何より、この場で無下に断った後の部下達の自分に対する評価が下がることも避けたいところである。

「わかった、連れて行くよ。ただし、グリセア村までの視察はナルソン様からの指示だから、ナルソン様の許可が降りなかったらその時は諦めるよ」

アイザックが部下たちにそう言うと、部下達は一様にほっとした表情を見せた。

「了解です。その時は腹を括りますけど、何とかお願いしますよ。戦争前に訓練で死ぬのは御免ですからね」

真顔で言う副官に、アイザックは

「大げさな奴だ」

と溜め息を吐くと、次の訓練を部下に指示するのだった。

28話：それぞれの温度差

バレッタがこちらの世界と日本の往来に失敗してから8日後の朝。一良はバレッタと共に、村長邸の裏手に作られた柵の中で、2羽の根切り鳥に餌を与えていた。

根切り鳥に与えている餌は栄養バランスのとれた配合飼料であり、一良が6日前に日本で購入してきたものである。

2羽の根切り鳥は地面に撒かれた餌を美味しそうについばんでおり、その姿はまるで日本の鶏のようだ。

「よしよし、沢山食べてしつかり卵を産むんだぞ。出来ることなら有精卵を産んでくれ」

ここ数日、根切り鳥は日本製の飼料を与えたことがよほど効果的だったのか、この4日間で2つも卵を産んでいる。

今のところ親鳥が暖めたものはないのだが、そろそろ有精卵が生まれるかもしれない。

たった2羽しかいないので、弱って死なれては困るということで日本製の飼料を与えているのだが、期待通りに体質改善されているようだ。

「これから根切り鳥が沢山増えれば、数年後には根切り鳥の生産を村の新しい産業に出来るかもしれませんね。……養鶏についてもっと勉強しないと」

一良と共に日本へ行くことが出来ないという事実が判明してからというもの、バレッタは前にも増して熱心に勉強に取り組むようになった。

一良もバレッタと一緒に勉強に取り組んではいるのだが、バレッ

タの飲み込みの速さがあまりにも早く、分野によつては先に内容を理解したバレッタから、逆に一良が勉強を教わっているといった始末である。

養鶏についてはまだ何も勉強はしておらず、知識らしい知識といえは一良がホームセンターで飼料を買う際に店員から聞いた、鶏の育て方の基礎知識程度しかない。

「今度日本に戻ったときに、養鶏についての専門書も買ってきますね。……そろそろ本棚が必要だなあ」

この8日間の間、一良は何度か日本に戻って食料品の買い入れを行っていたのだが、そのついでにバレッタへのお土産として書籍も大量に購入してきていた。

しかし、最近では本の冊数がかなり多くなってきており、収納場所を用意しなければ一良の部屋の隅に本が積みあがっていく一方である。

「そうですね……森の手前に租税用の木材が沢山あるはずですから、少し使わせてもらって本棚を作りますでしょうか」

「折角だから大きな目のやつを作りますかね……ん？ 誰か訪ねてきたみたいですよ」

二人が話をしながら根切り鳥に餌を与えていると、家の入り口の方から複数名が大声で村長の名を呼ぶ声が聞こえた。

村の誰かが訪ねてきたようだが、何やら慌てているような雰囲気である。

その只ならぬ雰囲気二人は顔を見合わせると、何事だろうかと屋敷の入り口へと足を向けるのだった。

二人が屋敷の入り口に着くと、そこでは村長と十数名の村人が真剣な表情で何やら話し込んでいた。

村人達は一良とバレッタがやってきたことに気付くと、皆が無言のまま、一様に不安が入り混じった縋り付くような表情で一良のことを見つめてくる。

「……えっと……」

「皆さん、何かあったのですか？」

急に大勢に見つめられて一良が困っていると、バレッタが一步前に出て村人達に声を掛けた。

声を掛けられた村人達は口を閉ざしたまま地面に目を向けていたが、それを見かねた村長が村人達の代わりに口を開く。

「……東の街道から、イステリアの軍隊が村へ向かってきているらしい。人数は100人もいるそうだ」

「えっ!?!」

自らの父親の言葉に、バレッタは一良を振り返った。

今まで、グリセア村にイステリアの軍隊がやってきたことなど、グレイシオールの言い伝えを除けば、バレッタの知る限り一度もない。

バルベールと戦争をしていた時には、徴兵に訪れる兵士が多くてもう名いれが多い方だったのである。

「……えっと、とりあえず私は自分の部屋に引き籠もっていますね」

今度はバレッタまで含めた全員に見つめられ始めてしまった一良は、その場の空気の重さを感じ取って自ら自室に引っ込むことにした。

この場にいる者の内、バレッタ以外は村長も含めた全員が一良のことをグレイシオールだと信じきっているはずである。

だとすれば、自分がここにいては村人達はまともに話を進めることが出来ないだろうと一良は考えたのだ。

一良はそう言つと、皆の視線を背中に受けながら、そそくさと屋敷の中へと消えていった。

一良が屋敷の奥へ行つたことを確認すると、村人達は再び村長に向き直つた。

「村長……村に向かつてきている軍隊は、カズラ様を捕らえようと、ナルソン様が差し向けたものに違いありません！」

「いや、まだそうと決まつたわけでは……」

「他にどんな理由があつてこの村に軍隊がやってくるというのですか！ このままでは言い伝えと同じように、カズラ様は……グレイシオール様は、再び私達の元から去ってしまいます……！」

屋敷の中にいる一良を気遣つて小声ではあるが、鬼気迫つた表情で訴えてくる村人達に、村長は思わずたじろいだ。

村人達にとつて、一良は村の窮地を救ってくれたグレイシオールそのものなのである。

自分達を救うために現れてくれた慈悲と豊穡の神が、言い伝えと同様に再び領主の手によって奪い去られてしまうかもしれないといった恐怖に、村人達は恐慌状態に陥っているかのように見えた。

「言い伝えと同じ過ちを、今再び繰り返すわけにはいきません。屋敷の武器庫を開けてください」

「お、おい、何を言っておるのだ！？ お前はナルソン様の軍隊に刃を向けるつもりか！ 馬鹿な事を言うな！！」

武器庫を開けろ、とんでもないことを言い出した村人達を、村長は一喝した。

イステリアの軍隊に刃を向けるということは、アルカディアに対して反逆を起こすと同義である。

村人達は村長の剣幕に一瞬身を縮めたが、今度は村長を睨み付けて更に一步前へと村長に迫った。

「数百年前に私達の祖先は、グレイシオール様に命を救ってもらったにも関わらず、捕らえられようとしているグレイシオール様を、我が身可愛さに守ろうともしませんでした。グレイシオール様はそんな罪深い者達の子孫である私達を赦し、再び救いの手を差し伸べてくださったのです。ここで同じ過ちを繰り返せば、今度こそ我々はグレイシオール様から見捨てられてしまいます」

「だが、ナルソン様の軍隊に楯突くことなど……」

村人の言葉に、村長は苦虫を噛み潰したような表情で唸った。

村人達の言い分も理解できるし、村長個人としても、一良が捕らえられるような事態は絶対に避けたいと思っている。

しかし、ナルソンの軍隊に楯突いた場合、後に待っているのは極刑もしくは奴隷化である。

村長である自分が処罰されて死刑になるだけで済むのならば、一

良のために何でもしたいところなのだが、まず間違いなく村全体が重い罰を受けることになる。

村長親子が死刑になるのは当然のこと、村人全員も死刑になるか奴隷の身分に叩き落されることは確実なのだ。

「私も皆さんの言うことに賛成です。グレイシオール様が捕らえられようとしているのであれば、たとえ相手がナルソン様の軍隊だとしても、武器を取って戦うべきだと思います」

村長がどうするべきかと困っていると、それまで沈黙していたバレッタが自らの意見を述べた。

バレッタがそのようなことを言うなどとは全く考えていなかった村長は、驚いて自らの娘に目を向ける。

村人達も、バレッタの意見を聞いてより勢いづいたように見えた。

「ですが」

バレッタは村人達の意見に同調した自分を諫めようと口を開きかけた村長を目で制すと、村人達に向き直って言葉を続けた。

「残念ながら、私達全員が武器を取って戦ったとしても、100人近くもいる軍隊を撃退することは難しいでしょう。この村でまともに軍人と戦える人は、多く見積もっても10数人ですから」

バレッタが自分達の意見に同調したことに気を良くしていた村人たちは、その指摘にざわついた。

「し、しかし、だからといって戦わないわけにはいきません！ バレッタさんだって、たった今戦うべきだと言ったばかりではないですか！」

興奮した様子で近くに迫り訴える男の村人を、バレッタは見上げる形で直視したまま、ええ、と頷いた。

「必要とあらばもちろん戦います。しかし、それは最後の手段です。私達の目的はグレイシオール様をお守りすることですから、それが達成されてしまえばナルソン様の軍隊と戦う必要はありません」

「ですが、グレイシオール様をお守りするためには戦うしか……」

「戦う前に出来ることが他に何かあるはずです。村へ向かってきている軍隊は、あとどれくらいで到着するのか知っている人はいますか？」

バレッタがそう言って他の者に目をやると、一人の若い男の村人が手を挙げた。

「1刻程経った後に村へ着くと聞きました」

「それは誰から聞いたんですか？」

「ラタに乗った騎兵からです。1刻程で軍隊が村に到着するから、村長に出迎えるように伝えておけ、と言われました」

バレッタはそれを聞くと、ほつと息を吐いた。

今の話から村へ向かってきている軍隊の目的を察するに、一良を捕らえることが目的ではないように思える。

もし一良を捕らえることが目的であるならば、わざわざ騎兵に先行させて軍隊の到着時刻を村に伝えるといった真似はしないはずだ。軍隊がやってくると聞いた村人達は、一良の存在と村に伝わるグ

レイシオールの言い伝えが真っ先に頭に浮かんでしまい、極端な思考に陥ってしまっているのだろう。

バレッタは今考えた内容を村人達に説明して理解を得ようかと一瞬考えたが、すぐにそれを打ち消した。

興奮状態にある村人達にそれを説明するよりも、別の作業をさせて一旦冷静になってもらう方が先だと考えたのだ。

バレッタはその場で数秒思案すると、すぐに村人達にいくつか指示を出し始めるのだった。

バレッタが村人達に指示を出している頃、一良は屋敷の自室で、自分のボストンバッグの中に衣類などの荷物を詰め込んでいた。

先ほどの村長の話では、イステリアの軍隊が村に接近中らしい。何の目的で村に軍隊が向かってきているのかはわからないが、少なくとも自分は暫くの間、村から姿を消したほうがいいと判断したのだ。

もし軍隊が村に何日か滞在することになった場合、何かの拍子に自分の存在が露見する可能性がある。

元々一良はこの村にいるはずのない人間であるので、軍隊がこの村の戸籍謄本のような物を持っていた場合、村人と同じ格好をしていてもばれてしまうかもしれないのだ。

一良は自身の身の回りのものをバッグに積めると、部屋の隅に積みあがっている本の山を眺めながら、これらも持っていくべきだろうかと考えていると、話し合いを終えたバレッタが部屋へ入ってきた。

「カズラさん……あ、既に荷造りをしていましたか」

バッグに荷物を積み終え、積みあがった本を眺めている一良を見て、バレッタは一良に笑顔を見せた。

「ええ、暫くの間、私は日本に避難しておきます。先ほどバリンさんが言っていたイステリアの軍隊ですが、すぐに村へ到着するんですか？」

「いえ、あと1刻……2時間程時間があります。その間に、見られずとも隠さないと……」

一良はそれを聞くと、再び目の前に積みあがっている本へ目を向けた。

「この本も何とかしなくちゃいけないかなあ……軍隊は何の目的で村へ向かってきているんですか？」

バレッタは一良に質問されると、うーん、と口元に手を当てて少し考える素振りを見せた。

「目的はよくわかりませんが、連絡用の騎兵を先に村に寄越したようなので、少なくともカズラさんが目当てで村に向かっているわけではなさそうです。この村を経由して別の目的地に向かうつもりか、何かの訓練の一環でたまたま立ち寄っただけかもしれませんね」

自分が目的ではない、と聞いて、一良はほっと胸を撫で下ろした。以前、イステリアに行った時に、ナルソンの娘とトラブルになりにかけたことがあったので、それが元で何か起こってしまったのかと心配していたのだ。

バレッタの予想通り、軍隊の目的が訓練や遠征のための立ち寄り

だけであるならば、またすぐに村へ戻ってできるかもしれない。

「それはよかった。しかしまあ、念のために私は日本へ戻っておいた方がいいですね……この本もそうですが、村の方たちに渡してある鍬なども見つからないように気をつけないと」

バレッタは一良の言葉に、大丈夫です、と言って微笑んだ。

「先ほど、村の皆には、カズラさんからいただいた道具は全て縁の下に隠すように伝えておきました。例え縁の下を覗かれても、薄暗いところなら青銅製の鍬などで見分けが付きませんから、見つかることはないと思います」

「おお、さすがバレッタさん。では、この本なども袋に入れて物置の隅にでも置いておけば平気ですかね？」

「そうですね……家にあるズタ袋に入れて、念のために袋の上のほうには別の物を入れておけば大丈夫だと思います」

村に向かっていている軍隊の目的が一良を捕らえることでないならば、村の中を詮索されるようなことはないはずなので、見つかったらまずい物は目に付かない所に置いておく程度で問題ないはずである。

一良はバレッタの返事に頷くと、改めて本の山に向き直った。

「では、早いところこの本を片付けますか」

「はい、本を入れる袋を取ってきますね」

こうして、二人は当初の予定とは違った形で、積みあがっている

本の片づけを開始するのだった。

グリセア村の住民達が隠蔽工作を始めてから約2時間後。

部隊を引き連れたアイザックは、村の入り口から200メートル程の位置にて、副官に野営準備の指示を出していた。

時刻はまだ昼前で、野営の準備をするには大分早いですが、部隊長であるアイザックはグリセア村の視察のために一時的に部隊を離れてしまったため、その間に野営準備をさせることにしたのだ。

それに、今回の行軍には荷引き用のラタを数頭連れてはいるが、従者は一人も連れてきていないので、全て部隊の兵士が自力で野営準備をしなければならなかったため、時間があるに越したことはないし、実際物凄く時間が掛かる。

アイザックの部隊に所属している者は全て貴族出身であり、普段は身の回りのことを全て従者にやらせている者達ばかりなので、慣れない作業に時間が掛かるのは仕方がないのだが、その手際の悪さはアイザックの予想を遥かに超えていた。

本日でイステリアを出発してから3日目なのだが、初日の野営準備はそれはもう散々な結果であり、夕暮れ前から天幕を設置し始め、全ての天幕を張り終えて食事の仕度が整う頃には、夜空に星が輝いていた程である。

昨日は初日に比べれば多少マシな早さで野営準備を整えることが出来たが、本日もかなりの時間がかかると思われた。

「では、俺はこれから村の視察に行つて来る。恐らく夕暮れまで掛かるだろうから、それまでの指揮は任せたぞ」

「了解です……あ、隊長、水の補給には、グリセア村にある水路を

使ってもよろしいですか？」

ここまでの行軍中、アイザックは副官に雑談がてらグリセア村の様子や周辺の地理について話をしていたのだが、副官は村に新しく作られた水路のことを覚えていたらしい。

ここから川まで水を汲みに行くとかかなりの時間が掛かってしまうが、村に作られたという水路から水が得られれば非常に楽である。

「ん、そうだな……よし、俺から村長のバリンさんに水路を使わせてもらえるように頼むとしよう。水の補給に充てる人員を4人選抜しろ」

そう指示を受けた副官は、アイザックの台詞に一瞬眉をひそめたが、了解しました、と返事をする、と、手近な位置で座り込んでいる兵士達に声を掛けた。

声を掛けられた兵士達はすぐに立ち上がると、水桶を取るために荷馬車へと駆けていく。

アイザックは走っていった兵士達を見送っている副官の姿を見ながら内心溜め息を吐くと、これから向かうグリセア村へと目を向けるのだった。

29話：思い込み

真夏の太陽が強烈に大地を照りつける中、村長とバレッタはアイザックを含めた5人の武装した兵士を村の入り口にて出迎えていた。兵士達は皆が青銅で補強された厚手の皮鎧を身に纏い、頭には青銅の兜を被るという重装備である。

アイザック以外の兵士は両手に水桶をぶら下げており、腰に挿してある短剣以外に武器や盾は携帯していないようだった。

また、アイザックだけは兜を被っていないのだが、長時間の視察の邪魔になると判断したのかもしれない。

「というわけで、私が村を視察している間、村の傍で部隊に野営準備をさせることになったのですが、水の補給に村の水路を使わせていただければと思ひまして……」

「もちろん大丈夫です。どうか遠慮などなさらず、好きに使ってください」

村長は申し訳なさそうに頼むアイザックに笑顔で応じたが、内心かなり驚いていた。

というのも、村に向かっている軍隊の指揮官がアイザックであるとは欠片も考えていなかったからである。

今までに何度かアイザックがグリセア村に訪れた際にも、常にあるような丁寧な対応を村人全員に取っていたので、まさか部隊指揮官を担う程の身分にある人物だとは思っていなかった。

しかも、彼の後ろに控えている兵士達が腰に下げている短剣には家紋の装飾が施されており、どうやら貴族のようである。

貴族が所属する部隊の指揮官は、配下の貴族よりも上級の貴族しか有り得ないはずなので、アイザックはなかなか地位の高い貴族

ということになるのだ。

ちなみに、今アイザックが腰に下げている短剣にも豪華な家紋の装飾が施されている。

以前、村に視察に訪れた際には短剣に装飾は施されていなかったはずなので、一人で村の視察に訪れる際は、村人達に威圧感を与えないようにあえて一般兵士が携帯するような普通の短剣を装備しているのかもしれない。

「ありがとうございます。あまり村の奥には入らないようにさせますので、兵のことは気にしないように村の方々にお伝えください」

アイザックは村長にそう言うと、背後の兵士達に水汲みの指示を出した。

指示を受けた兵士達は短く返事をする、両手に持っている水桶を揺らしながら水路へ向かって走っていく。

アイザックは走っていった兵士達を見送ると、村長とバレッタに向き直った。

「それでは、早速ですが村の視察をさせてください。畑の作物の生育は順調ですか？」

「ええ、水路からの水が使えるおかげで、日照りにも負けずに順調に育っております。それに、作物をいつもとは違ったやり方で育てたところ、以前に比べて成長するのがかなり早くなりました。この分なら、収穫の時期には租税として芋を少し収めることができるかもしれません」

作物の生育具合を問うアイザックに、村長は以前よりバレッタや一良と話し合って決めていたとおりの受け答えをした。

村の畑の作物は一良の持ち込んだ肥料と、森から取ってきた腐葉土のおかげでかなりの急成長を遂げているのだが、アイザックに詳しく聞かれた場合は腐葉土についてだけ答えることになっている。

「それは朗報ですね。少しでも作物を収めて頂けると、我々としても非常に助かります。今年は他の村々からの租税も大分少なくなりそうですから」

アイザックは村長の台詞に笑顔を見せると、村長とバレッタを促して手近な位置にある芋畑へと向かうのだった。

アイザックは芋畑に到着すると、そこに生えている芋の姿に目を見張った。

畑に植えられている芋は、以前村を訪れた時よりも格段にその大きさを増し、傍目から見ても解るほどに蔓は太くて逞しく、葉も驚くほどに巨大になっている。

アイザック自身、農業に関しては素人同然だが、葉や蔓がここまで大きくなった芋は見たことがない。

「これは……私の知る限り、ここまで葉と蔓が大きく成長した芋は見たことがないのですが……ここに植えられている物は、例年収めていただいている芋と同じものですか？」

「はい、いつもと同じ芋ですぞ。ただし、今年は畑の土に森から取ってきた沢山の土を混ぜてみたのです」

アイザックはそれを聞くと、興味深げな表情で芋の前にしゃがみ込み、その葉に触れてみた。

芋の葉は厚みも増しているらしく、太い蔓と合わさってかなりの迫力である。

一ヶ月前に見た芋と同じものだとはい、正直言って信じられない程だ。

「森が受けているグレイシオール様の加護を、土と一緒に村の畑に取り込んだのですか……まさかこれ程にも効果があるとは……」

「我々も驚いております。この手法が他の村でも可能なのはわかりませんが、グリセア村の森はグレイシオール様の加護をかなり強く受けているでしょう」

村長の言葉に、アイザックはこの村についての言い伝えを思い出し、芋の成長と照らし合わせて納得した表情を見せた。

この村は、数百年前にグレイシオールが現れて人々を救ったという言い伝えのある村なのだ。

周辺の森そのものがグレイシオールの多大な加護を受けていたとしても何ら不思議ではなく、その森の土を使えば作物の生長が急激に早くなるということにも納得がいく。

「さすがはグリセア村です。グレイシオール様の加護をこれほどまで強く受けた土を使えるのなら、今後の作物の収穫も期待が持てそうですね」

周辺の森にあるグレイシオールの多大なる加護を受けた土を使えるとなると、今後グリセア村の食料生産量は劇的に向上するかもしれない。

その上、村に新しく作られた水路にはこの日照りの中でも安定的に水が供給されているようなので、大干ばつによる食料生産量の落ち込みの心配もないのだ。

もしかすると、この村を中心とした大規模な穀倉地帯を作ることが可能かもしれないとアイザックは考えると、懐から皮紙と木炭を取り出し、作物の生育具合と森の土の存在を書き綴るのだった。

「他の畑の作物も気になるところですが、先に水路について少し教えていただきたいことがあります」

メモ書きを終えて、手にした皮紙から顔を上げてそう言うアイザックに、村長とバレッタは笑顔で頷きながらも「きたか」と内心身構えた。

前回アイザックが視察に来た時には水路について特に何も探られなかったが、一良の案じていた通り、それはアイザックが村と川の位置関係について詳しくなかったからだろう。

アイザックが上官に視察の報告をした際、水の出所について物言いがついたに違いないと村長とバレッタは思った。

実際はアイザックが直接ナルソンに報告し、村と川の位置関係について直に物言いをされていたのだが、まさかアイザックがナルソンに直接会えるほどの立場にある人物だとは、村長もバレッタも毛ほども思っていない。

「村の水路に流れている水なのですが、これは北西にある川から引いているのですか？」

「ええ、川から引いております」

「ふむ……北西の川は村に対して位置が低すぎて、水路を引くのは無理なはずなのですが、どうやって水を引いているのですか？」

アイザックにそう問われると、村長はバレッタをちらりと見やり、

バレッタが頷くのを見てから口を開いた。

「実は、娘のバレッタが水車という道具を考えまして、それを使って川の水を汲み上げて水路に流し続けているのです」

「水車？」

水車という始めて聞く単語に、アイザックは鸚鵡返しで聞き返した。

アイザックの知る限り、常に水路に水が流れるほどの量の水を汲み上げ続ける道具など聞いたことがない。

「その水車という道具は、村の水路の先にあるのですか？」

「はい、そうです。今からご案内しましょうか？」

案内を申し出る村長に、アイザックは即座に頷いた。

てつきり新しい水源でも見つかったのかと思っていたのだが、実際は川の水を道具を使って汲み上げているという。

アイザックは何やら言い知れぬ予感を感じつつ、先導する村長とバレッタの後に続いて川へと向かうのだった。

歩くこと約30分。

村長ら3人は、先日設置した水車二号機の元へやって来ていた。

水車はいつものように元気に回り続けており、川に隣接して作られた水路の水を、揚水用の木箱を使って高所にある木の水路へと運び続けている。

「こ、これはすごい！」

アイザックは水車を目にし、低所から高所へと大量の水を運ぶ水車の姿に驚嘆の声を上げた。

人の手を借りず、流れる水の力だけを使ってこのような動きをする道具を、アイザックは今まで見たことがなかったのだ。

「これが水車です。何とか川の水を村に引くことができないものかと、バレッタが考え出してくれました」

「水があんなに高い所にまで……これは凄い発明ですよ！ バレッタさんが一人で考えたのですか？」

アイザックは回り続けている水車を食い入るように見つめた後、懐から取り出した皮紙に水車の絵を描きながらバレッタを見やった。

「はい、どうやったら川の水を村に引けるのか色々と考えていて、この水車を考え付いたんです。村のみんなに協力してもらって、部品を作って組み立てました」

バレッタの答えにアイザックは頷きながらも、水車の存在に興奮する頭の片隅で、何かすつきりしないものを感じていた。

というのも、一介の農民風情、しかもバレッタのような若者がこのような画期的な発明をするなど、アイザックの知る常識からいって有り得ないことなのである。

新規的な発明は都市部の技術者や職人によって行われるのが常であり、辺境の農民が何かを発明したなどという話は、アイザックは聞いたこともないのだ。

アイザックが農民を馬鹿にしているわけではないが、農業以外に

何の教育の機会もない小さな村の住民に、このような画期的な道具の開発が出来るなど、とても信じられなかった。

「一人でこのような道具を考え出すとは……この水車という道具を作るに当たって、作り方を記した紙などがあつたら見せていただけませんか？」

「それが……この水車は都度考えながら部品を一つ一つ作りあげたものなので、そのようなものは無いんです。申し訳ございません」

すまなそうに頭を下げるバレッタに、アイザックは一瞬訝しげに眉を寄せたが、すぐに表情をとりなして、そうですか、と頷いて見せた。

「では、この水車の動作と作り方について簡単に説明していただいてもよろしいですか？」

「わかりました。では、まず動作についてですが……」

アイザックはバレッタの説明を聞きながら、水車の要点を皮紙に書き出していく。

水車の動作について堂々と説明するバレッタに、何処か釈然としないものを抱きつつアイザックが水車を見ていると、ふと目をやった水車の軸部分が、回転の摩擦で大きく磨り減って痛んでいることを発見した。

「おや、この棒の部分は半分磨り減っていますね……このままでは折れてしまわないですか？」

「えっ、本当ですか？」

水車に歩み寄って軸の部分を覗き込みながら言うアイザックに、バレッタは水車の説明を一旦止め、アイザックの隣に歩み寄った。そして自らの目線の高さにある水車の軸を見てみると、確かに軸が磨耗して大分磨り減っているようである。

今はまだ平気なようだが、このまま使用を続ければ軸が折れて水車が崩壊するかもしれない。

「これは、このまま水車を回し続けたら確実に軸が折れますね……何か対策を考えないと」

軸の痛み具合を見てバレッタはそう言うと、川に接している水路の上流側に行き、傍に落ちている木板を水路にはめ込んで川と水路を遮断した。

川からの水の供給を阻害され、くると回っていた水車もその動きをゆっくりと止める。

「なるほど、その板を使っていつでも水車を止められるようにしているのですか」

その様子を見て感心しているアイザックに、バレッタは笑顔で頷いた。

「ええ、こうしておけばいつでも水車を修理することができますから。でも、アイザックさんが軸の傷みに気付いてくださらなければ、修理する前に水車が壊れてしまうところでした。ありがとうございます」

そう礼を述べるバレッタに、どういたしまして、とアイザックは答えると、再びメモを取りつつバレッタから水車の説明を受け始め

た。

村の視察が始まってから半日後。

夕焼け色に染まる村はずれの森の前で、アイザックは村長から租税用の木材の準備具合についての報告を受け終え、お互いに労いの言葉を掛け合っていた。

アイザックが水車についての説明をバレッタから受けた後、3人は再び村へと戻り、村の食糧事情や作物の生育について、全ての畑を見て回りながら村長がアイザックに報告をした。

作物の急激な成長については、アイザックはグレイシオールの加護を得た森の土の影響だと信じきっているようで、特に探りを入れられることは無かったのだが、今後の食糧生産手法についてイステリアより何らかの指示があるかもしれないとの説明を村長は受けた。

ちなみに、バレッタは夕飯の仕度をするべく、先に屋敷に戻っている。

「それでは、私は部隊に戻ります。我々の都合で部隊を連れて来てしまい、お騒がせして申し訳ありませんでした」

「いやいや、軍の方々のお勤めに協力できるのであれば、我々としても光栄なことですからな。どうか気に負わないで下され」

何とか何事もなく視察をやり過ごすことが出来たためか、村長は肩の力も抜けて朗らかに答える。

アイザックは村長の言葉に、ありがとうございます、と笑顔を見せた。

「では、ここで解散としましょうか。また一ヶ月後に伺いますので、その時までには納税の準備を整えておいてください」

「わかりました。ではまた一ヶ月後に」

村長はアイザックにそう答えると、深く一礼してから屋敷へと戻っていった。

去っていく村長の背を見ながら、アイザックは、さてと、一息つきながら村を見渡し、視察結果を思い返す。

視察の間に時折目にした村人や、村長とバレッタの身体つきから察するに、グリセア村の食糧事情はかなり良くなっているようである。

水車を使った水の汲み上げといい、森の土を使った作物の急成長といい、この一ヶ月でのグリセア村の急速な回復ぶりには目を見張るものがある。

これらのことは大変喜ばしい事態なのだが、アイザックは何処かすっきりしないものを感じていた。

というのも、この村は全てが上手く行き過ぎており、それがどうにも不自然に感じるのだ。

特に気になるのは水車である。

あのような画期的な道具が一人の農民によって生み出されたという事実を、アイザックは未だに受け入れることが出来ずにいた。

アイザックが水車のことを思い返しながら村を見渡していると、視界の端に小さな影が居ることに気付いた。

横目で確認してみると、30メートル程離れた木の陰で、子供が隠れながらこちらをじっと伺っている様子である。

「（男の子…… 5、6歳といったところか。名前は確か……）」

アイザックは村人の名簿を思い返しながらし考えと、ふと思いつて男の子の方へ顔を向けて笑顔で手を振った。

手を振られた男の子は、自分が見つかったことに一瞬肩をすくめた様子だったが、すぐに木の陰から出るとこちらへ向かって走ってきた。

「にいちちゃん、偉い兵隊さんだったの！？ そんなにかっこいい鎧初めて見るよ！」

少年はアイザックの元に走り寄ると、アイザックが挨拶をする間も無く興奮した様子でまくし立てた。

どうやら、重装備の兵士の姿に感激しているらしい。

「ん、少しだけ偉い兵隊だよ。100人の兵士達の隊長をやってるんだ」

「100人も！？ すげー！ いつも村に来るときは安っぽい鎧着てるから、全然わからなかったよ！」

アイザックは少年の言葉に苦笑しつつも、更に興奮した様子で自分の周りをぐるぐる回っては鎧を楽しそうに眺めている男の子を見ながら、先ほど思いついたことを試しにこの男の子に聞いてみることにした。

「君は確かコルツ君だったかな？ 実は村の近くに部隊を待たせてるんだけど、ちょっと見学してみるかい？」

アイザックがそう言うと、コルツは驚きと期待が入り混じった表情で

「えっ、いいの!？」

と声を上げてアイザックを見上げる。

「ああ、いいとも。でも、その前にご両親に少しでも村から出ることを言いに行こう。勝手に居なくなったら大騒ぎになっちゃうからね」

「うん！ 俺の家はこっちだよ！」

コルツはアイザックの提案に大喜びで応じると、アイザックの前に立って早足で自分の家へと歩き始めた。

アイザックはコルツの後を数歩歩き始めたところで、そうだと手を打ってその場に立ち止まる。

「どうしたの？ 早く行こうよ！」

「いや、一つ大切なことを忘れちゃってね。コルツ君が知ってたら教えて欲しいんだけど……」

「何？ 早く言つてよ！」

もったいぶった様子で言うアイザックに、コルツは焦れたようにアイザックを急かす。

アイザックはそんなコルツの様子に内心少しだけ罪悪感を感じながらも、先ほど考えたことを口にした。

「さつき、村長のバリンさんから水車を作った人の名前を聞いたんだけど、聞いたことの無い名前だったからつい忘れちゃってね……。コルツ君は水車を作った人の名前を知ってるかな？」

アイザックの質問に、コルツは一瞬きょとんとした様子だったが、すぐに口を開いた。

「カズラ様のこと？」

30話：岩場の影から

コルツの言葉を聞いた瞬間、アイザックは自らの頭の中が灼熱するような錯覚を覚えた。

アイザックの記憶が正しければ、カズラなどという名前の人物はこの村には住んでいない。

その人物が本当にいるのであれば、村長とバレッタは嘘を吐いていたということになるのだ。

アイザックは笑顔の裏で必死に怒りを堪えると、コルツの言葉に相槌を打った。

「ああ、そうだった、カズラって名前だったね。その人と少しお話をしたいんだけど、今何処にいるのか知ってるかな？」

「んー、少しの間神様の世界に帰るって昼前に母ちゃんが言ってたから、もう村にはいないんじゃないかなあ」

「……神様の世界？」

神様という予期せぬ単語を聞き、アイザックは思わず聞き返した。コルツが何を言っているのか、咄嗟には理解出来なかったのだ。

「そうだよ。村長さんから聞かなかったの？」

「……その神様の世界って、何処にあるんだい？」

アイザックがそう問うと、コルツは呆れた様子でアイザックを見上げた。

「あつちの林の奥だよ……にいちちゃん、何度もこの村に来てるのに、そんなことも知らないの？」

アイザックはコルツの指差す方向に目を向けると、遠目に雑木林が見えた。

その雑木林に纏わるグレイシオール言い伝えは、アイザックももちろん知っている。

知っているのだが、カズラという人物とグレイシオールの言い伝えに、何の関連があるのかが判らないのだ。

「あ、いや……あの林は、グレイシオール様が現れた林だね？」

「何だよ、知ってるんじゃない。じゃあ、早く俺の家に行こうよ」

「え？　ちょ、ちょっと待って！　そのカズラって人は、あそこの林に入ってたのかい？」

まるで話が終わったかのように、自分の家に向かって歩き出したコルツを、アイザックは慌てて引き止めた。

コルツの口ぶりでは、まるでカズラという人物は神様の使いか何かだとも言わんばかりなのだ。

アイザックがそう問いかけると、前を歩いていたコルツはぴたりと足を止め、くるとアイザックに振り返った。

「……にいちちゃん、まさか……」

コルツは真つ直ぐにアイザックを見上げたままそう言い掛けると、見る見るうちに表情が青ざめ、再びくるとアイザックに背を向け

た。

「俺、もう帰る」

「あ、ちよつと！」

コルツは短くそう言うと、アイザックの制止の声も聞かずに、自らの家へと向かって走って行ってしまった。

アイザックは走り去るコルツの背を呆然と見送ると、コルツの言っていた話を思い返ししながら、その場で暫し考え込むのだった。

一方その頃、昼前にグリセア村から日本へと帰還していた一良は、落ち始めた太陽の下、シャベルを使って地面に小さな穴をいくつも掘っていた。

ここは埼玉県の某地区にある1000坪程の畑で、一良の父親である真治が知り合いの地主から借りている畑である。

何でこんなことをしているのかというと、日本に移動してすぐに携帯電話に電源を入れた直後に真治から電話がかかってきて、「たまには実家にも顔を出せ」と呼び出しをくらったため、急遽実家に帰ってきたところ、

「アスパラの苗を植えるから手伝ってくれ」

と言われ、畑まで軽トラで連行されてきたのだ。

これから植える予定のアスパラの苗は、大きめの黒いビニールポットに入った状態で、一良が穴を掘っている畑の脇に大量に並べられている。

「お、随分と手際がいいじゃないか。もうこんなに掘ったのか」

一良が黙々と等間隔で穴を掘っていると、あと3つで一列分の植え替え穴が掘り終わるところで、真治が肥料と平鍬を乗せた手押し一輪車を押してやってきた。

真治は日頃から畑仕事をしているためか、無駄な贅肉は殆どなく筋肉質である。

身長は170センチに届かない程度で一良よりも少し低いが、日焼けした褐色の肌と多少混じっている白髪がいい具合にマッチしており、中々にダンディな風貌だ。

「最近屋敷の近所の農家で、毎日畑を手伝わせて貰ってるからね。手際も良くなるさ」

一良はそう言いながら残りの穴を掘り終わると、シャベルを地面に突き刺し、首に掛けていたタオルで顔の汗を拭った。

グリセア村で畑仕事をしている時に比べ、埼玉の暑さは湿度がある分体感的にかなり辛く、何もしなくても汗が大量に吹き出てくる程だ。

「ほう、畑を手伝ってるのか、道理で逞しくなってるわけだ。近所の人とは仲良くやってるのか？」

畑の手伝いと聞いて、以前に比べて大分逞しくなっている一良の姿に納得したかのように真治は頷いた。

一良は今まで特に力を入れてスポーツなどしたことがなかったため、肉体的に貧弱な部類の人間だったのだが、ここ一ヶ月ちよつとの間の農作業のおかげでそれなりに筋肉がついた。

食事は一良が持ち込んだ米や缶詰が中心だったので、村では間食

も殆どしない上に基本的にドカ食いもしないため、いい具合にデトックス効果も出て、身体は頗る快調なのだ。

たまに日本に戻ったときにファミレスなどで大量に食べてしまうこともあるのだが、そこはご愛嬌である。

「うん、皆良い人ばかりだからね……あ、そうだ、屋敷のことで一つ教えて欲しいんだけどさ」

「屋敷？ ああ、古いわりに埃一つなかっただろ。昔、俺が行った時もやたらと綺麗でなあ」

真治はそう言いながら肥料を一輪車から降ろすと、以前自分が屋敷に行った時の様子をつらつらと語り始めた。

しかし、一良が聞きたいのはそんな話ではないので、

「いや、そうじゃなくて」

と、話の腰を折る。

「屋敷の奥に南京錠で扉が封印されてる部屋があっただけど、あの部屋って何なのか知ってる？」

「南京錠？ ……そんな部屋あったっけか？ 俺が昔行った時は、南京錠付きの部屋なんて無かったぞ」

怪訝な顔をしながら首を傾げている真治に、何かしら異世界へ通じる部屋についての情報を得られると考えていた一良は当てが外れてしまった。

真治の他に屋敷のことを知っている可能性のある人物となると、親族を総当りしていけば誰かしら知っているかもしれないが、直近

で親族に顔を会わせる予定はない。

どうしても屋敷についての情報がすぐに必要というわけでもない
ので、一先ずこの件は保留ということになりそうだ。

「それより、あの屋敷の周りは民家も殆どないけど、治安は大丈夫
か？ 強盗とかには十分気をつけろよ」

「そういう物騒な話は全然聞かないなあ……田舎の方が都会より治
安はいいんじゃないかな？」

一良がそう答えると、真治はなんとも心配そうな表情で一良を見
やる。

「いや、そうとも限らないぞ。用心に越したことはないからな。い
くつか防犯用品を用意しておいたから、帰りに持っていけ」

「防犯用品ねえ……それより先に、屋敷に水道だけでも引きたいと
ころだなあ」

そんな話をしながら、一良が掘った穴に真治が苗を植え替えては、
撒いた肥料と土を混ぜるといふ作業をひたすら続け、順調にアスパ
ラ畑を拡張していくのだった。

二人で植え替え作業を開始してから2時間後。

ようやく全てのアスパラの植え替えが終わり、日も落ちてきたこ
ともあって、二人して実家へと帰ることとなった。

一良の当初の予定では、群馬県内の街でバレッタへのお土産用の
本でも物色し、何か美味しいものをお土産を買って翌日の昼にはグ

リセア村へ様子を見に戻るつもりだったのだが、真治の呼び出しで計画が狂ってしまった。

なので、とりあえず今日の所は実家に泊まり、明日の夕方くらいまでに前述の作業をこなす予定に変更したのだ。

軽トラの窓を全開にし、助手席で少し排ガス臭い風を浴びながら国道を走っていると、運転席の真治が、そういえば、と声を掛けて来た。

「農家の手伝で耕運機とかは使ってるのか？ あれは下手すると大怪我をするから、使ってるなら気をつけるんだぞ」

「耕運機とか機械は何も使ってないよ。鍬とかシャベルしか用意してないから」

「そうか……手伝い先の家の物を使わせてもらう予定もないのか？」

「んー……」

真治の問いに、一良はふとグリセア村の今後ついて考えてみた。機械を使えば広大な土地を一気に耕すことが出来、村の人々の負担を大幅に軽減することが出来るだろう。

だが、一良が持ち込んだこちらの世界の食べ物のおかげで疲れ知らずの超人と化している村人には、今更機械の力は不要に思えた。それに加え、急いで畑を耕さなければならない理由もない上に、野菜も順調に生育している今、グリセア村に限ってはこれ以上の農業支援は必要ないだろう。

そして何より、水車ならまだしも耕運機などというオーバーテクノロジーの塊を持ち込んで、万が一村人以外の人間に見つかったら言い訳の仕様ががないのだ。

「いや、特に使わせてもらつ予定はないかな。鋤で十分だよ」

一良がそう言うと、真治は何処と無くほつとしたような表情で

「そうか」

と呟いた。

そんな真治を見て、いくらなんでも25歳にもなった息子に対して心配しすぎだろうと一良は思ったのだが、それが親というもののだろう。

一良は一人っ子なので、父親としては余計に気にかけてしまうのかもしれない。

「おかえりー。畑の手伝い大変だったでしょう」

実家に到着し、一良と真治が家に入ると、母の睦むつみが玄関で出迎えてくれた。

睦は真治と違って白髪が全く無く、真治と同じ54歳にしては肌も綺麗で大分若く見える。

これが日頃食生活に気を使ったり、肌の手入れを怠らない女の底力なのだろうか。

「ただいま。群馬から長距離運転してそのまま畑だったからね。さすがに疲れたよ」

一良がそう言いながら靴を脱いでいると、家の奥からは何やら美味しそうな匂いが漂ってくることに気付いた。

どうやら、夕飯はすき焼きのようだ。

「あら、少し痩せたんじゃない？　ちゃんとご飯食べてるの？」

「無駄な贅肉が落ちて引き締まったと言って欲しいな。ご飯もちやんと食べてるよ」

じろじろと身体を眺めてくる母の視線を浴びながら家に上がり、真治と共に手洗いを済ませて居間へ移動する。

居間のテーブルの上には鍋ですき焼きが煮えており、生卵も3人分用意されていて食事の準備は万端だ。

睦が茶碗にご飯を盛って配り終わると、みんなで手を合わせて、

「いただきます」

と言ってからすき焼き鍋に箸をつける。

「ねえ、もう一ヶ月以上群馬に行ってるみたいだけど、あとどれ位屋敷にいる予定なの？」

久々の我が家の味に、一良が猛烈な勢いですき焼きにパクついていると、追加の肉を冷蔵庫から出しながら睦が聞いてきた。

「ん、まだ暫くは屋敷に住むつもりだよ。何だかんだで田舎暮らしも楽しいし、金目当てに集まってくる輩も今の所いないし」

群馬の屋敷に移動してからというものの、宝くじの当選金目当てに集まってきた奴らは完全に撒くことができたようで、誰かが屋敷に押しかけてくるといったことは一度もない。

日本に帰ってくることで自体が週に1回程度で、殆ど異世界で生活しているというのが一番の要因なのかもしれないが。

どちらにせよ、グリセア村での生活に馴染みきっており、異世界でのスローライフを満喫している一良としては、暫くは9割異世界1割日本といった生活を続けたいのだ。

「そう……でも、たまには実家にも連絡ちょうだいね。お屋敷がある地域が山奥すぎるみたいで、電話掛けても電波が届かないことが殆どなのよ。今日はたまたま真治の携帯から繋がったみたいだけど」

「そうだぞ。ずっと連絡がないと俺達も心配になるからな。一ヶ月に一回程度でもいいから電話の一本も寄越してくれ」

「あー……そうだね、覚えておくよ」

思い返してみれば、一ヶ月前に一度真治に電話をしたきり、一度も両親に連絡を取っていなかった。

たまに日本へ物資の調達などで戻ってきた際も、携帯の電源を切ったまま行動していることが殆どで、両親にはこちらから掛けない限りはまず連絡が取れないのだ。

それに、異世界に行っている時はもちろん電波は届かないので、両親がいくら電話を掛けても一良の携帯に繋がらないのは当たり前前である。

「それで、初めての田舎暮らしはどう？ お屋敷は電気も通ってないから不便なんじゃない？」

「いや、慣れれば電気くらい無くても大丈夫だよ。明かりなんてラントンがあれば十分だし」

「どんな生活してるんだお前……」

そんな話をしながら、一良が社会人になってから数える程しなくなってしまうた家族団らんの夜はゆっくりと更けていくのであった。

次の日の朝。

時計の針はまだ午前6時を指しているにも関わらず、一良は実家の車庫で着替えなどの入ったボストンバッグを車に積んでいた。

真治も既に起きており、大きな旅行用のキャリーケースを一良の車の後部座席に載せている。

睦はまだ起きておらず、車庫にいるのは一良と真治の二人だけである。

「しかし、随分早く帰るんだな。何か用事でもあるのか？」

後部座席にバッグを載せ終え、ドアの取っ手に手を掛けながら真治が言う。

「うん、ちよっとお手伝いしてる農家の人と約束があつてね……それより、あのキャリーケースの中身って……」

「おう、防犯用品とか田舎暮らしに役立ちそうなものが適当に入れているぞ」

「適当につて、あのキャリーケースでかすぎだろ……」

そう言いながら車の中を覗きこむと、そこにあるキャリーケースはどう見てもＬサイズはありそうな大きさである。

いくらなんでも詰め込みすぎだ。

「まあいいじゃないか、別に腐るものでもないし。さて、俺は畑に行くかな。今日は聖護院大根を撒かなきゃならん」
ショウゴインダイコン

真治はそう言って車のドアを閉めると、自らの軽トラに乗り込んだ。

そんな真治を見て、一良はやれやれと溜め息を吐くと、自分の車に乗り込みエンジンを掛ける。

「じゃあ、俺は群馬に帰るよ。母さんにもよろしく言っというて」

「あいよ、身体に気をつけるんだぞ」

そう挨拶を交わすと、一良は群馬へ向けてアクセルを踏み込んだ。

実家を出発してから４時間後。

群馬県内に到着した一良は、市街地で缶詰や石鹸などの日用品や、バレッタへのお土産用の本を数冊購入した後、以前訪れた個人ハーブ店へとやってきていた。

以前訪れた時と同様、古民家のいい雰囲気を残したままの店内には、様々な種類のハーブがアクリルビンに入れられて陳列されている。

レジの前で座って本を読んでいた女性店員は、一良が店にやってきたのを確認すると、よく冷やされたベルガモット入りのハーブティーを試飲用の紙コップに入れて渡してくれた。

「えっと、ネトルとレモンバーベナと……おっ、このハーブティー美味しいですねえ。これと同じやつも30グラム貰えます?」

貰ったハーブティーを一口飲んで一良がそう言つと、女性は嬉しそうに了解の返事をし、アクリルビンの一つからハーブを小袋に分け始めた。

よくよく店内を見渡してみると、以前来た時には無かったブレンドのものもいくつかあるようだ。

今日試飲させて貰ったものも、新商品なのかもしれない。

その他にも、床に何個かハーブの苗が植えられた鉢が値札と共に置かれている。

「あ、ハーブの苗の販売も始めたんですか?」

「はい、以前お客様がいらした時に、ハーブの苗が欲しいっておっしゃってたじゃないですか。それで、いくつか育てているものを株分けしてお店にも置いてみることにしたんです」

まさか自分の発言が元で商品の枠が広げられるとは思わなかったが、そういった心遣いは一良としてはとても嬉しい。

商品として置かれている苗はまだ数が少ないが、どれも葉や茎がしっかりしていていい苗である。

置いてある苗は、どれも以前一良が買っていた種のものばかりだった。

「ありゃ、何か催促したみたいですね……それじゃ、このワイルドストロベリーとマリーゴールドを一つずつ貰おうかな」

「ありがとうございます。そういえば、この間買って行かれた種の

芽は出ました？ ルッコラあたりはそろそろ出てると思うんですけど」

女性は一良が指定した苗とハーブの小袋をビニール袋に入れるとふと思い出したようにそう言った。

どうやら、以前一良が買った商品の内容も覚えていたらしい。

「ええ、種を買っていつてその日の内に植えられるものは植えたんですが、ルッコラとバジルは大量に芽が出始めてますよ。他はまだ出てないですね」

ハーブの種を植えてから本日で丁度2週間なのだが、先に上げた二つ以外は未だに芽を出していない。

その代わりと言つかのように、バジルはこれでもかと大量に芽吹いているのだが。

「レモンバームもそろそろ芽を出す頃だと思いますよ。風通しを良くしてあげてくださいね」

「はい、その辺は気を使って植えたので大丈夫だと思うんですけど……あ、精油か……」

商品を袋に入れてもらい、会計をしようと財布を出したところで近くの棚に置いてある精油が目についた。

考えてみれば、バレッタにお土産としてハーブは時々買っているのだが、精油は一度も買っていったことが無い。

ハーブの本で予備知識はあるはずなので、買って行けばきっと喜んでくれるだろう。

「すみません、この精油も一緒をお願いします。あと、アロマポッ

トのセットとポーチも一つずつ」

「まあ、沢山買っていただいてありがとうございます」

とりあえず目についた30ミリリットル入りの精油を数本と、ちよつとお高めのガラスポットなども一緒に購入すると、

「ありがとうございました。また来てくださいね」

と小さく手を振る女性店員に見送られながら、一良は店を後にするのだった。

一良がハーブ店を出てから約3時間後。

グリセア村へと続く水路の脇に設置されている水車から、数百メートル程離れた小高い丘の岩陰で、アイザックと3人の兵士が身を隠していた。

アイザックと部下の2人は、鎧を着込んだ上に短槍と盾を傍らに置いているが、もう1人の兵士は鎧を着ておらず、布製の服を着て腰に短剣を挿しているのみである。

4人は何か言葉を交わすでもなく、時折木製の水筒から水を飲む以外は、グリセア村の方向を身を隠したままじつと覗き見ている。

特に話すことが無くて言葉を発しないというよりも、何処かピリピリとした雰囲気醸し出しているアイザックに気を使い、部下の3人は沈黙しているようだった。

「来たぞ。岩陰に隠れる」

アイザックは視線の先に何か見つけたのか、部下の3人を岩陰に

完全に引っ込ませると、鎧を着けていない兵士に声を掛ける。

「こっちに向かってきている奴らが水車の傍まで来たら、お前は本隊へ伝令に走れ。当初の作戦通りに行動を起こせと伝える」

「了解しました。村長の屋敷を制圧し、村人は全員家に押し込めておくのですね？」

伝令を命じた鎧を着けていない兵士の返答にアイザックは頷くと、遠目に見えたこちらへ向かう人影を思い返した。

人影まで距離がかなりあったので確証は持てないが、こちらへ向かってきている者はどうやら2人のようである。

アイザックの予想が正しければ、2人の内の1人は、昨日コルツが言っていたカズラという人物のはずなのだ。

昨日、アイザックはコルツと別れた後、何食わぬ顔で部隊に戻ると、部隊と共にイステリア方面へと日が暮れるまで移動し続け、部隊は全て撤収したかのように見せかけた。

その後、夜の内に部隊を再び村の周辺にある森の奥にまで静かに移動させ、潜伏させたのだ。

もちろん、事前に部下の内二人をイステリアへ伝令に出し、部隊の帰還が遅れることを伝えるように命じてある。

これによって、部隊はカズラすることに気付かないまま撤収したと思ひ込んだ村人達は安心して警戒を解き、村の外に避難しているカズラという人物も村に戻ってくるはずなのだ。

万が一、コルツが昨日のアイザックとのやり取りを村の誰かに言ってしまった場合、下手に部隊を村の付近に留まらせておくとカズラが二度と村に戻ってこなくなる恐れがあったため、あえてこのような面倒な手段をとったのだが、どうやら上手くいったようである。

昼間、村を部下に偵察させた際にも特に変わった様子はないとの報告を受けていたので、コルツは村の誰にも昨日のアイザックとの一件を言っていないのかもしれない。

そうして暫く待機していると、水車の方から話し声が聞こえてきた。

「どうやら、こちらへ向かって来ていた2人が水車に到着したようだ。」

「いくぞ。万が一反抗した場合でも絶対に殺すな。生け捕りにして尋問する必要があるからな」

アイザックは部下の二人にそう声を掛けると、岩影からずりりと抜け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2163n/>

宝くじで40億当たったんだけど異世界に移住する

2011年10月24日20時38分発行